蔵王町文化財調査報告書　第11集

窪　田　遺　跡

── 経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査 ──

２０１１年（平成23年）３月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

窪田遺跡

── 経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査 ──

序　　文

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた私たちの蔵王町は、大昔から大変住み良いところだったのでしょう。私たちの足もとに埋もれている数多くの遺跡が、悠久の時をこえてそのことを力づよく物語っています。

蔵王町の北東部に位置する円田盆地では、平成８年度に大規模なほ場整備事業が計画されました。事業の計画区域には多くの遺跡が含まれていたことから、文化財の保存についての協議が重ねられました。この結果、水田となる部分は盛土によって遺跡を保存し、道路や水路などの工事によってやむを得ず破壊される部分について、平成 13 年度より記録保存のための発掘調査を行なうことになりました。

本書において皆さまにご報告するのは、平成 20 年度に行なった窪田遺跡の発掘調査成果です。今回の調査では、古墳・奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見されました。これらは、蔵王山麓に暮らした当時の人々の生活の一端を窺い知ることのできる貴重な成果です。本書にまとめられた学術的成果が、広く町民の皆さまや各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

ほ場整備事業計画の策定と実施にあたっては、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区、地元地権者の皆さまより文化財の保存へのご理解とご協力をいただきました。また、発掘調査と整理作業の実施にあたっては、宮城県教育委員会より専門的なご指導をいただきました。地元発掘作業員の皆さまには、夏の炎天下や晩秋の寒空の下、野外での発掘作業にあたっていただきました。ご協力を賜りました関係各位の皆さまに厚く心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、先人の残した文化遺産を町民の宝として長く後世に継承していくことは、これからの地域色豊かなまちづくりには欠かせない大切なことであります。今後とも、各位のご理解とご協力を念願して序といたします。

平成 23 年 3 月

蔵王町教育委員会
教育長　山田　紘

例　言

1．本書は、蔵王町大字平沢字窪田・田中地内に所在する窪田遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う事前調査として行なったものであり、発掘調査から整理作業および本書の作成に至る一連の業務は、調査原因となった事業の主体者である宮城県大河原地方振興事務所を委託者、蔵王町を受託者とする業務委託契約を締結し、蔵王町教育委員会が平成 20・22 年度に実施した。

3．本遺跡の発掘調査と整理作業は蔵王町教育委員会が主体となり、教育総務課文化財保護係が担当した。職員体制は下記のとおりである。

教　　育　　長　山田 紘

教育総務課長　大沼 芳國　　課長補佐　阿部 宏（H20 年度）　高野正人（H22 年度）

文化財保護係長　佐藤 洋一　　主　　事　鈴木 雅

文化財臨時職員　我妻 なおみ・庄子 善昭・鈴木（山戸）和美（H20・22 年度）
安倍 奈々子・古田 和誠（H20 年度）・中沢 祐一・渡邊 香織（H22 年度）

発掘調査作業員　我妻 英子・我妻 儀八・我妻 武夫・浅沼 一郎・芦立 清・太田 忠義・大庭 慶志郎・加藤 初子・亀井 勇二・熊坂 信子・小杉 佐和子・後藤 扶美江・小林 四郎・小林 美智子・佐藤 かおる・佐藤 和子・佐藤 貴美子・佐藤 照子・佐藤 福治・佐藤 義晴・眞貝 誠一・鈴木 光一・鈴木 勝・清野 政男・竹内 恂子・樋口 良子・堀内 博・山家 次郎・吉田 三郎（H20 年度）

室内整理作業員　竹内 恂子（H20 年度）、我妻 英子・小杉 佐和子・小林 四郎・小林 美智子・佐藤 かおる・佐藤 貴美子（H20・22 年度）、岩佐 若奈・大庭 慶志郎・佐藤 恵子・佐藤 里栄・松田 律子（H22 年度）

4．本書の作成に先立ち、第 1 回蔵王町出土遺物検討会「円田盆地周辺における 7 ～ 8 世紀の土器様相」（平成 21 年 4 月 25 日、会場：蔵王町ふるさと文化会館、主催：蔵王町教育委員会・宮城県考古学会古墳古代研究部会）を開催し、県内外の考古学研究者等 44 名の参加を得て意見交換を行なった。

5．本遺跡の発掘調査および資料整理と本書の作成に際し、以下の諸機関・諸氏よりご指導・ご助言ならびにご協力を賜った。ここに記して深甚より謝意を表します。

宮城県教育庁文化財保護課・宮城県考古学会古墳古代研究部会
植松 暁彦・大久保 弥生・川崎 利夫・櫻井 友梓・佐藤 鎮雄・佐藤 敏幸・菅原 祥夫・鈴木 芳英・辻 秀人・村田 晃一・第 1 回蔵王町出土遺物検討会参加者各位（敬称略・五十音順）

6．本発掘調査における現場写真撮影に使用した機材等は以下のとおりである。

カメラ：NikonD100・NikonD70s ／レンズ：AF-S NIKKOR 18-70mm f3.5 ～ 4.5G ED

7．遺物の写真撮影は、庄子 善昭が担当した。撮影に使用した機材等は以下のとおりである。

カメラ：NikonD90 ／レンズ：AF MICRO NIKKOR 60mm F:2.8 D ／ストロボ：SUNPAK auto544 ／
赤外線撮影／カメラ：SONY MVC-FD7（改）／赤外線 LED ライト：AE-LED56 ／
撮影ソフトウェア：Nikon Camera Control Pro2 ／現像ソフトウェア：Adobe Photoshop Lightroom3 ver.3.0

8．本書に掲載した遺構実測図のトレース、画像処理、レイアウトには下記のソフトウェアを使用した。

Adobe Photoshop6.0・CS4 ／ Adobe Illustrator10.0・CS4 ／ Adobe InDesignCS4

9．本書に掲載した遺構実測図のトレース、遺物実測図の作成およびトレース、遺物拓本、遺物写真撮

影、図版レイアウトなどは文化財臨時職員が中心となり、室内整理作業員がこれを助けた。

10. 本発掘調査の整理作業は、下記の調査員が中心となり、調査員全員で協議しながら進めた。
遺構：我妻 なおみ、土師器・須恵器・木製品：庄子 善昭・鈴木 和美、縄文土器・陶磁器：古田 和誠・渡邊 香織、石器：中沢 祐一・安倍 奈々子、統括：鈴木 雅・庄子 善昭

11. 本書の執筆は調査員全員の協議を経て鈴木 雅が執筆・編集し、鈴木 和美が校正・照合を担当した。

12. 本発掘調査の成果については、平成 20 年度宮城県遺跡調査成果発表会等において概要を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合には、本書がこれらに優先するものである。

13. 本発掘調査で出土した遺物および写真・図面等の記録資料については、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

凡　例

1．本発掘調査における測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。測量成果表は第 10 図に示した。なお、方位は座標北を表している。

2．本発掘調査では、調査区内に工事用測量基準杭を基準として 3m グリッドを設定し、東西・南北方向に数字を付した。グリッドの局地座標における北は日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系における座標北を基準として東に 6.3°の方位である。

3．第 2 図は、5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査における地形分類図「白石」の一部を使用した。

4．第 3 図は、国土地理院による 2 万 5 千分の 1 地形図の電子国土配信データおよび日本高密メッシュ標高データをもとに風景 CG 作成ソフトウェア「カシミール 3D」を使用して作成した。

5．本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」（小川・竹原 2005）を参照した。

6．本書で使用した遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。

7．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
ＳＩ：竪穴住居跡、ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＡ：柱穴列、ＳＤ：溝跡・河川跡、ＳＥ：井戸跡、ＳＫ：落とし穴状土坑・土坑、ＳＸ：水溜状遺構・焼成遺構・性格不明遺構

8．遺構・遺物実測図の縮尺は下記の通りで、それぞれ図中にスケールを付して示した。
調査区配置図：1/2000、遺構配置図：1/400
竪穴住居跡：1/60、掘立柱建物跡・柱列跡：1/100（断面図：1/60）
落とし穴状土坑・土坑・井戸跡：1/60、溝跡：1/100・1/200（断面図：1/60）
土器・陶磁器・土製品・木製品：1/3・1/4、礫石器：2/3・1/3、打製石器：1/1・2/3

9．遺構断面図に付した土層注記表の備考欄では、下記の略号を使用して記載している。
（柱掘）：柱穴掘方埋土、（柱痕）：柱痕跡、（柱抜）：柱材抜き取り痕跡
（堆）：堆積土、（崩）：崩落土、（構）：構築土、（人為）：人為的埋土（特記ないときは自然堆積土）

10. 遺構の説明で、例えば北を基準として東に 10 度傾いている場合、「N‐10°‐E」のように表記した。重複関係について、例えばＡよりＢが新しい場合「Ａ→Ｂ」、掘立柱建物跡などで重複関係にあるが新旧関係が不明な場合「Ａ－Ｂ」のように記載した。柱間寸法で（　）内の数値は推定値である。

11. 遺物観察表で、器面調整・加工の前後関係が確認でき、Ａの痕跡よりＢの痕跡が新しい場合「Ａ→Ｂ」、前後関係が不明の場合「Ａ・Ｂ」のように記載した。また、（　）内の数値は残存値である。

12. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献については巻末に一括して掲載した。

調査要項

遺　跡　名：窪田遺跡（宮城県遺跡登録番号：05193　遺跡記号：ＴＳ）
所　在　地：宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字窪田・田中地内
発掘調査面積：4,029㎡（事前調査分 2,848㎡、確認調査分 1,181㎡）
調 査 期 間：平成 20 年（2008 年）5 月 21 日～ 9 月 19 日
調 査 原 因：経営体育成基盤整備事業円田 2 期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）
調 査 主 体：蔵王町教育委員会　教育長　山田 紘
調 査 担 当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係　主事　鈴木　雅
調　査　員：佐藤 洋一　鈴木 雅（教育総務課文化財保護係）
　　庄子 善昭　我妻 なおみ　鈴木 和美（文化財専門職臨時職員、H20・22 年度）
　　安倍 奈々子　古田 和誠（同、H20 年度）　中沢 祐一・渡邊 香織（同、H22 年度）
調 査 指 導：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 協 力：宮城県大河原地方振興事務所　蔵王町土地改良区　蔵王町小村崎区

目　次

序　文　　例　言　　凡　例　　調査要項　　目　次

第１章　遺跡の概要……1
第１節　遺跡の位置と地理的環境……1
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境……2

第２章　調査に至る経緯……8

第３章　調査の方法と経過……9

第４章　調査の結果……11
第１節　基本層序……11
第２節　発見された遺構と遺物……11
1　１区……12
2　２区……42
3　３区……63
4　４区……89
5　その他の出土遺物……107

第５章　自然科学的分析……113
第１節　窪田遺跡の放射性炭素年代（AMS 測定）……113

第６章　考察……117
第１節　遺物の特徴と編年的位置づけ……117
第２節　遺構の特徴と遺跡の性格……125

第７章　総括……131

引用・参考文献……132

写　真　図　版
遺跡遠景……写真図版 1　　遺構……写真図版 2 ～ 25　　遺物……写真図版 26 ～ 44

報 告 書 抄 録

解　　説

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置と周辺の地形……1
第 2 図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第 3 図　白石川流域における7～8世紀の主な遺跡（鳥瞰図）…6
第 4 図　材木塀で区画された集落（十郎田遺跡）…6
第 5 図　都遺跡で出土した土器と採集軒平瓦……6
第 6 図　窪田遺跡遠景（東から）……8
第 7 図　調査区配置図……9
第 8 図　発掘作業風景……10
第 9 図　整理作業風景……10
第 10 図　調査区設定図……12
第 11 図　1 区遺構配置図……13
第 12 図　SI1 竪穴住居跡……16
第 13 図　SI1 竪穴住居跡出土遺物（1）……17
第 14 図　SI1 竪穴住居跡出土遺物（2）……18
第 15 図　SI1 竪穴住居跡出土遺物（3）……19
第 16 図　SI2 竪穴住居跡……20
第 17 図　SI2 竪穴住居跡出土遺物……20
第 18 図　SI3 竪穴住居跡（1）……22
第 19 図　SI3 竪穴住居跡出土遺物……23
第 20 図　SI3 竪穴住居跡（2）……23
第 21 図　SB8 掘立柱建物跡……24
第 22 図　SB25 掘立柱建物跡……25
第 23 図　SB27 掘立柱建物跡……26
第 24 図　SB31・SB32 掘立柱建物跡……27
第 25 図　SB33・SB35 掘立柱建物跡……28
第 26 図　SB36 掘立柱建物跡……30
第 27 図　SA34 柱列跡、SE9・SE10・SE16 井戸跡…31
第 28 図　SE17・SE20 井戸跡……32
第 29 図　SE22 井戸跡……33
第 30 図　SE22 井戸跡出土遺物（1）……33
第 31 図　SE22 井戸跡出土遺物（2）……34
第 32 図　SK5・SK21 土坑……35
第 33 図　SK5 土坑出土遺物……35
第 34 図　SK13・SK14・SK23・SK26 土坑……36
第 35 図　SK28・SK38 土坑……37
第 36 図　SD7・SD11・SD12・SD15 溝跡……39
第 37 図　SD7 溝跡出土遺物……40
第 38 図　SD18・SD19 溝跡……41
第 39 図　2 ～ 4 区遺構配置図……43
第 40 図　SI301 竪穴住居跡……45
第 41 図　SI301 竪穴住居跡出土遺物……45
第 42 図　SI302 竪穴住居跡（1）……46
第 43 図　SI302 竪穴住居跡（2）……47
第 44 図　SI302 竪穴住居跡出土遺物（1）……48
第 45 図　SI302 竪穴住居跡（2）……49
第 46 図　SI303 竪穴住居跡（1）……51
第 47 図　SI303 竪穴住居跡（2）……52
第 48 図　SI303 竪穴住居跡出土遺物……52
第 49 図　SI304 竪穴住居跡……53
第 50 図　SI304 竪穴住居跡出土遺物……53
第 51 図　SI305B 竪穴住居跡（1）……54
第 52 図　SI305B 竪穴住居跡（2）……55
第 53 図　SI305B 竪穴住居跡出土遺物……56
第 54 図　SI305A 竪穴住居跡（1）……57
第 55 図　SI305A 竪穴住居跡（2）……58
第 56 図　SI305A 竪穴住居跡出土遺物……58
第 57 図　SB308 掘立柱建物跡……60
第 58 図　SB308 掘立柱建物跡出土遺物……61
第 59 図　SK307 土坑出土遺物……61
第 60 図　SK307・SK309 土坑……61
第 61 図　SD306 溝跡……62
第 62 図　SI206 竪穴住居跡……64
第 63 図　SI312・SI207 竪穴住居跡（1）……65
第 64 図　SI207 竪穴住居跡（2）……66
第 65 図　SI207 竪穴住居跡（3）……67
第 66 図　SI207 竪穴住居跡出土遺物……67
第 67 図　SB202・SB203 掘立柱建物跡……68
第 68 図　SB204・SB205 掘立柱建物跡……69
第 69 図　SB228 掘立柱建物跡……70
第 70 図　SB233 掘立柱建物跡……71
第 71 図　SB236 掘立柱建物跡……72
第 72 図　SB238 掘立柱建物跡……73
第 73 図　SB240・SB241 掘立柱建物跡……74
第 74 図　SB242・SB243 掘立柱建物跡……75
第 75 図　SA217 柱列跡……76
第 76 図　SA239・SA244・SA245 柱列跡……77
第 77 図　SA246・SA247 柱列跡……78
第 78 図　SK234 落とし穴状土坑、SK216・SK218 土坑…79
第 79 図　SK219・SK220・SK221・SK223 土坑…80
第 80 図　SK232 土坑……81

第 81 図　SK232 土坑出土遺物 ……81
第 82 図　SX208 水溜状遺構、SD209 溝跡 ……82
第 83 図　SD210・SD211 溝跡 ……83
第 84 図　SD213・SD214・SD222・SD224 溝跡 …84
第 85 図　SD215・SD225・SD227 溝跡 ……85
第 86 図　SD227 溝跡出土遺物 ……86
第 87 図　SD230 溝跡 ……86
第 88 図　SX208 水溜状遺構出土遺物 ……87
第 89 図　SI101 竪穴住居跡（1）……90
第 90 図　SI101 竪穴住居跡（2）……91
第 91 図　SI101 竪穴住居跡出土遺物（1）……92
第 92 図　SI101 竪穴住居跡出土遺物（2）……93
第 93 図　SI102・SI114 竪穴住居跡 ……94
第 94 図　SI114 竪穴住居跡出土遺物 ……94
第 95 図　SX103 竪穴状遺構出土遺物 ……96
第 96 図　SB108 掘立柱建物跡出土遺物 ……96
第 97 図　SB108 掘立柱建物跡 ……97
第 98 図　SB118 掘立柱建物跡 ……98
第 99 図　SB119 掘立柱建物跡出土遺物 ……99
第 100 図　SB119・SB120 掘立柱建物跡 ……99
第 101 図　SB121 掘立柱建物跡、SE106 井戸跡 …100
第 102 図　SE107・SE113 井戸跡 ……101
第 103 図　SE113 井戸跡出土遺物 ……102
第 104 図　SK115 落とし穴状土坑、SK104・SK109 土坑 ‥103
第 105 図　SK110・SK111・112 土坑 ……104
第 106 図　SK117 土坑 ……105
第 107 図　SK117 土坑出土遺物 ……105
第 108 図　SX105 焼成遺構 ……105
第 109 図　柱穴跡出土遺物 ……106
第 110 図　その他の出土遺物（1）……108
第 111 図　その他の出土遺物（2）……109
第 112 図　その他の出土遺物（3）……110
第 113 図　主な遺構出土土器（1）……118
第 114 図　主な遺構出土土器（2）……119
第 115 図　Ⅴ～Ⅶ期の主要遺構配置 ……127

表目次

第 1 表　周辺の遺跡 ……3
第 2 表　基本層序 ……11
第 3 表　試料一覧および ^{14}C 年代 ……115
第 4 表　^{14}C 年代と暦年較正年代 ……115
第 5 表　遺構出土遺物の年代 ……124
第 6 表　遺構の機能時期 ……126

第 1 章　遺跡の概要

第 1 節　遺跡の位置と地理的環境

宮城県南部の蔵王連峰東麓に位置する蔵王町は、東は村田町と大河原町、西は蔵王連峰をはさんで山形県、南は白石市、北は川崎町と境を接する。町域は東西 23km、南北 13km で面積は 152.85km^2 を占め、海抜標高は最高点が西端の屏風岳で 1,825m、最低点が東南部の松川と白石川の合流点で 20m を測る。町域の西部が主に蔵王連峰に連なる山林原野で、東部の松川流域と円田（えんだ）盆地に田園地帯が形成されている。西部は蔵王国定公園に含まれ、遠刈田温泉などが蔵王観光の基地となっているほか、東部の丘陵部を中心に果樹園が営まれ、県内有数の果樹生産地となっている。

窪田遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字窪田・田中地内に所在する。蔵王町役場の北東約 3.7km に位置し、円田盆地北西部にある標高 92m の低平な舌状丘陵上に立地する（第 1・2 図）。

円田盆地は松川の支流である薮川をはじめとする複数の中小河川によって形成された沖積地である。薮川は盆地中央部から東縁に沿って緩やかに蛇行しながら南流し、盆地周囲の丘陵からは無数の小規模な沢が流入している。盆地は南をのぞく三方を丘陵で囲まれており、盆地底面の範囲は東西約 1.2km、南北約 3.5km におよぶ。薮川流域は自然堤防が未発達で、盆地底部に湿地帯を形成しており、盆地の南側は松川との合流地点に向かって開けている。

円田盆地を三方から囲む丘陵のうち、北側から西側にかけては高木丘陵と呼ばれ、蔵王山系の東麓部にあたる。東側は高木丘陵から細長く派生した愛宕山丘陵と呼ばれる小丘陵が南へ延び、さらに東側の村田盆地との地形的な境界をなしている。標高は高木丘陵東端部で約 130m、愛宕山丘陵頂部で約 170m、盆地南端で約 80m である。

愛宕山丘陵はやや急な傾斜をもつ丘陵地で、小規模な沢によって開析された比高差の大きい舌状の小丘陵が連続的に連なっている。盆地東縁に連なるこの舌状小丘陵上には南部で中沢 A 遺跡、立目場遺跡、台遺跡、塩沢北遺跡などが立地し、北部では盆地底面との比高差が小さい丘陵末端部に車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡などが立地する。一方、高木丘陵は比較的なだらかな傾斜をもち、特に盆地北部では丘陵端部が緩やかに標高を減じつつ盆地中央部まで達している。盆地北西縁に連なるこの低平な丘陵上には本遺跡のほか六角遺跡、十郎田遺跡、都遺跡などが立地し、西縁の中南部では諏訪舘前遺跡、宋膳堂遺跡などが立地する。

近代以降に行なわれた耕地整理や薮川堤防改修工事の結果、盆地底面は平坦な

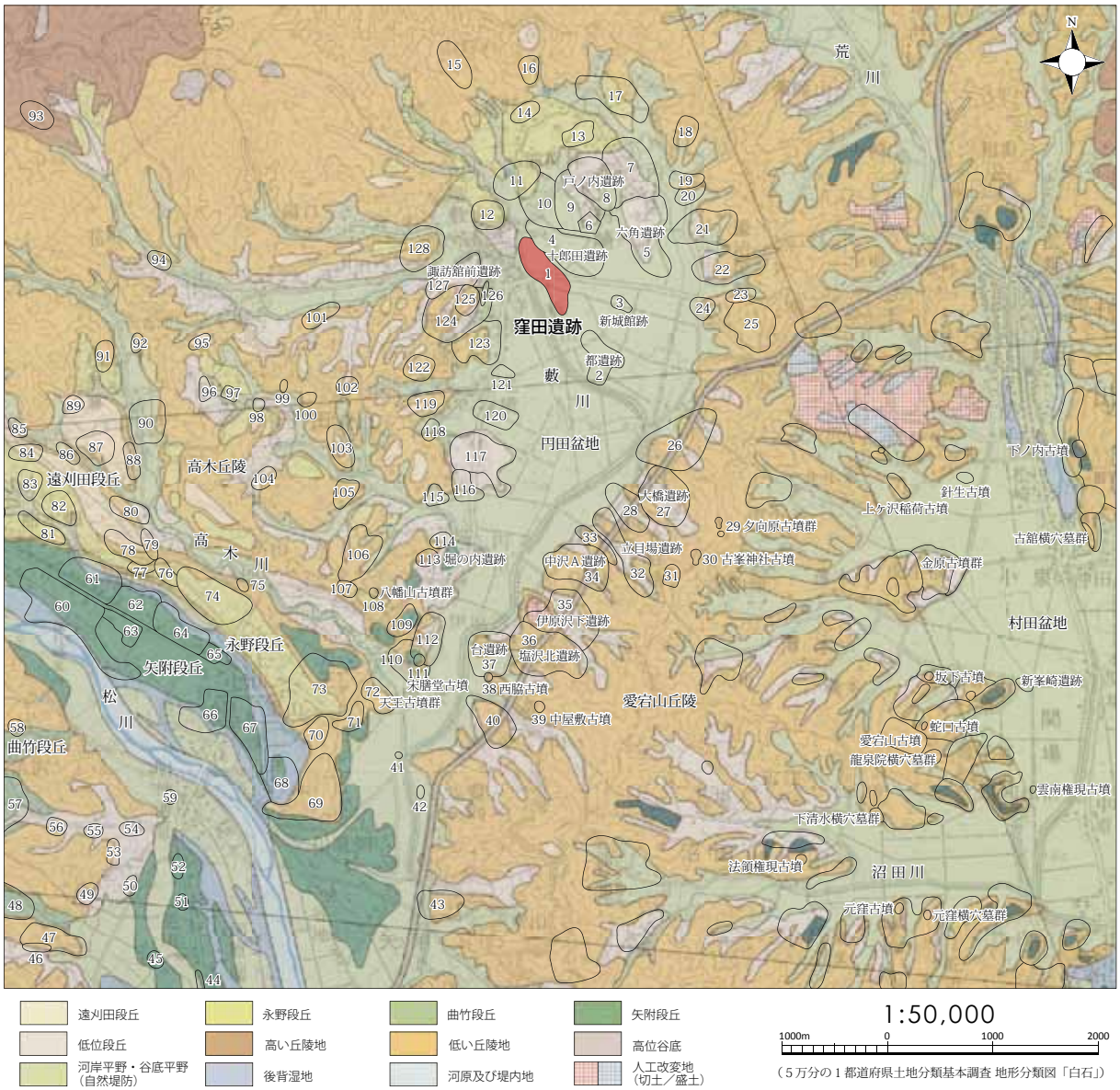
第 1 図　遺跡の位置と周辺の地形

水田地帯となり地形的な変化に乏しい景観を呈しているが、本来は遺跡が立地する微高地と小規模な沢状の低地とが複雑に入り組んだ景観であったと考えられる。

本遺跡は、盆地西側の高木丘陵の裾部から派生し、盆地北西縁から南東方向に細長く延びる低平な舌状丘陵上に立地する。本遺跡の南東 200m の丘陵末端部には都遺跡が立地する。また、北側に隣接する舌状丘陵上には十郎田遺跡と新城館跡が立地する。本遺跡の立地する丘陵の南西縁に沿って藪川が流れ、さらに十郎田遺跡の立地する丘陵との間には藪川の支流である川久保川の旧河道があることから、本遺跡は二つの河川に挟まれた環境であったと考えられる。

第 2 節　周辺の遺跡と歴史的環境

蔵王町における周知の遺跡は現在 190 か所を数える。その多くは町域の東部に分布し、蔵王連峰から派生する丘陵部と青麻山東麓部、松川流域と円田盆地の平野部などに立地する（第 2 図・第 1 表）。旧石器時代から近世に至るまで多数の遺跡が形成されているが、大略的に見て縄文時代の遺跡は蔵王連峰の東麓部から延びる高木丘陵上と青麻山東麓部の標高 150 ～ 250 m付近に、弥生時代中期以降の遺



第 2 図　遺跡の位置と周辺の遺跡

跡は円田盆地とその周辺の丘陵辺縁部の標高 80 ～ 100m 付近に立地する傾向が見られる。

こうした様相の違いは、概ね当時の人びとの生業形態の変化に伴うものと考えられる。縄文時代の食料獲得の場は主に丘陵地に繁茂した森林であり、弥生時代中期以降の食料生産の場は低湿地に作られた水田であったことを示している。後述するが、蔵王町内における稲作の開始を裏付けるものとしては、籾殻の圧痕がある弥生土器片や、古墳時代の水田跡がある。なお、縄文時代の集落が低湿地の周辺に作られることはなかったが、低平な丘陵と湿地の入り組んだ円田盆地北部の一帯は、縄文時代には狩猟の場として利用されていた。以下、各時代・時期における蔵王町周辺の考古学的様相を概観する。

番号	遺跡名	種別	時代
1	窪田遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
2	都遺跡	集落・散布地	縄文後・弥生・古墳・奈良・平安
3	新城館跡	散布地・城館	奈良・平安・中世
4	十郎田遺跡	集落・散布地	古墳・古代・奈良・平安
5	六角遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
6	西小屋館跡	城館	中世
7	原遺跡	散布地	縄文・古代
8	戸ノ内遺跡	集落・散布地	奈良・平安・中世
9	西屋敷遺跡	集落・散布地	古代・中世
10	前戸内遺跡	集落・散布地	旧石器？・縄文後・奈良・平安・中世
11	稲荷林遺跡	散布地	縄文早・古墳・奈良・平安
12	平沢館跡	城館	中世
13	後原遺跡	散布地	古代
14	大久保遺跡	散布地	古代
15	兵衛館跡	城館	中世
16	鹿野遺跡	散布地	古代
17	磯ケ坂遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
18	清上遺跡	散布地	古代
19	三の輪遺跡	散布地	古墳・奈良・平安
20	車地蔵遺跡	散布地	近世・古代
21	鍛冶屋敷遺跡	散布地	縄文中～晩・古代
22	上葉の木沢遺跡	散布地	古代
23	山崎遺跡	散布地	縄文早
24	中葉の木沢遺跡	散布地	縄文・弥生・古代
25	北割山遺跡	散布地	縄文・弥生
26	赤鬼上遺跡	集落	弥生・平安・中世
27	大橋遺跡	集落	縄文後・弥生・古墳・平安
28	屋木戸内遺跡	散布地	弥生・古代
29	夕向原古墳群	前方後円墳 円墳	古墳
30	古峯神社古墳	円墳	古墳
31	愛宕山遺跡	散布地	弥生
32	立目場遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳
33	中沢Ｂ遺跡	散布地	弥生・古墳・古代
34	中沢Ａ遺跡	散布地	縄文早・弥生・古墳・古代～中世
35	伊原沢下遺跡	集落	古墳
36	塩沢北遺跡	集落	弥生・古墳・平安
37	台遺跡	散布地・水田	弥生・古墳・平安・中・近世
38	西脇古墳	円墳	古墳
39	中屋敷古墳	円墳	古墳
40	大山遺跡	集落	縄文早・弥生・古墳前
41	鉾附神社古墳	円墳？	古墳？
42	豊向遺跡	散布地	古墳
43	東山遺跡	集落	縄文早・平安
44	逆川遺跡	散布地	縄文早・前
45	小原遺跡	散布地	縄文晩
46	欠山遺跡	散布地	縄文後
47	曲竹小屋館跡	城館	中世
48	淡島山遺跡	散布地	縄文後・古代
49	岩蔵寺遺跡	散布地	縄文晩・古代
50	妙見遺跡	散布地	縄文晩
51	下原遺跡	散布地	縄文中
52	上原遺跡	散布地	縄文後
53	清水遺跡	散布地	縄文・弥生
54	日向前遺跡	散布地	縄文早・晩・古代
55	八卦遺跡	散布地	縄文後
56	市ノ沢遺跡	散布地	弥生・古代
57	鍛冶沢遺跡	散布地	縄文早・中～晩・弥生・古代
58	馬越遺跡	散布地	縄文中
59	白九頭龍古墳	古墳	古墳
60	十文字遺跡	散布地	縄文中
61	曲木遺跡	散布地	縄文中
62	寺門前遺跡	散布地	縄文中・後
63	谷地遺跡	散布地	縄文中～晩
64	西浦Ｂ遺跡	集落・散布地	縄文中～晩・弥生・平安

番号	遺跡名	種別	時代
65	愛宕山遺跡	散布地	縄文前～後・古代
66	西浦遺跡	集落・散布地	縄文早～後・弥生・古代
67	東浦遺跡	散布地	縄文中・後・弥生・古墳・古代
68	下永野Ｂ遺跡	散布地	奈良・平安
69	矢附館跡	城館	中世
70	下永向山遺跡	散布地	縄文中・弥生・古代
71	蟹沢遺跡	散布地	弥生
72	天王古墳群 天王遺跡	円墳・散布地	縄文早・中・弥生・古墳・古代
73	上野遺跡	散布地	縄文中・弥生・平安
74	高木遺跡	散布地	縄文中
75	高木Ｂ遺跡	散布地	縄文
76	鞘堂山遺跡	散布地	縄文中・後・弥生・古代
77	上曲木Ａ遺跡	散布地	縄文早・弥生・古代
78	上曲木Ｂ遺跡	散布地	縄文早～中・古代
79	桔梗山Ｂ遺跡	散布地	縄文
80	土橋遺跡	散布地	縄文後・弥生
81	上曲木Ｅ遺跡	散布地	縄文前・中
82	上曲木Ｄ遺跡	散布地	縄文前・中
83	上曲木Ｃ遺跡	散布地	縄文早・中
84	八幡平遺跡	散布地	縄文前・中・古代
85	入山遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代
86	手代木Ｂ遺跡	散布地	縄文早・後・古代
87	湯坂山Ｂ遺跡	集落	縄文中～晩・弥生
88	湯坂山遺跡	散布地	縄文中～晩
89	根無藤遺跡	散布地	縄文早・晩・古代
90	円田入Ｂ遺跡	散布地	縄文早・中
91	根無藤館跡	城館	中世
92	円田入Ｃ遺跡	散布地	縄文
93	四方坂館跡	城館	中世
94	町尻遺跡	散布地	縄文
95	三本槻Ａ遺跡	散布地	縄文早
96	入青木遺跡	散布地	縄文
97	山中遺跡	散布地	平安
98	青木遺跡	散布地	平安
99	角山Ａ遺跡	散布地	古代
100	角山Ｂ遺跡	散布地	縄文
101	三本槻Ｂ遺跡	散布地	縄文・平安
102	新並遺跡	散布地	縄文中
103	築館館跡	城館	中世
104	荻の窪遺跡	散布地	縄文晩・弥生
105	鳥山遺跡	散布地	縄文中・古代
106	花楯館跡	城館	中世
107	見継遺跡	散布地	縄文
108	八幡山古墳群	円墳・方墳	古墳
109	土ヶ市遺跡	散布地	弥生・古代
110	戸の内脇遺跡	散布地	縄文早・中・弥生・古墳・平安・中世
111	宋膳堂古墳	円墳	古墳
112	宋膳堂遺跡	散布地	弥生・古墳・平安
113	寺坂遺跡	散布地	平安
114	堀の内遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・古代
115	清水遺跡	散布地	弥生・平安
116	白山遺跡	集落・散布地	弥生・古墳
117	本宿前遺跡	集落・散布地	縄文早・弥生・古代・中世
118	沢遺跡	散布地	古代
119	北境遺跡	散布地	縄文早・弥生・古代
120	中組遺跡	集落・散布地	縄文早・中・弥生・平安・中～近世
121	堂の入遺跡	散布地	弥生・古代・中世
122	大柿内遺跡	散布地	弥生
123	小高遺跡・経塚	散布地・経塚	縄文・弥生・古代・中世
124	諏訪舘遺跡	散布地	弥生・古墳
125	諏訪舘跡	城館	中世
126	諏訪舘横穴墓群	横穴墓？	古墳？
127	諏訪舘前遺跡	集落・散布地	縄文晩・弥生・古墳・平安
128	丈六遺跡	散布地	古代

第１表　周辺の遺跡（番号は第２図に対応）

（1）旧石器時代

宮地区の持長地遺跡、鉄砲町遺跡、明神裏遺跡、小村崎地区の前戸内遺跡が知られている。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層下部よりナイフ形石器が単独出土した（宮城県教委 1980）。石刃を素材として基部の両側縁に刃潰し加工を施すもので、茂呂型ナイフ形石器の範疇に含まれる。鉄砲町遺跡では彫刻刀形石器が採集されている。大型の石刃の末端側に施した急角度剥離面を打面として側縁に樋状剥離面を作出するもので、小坂型彫刻刀形石器の範疇に含まれる。明神裏遺跡では細石刃と槍先形尖頭器が採集されたというが、詳細は不明である。小村崎地区の前戸内遺跡では槍先形尖頭器が採集されている。このほか、宮地区の二屋敷遺跡（縄文時代中期末～後期前葉）では石刃の基部両側縁に二次加工を施したナイフ形石器に類似する石器が出土しているが、本地域では縄文時代中期末から後期初頭にかけて山形県寒河江川流域の集落から珪質頁岩製の石刃が交易品として搬入されたことが分かっており（会田 2000）、層位的裏付けを伴わない石刃製石器の旧石器としての時期判定には注意を要する。

以上のことから、持長地遺跡と鉄砲町遺跡については後期旧石器時代後半期、明神裏遺跡と前戸内遺跡については後期旧石器時代終末期に属する可能性が考えられる。しかし、いずれも単独出土ないしは採集資料のため、明確な時期や遺跡の性格については不明な点が多い。

なお、円田盆地の東側に隣接する村田盆地東縁の新川流域では玉髄が産出し、これを利用して石器製作を行なった原産地遺跡が点在する（新川流域遺跡群）。このうち、村田町小泉地区の賀篭沢遺跡では 2003 ～ 2006 年度にかけて東北学院大学による学術発掘調査が行なわれ、後期旧石器時代の在地型原産地遺跡の様相が明らかにされた（東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール 2006）。今のところ蔵王町内における旧石器時代の人びとの暮らしぶりは明らかになっていないが、このような原産地遺跡に関連して残された遺跡が今後発見される可能性は十分に考えられる。

（2）縄文時代

草創期については明確な遺跡が発見されていない。周辺地域でも白石市福岡深谷地区の高野遺跡で槍先形尖頭器が、同大鷹沢地区の小菅遺跡、戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されている程度で、具体的な様相は明らかでない。早期の遺跡には宮地区の明神裏遺跡、沢入Ｄ遺跡、円田地区の手代木遺跡、三本槻Ａ遺跡、遠刈田地区の北原尾遺跡、前期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、八幡平遺跡、円田地区の入山遺跡、愛宕山遺跡、中期の遺跡には宮地区の上原田遺跡、円田地区の高木遺跡、鞘堂山遺跡、湯坂山Ｂ遺跡、後期の遺跡には宮地区の二屋敷遺跡、山田沢遺跡、一本木遺跡、円田地区の西浦Ｂ遺跡、晩期の遺跡には宮地区の下別当遺跡、沢北遺跡、曲竹地区の鍛冶沢遺跡などがある。

鞘堂山遺跡では主に大木８ｂ式期の竪穴住居跡 5 軒、貯蔵穴 23 基、土坑墓 1 基などが発見され、竪穴住居跡は貯蔵穴・柱穴群を挟むように北西側と南東側に分布していた。湯坂山Ｂ遺跡では主に大木９式期の竪穴住居跡 13 軒、貯蔵穴 8 基などが発見され、多量の土器・石器と土笛が出土している。竪穴住居跡は複式炉を伴うもので、直径 9m に及ぶ大型のものもみられる。西浦Ｂ遺跡では後期初頭～前葉前半期の貯蔵穴・掘立柱建物跡群が発見されている（蔵王町教育委員会 2011）。二屋敷遺跡では中期末の竪穴住居跡 5 軒、後期初頭～前葉の炉跡 2 基、土器埋設遺構 4 基、配石遺構などが発見され、遺物包含層から多量の遺物が出土している（宮城県教育委員会 1984）。鍛冶沢遺跡では大洞 BC ～ C1 式期の土器埋設遺構や弥生時代初頭の再葬墓と、その周囲を取り囲むように配置された掘立柱建物跡群が発見されている（宮城県教育委員会 2010）。

遺跡の分布状況をみると、早期の遺跡は小規模なものが多く、高木丘陵から青麻山東麓部にかけての広範囲に点在し、遠刈田地区から白石市福岡深谷地区にかけての不忘山東麓部にまとまった分布域を形成する。前期の遺跡数はやや少なくなるが、高木丘陵上と青麻山東麓部に点在する。中期から後期にか

けては高木丘陵上に大きな集落が形成され、集中的な遺跡分布域となっている。一方、青麻山東麓部では後期になると多くの集落が形成され、晩期まで継続する大規模な集落がみられる。

このように、時期による分布域の移動と、微地形選択の志向性に変化は見られるものの、縄文時代のおよそ１万数千年間を通して彼らの生活の中心は蔵王山東麓部から延びる高木丘陵上と、青麻山東麓部にあったと言って良い。なお、円田盆地北部の小村崎地区にある都遺跡、窪田遺跡、六角遺跡、原遺跡、平沢地区の中組遺跡などでは縄文時代のものと考えられる落とし穴状土坑が見つかっており、低湿地に面した低平な丘陵裾部が狩猟の場として利用されていたことが分かっている。

（３）弥生時代

縄文時代晩期から継続する宮地区の沢北遺跡、曲竹地区の鍛冶沢遺跡、これに後続する桝形囲式期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、円田地区の清水遺跡、西浦遺跡、塩沢地区の宋膳堂遺跡、東根地区の立目場遺跡、円田式期の遺跡には東根地区の大橋遺跡、塩沢地区の台遺跡、上野遺跡、塩沢北遺跡、小村崎地区の都遺跡、円田地区の西浦遺跡、十三塚式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、立目場遺跡、天王山式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、塩沢地区の天王遺跡、平沢地区の赤鬼上遺跡などがある。

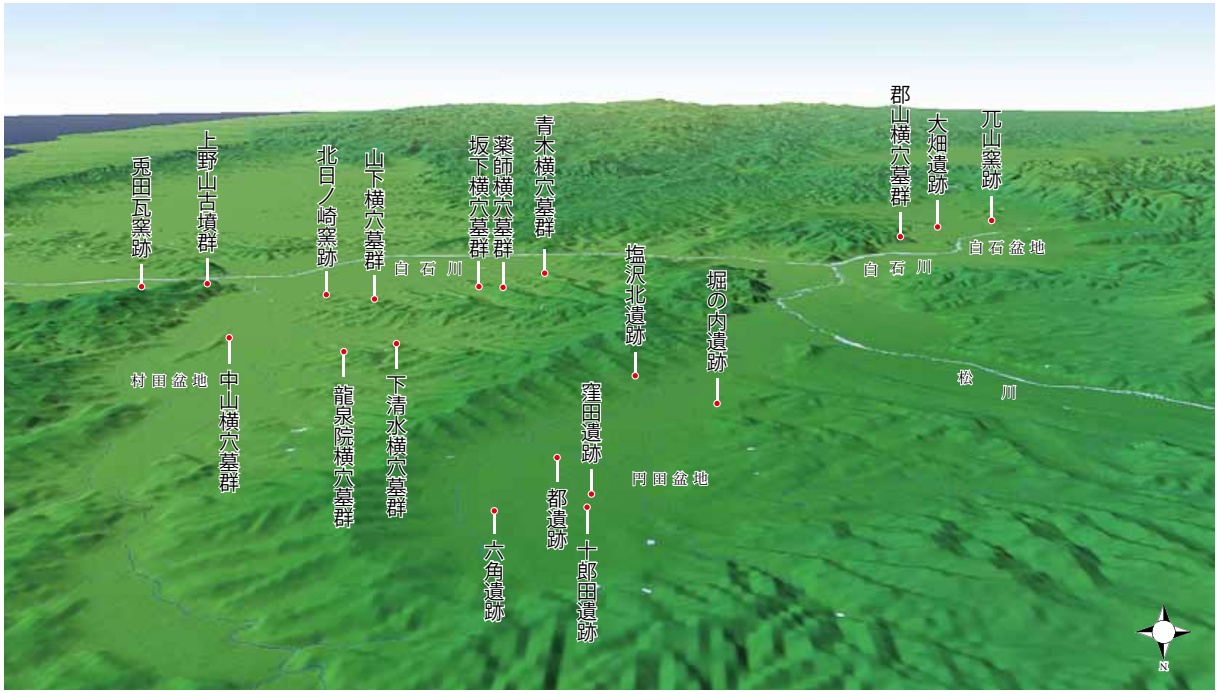
桝形囲式期以前の遺跡は、鍛冶沢遺跡などのように縄文時代晩期の立地を踏襲しながら、一部円田盆地周縁部の丘陵に立地している。円田式期になると円田盆地周縁部に急速に展開し、遺跡数も急増する。遺構が調査された例は皆無であるが、稲作が受容されたと考えるのに十分な変化と言える。十三塚式期から天王山式期にかけてはこうした流れを引き継ぐ一方、愛宕山遺跡のように標高の高い丘陵上に立地する遺跡も見られる。なお、都遺跡（蔵王町教育委員会 2005）で出土した円田式土器の破片と、大橋遺跡(宮城県教育委員会 1980)で出土した天王山式土器の破片の表面には籾殻の圧痕が観察されている。

（４）古墳時代

前期（塩釜式期）の遺跡には東根地区の大橋遺跡、伊原沢下遺跡、円田地区の堀の内遺跡、中期（南小泉式期）の遺跡には小村崎地区の都遺跡、東根地区の中沢Ａ遺跡、台遺跡があるが、後期（住社式期）の遺跡は明瞭には確認されていない。また、高塚古墳には宮地区の明神裏古墳、東根地区の夕向原古墳群、古峯神社古墳、塩沢地区の宋膳堂古墳、天王古墳、西脇古墳、中屋敷古墳、八幡山古墳がある。

古墳時代の遺跡は弥生時代の立地を踏襲し、円田盆地周縁部に集中している。前期の大橋遺跡、伊原沢下遺跡は宮城県内における塩釜式最古段階の（宮城県教育委員会 1980）、中沢Ａ遺跡は南小泉式最古段階の遺跡として知られ、当該地域が周辺地域に先駆けて新しい文化要素を受容していたことが窺われる（蔵王町教育委員会 2007）。また、盆地を取り囲む丘陵上に多くの高塚古墳が築かれている。古墳のほとんどは未調査であるが、古峯神社古墳は主軸長 38m、夕向原 1 号墳は主軸長 57m の前方後円墳（藤沢 2000）、宋膳堂古墳は直径約 30m の円墳で、埴輪が採集されている。明神裏古墳は昭和 31 年に発掘調査され、凝灰岩板石によって築造された箱式石棺が確認されている。

なお、円田盆地を含む白石川流域では、合計 130 か所の古墳・古墳群・横穴墓群が知られており、東北地方の中でも古墳分布が濃密な地域のひとつである（藤沢 1998）。円田盆地の東側に隣接する村田盆地には村田町関場地区の愛宕山古墳（前期、前方後円墳、主軸長 90m、県指定文化財）、沼辺地区の千塚山古墳（前期、前方後円墳、主軸長 85m）、薄木地区の法領権現古墳（中期、前方後円墳、主軸長 64m）など多数の古墳が築造され（村田町教育委員会・千塚山古墳測量調査団 1992）、関場地区の新峯崎遺跡（中期）では祭祀遺構が確認されている（村田町教育委員会 1991）。また、円田盆地の南西約 10km に位置する白石盆地には、白石市大鷹沢地区の瓶ヶ森古墳（前方後円墳、主軸長 56m）、鷹巣 20 号墳（前方後円墳、主軸長 18m）を含む鷹巣古墳群（中期）などが形成されている。



第 3 図　白石川流域における 7 ～ 8 世紀の主な遺跡（鳥瞰図）

（5）古代

飛鳥・奈良・平安時代の遺跡としては 100 か所以上が知られ、このうち発掘調査が行なわれた遺跡としては宮地区の二屋敷遺跡、矢附地区の東山遺跡、塩沢地区の塩沢北遺跡、円田地区の堀の内遺跡、平沢地区の窪田遺跡、都遺跡、赤鬼上遺跡、小村崎地区の戸ノ内遺跡、六角遺跡、十郎田遺跡、前戸内遺跡などがある。また、現在その所在を確認できないが平沢地区の諏訪舘横穴墓群がある。

飛鳥・奈良・平安時代の遺跡は、弥生時代以降の立地を踏襲し、円田盆地周辺に多く分布する一方、町東部の丘陵麓部の広い範囲に分布するようになり、生活領域が拡大したことが窺われる。十郎田遺跡では 7 世紀後半頃の材木塀と大溝による区画施設を伴う集落跡を確認している（第 4 図、蔵王町教育委員会 2010）。六角遺跡では 7 世紀後半～ 8 世紀前半頃の大溝による区画施設を伴う集落跡を確認した。当時の在地の土師器とは異なる関東系土師器を主体的に伴っており、関東型カマドをもつ竪穴住居跡も確認されている（蔵王町教育委員会 2008）。堀の内遺跡、都遺跡、戸ノ内遺跡でも少数ながら関東系土師器が出土している（蔵王町教育委員会 2009）。都遺跡では遺跡中枢部が削平により残存しないものの、8 世紀前半の多賀城創建期（奈良時代初頭）に位置づけられる軒平瓦が採集されているのをはじめ、大型の掘立柱建物跡と材木塀による区画施設が確認されており、当時の円田盆地を中心とする地域の経営に関する官衙関連施設が営まれていた可能性がある（第 5 図、蔵王町教育委員会 2005）。

第 4 図　材木塀で区画された集落（十郎田遺跡）

第 5 図　都遺跡で出土した土器と採集軒平瓦

また、前戸内遺跡では平安時代前半の掘立柱建物跡群が確認され、墨書土器が出土している（蔵王町教育委員会 2009）。東山遺跡からは、石組みのカマドを持つ平安時代の竪穴住居跡と土器溜遺構が確認され、灰釉陶器、転用硯のほか、墨書土器が多量に出土している（宮城県教育委員会 1981）。

なお、村田盆地では村田町関場地区の龍泉院横穴墓群（7 世紀中頃～後半）、村田盆地南側の白石川流域では大河原町福田地区の山下横穴墓群、金ケ瀬地区の青木横穴墓群など多くの横穴墓群が分布するほか、柴田・村田町にまたがる上野山丘陵上に総数 314 基を数え東北最大規模の高塚古墳群とされる上野山古墳群（7 世紀後半～ 8 世紀初頭頃、柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会 1995）が形成されている。白石盆地では白石市郡山地区に郡山横穴墓群（7 ～ 8 世紀）などが形成されている。

また、官衙関連遺跡として 8 世紀前半頃の可能性のある倉庫院跡が確認され苅田郡跡と考えられている白石市大畑地区の大畑遺跡（宮城県教育委員会 1995）がある。生産遺跡としては多賀城創建期に先行する瓦を生産し、未発見の柴田郡衙への供給が推定される大河原町船迫地区の兎田瓦窯跡、大畑遺跡に瓦を供給した白石市八幡町地区の兀山窯跡（8 世紀前半頃）、須恵器を生産した村田町沼辺地区の北日ノ崎窯跡（7 世紀後半・7 世紀末～ 8 世紀初頭、村田町教育委員会 1988）などがある（第 3 図）。

このほか、平沢地区に現存する丈六阿弥陀如来坐像（県指定文化財）は平安時代末期の作風とされ、奥州藤原氏との関係性を示唆している。また、丈六阿弥陀堂があったとされる平沢字丈六地区には、阿弥陀堂の参道杉並木の一本が現生し、平沢弥陀の杉（県指定天然記念物）と呼ばれている。

（6）中世

宮地区の宮城館跡、山家館跡、館の山城跡、曲竹地区の曲竹小屋館跡、円田地区の花楯館跡、棚村館跡、小村崎地区の西小屋館跡、兵衛館跡、平沢地区の諏訪舘館跡、矢附地区の矢附館跡などがあり、町東部の丘陵上に多くの城館が築かれている。また、円田盆地北部の戸ノ内遺跡（蔵王町教育委員会 2009）、西屋敷遺跡、十郎田遺跡などで掘立柱建物跡群が確認されているほか、宮地区の持長地遺跡では掘立柱建物跡群に伴って常滑系陶器、馬具、鉄鈴、刀子などが出土している（宮城県教育委員会 1980）。

（7）近世以降

小村崎地区の車地蔵遺跡では近世の有力者層の屋敷地の一部と考えられる掘立柱建物跡、区画溝跡、水場遺構などの遺構群が確認された（蔵王町教育委員会 2006）。伊達家家臣の高野家が拝領した平沢地区の平沢要害跡は、江戸時代の絵図に本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭のような構造であったことが窺える。また、遠刈田地区の岩崎山金窟址では戦国末期には採掘が開始されていたとみられ、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。

現存する近世の建造物としては、曲竹地区の我妻家住宅（江戸中期、国指定重要文化財）、宮地区の刈田嶺神社本殿（江戸中期、県指定文化財）、平沢地区の日吉神社本殿（江戸中期）、小村崎地区の奥平家住宅（江戸後期、町指定文化財）などがある。刈田嶺神社は江戸時代には刈田郡総鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。日吉神社は高野家の領地替えの時に伊達郡より遷座された。

また、近世には奥州街道が宮地区を通り、さらに宮宿から分かれて永野宿、猿鼻宿を経由し、四方峠、笹谷峠を越えて山形へ至る羽前街道が通っていた。平沢地区には羽前街道の古道の一部が保存され（旧羽前街道保存地区）、藩政時代の街道の景観を今に伝えている。

近代の遺構としては遠刈田地区の遠刈田製鉄所高炉跡、軽便鉄道跡などがある。遠刈田製鉄所高炉跡は当時最先端の設計で明治時代後期に建てられたもので、近代製鉄遺構としては国内で唯一、基礎部分が現存する。明治時代後期から大正時代にかけて大河原－遠刈田間を結んだ軽便鉄道は、現在の道路あるいは路地として、その路線敷きの名残を留めている。

第２章　調査に至る経緯

蔵王町北東部の円田盆地に広がる水田地帯を対象とした経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）では、昭和 63 年度に盆地南部（円田 1 期地区）の事業計画が策定され、同年に埋蔵文化財保存協議が実施された。この結果を受け、同年から平成２年度にかけて事業実施区域内に存在する埋蔵文化財包蔵地の遺構確認調査および事前調査が宮城県教育庁文化財保護課により実施されている（宮城県教育委員会 1989・1990・1991・1992）。

第６図　窪田遺跡遠景（東から）

一方、盆地中・北部（円田２期地区）の事業計画は平成８年度に策定され、平成 12 年度には事業年次計画が提示された。事業実施予定区域内には多数の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、平成８年度より文化財保護側の宮城県教育委員会、蔵王町教育委員会と原因者側の宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区の四者による埋蔵文化財保存協議が開始された。

平成 11 年度の協議において事業実施区域内における埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布調査が必要であるとの判断がなされ、平成 12 年度に蔵王町教育委員会が分布調査を実施した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく広がることが判明した。この結果を基に再協議を実施し、埋蔵文化財包蔵地の破壊される面積をできるだけ少なくするよう事業計画を大幅に見直すことが決定した。平成 13 年度には大河原地方振興事務所より、水田および畑地となる部分については、地下の遺構を保護するよう適宜盛土を行なうとともに、幹線農道以外の作業用道路については未舗装の砂利道として事前調査対象範囲をできるだけ減少させる見直し案が提示され、合意に達した。

平成 13・14 年度には宮城県教育庁文化財保護課と蔵王町教育委員会によって事業実施区域内の遺構確認調査が実施され（宮城県教育委員会 2002・2003）、この結果を踏まえた協議により、遺構の存在する部分については基本的に盛土による現状保存を行ない、計画田面が遺構面よりも下がる切土部分と、道路・水路の建設に伴って遺構面が掘削される部分について事前調査を実施することが決定した。平成 14 年度には事業実施区域のうち県道の南側部分を平成 15・16 年度に、北側部分を平成 17 ～ 21 年度に順次施工する事業計画が提示され、これに先立って平成 15 年度に南側部分を、平成 17 ～ 20 年度に北側部分を対象とする計 14 遺跡の事前調査計画が策定された。なお、その後の事業計画見直しなどにより、北側部分の調査年度を平成 23 年度まで延長することで合意している。

蔵王町教育委員会は宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、平成 15・16 年度に都遺跡、窪田遺跡（南部）、新城館跡（蔵王町教育委員会 2005）、平成 17 年度に車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡（蔵王町教育委員会 2006）、平成 18・19 年度に六角遺跡（蔵王町教委教育委員会）、平成 19・20 年度に戸ノ内遺跡（蔵王町教育委員会 2009）の事前調査を実施してきた。本書で報告するのは、平成 20 年度に実施した窪田遺跡（北部）の調査成果である。

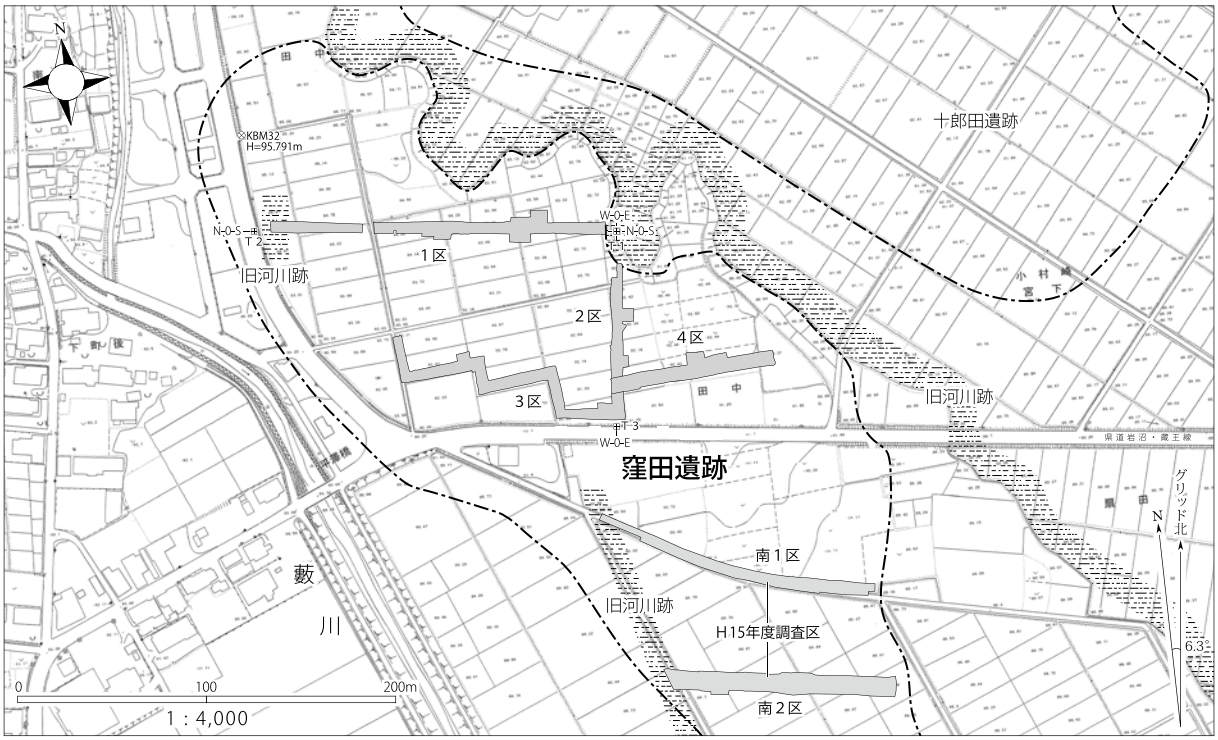
なお、このほか十郎田遺跡（H19・20 年度）、前戸内遺跡（H20・21 年度）、西屋敷遺跡・磯ヶ坂遺跡（H21 年度）で事前調査を実施し、現在整理作業が進行中である。また、平成 23 年度には事業用地内の集落道改修にかかる遺跡の事前調査を実施する計画である。これらについては、平成 24 年度までに順次発掘調査報告書を刊行して本事業計画にかかわる遺跡の事前調査を終了する計画となっている。

第３章　調査の方法と経過

遺跡は円田盆地北西縁から南東方向に細長く延びる低平な舌状丘陵上に立地する。遺跡付近の地形は南東向きにわずかに傾斜する平坦面となっており、本遺跡の南東約 200m の丘陵末端部には都遺跡が立地する。丘陵の南西縁に沿って藪川、北東縁に沿って旧河道が位置しており、本遺跡の立地する丘陵は二つの河川に挟まれた環境であったと考えられる。現況は畑地および水田である。平成 14 年に実施された遺構確認調査では丘陵上のほぼ全域で古墳時代中期、7 世紀後半～奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが確認され、7 世紀後半～奈良・平安時代を主体とする集落跡と予想された。

県営ほ場整備事業計画に伴う埋蔵文化財保存協議（事業主側：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区、文化財保護側：宮城県教育委員会・蔵王町教育委員会）により本遺跡範囲の東部が事業計画範囲に含まれることが判明したため、遺跡範囲における遺構分布状況と遺構面深度の把握を目的とした綿密な遺構確認調査を平成 14 年度に実施した。これに基づく最終的な事業設計案が平成 17 年度に提示され、田面となる部分は原則として盛土によって遺構面を保護し、止むを得ず切土が発生する道路・水路の予定範囲について事前調査を実施して文化財保護法上必要な措置としての記録保存を図るという基本方針で合意に達した。

本遺跡は中央部を横断する県道によって南北に分断されており、施工区域との関係から県道南側部分の発掘調査を先行して平成 15 年度に実施した。この結果、古墳時代中期と 7 世紀末～ 8 世紀前半頃を主体とする竪穴住居跡 11 軒、掘立柱建物跡 3 棟、井戸跡 1 基、溝跡 3 条、土坑 2 基、柱穴多数などが確認されている（蔵王町教育委員会 2005）。今回報告する県道北側部分の発掘調査は平成 20 年度に業務委託契約（委託者：宮城県大河原地方振興事務所、受託者：蔵王町）を締結し、事前調査を実施する運びとなったものである。



第 7 図　調査区配置図

発掘調査は平成 20 年 5 月 21 日～ 9 月 19 日までの約 4 ヶ月間を要した。今回の発掘調査は、道路・水路の整備によって遺構面が削平される範囲を対象としたものである。遺跡範囲内に計画された水路・作業道予定地に 1 ～ 4 区を設定し、順次調査を実施した（第 7 図）。確認した遺構のうち、工事で掘削の及ばない範囲（主に作業道予定地）については遺構の分布状況を記録するに留め、工事による破壊を免れない範囲（主に水路予定地）について遺構の精査を実施した。調査面積は、事前調査分約 2,848㎡、確認調査分約 1,181㎡の合計約 4,029㎡に及んだ。

調査の方法は重機による表土除去の後、手作業による遺構確認と遺構精査を行なった。確認した遺構は竪穴住居跡 15 軒、竪穴状遺構 1 基、掘立柱建物跡 26 棟、柱列跡 8 条、井戸跡 9 基、落とし穴状土坑 2 基、土坑 25 基、溝跡 18 条、水溜状遺構 1 基、焼成遺構 1 基、柱穴多数である（第 10 図）。

本発掘調査の測量基準点は作業道計画路線上に打設された工事用基準杭を機械設置点および方位視準点として使用し、測量基準線に平行・直交する 3 mグリッドを設定した。図面についてはトータルステーションを用いて設定した 3m グリッドを利用してすべて手実測で作成し、遺構は必要に応じて 1/20 縮尺の平面図・断面図を作成した。1 区西部では遺構分布が散漫であったことから 1/100 縮尺の平板実測による遺構配置図を作成し、必要に応じて 1/20 縮尺の遺構平面図・断面図を作成した。また、デジタル一眼レフカメラおよび 35mm モノクロームフィルムを用いて、必要に応じて遺構の検出状況と土層断面、完掘状況、遺物の出土状況および調査区全景などの記録写真を撮影した。デジタルデータについては DVD-ROM に記録して保管した。出土遺物は調査区および遺構、出土層位別に取り上げた。

整理作業は平成 20 年度に当該年度調査遺跡の基礎整理のための業務委託契約を締結し、平成 20 年 9 月 29 日～平成 21 年 3 月 25 日の約 6 ヶ月間実施した。本遺跡については出土遺物の洗浄と注記、接合と修復の作業を実施したほか、図面と写真などの記録類の基礎的な整理作業を実施した。平成 22 年度には平成 19・20 年度調査遺跡の本整理と本遺跡の発掘調査報告書作成のための業務委託契約を締結し、平成 22 年 6 月 1 日～平成 23 年 3 月 25 日の約 8 ヶ月間実施した。本遺跡については出土遺物の実測と写真撮影、実測図・遺構図トレース、図版レイアウト、本書の執筆・編集と印刷・製本を実施した。

遺構図については、手実測で作成した図面をイメージスキャナとビットマップ画像編集ソフトウェアを用いてデジタル画像化し、調査員が作成した遺構調書を参照しながらパソコン内でベクトル画像編集ソフトウェアを用いてデジタルトレースを行なった。遺物については、水洗洗浄の後に注記を行ない、可能な限り接合と修復を行なった上で遺物調書を作成し、遺物の性格と残存状況などに応じて実測図あるいは拓本を作成した。遺物の実測図およびトレース図についてはすべて手作業により作成した。実測図等の作成が終了した遺物については、デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行なった。

以上の経過を経て作成した遺構・遺物調書をもとに執筆した本文と、遺構・遺物の写真・図面等のレイアウトおよび編集作業を DTP ソフトウェアを用いて実施し、本書の印刷・製本を完了した。

第 8 図　発掘作業風景

第 9 図　整理作業風景

第 4 章　調査の結果

第 1 節　基本層序

調査区により立地条件と土層の堆積状況に違いが見られるが、基本層序はⅠ～Ⅷ層に大別される。Ⅰ層は表土ないしは現耕作土で、層厚は 15 ～ 25cm 程度である。Ⅱ層は旧表土ないしは旧耕作土で、層厚は 10 ～ 30cm 程度である。近世～近代の陶磁器片などを含む。Ⅲ層は黒ボクと称される黒色火山灰土で、層厚は 20 ～ 40cm 程度である。縄文土器片などを含む。丘陵斜面部に堆積し、斜面下部では複数の再堆積層を形成する。Ⅳ層はⅢ層下部とⅤ層上部に形成された漸移層で、層厚は 20cm 程度である。Ⅴ層は黄褐色ローム層で、層厚は 30 ～ 40cm 程度、Ⅵ層は白色粘土層で、層厚は 30 ～ 50cm 程度である。Ⅶ層は猿岩と称される凝灰質シルトで、川崎スコリア層（板垣 1981）に相当するとみられる。

調査区内ですべての層序を確認した地点はなく、耕作および削平などによりⅠ層またはⅡ層の直下でⅢ層より下位の層を確認した地点が多かった。遺構はⅢ層上面あるいはⅣ～Ⅶ層の削平面で確認した。以上の状況を考慮すれば、確認した遺構の多くが本来はⅢ層上面から掘り込まれたものと考えられる。

第 2 表　基本層序

層名	土性	性格	層厚	備考
Ⅰ層	黒褐色シルト	表土・現耕作土	15 ～ 25cm	
Ⅱ層	黒色シルト	旧表土・旧耕作土	10 ～ 30cm	近世～近代の陶磁器片を含む
Ⅲ層	黒色シルト	黒色火山灰	20 ～ 40cm	古代～中世の遺構掘り込み面
Ⅳ層	暗褐色シルト	漸移層	20cm	
Ⅴ層	黄褐色粘土	黄褐色ローム	30 ～ 40cm	
Ⅵ層	白色粘土	水成堆積	30 ～ 50cm	
Ⅶ層	凝灰質シルト	川崎スコリア（Za-Kw）	20 ～ 40cm	2.6 ～ 3.1 万年前
Ⅷ層	白色粘土	水成堆積	20cm ～	砂礫を含む

第 2 節　発見された遺構と遺物

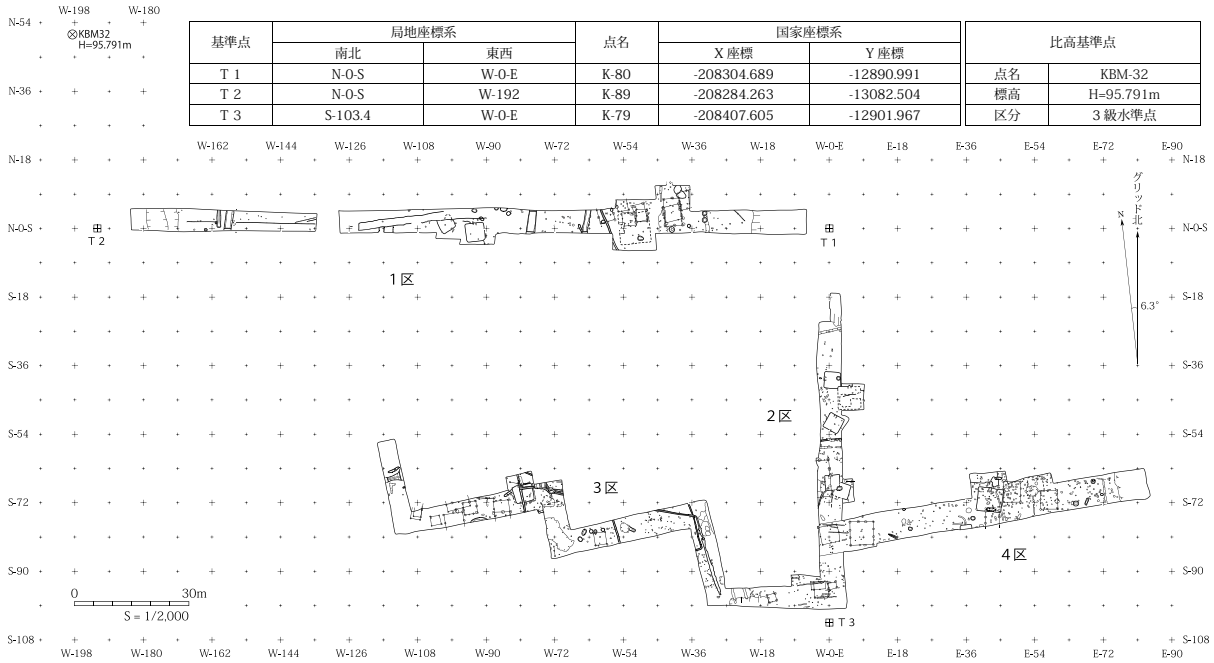
確認した遺構は、竪穴住居跡 15 軒、竪穴状遺構 1 基、掘立柱建物跡 26 棟、柱列跡 8 条、井戸跡 9 基、落とし穴状土坑 2 基、土坑 25 基、溝跡 18 条、水溜状遺構 1 基、焼成遺構 1 基、柱穴多数である（第 10 図）。各調査区の概要と遺構の確認状況は以下のとおりである。

1 区は西部に東西約 49m、南北約 6m、中央～東部に東西約 122m、南北約 6m の東西方向に延びる調査区を設定した。調査区内はほぼ平坦で、遺構確認面はⅤ層上面である。現地表面からの深さは西部で 30cm 程度、中央～東部で 10 ～ 20cm である。調査区の東西両端で旧河道跡を確認した。確認した遺構は、竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 8 棟、柱列跡 1 条、井戸跡 6 基、土坑 10 基、溝跡 6 条である。

2 区は東西約 6m、南北約 60m で南北方向に延びる調査区である。調査区内は北へ向かってわずかに傾斜し、遺構確認面はⅣ～Ⅴ層上面である。現地表面からの深さは 15 ～ 20cm である。調査区北端で旧河道跡を確認した。確認した遺構は、竪穴住居跡 6 軒、掘立柱建物跡 1 棟、柱列跡 1 条、土坑 2 基、溝跡 1 条である。

3 区は東西 123m、南北 44m の範囲に幅約 6m で東西方向にジグザグ状に延びる延長 182m の調査区である。調査区内は南西に向かってわずかに傾斜し、遺構確認面はⅣ～Ⅵ層上面である。現地表面からの深さは 15 ～ 40㎝である。調査区南部で谷地状の地形を確認した。確認した遺構は、竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 12 棟、柱列跡 6 条、落とし穴状土坑 1 基、土坑 7 基、溝跡 11 条、水溜状遺構 1 基である。

4 区は東西約 88m、南北約 8m で東西方向に延びる調査区である。調査区内はほぼ平坦で、遺構確認



基準点	局地座標系		点名	国家座標系		比高基準点	
	南北	東西		X 座標	Y 座標		
T 1	N-0-S	W-0-E	K-80	-208304.689	-12890.991	点名	KBM-32
T 2	N-0-S	W-192	K-89	-208284.263	-13082.504	標高	H=95.791m
T 3	S-103.4	W-0-E	K-79	-208407.605	-12901.967	区分	3 級水準点

第 10 図　調査区設定図

面はⅣ～Ⅵ層である。現地表面からの深さは 15 ～ 60cm である。確認した遺構は、竪穴住居跡 3 軒、竪穴状遺構 1 基、掘立柱建物跡 5 棟、井戸跡 3 基、落とし穴状土坑 1 基、土坑 6 基、焼成遺構 1 基である。

出土した遺物は、土師器を主体に、ロクロ土師器、須恵器、中世陶器、縄文土器、弥生土器、木製品、石器、鉄製品などである。土師器は竪穴住居跡などから出土したもので、5 世紀（古墳時代中期）、7 世紀中頃～ 8 世紀中頃（飛鳥時代後半～奈良時代前半）に位置づけられるものがある。ロクロ土師器も竪穴住居跡などから出土したもので、8 世紀末～ 9 世紀初頭（平安時代初頭）に位置づけられるものがある。出土遺物の修復後総量は遺物収納コンテナ（44 × 60 × 15cm）で約 30 箱分である。

出土した遺物の特徴などから、確認した遺構は主に 5 世紀（古墳時代中期）、7 世紀中頃～ 8 世紀中頃（飛鳥時代後半～奈良時代前半）、8 世紀末～ 9 世紀初頭（平安時代初頭）、13 世紀（中世）に位置づけられる。以下、発見された遺構と遺物について調査区ごとに詳述する。

1．1 区

（1）竪穴住居跡

【SI1 竪穴住居跡】（第 12 ～ 15 図、写真図版 3 － 4，4，5 － 1･2）

〔位置・確認面〕1 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

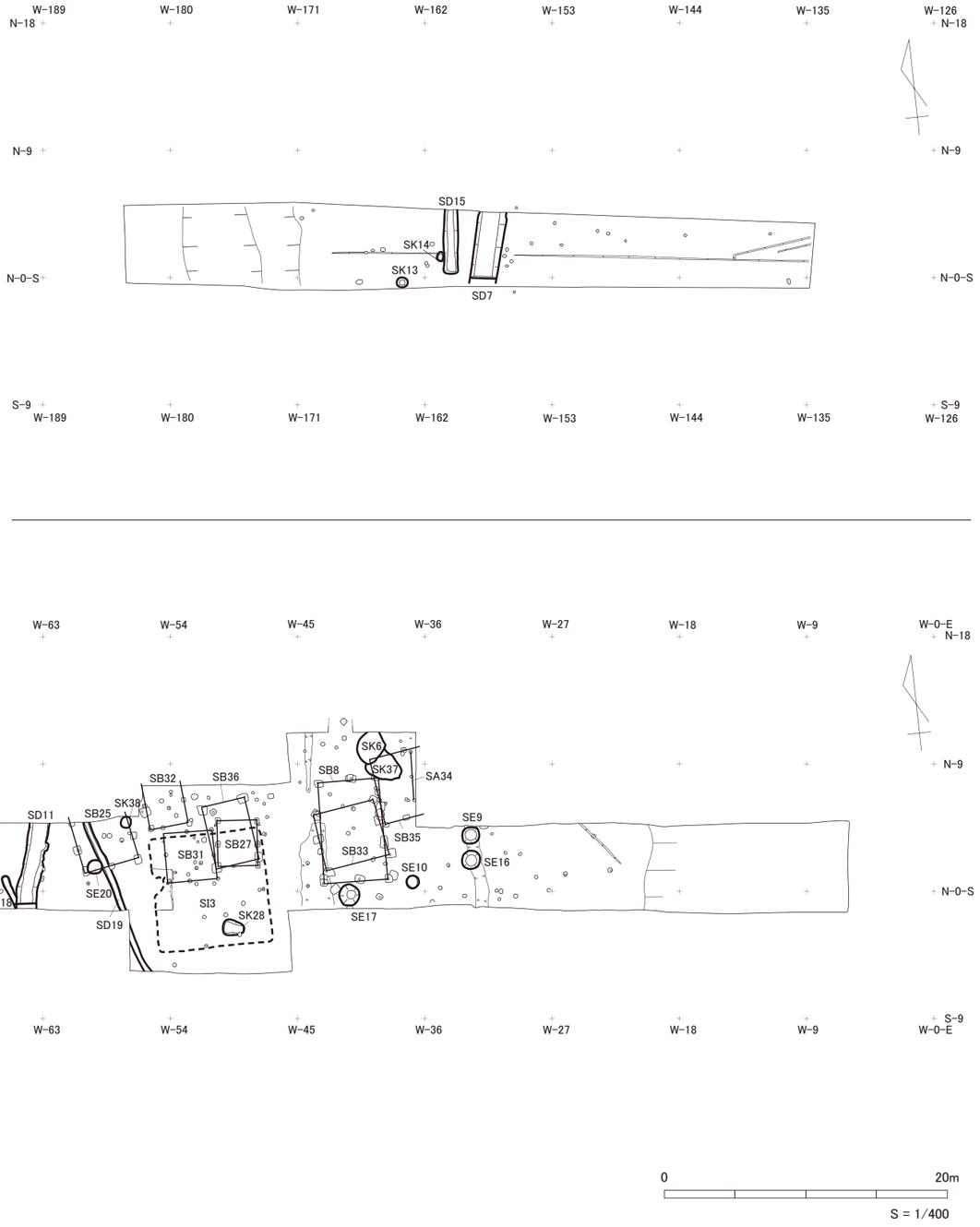
〔規模・形状〕東西 5.0m、南北 4.8m の隅丸方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N － 0°

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な西壁で床面から 20cm である。

〔床面〕住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦であるが、西側に向かってわずかに傾斜する。

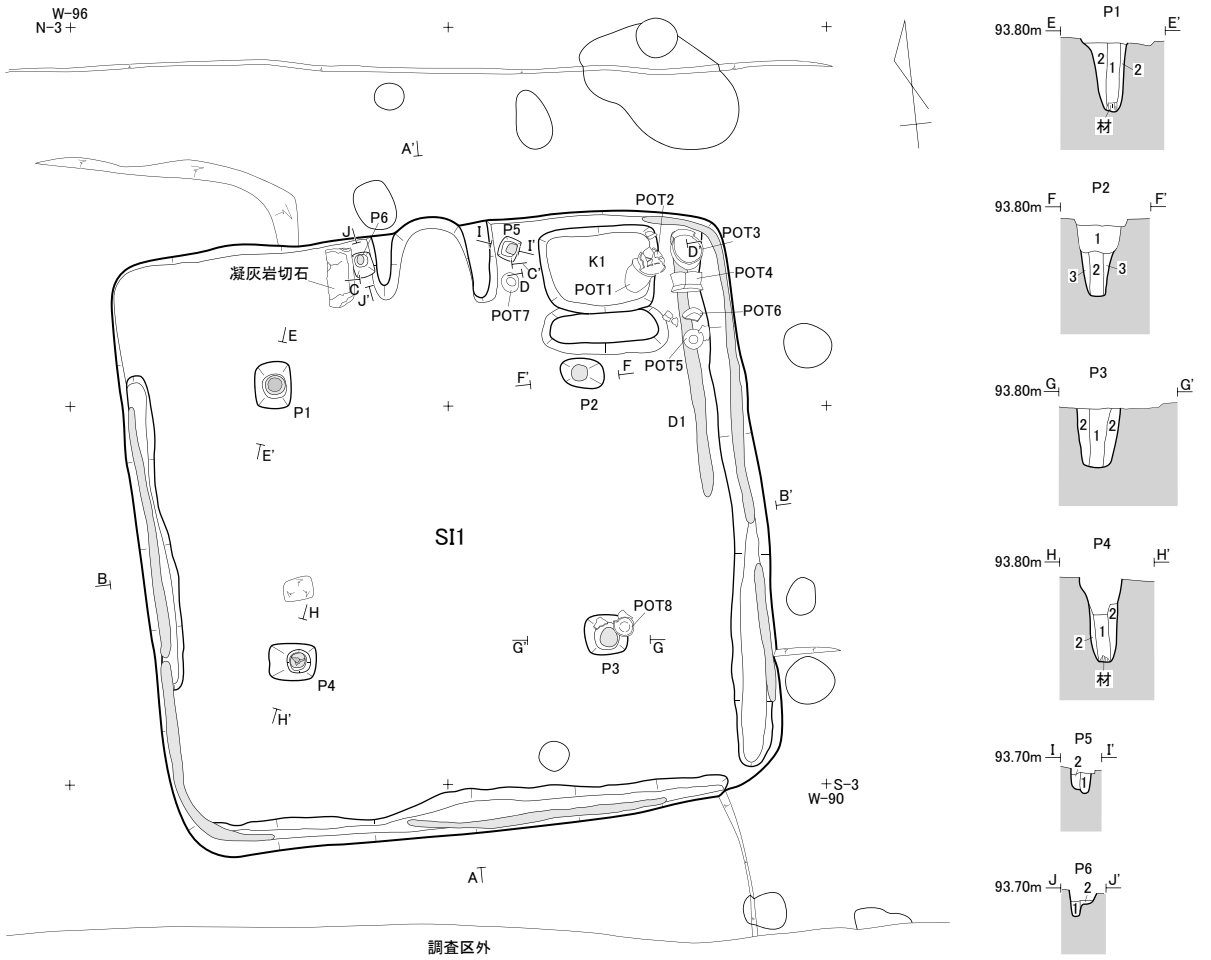
〔主柱穴〕4 か所確認した。やや西側へずれる南西側の P4 を除いては、住居平面形の対角線上に位置している。掘方の平面形は長軸 33 ～ 37cm、短軸 23 ～ 31cm の隅丸方形を呈し、深さ 50 ～ 64cm である。掘方埋土は地山起源の灰白色粘土ブロックと凝灰岩質岩片を含む黒褐色シルトである。いずれも平面形が直径 10 ～ 15cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認したほか、2 か所では掘方底面に柱材の一部が残存していた。また、1 か所で柱材の抜き取り穴を確認した。



第 11図　1 区遺構配置図

〔周溝・壁材〕カマドの付設される住居北辺を除く３辺に上幅 11 ～ 29cm、深さ３～ 10cm の周溝が巡る。堆積土は凝灰岩質岩片を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。周溝内の住居壁面側に幅 5 ～ 10cm、深さ 4 ～ 5cm の壁材痕跡を確認した。
〔小溝〕住居東辺北半部の住居壁面から 40cm 程の位置を直線的に延びる上幅８～ 11cm、深さ 4cm の小溝（D1）を確認した。堆積土は周溝と同様で、人為的埋土と考えられる。
〔カマド〕住居北辺中央に付設されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ 102cm、幅 98cm で、焚口幅は側壁先端間で 76cm である。燃焼部底面は幅 57cm、奥行 90cm で、床面と一連の平坦面となっている。底面には被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は左右とも残存し、長さ 51 ～ 63cm、幅 25 ～ 27cm、高さ 19 ～ 23cm である。凝灰岩質岩片を含む灰黄褐色シルトで構築されている。奥壁は住居北壁より 10cm 張り出す。燃焼部左側の床面で長さ 45cm、幅 20cm、厚さ 8cm の凝灰岩切石が出土した。片面に被熱による赤色化が認められ、焚口部を構成していた構築材の可能性がある。また、燃焼部両脇で柱穴各１か所を検出した。掘方の平面形は長軸 16 ～ 19cm、短軸 15 ～ 16cm の隅丸方形を呈し、深さ 22cm である。いずれも平面形が直径８～ 10cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。カマドの上部構造に付随する施設と考えられる。
〔貯蔵穴〕住居北東隅で土坑１基（K1）を確認した。平面形は長軸 95cm、短軸 69cm の隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 25cm の皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は３層に細分され、1 層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、2 層は淡黄色粘土、3 層は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。また、貯蔵穴南辺に沿った住居床面に長さ 110cm、幅 24cm、高さ 4cm の土手状の施設を確認した。構築土は凝灰質岩片を含む灰黄褐色シルトで、カマド構築土と類似している。
〔床下土坑〕なし
〔堆積土〕２層に細分される。いずれも凝灰岩質岩片などを含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。
〔出土遺物〕確認面より土師器小型甕（第 13 図 9･第 14 図 1）、堆積土より土師器坏（第 13 図 1･5･8）･鉢（第 13 図 10）、カマド崩落土より土師器坏（第 13 図 2･7）、床面より土師器坏（第 13 図 3･4･6）･甕（第 14 図２～５、第 15 図 1）・小型甕（第 13 図 11・12）が出土した。

土師器坏は厚手で重量感のあるものが多く、丸底（第 13 図 1･2）、平底風丸底（第 13 図３～５･8）、平底（第 13 図６・７）のものがある。いずれも外面の口縁部にヨコナデ調整、体部～底部にヘラケズリ調整を施す。内面の調整はヘラミガキ調整（第 13 図２～４・7）、ヘラナデ調整（第 13 図 6）のみで黒色処理を施さないものが多く、ヘラミガキ調整（第 13 図 8）、ヨコナデ調整（第 13 図 5）の後に黒色処理を施すものが少数である。第 13 図 1 はヘラミガキ調整→黒色処理？を施す。土師器鉢（第 13 図 10）は内面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。外面は口縁部にヨコナデ調整、体部～底部にヘラケズリ調整を施し、頸部に段を持つ。外面の段に対応する位置の内面には屈曲がみられる。土師器小型甕は胴上部に最大径を持つもの（第 13 図９・12、第 14 図 1）と中位に最大径を持つもの（第 13 図 11）がある。いずれも外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部に縦方向のハケメ調整を施し、第 13 図 11・12 は外面の下半部にヘラケズリ調整を施す。第 14 図 1 は外面の頸部に明瞭な段を形成するが、他は見られない。土師器甕は長胴のもの（第 14 図２～５）と胴部が内弯し球胴状を呈するもの（第 15 図 1）がある。第 14 図 1 は外面の頸部に明瞭な段を形成するが、他は見られない。外面の調整はいずれも口縁部にヨコナデ調整､胴部に縦方向のハケメ調整を施し､第 14 図 4･5 は下半部に縦方向のヘラケズリ調整、第 15 図 1 は下半部に縦方向のヘラケズリ調整→ヘラミガキ調整を施す。第 14 図 3 は外底面に木葉痕を持つ。



SI1　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	凝灰岩片・粒を多く含む　粘土粒を含む（住堆）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	凝灰岩片・粒を少量含む（住堆）
3	2.5Y7/3 浅黄	粘土	均質土（カマド崩）
4	5YR4/1 褐灰	シルト	焼土を多く含む、焼骨を含む（竈崩）
5	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（壁材痕）
6	10YR3/1 黒褐	シルト	凝灰岩片を少量含む（周溝堆・人為）
7	10YR2/2 黒褐	シルト	凝灰岩片を多く含む（住掘）
8	10YR3/4 暗褐	シルト	10YR5/1 灰褐色の砂礫を含む（住掘）

SI1 カマド　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR5/2 灰黄褐	シルト	凝灰岩片・炭粒を含む（竈構）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	凝灰岩片・灰色粘土を含む　上面が被熱により赤色化（住掘・住居主断面 7 層対応）
3	10YR3/4 暗褐	シルト	10YR5/1 灰褐色の砂礫（φ 1 ～ 2mm）を含む（住掘・住居主断面 8 層対応）
4	10YR3/4 暗褐	シルト	砂を含む（住掘・住居主断面 9 層対応）

SI1 K1　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む　上部に Pot1 を含む（人為）
2	2.5YR8/4 淡黄	粘土	カマド崩落土（住居主断面 3 層）と類似（人為）
3	10YR2/3 黒褐	粘土	地山ブロックを含む（人為）

SI1 P1　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山・灰色粘土・黒色シルトブロック、凝灰岩片を含む（柱掘）

SI1 P2　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	凝灰岩片を含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
3	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI1 P3　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI1 P4　H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	灰色粘土ブロックを多く含む（柱掘）

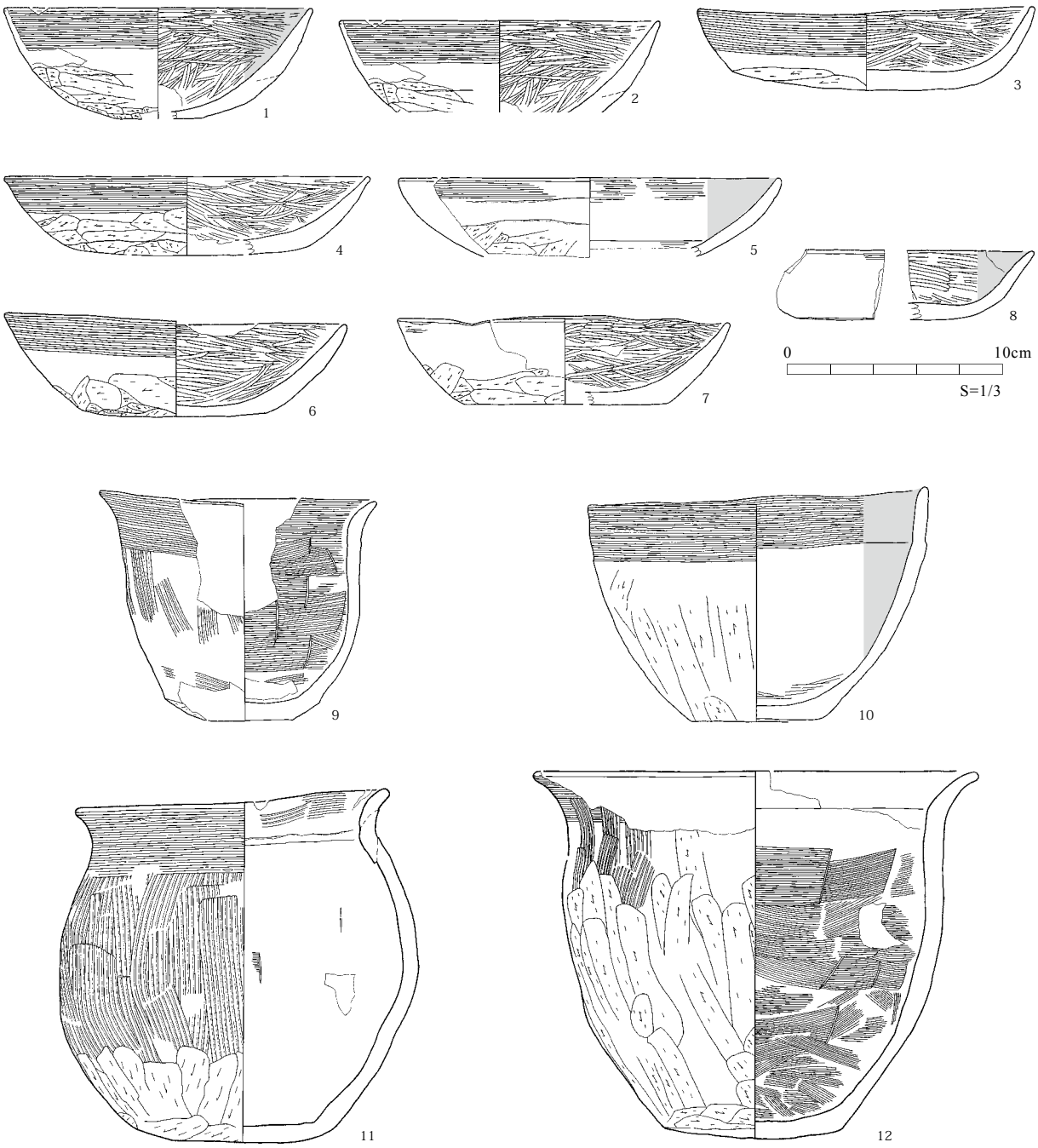
SI1 P5　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	灰色粘土ブロック・凝灰岩粒を含む（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒・砂を含む（柱掘）

SI1 P6　J-J'

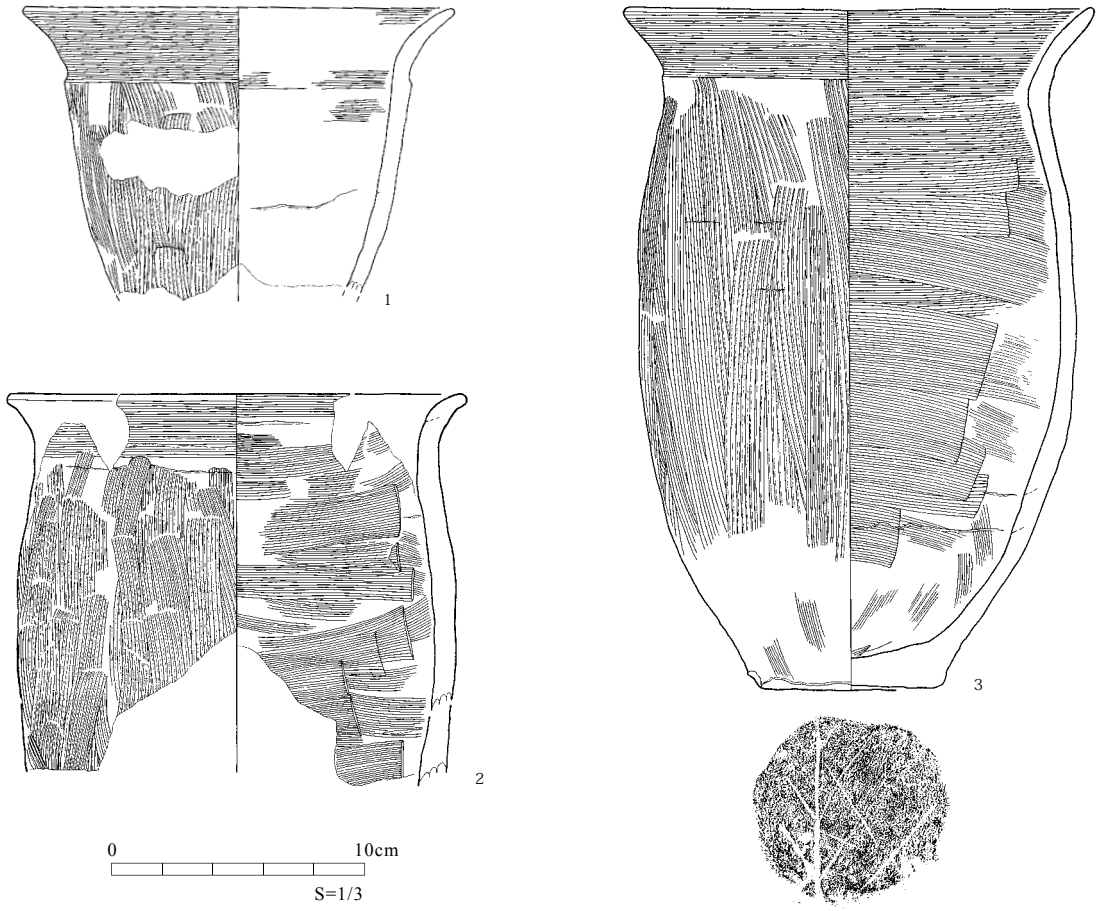
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	凝灰岩ブロックを含む（柱痕）
2	10YR3/6 黒褐	シルト	地山粒・砂を含む（柱掘）

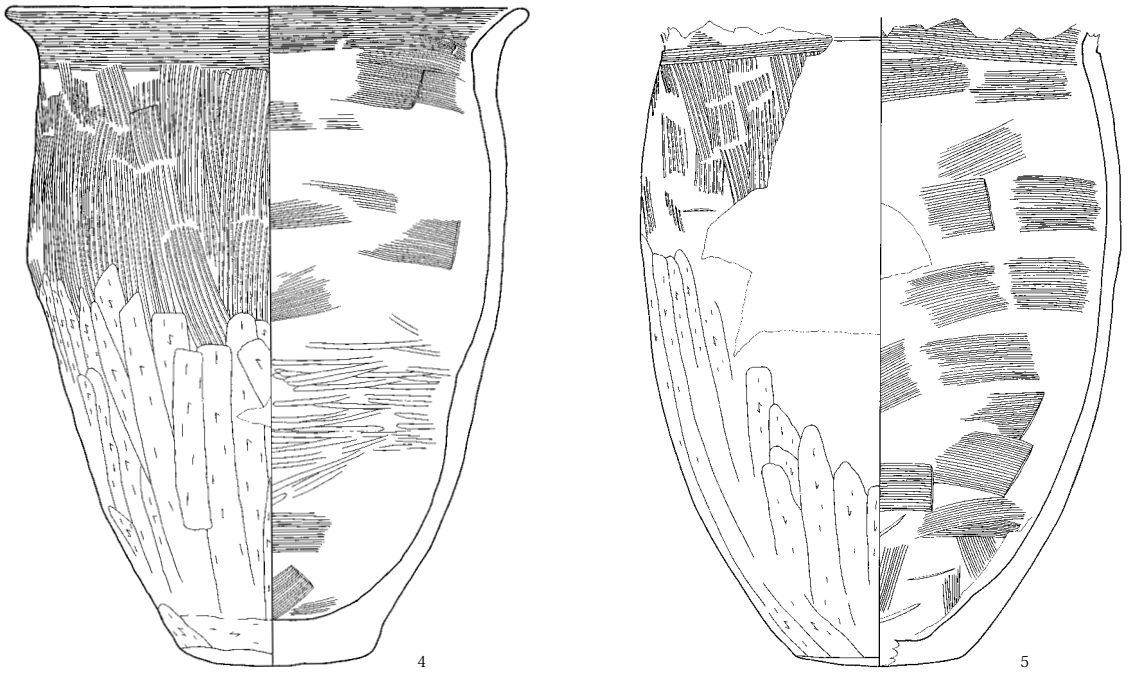
第 12 図　SI1 竪穴住居跡



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI1	堆積土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理？, 外面：(口) ヨコナデ，(体) ナデ，(体下～底) ヘラケズリ	(14.3)	-	(5.2)	1/5	16	28-1
2	SI1	カマド崩落土 Pot .7a	土師器	坏	内面：ヘラミガキ，外面：(口) ヨコナデ，(体) ナデ，(底) ヘラケズリ	15.8	-	4.4	5/6	7	28-2
3	SI1	床面直上 Pot .6	土師器	坏	内面：ヘラミガキ，外面：(口) ヨコナデ，(体) ナデ，(底) ヘラケズリ	15.7	-	3.5	完形	6	28-3
4	SI1	床面直上	土師器	坏	内面：ヘラミガキ　外面：(口) ヨコナデ→(体～底) ヘラケズリ→(底) 一部ミガキ	(17.0)	(11.4)	(4.7)	1/4	10	28-4
5	SI1	堆積土	土師器	坏	内面：(体) ナデ？・(口) ヨコナデ→黒色処理, 外面：(口) ヨコナデ，(体下) ヘラケズリ	(17.8)	-	(3.4)	一部	14	28-5
6	SI1	床面直上 Pot .5	土師器	坏	内面：ヘラミガキ，外面：(体) ナデ→(体下～底) ヘラケズリ，(口) ヨコナデ ※断面：黒色，外面：70％黒色，30％灰色～にぶい黄橙色，内面：灰褐色	16.0	8.5	4.5	略完形	5	28-6
7	SI1	カマド崩落土 Pot .7b	土師器	坏	内面：ヘラミガキ，外面：(体) ナデ→(口) ミガキ・(体下～底) ヘラケズリ	15.5	9.4	4.0	4/5	8	28-7
8	SI1	堆積土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：(口) ナデ・(体～底) ケズリ？	-	-	(3.3)	一部	15	28-8
9	SI1	確認面	土師器	小型甕	内面：(口) ヨコナデ→(胴) ヘラナデ, 外面：(胴) ハケメ→(口) ヨコナデ・(底) ヘラケズリ	12.9	4.2	10.6	2/3	12	28-9
10	SI1	堆積土	土師器	鉢	内面：(口) ヨコナデ・(体下～底) ヘラミガキ→黒色処理, 外面：(口) ヨコナデ，(体～底) ヘラケズリ	15.8	6.2	10.1	5/6	17	28-10
11	SI1	床面直上 Pot .2	土師器	小型甕	内面：(口) ハケメ→ヨコナデ，(胴) ヘラナデ, 外面：(胴) ハケメ→(口) ヨコナデ・(胴下～底) ヘラケズリ	14.6	6.8	15.8	略完形	2	29-1
12	SI1	床面直上 Pot .8	土師器	小型甕	内面：(胴) ヘラナデ，(口) 磨滅, 外面：(口) ヨコナデ→(胴上) ハケメ→(胴) ヘラケズリ，(底) ヘラケズリ	(20.6)	8.3	17.1	2/3	9	29-2

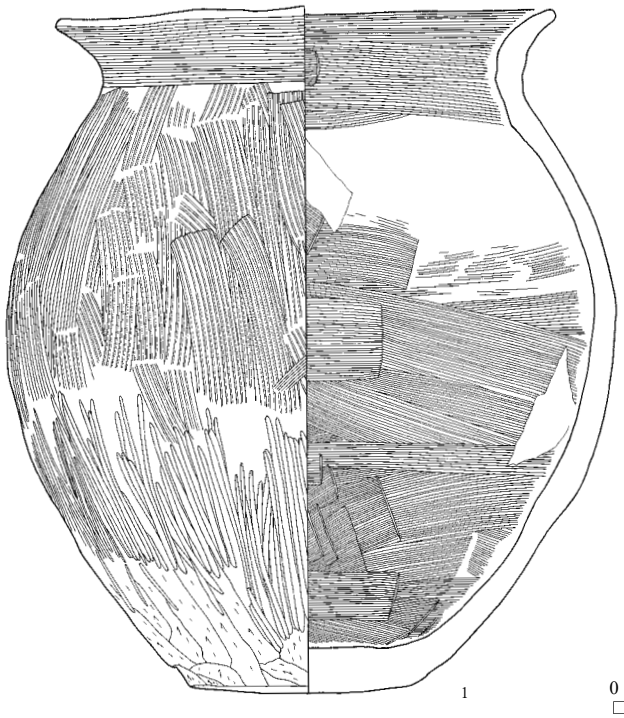
第 13 図　SI1 竪穴住居跡出土遺物（1）





No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI1	確認面	土師器	小型甕	内面：（胴）ナデ→（口）ヨコナデ，外面：（胴）ハケメ→（口）ヨコナデ	（17.1）	-	（11.7）	一部	13	29-3
2	SI1	床面直上	土師器	甕	内面：（口）ヨコナデ，（胴）ヘラナデ，外面：（口）ヨコナデ→（胴）ハケメ	（18.2）	-	-	一部	11	29-4
3	SI1	床面直上 Pot .4	土師器	甕	内面：（胴）ヘラナデ→（口）ヨコナデ， 外面：（胴）ナデ→ハケメ→（口）ヨコナデ，（底）木葉痕	18.7	7.2	27.0	略完形	4	29-5
4	SI1	床面直上 Pot .1	土師器	甕	内面：（口）ヨコナデ→（胴）ヘラナデ・一部ミガキ， 外面：（口）ヨコナデ→（胴上）ハケメ→（胴下～底）ヘラケズリ，（胴）一部ミガキ	20.7	7.4	26.1	完形	1	30-1
5	SI1	床面直上	土師器	甕	内面：（口）ヨコナデ，（胴）ヘラナデ， 外面：（胴）ハケメ→ヘラケズリ・（口）ヨコナデ，（底）ヘラケズリ	-	（6.6）	（25.9）	一部	18	30-2

第 14 図　SI1 竪穴住居跡出土遺物（2）



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI1	床面直上 Pot .3	土師器	甕	内面：(口) ヨコナデ→ (胴) ヘラナデ，外面：(胴上) ハケメ→ (口) ヨコナデ，(胴下) ヘラケズリ→ヘラミガキ・(底) ヘラケズリ→一部ヘラミガキ	19.9	9.4	27.2	略完形	3	30-3

第 15 図　SI1 竪穴住居跡出土遺物（3）

このほか、確認面、住居内堆積土、K1 貯蔵穴･P2 柱穴堆積土、カマド崩落土、床面、P2 柱穴掘方埋土、住居掘方埋土より土師器坏・甕などが出土した。土師器坏は各部位の破片がある。内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施すもので、頸部に段を持たないもの、頸部に痕跡的な段を持つものがある。土師器甕は口縁部・胴部破片があり外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にケズリ調整を施し、頸部に段を持つ。

【SI2 竪穴住居跡】（第 16・17 図、写真図版 5 － 1・3 ～ 5）

〔位置・確認面〕1 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 4.1m、南北 3.8m 以上である。北側が残存しないため全体の形状は不明であるが、隅丸方形を呈するとみられる。

〔方向〕住居南辺：N － 55.0° － E

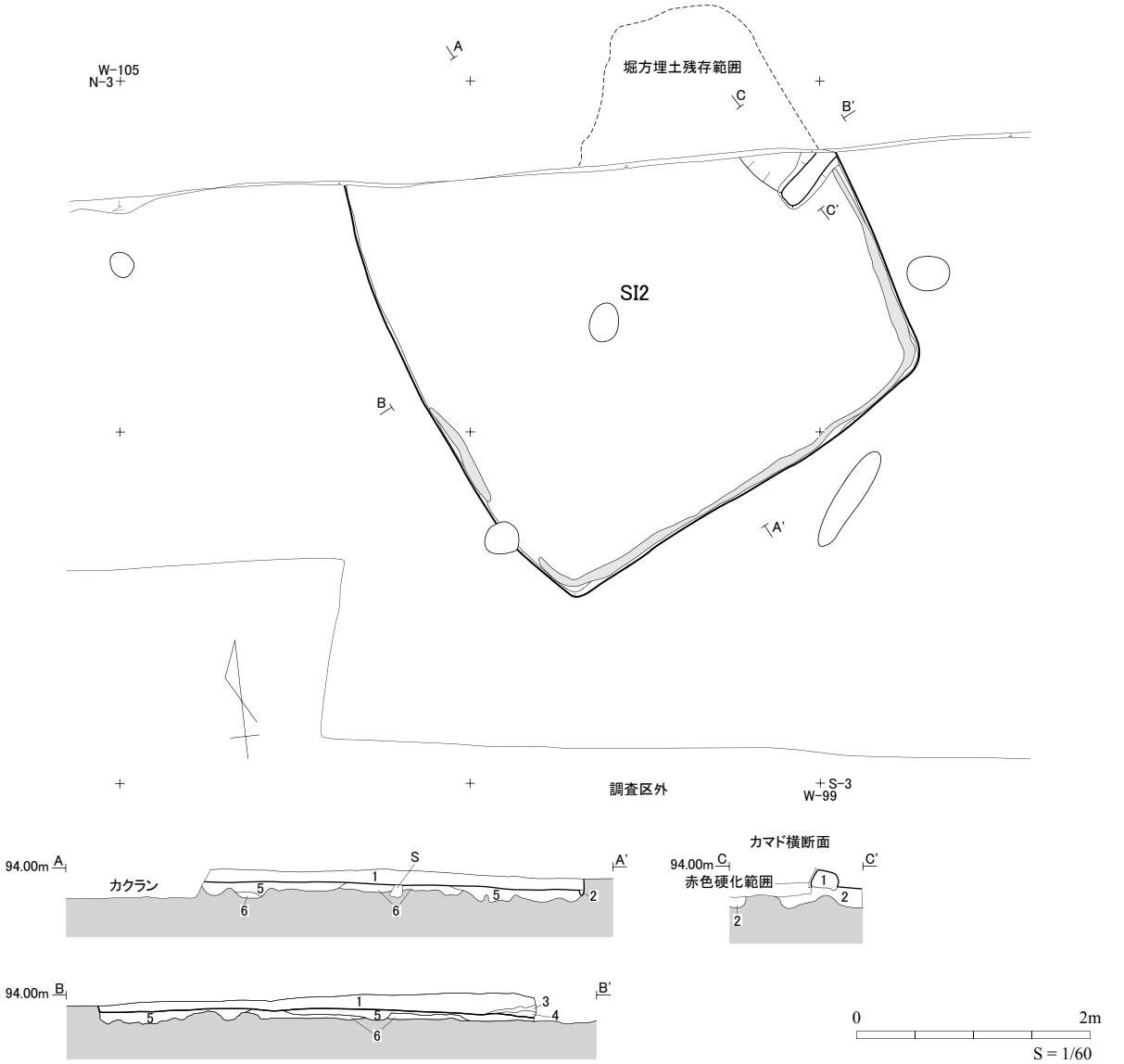
〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な南壁で床面から 17cm である。

〔床面〕住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦であるが、南側に向かってわずかに傾斜する。

〔主柱穴〕なし

〔周溝〕住居南辺および東･西辺南半部の壁面に沿って幅 4 ～ 10cm、深さ 3 ～ 5cm の壁材痕跡を確認した。周溝は確認されない。

〔カマド〕住居東辺に付設されている。燃焼部の一部が残存する。燃焼部は長さ 70cm 以上、幅 60cm 以上で、焚口幅は側壁先端間で 50cm 以上である。燃焼部底面は幅 45cm 以上、奥行 45cm 以上で、床面より 3cm 以上窪んでいる。側壁は右側のみ残存し、長さ 60cm、幅 30cm、高さ 19cm である。凝灰岩質岩片を含むにぶい黄褐色粘土で構築されており、内壁に被熱による赤色化が認められる。奥壁は残



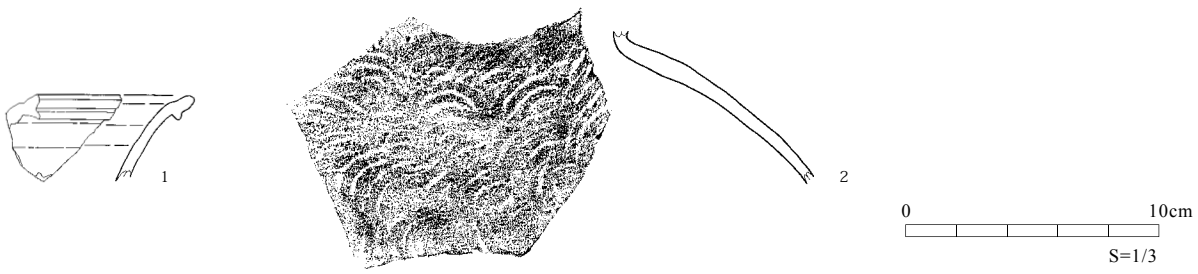
SI2　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	凝灰岩ブロックを多く含む（住堆）
2	10YR3/4 暗褐	粘土	一部に被熱による赤色化がみられる（竈崩）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	暗褐色粘土ブロックを少量含む　焼骨片・炭化物粒を含む（竈堆）
4	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山粒をごく少量含む（壁材痕）
5	10YR1/3 黒褐	シルト	凝灰岩ブロック・砂を含む（住掘）
6	10YR3/3 暗褐	シルト	凝灰岩ブロックを多量に含む（住掘）

SI2 カマド　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR5/3 にぶい黄褐	粘質シルト	内面が被熱により赤色硬化（竈構）
2	10YR1/3 黒褐	シルト	凝灰岩ブロック・砂を含む （住掘・住居主断面 5 層対応）

第 16 図　SI2 竪穴住居跡



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI2	堆積土	須恵器	壺	内外面：ロクロナデ	-	-	(3.4)	一部	22	31-1
2	SI2	住居掘方埋土	須恵器	甕	内面：（頸）ナデ，（胴）同心円文アテ具痕→ナデ，外面：カキメ	-	-	-	一部	21	31-2

第 17 図　SI2 竪穴住居跡出土遺物

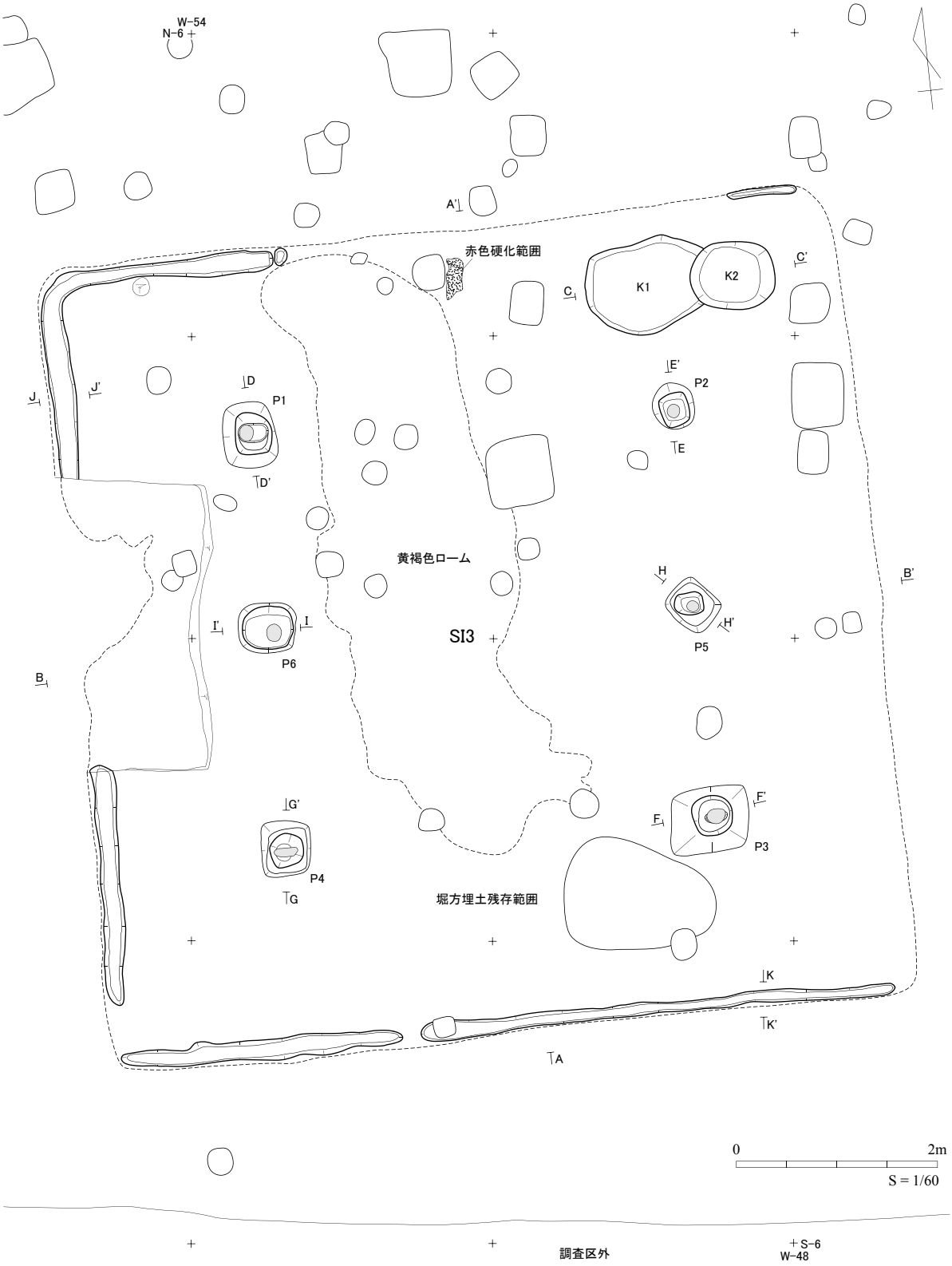
存しない。
〔貯蔵穴〕なし
〔床下土坑〕なし
〔堆積土〕凝灰岩質岩片を多く含む黒褐色シルトである。住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。
〔出土遺物〕住居堆積土より須恵器壺（第 17 図 1）、住居掘方埋土より須恵器甕（第 17 図 2）が出土した。1 は口縁部の内外面にロクロナデ調整を施し、口縁帯は上下端を引き出している。2 は胴部の内面に同心円文アテ具痕の後にナデ調整、外面にカキメ調整を施す。

このほか、確認面よりロクロ土師器坏、住居内堆積土、床面、住居掘方埋土より土師器坏・甕、須恵器甕・小型品などが出土した。ロクロ土師器坏は底部破片で回転糸切痕がみられる。土師器坏は底部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。土師器甕は口縁部・胴部破片があり外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にハケメ調整を施し、頸部に段を持たない。須恵器甕は胴部破片で内面に同心円文アテ具痕がみられ、外面にロクロナデ調整を施す。

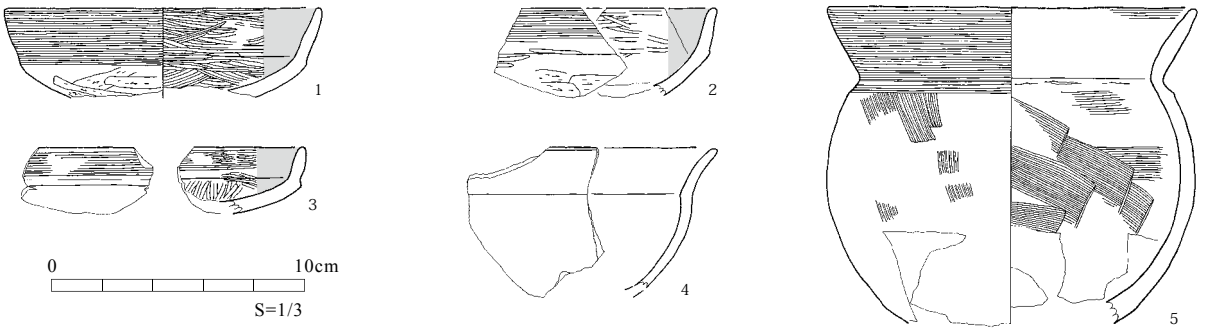
【SI3 竪穴住居跡】（第 18 ～ 20 図、写真図版 5 － 6 ～ 8，6 － 1 ～ 6）
〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕SK28 → SI3 → SB31 － SB27 → SB36
〔規模・形状〕東西 8.0m、南北 8.0m の隅丸方形を呈する。
〔方向〕住居西辺：N － 0°
〔壁面〕残存しない
〔床面〕残存しない
〔主柱穴〕6 か所確認した。東西 1 間、南北 2 間に配置され、隅柱は住居平面形の対角線上に位置している。掘方の平面形は長軸 28 ～ 45cm、短軸 22 ～ 43cm の隅丸方形を呈し、深さは隅柱で 62 ～ 80cm、中間の柱で 37 ～ 45cm である。掘方埋土は地山起源の灰白色粘土および地山ブロックを含む黒褐色シルトである。いずれも上部に柱材の抜き取り痕跡を確認し、下部で掘方底面に達する柱痕跡を確認した。このうち隅柱の柱痕跡は平面形が長軸 17 ～ 22cm、短軸 8 ～ 13cm の東西に長い長方形を呈し、中間の柱は直径 12cm の円形を呈する。
〔周溝〕住居東辺と北辺のカマド・貯蔵穴周辺を除いて上幅 6 ～ 25cm、深さ 3 ～ 14cm の周溝が巡る。堆積土は地山起源の凝灰岩質岩片を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。
〔カマド〕残存しない。住居北辺中央の壁面から 15 ～ 60cm の位置で住居掘方埋土の被熱による赤色化が認められ、カマド燃焼部底面の痕跡と考えられる。
〔貯蔵穴〕住居北東隅で土坑 2 基（K1、K2）を確認した。重複関係にあり、K2 が K1 を壊している。住居床面が残存しないため掘り込み面は不明であるが、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。K1 は平面形が長軸 106cm 以上、短軸 90cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 22cm の皿状を呈する。堆積土は 3 層に細分され、1 層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、2 層は地山ブロックを少量含む灰褐色シルト、3 層地山粒を少量含む黒色粘質シルトである。1 層は人為的埋土、2･3 層は機能時の堆積土と考えられる。K2 は K1 を埋め戻した後、東側に位置をずらして作られている。平面形が長軸 84cm、短軸 67cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 20cm の皿状を呈する。堆積土は 3 層に細分され、1 層は炭化物と地山ブロックを少量含む黒色シルト、2 層は地山ブロックを主体とする浅黄色粘質シルト、3 層は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。
〔床下土坑〕なし
〔堆積土〕残存しない
〔出土遺物〕住居堆積土より土師器坏（第 19 図 4）、住居掘方埋土より土師器坏（第 19 図 1 ～ 3）・壺

（第 19 図 5）が出土した。1 ～ 3 は有段丸底で外面の段に対応する位置の内面に屈曲を持ち、内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。外面の調整は口縁部にヨコナデ調整、体部～底部にヘラケズリ調整を施す。4 は体部が内弯して口縁部との境に屈曲を持ち、口縁部が外反する。5 は球胴で口縁部が外傾する。外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施し、頸部に痕跡的な段を持つ。

このほか、確認面、住居内堆積土、K2 貯蔵穴堆積土、P6 柱穴堆積土、P1 柱穴柱痕跡、P3 柱穴掘方埋土、住居掘方埋土より土師器坏・甕、須恵器甕などが出土した。土師器坏は各部位の破片があり、内面にヘ

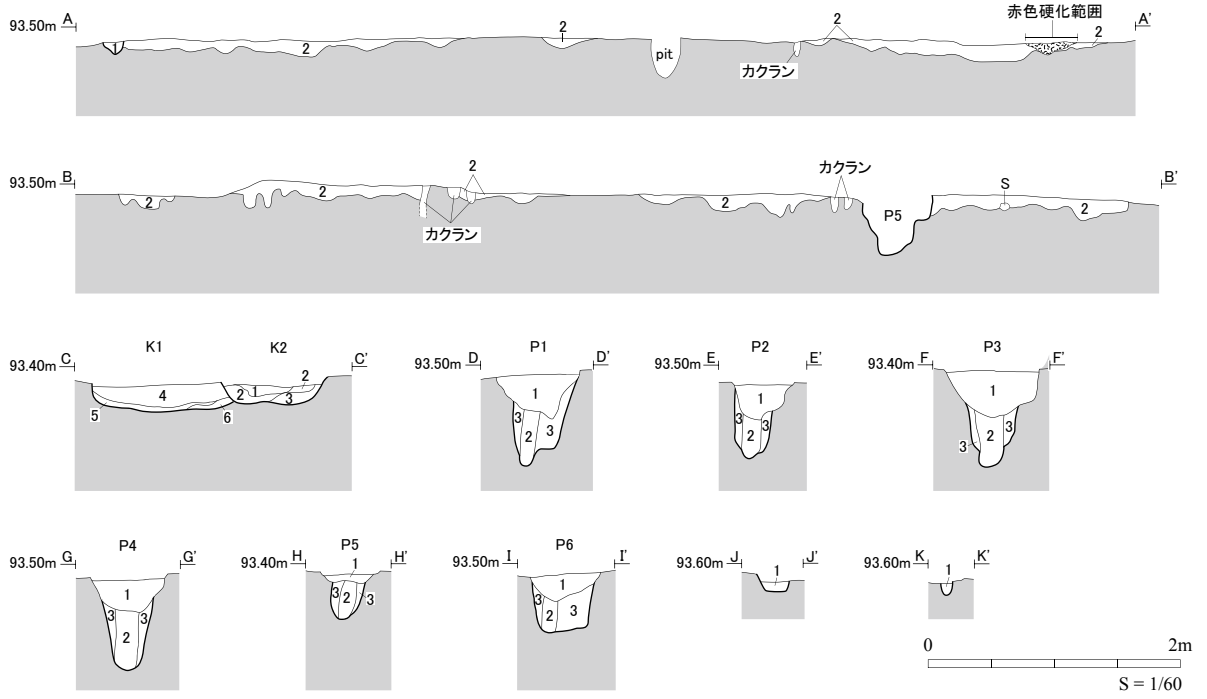


第 18 図　SI3 竪穴住居跡（1）



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI3	住居掘方埋土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：(口) ヨコナデ，(体～底) ヘラケズリ	(12.6)	-	(3.6)	一部	24	31-3
2	SI3	住居掘方埋土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理， 外面：(口) ヨコナデ→ヘラミガキ，(体下～底) ケズリ→ヘラミガキ	-	-	(3.5)	一部	25	31-4
3	SI3	住居掘方埋土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：(体) ケズリ，(口) ヨコナデ	-	-	(3.6)	一部	23	31-5
4	SI3	堆積土	土師器	坏	内外面：不明	-	-	(5.9)	一部	26	31-6
5	SI3	住居掘方埋土	土師器	壺	内面：(口) ヨコナデ，(体) ヘラナデ，外面：(体) ハケメ→ (口) ヨコナデ	(14.6)	-	(12.5)	一部	27	31-7

第 19 図　SI3 竪穴住居跡出土遺物



SI3　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	凝灰岩粒を含む（周溝堆・人為）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロック・砂・小礫・凝灰岩片を含む（住掘）

SI3 周溝　J-J'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（人為）

SI3 周溝　K-K'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（人為）

SI3 K1・K2　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロック・炭化物粒を少量含む（K2 堆・人為）
2	2.5Y7/3 浅黄	粘質シルト	地山土ブロックを主体とする（K2 堆・人為）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（K2 堆・人為）
4	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（K1 堆・人為）
5	10YR4/1 灰褐	シルト	地山ブロック・粒を少量含む（K1 堆・人為）
6	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山粒を少量含む（K1 堆・人為）

SI3 P1　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを若干含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI3 P2　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SI3 P3　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を若干含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SI3 P4　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を若干含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	灰色粘土ブロックを部分的に含む（柱痕）
3	10YR1/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SI3 P5　H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山大ブロックを含む（柱掘）

SI3 P6　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

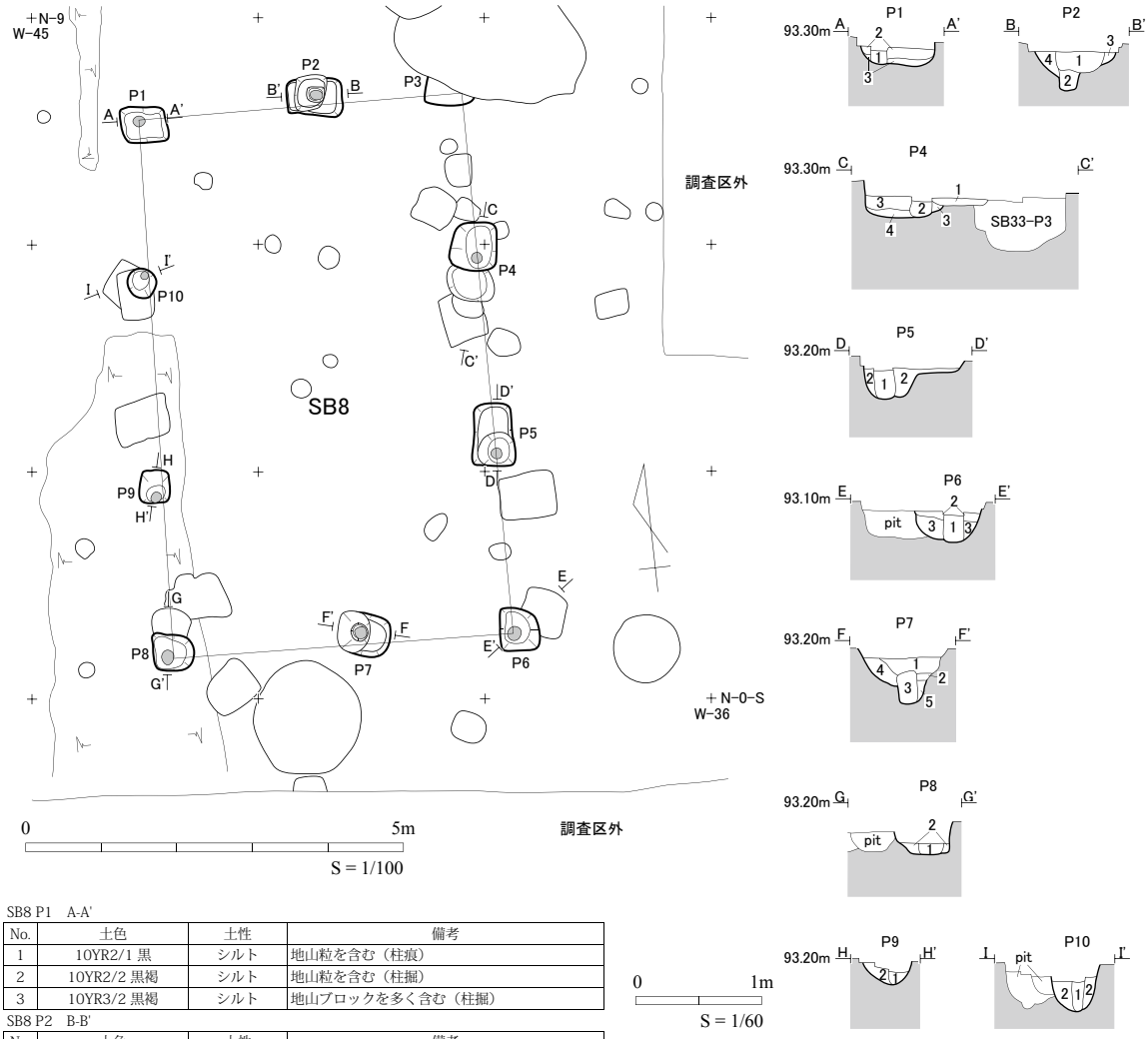
第 20 図　SI3 竪穴住居跡（２）

ラミガキ調整→黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施し頸部に段を持つもの、持たないのものがある。また、胎土が赤色を呈し内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施すもので南小泉式とみられるものが混入している。土師器甕は各部位の破片があり、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施し、頸部に痕跡的な段を持つものがある。須恵器甕は体部破片で内面にナデ調整を施し、外面に平行タタキ目がみられる。

（2）掘立柱建物跡

【SB8 掘立柱建物跡】（第 21 図、写真図版 7 － 1 ～ 4，8 － 8）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。



SB8 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB8 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
3	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱掘）
4	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB8 P4　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
4	10YR4/4 褐	シルト	10YR2/1 黒色シルトとの互層（柱掘）

SB8 P5　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB8 P6　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB8 P7　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
3	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
4	10YR5/8 黄褐	シルト	黒色土を含む（柱掘）
5	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB8 P8　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB8 P9　H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を多く含む（柱掘）

SB8 P10　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

第 21 図　SB8 掘立柱建物跡

〔重複〕SB33 → SB8―SB35 → SK37 → SK6

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 4.6m）、南北 3 間（総長 7.2m）の南北棟である。

〔柱穴〕10 か所確認した。北東隅の P3 は未精査である。掘方の平面形は長軸 38 ～ 83cm、短軸 38 ～ 60cm の隅丸長方形を基調とし、深さは 20 ～ 46cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。9 か所で平面形が直径 10 ～ 18cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認し、3 か所で柱材の抜き取り穴を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列：西から 260―210cm、西側柱列：南から 220―300―200cm

〔方向〕東側柱列：N － 2.4° － E

〔出土遺物〕P1・P2 柱穴堆積土、P2 柱穴柱材抜き取り痕跡より土師器坏ほか、須恵器甕が出土した。土師器はいずれも小破片で磨滅が著しい。須恵器甕は頸部～胴部破片で内面にアテ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。

【SB25 掘立柱建物跡】（第 22 図、写真図版 7 － 8 ～ 10）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

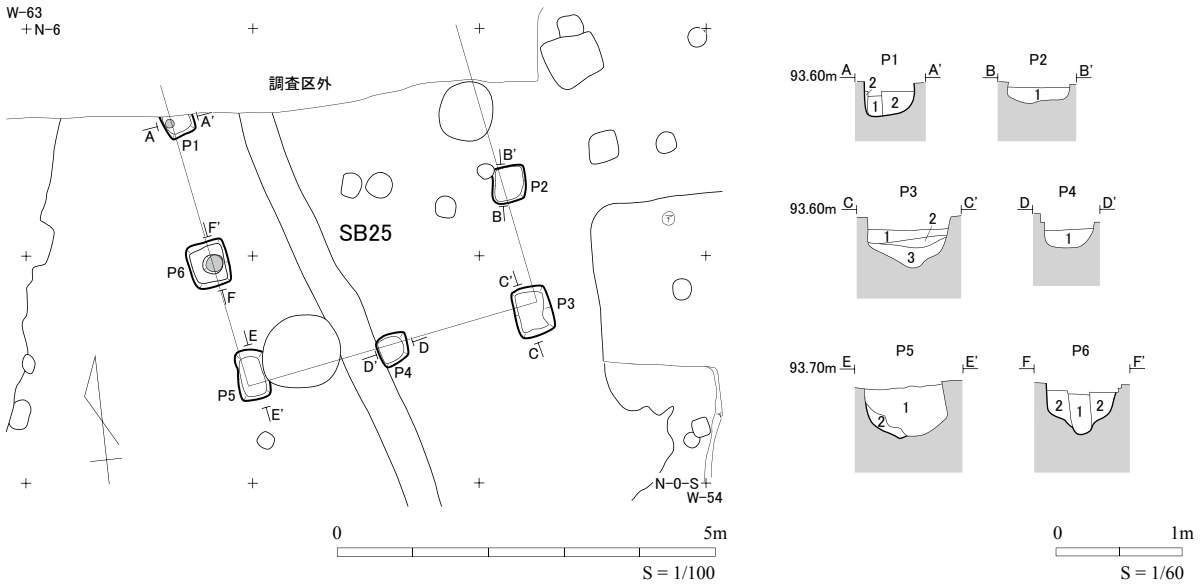
〔重複〕SD19 → SB25 → SE20（―SK38）

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.9m）、南北 2 間（総長 3.7m）以上の建物跡である。北側が調査区外へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕6 か所確認した。掘方の平面形は長軸 48 ～ 66cm、短軸 38 ～ 49cm の隅丸長方形を呈し、深さは 16 ～ 44cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。2 か所で平面形が直径 9 ～ 22cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認し、4 か所で柱材の抜き取り穴を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列：南から（170）―200cm、南側柱列：西から（190）―（200）cm

〔方向〕西側柱列：N － 11.0° － W



SB25 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB25 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）

SB25 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒をごくわずかに含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒をごくわずかに含む（柱抜）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）

SB25 P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）

SB25 P5　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR5/6 黄褐		地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB25 P6　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

第 22 図　SB25 掘立柱建物跡

〔出土遺物〕P6 柱穴堆積土より土師器甕が出土した。頸部破片で外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施し、頸部に痕跡的な段を持つ。磨滅が著しい。

【SB27 掘立柱建物跡】（第 23 図、写真図版 8 － 1 ～ 3）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SI3 → SB27 → SB36―SB31

〔規模・形状〕東西 1 間（総長 2.8m）、南北 2 間（総長 3.3m）の南北棟である。

〔柱穴〕SB36 掘立柱建物跡に壊される南東隅を除く 5 か所を確認した。掘方の平面形は長軸 41 ～ 45cm、短軸 30 ～ 38cm の隅丸長方形を呈し、深さは 38 ～ 42cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色・灰黄褐色シルトである。いずれも平面形が直径 14 ～ 22cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：南から 150―170cm、北側柱列：280cm

〔方向〕東側柱列：N － 4.0° － E

〔出土遺物〕P1 ～ P3・P5 柱穴掘方埋土より土師器坏・甕などが出土した。土師器坏は各部位の破片があり、内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施すもので南小泉式とみられるもの、内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施すものがある。土師器甕は頸部・胴部・底部の破片があり、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にハケメ調整を施し、頸部に段を持つものがある。また、底部に木葉痕を持つものがある。

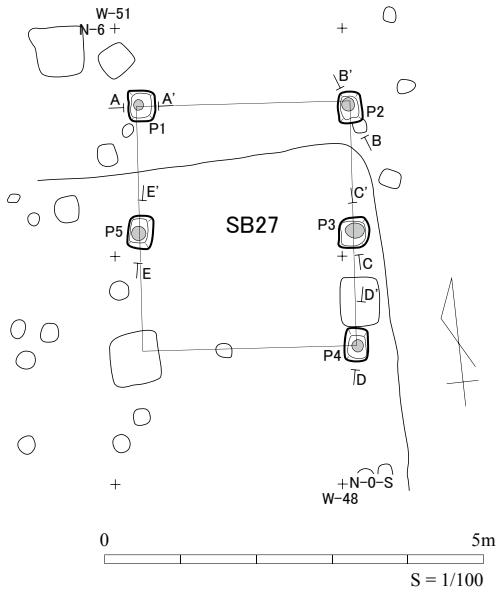
【SB31 掘立柱建物跡】（第 24 図、写真図版 2 － 3，8 － 4 ～ 6）

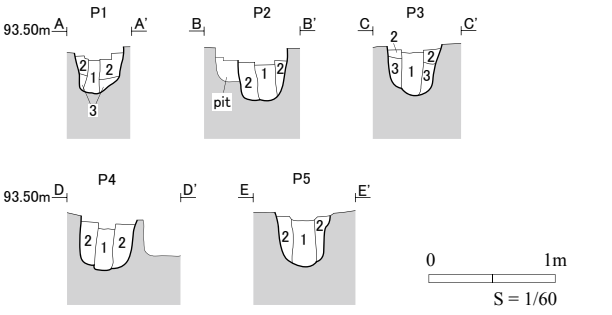
〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SI3 → SB31―SB36

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.6m）、南北 2 間（総長 3.5m）の建物跡である。

〔柱穴〕北西隅を除く 7 か所を確認した。掘方の平面形は長軸 27 ～ 29cm、短軸 22 ～ 25cm の円形ないしは隅丸方形を呈し、深さは 14 ～ 36cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。いずれも平面形が直径 8 ～ 15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものが 2 か所、厚さ 2cm ほどの掘方埋土を介するものが 1 か所、4 ～ 8cm ほど沈み込むものが 4 か所である。





SB27 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
3	10YR5/6 黄褐	シルト	黒色土を少量含む（柱掘）

SB27 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB27　P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SB27 P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SB27 P5　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	10YR8/1 灰色粘土ブロックを含む（柱掘）

第 23 図　SB27 掘立柱建物跡

〔柱間寸法〕南側柱列：西から 150―200cm、東側柱列：南から 170―180cm

〔方向〕東側柱列：N － 0°

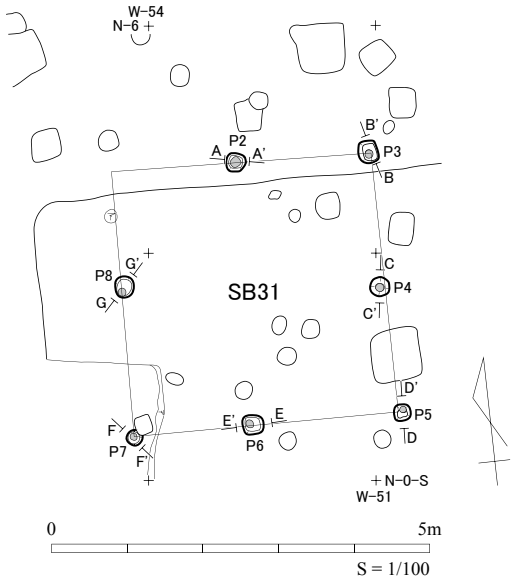
〔出土遺物〕P4 柱穴堆積土より土師器甕、ロクロ土師器坏が出土した。土師器甕は頸部破片で外面の胴部にハケメ調整を施し、頸部に痕跡的な段を持つ。ロクロ土師器坏は各部位の破片があり、内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。磨滅の著しいものがある。

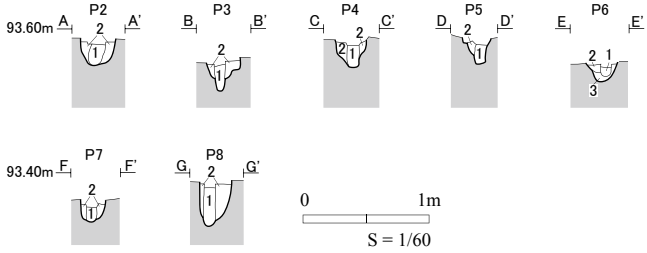
【SB32 掘立柱建物跡】（第 24 図、写真図版 2 － 3，8 － 7）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SB32 → Pit

〔規模・形状〕東西 1 間（総長 2.7m）、南北 1 間（総長 1.6m）以上の建物跡である。北側が調査区外へ延びている可能性がある。





SB31 P2　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB31 P3　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB31 P4　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む、酸化鉄含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	10YR8/1 灰色粘土ブロックを含む（柱掘）

SB31 P5　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR　黒褐	シルト	地山粒を若干含む（柱痕）
2	10YR 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB31 P6　E-E'

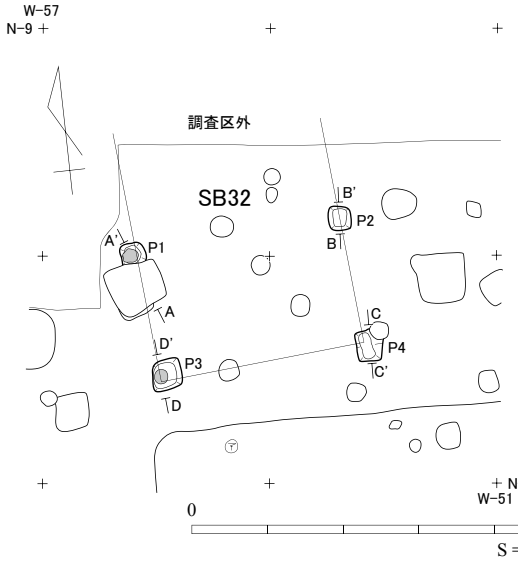
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱掘）

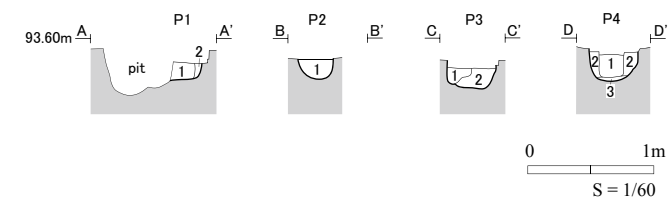
SB31 P7　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB31 P8　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）





SB32P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB32 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

SB32P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒・小礫を含む（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

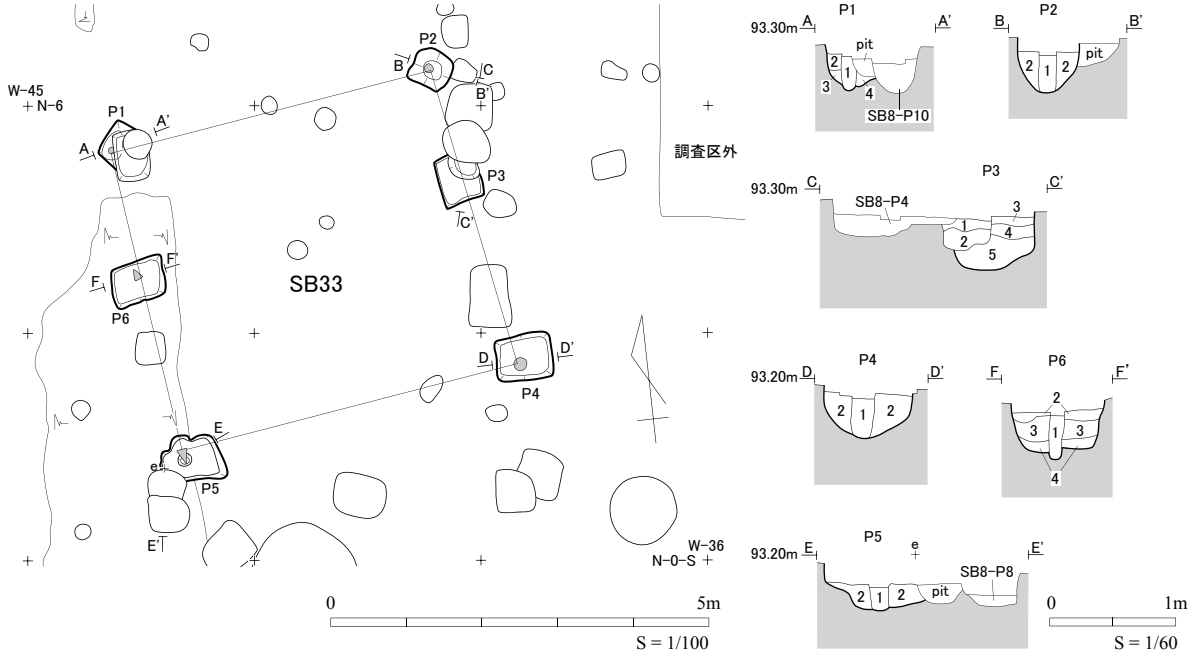
SB32 P4　D-D'

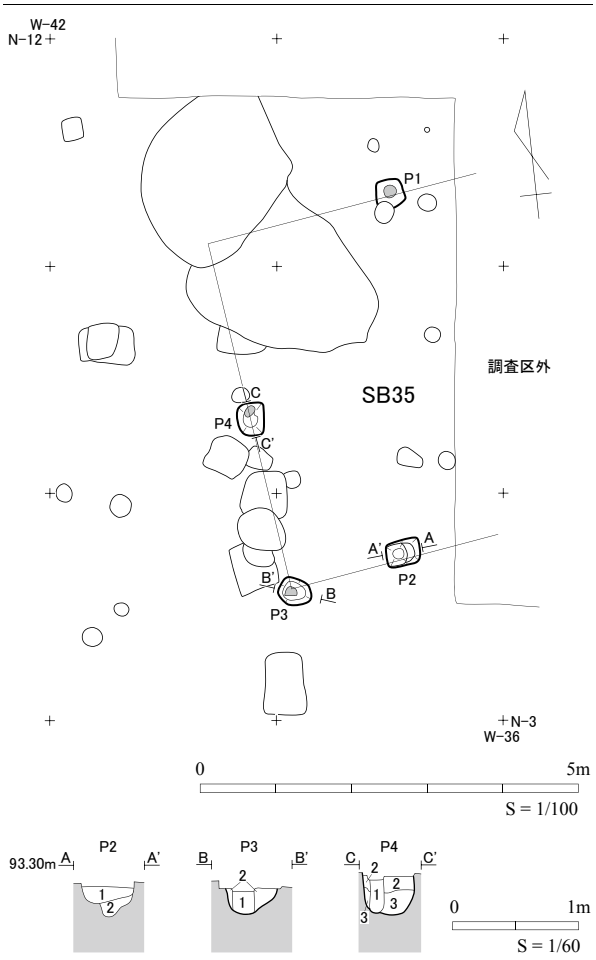
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）
3	10YR1/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

第 24 図　SB31・SB32 掘立柱建物跡

〔柱穴〕4 か所を確認した。掘方の平面形は長軸 30 ～ 41cm、短軸 29 ～ 38cm の隅丸方形を呈し、深さは 17 ～ 27cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。西側柱列の 2 か所で平面形が直径 18 ～ 19cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は 1 か所が掘方底面に達し、1 か所は厚さ 3cm ほどの掘方埋土を介する。

〔柱間寸法〕西側柱列 160cm、南側柱列：（270）cm





SB33 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR4/6 褐	シルト	10YR2/1 黒色シルトブロックを多く含む（柱掘）
3	10YR4/6 褐	シルト	10YR2/1 黒色シルトブロックを少量含む（柱掘）
4	10YR3/2 黒褐	シルト	均質土（柱掘）

SB33 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB33 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
4	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
5	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB33 P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB33 P5　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR5/6 黄褐	シルト	10YR2/1 黒色シルトブロックを含む（柱掘）

SB33 P6　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒色	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR5/6 黄褐	シルト	10YR2/1 黒色シルトブロックを多く含む（柱掘）
3	10YR5/6 黄褐	シルト	10YR2/1 黒色シルトブロックを少量含む（柱掘）
4	10YR5/8 黄褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB35 P2　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を多く含む（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）

SB35 P3　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ローム粒を含む（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ロームブロックを含む（柱掘）

SB35 P4　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/2 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

第 25 図　SB33・SB35 掘立柱建物跡

〔方向〕東側柱列：N － 4.5° － W
〔出土遺物〕なし

【SB33 掘立柱建物跡】（第 25 図、写真図版 2 － 3，8 － 8）

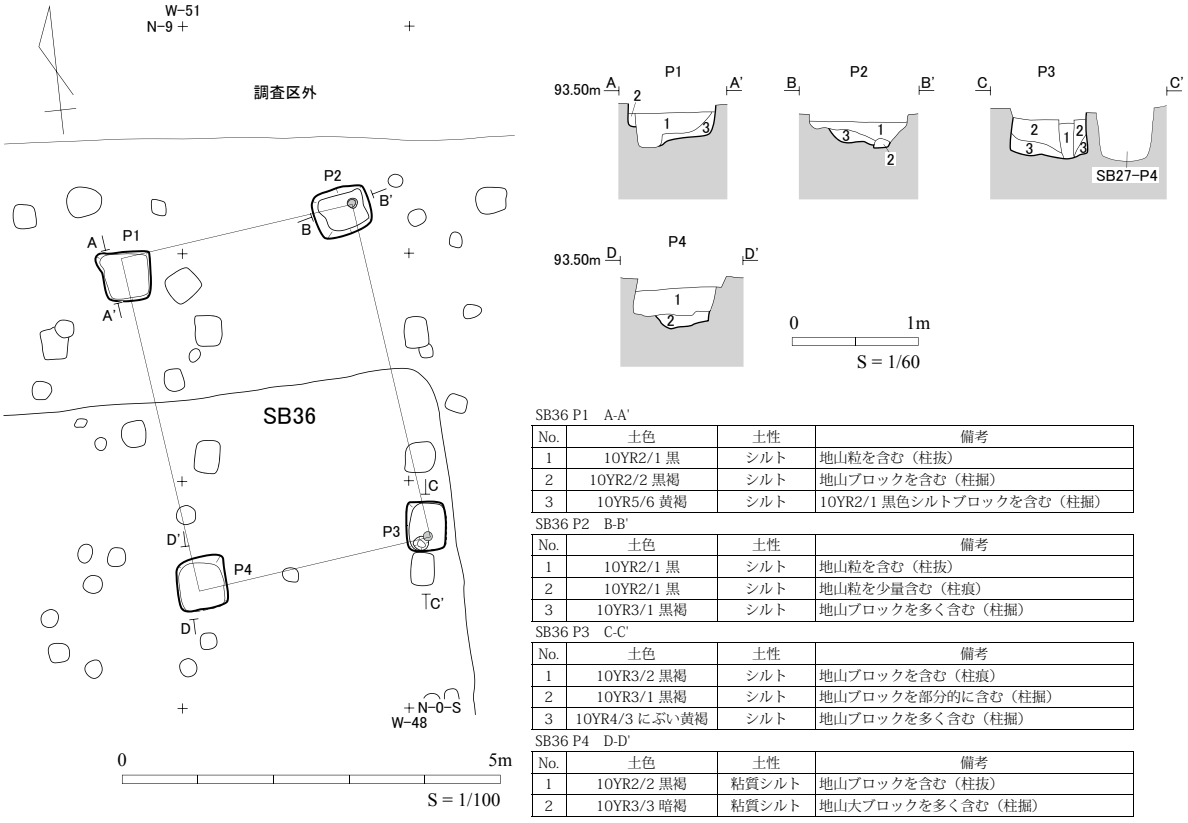
〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕SB33 → SB8
〔規模・形状〕東西 1 間（総長 4.6m）、南北 2 間（総長 4.1m）の南北棟である。
〔柱穴〕6 か所を確認した。掘方の平面形は長軸 52 ～ 78cm、短軸 50 ～ 60cm の隅丸長方形を呈し、深さは 34 ～ 46cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトおよび黄褐色シルトである。5 か所で柱痕跡を確認し、1 か所で柱材の抜き取り穴を確認した。柱痕跡の平面形は直径 9 ～ 16cm の円形を呈するものが 3 か所、一辺 12 ～ 20cm の三角形を呈するものが 2 か所で、掘方底面に達するものが 3 か所、2 ～ 8cm ほど沈み込むものが 2 か所である。
〔柱間寸法〕南側柱列：460cm、西側柱列：南から 250 － 170cm
〔方向〕西側柱列：N － 6.5° － W
〔出土遺物〕P2 ～ P6 堆積土より土師器坏などが出土した。いずれも小片で磨滅が著しい。土師器坏は各部位の破片があり、胎土が赤褐色で内面にナデ調整→ミガキ調整、外面にケズリ調整を施すもの、胎土が明黄褐色で内面にミガキ調整、外面にナデ調整の後に赤彩を施すものがあり、南小泉式とみられる。また、内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施すものがある。

【SB35 掘立柱建物跡】（第 25 図、写真図版 2 － 3，8 － 9）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕SA34―SB35―SB8 → SK37 → SK6
〔規模・形状〕東西 1 間（総長 2.6m）以上、南北 2 間（総長 4.8m）の建物跡である。
〔柱穴〕4 か所を確認した。北東側の 1 か所は未精査である。掘方の平面形は長軸 36 ～ 44cm、短軸 34 ～ 36cm の隅丸長方形あるいは不整方形を呈し、深さは 26 ～ 34cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。3 か所で平面形が直径 10 ～ 18cm の円形あるいは半円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達する。
〔柱間寸法〕南側柱列：（150）cm、西側柱列：南から 240 －（240）cm、北側柱列：（240）cm
〔方向〕西側柱列：N － 7.0° － W
〔出土遺物〕P2 ～ 4 柱穴堆積土・掘方埋土より土師器、P2 柱穴掘方埋土より金属製品が出土した。いずれも小片で磨滅が著しい。

【SB36 掘立柱建物跡】（第 26 図、写真図版 2 － 3）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕SI3 → SB27 → SB36―SB31
〔規模・形状〕東西 1 間（総長 3.1m）、南北 1 間（総長 4.5m）の建物跡である。
〔柱穴〕4 か所を確認した。掘方の平面形は長軸 66 ～ 74cm、短軸 52 ～ 62cm の隅丸長方形を呈し、深さは 32 ～ 42cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトあるいは暗褐色粘質シルトである。2 か所で柱痕跡を確認し、3 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。柱痕跡は平面形が直径 12cm の円形を呈し、掘方底面に達する。
〔柱間寸法〕南側柱列：（150）cm、西側柱列：南から 240 －（240）cm、北側柱列：（240）cm
〔方向〕西側柱列：N － 7.0° － W
〔出土遺物〕P1・P3 柱穴堆積土より土師器坏などが出土した。いずれも小破片で磨滅が著しい。土師器坏は口縁部破片で内外面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。



SB36 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR5/6 黄褐	シルト	10YR2/1 黒色シルトブロックを含む（柱掘）

SB36 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB36 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを部分的に含む（柱掘）
3	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB36 P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山大ブロックを多く含む（柱掘）

第 26 図　SB36 掘立柱建物跡

（3）柱列跡

【SA34 柱列跡】（第 27 図、写真図版 2 − 3）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SA34―SB35

〔規模・形状〕南北 2 間（総長 3.5m）の柱列跡である。

〔柱穴〕3 か所を確認した。北側の 2 か所は未精査である。掘方の平面形は直径 22 ～ 24cm の円形を呈し、深さは南端の 1 か所で 33cm である。柱痕跡は認められない。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

〔柱間寸法〕南から（170）−（180）cm

〔方向〕N − 3.0° − E

〔出土遺物〕なし

（4）井戸跡

【SE9 井戸跡】（第 27 図、写真図版 8 − 10・11）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕直径 120cm、深さ 80cm で、上部がやや漏斗形に開く円筒形を呈する。

〔堆積土〕5 層に細分され、地山ブロック・粒を含む黒褐色シルト・粘質シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。

〔その他〕南側に隣接する SE16 井戸跡と規模・形状・底面標高がほぼ同一である。

〔出土遺物〕確認面より土師器・須恵器、堆積土より土師器が出土した。須恵器は体部破片で内外面にロクロナデ調整を施す。

【SE10 井戸跡】（第 27 図、写真図版９－１・２）

〔位置・確認面〕１区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕直径 90cm、深さ 80cm の円筒形を呈する。

〔堆積土〕４層に細分される。１～３層は地山ブロックを含む黒褐色・黒色シルト、４層は地山ブロックと拳大～人頭大の礫を多く含む黒褐色粘質シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。

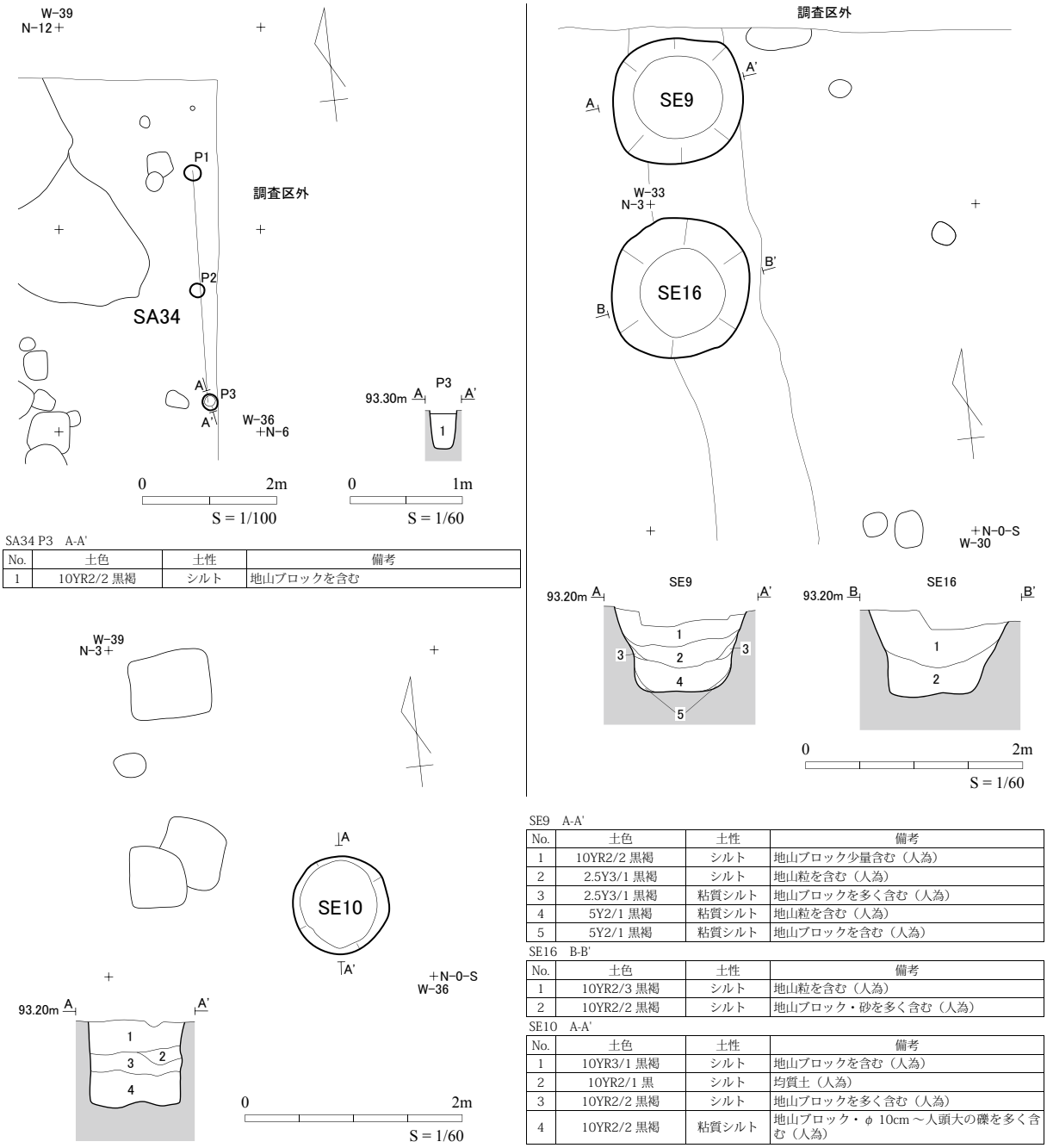
〔出土遺物〕堆積土より土師器甕が出土した。頸部破片で外面に段を持つ。

【SE16 井戸跡】（第 27 図、写真図版９－３・４）

〔位置・確認面〕１区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SE16 →新しい溝跡

〔規模・形状〕直径 130cm、深さ 80cm で、上部が漏斗形に開く円筒形を呈する。



SA34 P3　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

SE9　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロック少量含む（人為）
2	2.5Y3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（人為）
3	2.5Y3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（人為）
4	5Y2/1 黒褐	粘質シルト	地山粒を含む（人為）
5	5Y2/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（人為）

SE16　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（人為）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロック・砂を多く含む（人為）

SE10　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（人為）
2	10YR2/1 黒	シルト	均質土（人為）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（人為）
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロック・φ 10cm ～人頭大の礫を多く含む（人為）

第 27 図　SA34 柱列跡、SE9・SE10・SE16 井戸跡

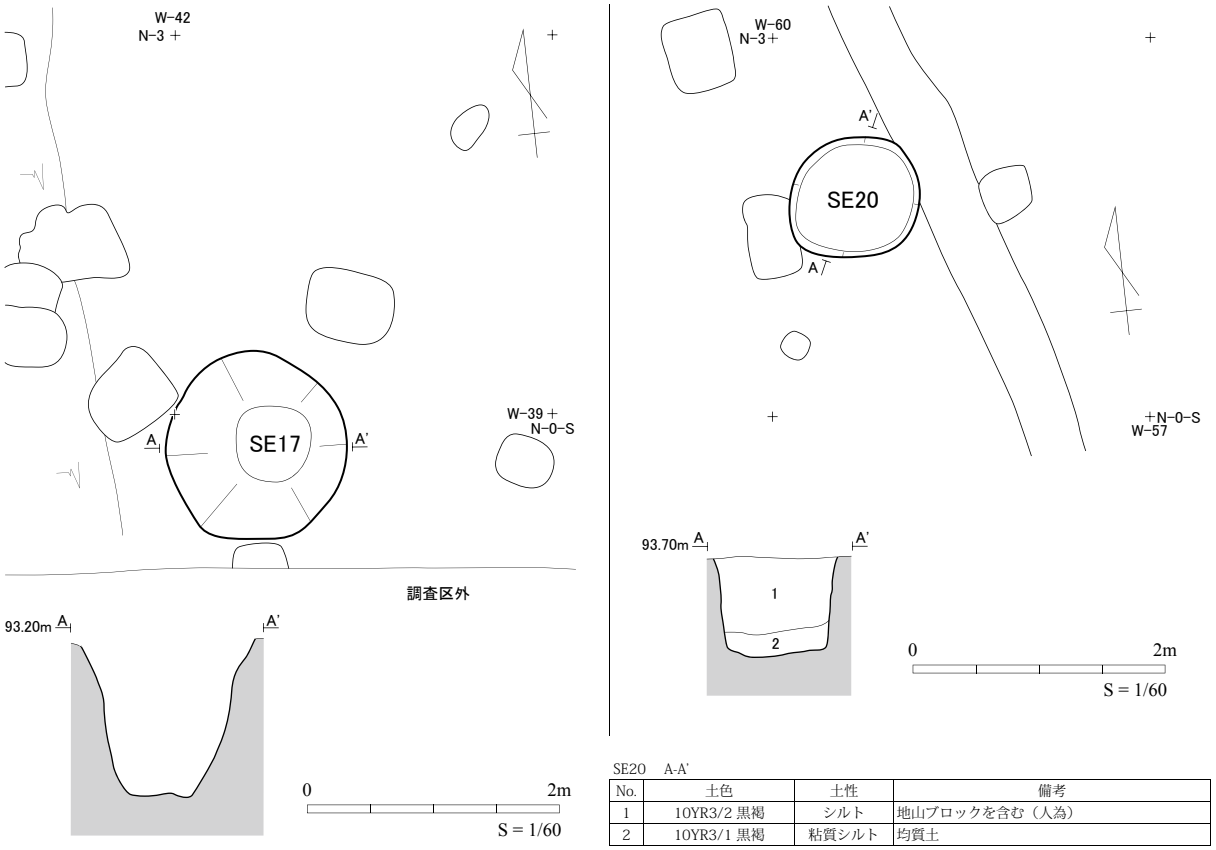
〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は地山粒を含む黒褐色シルト、2 層は地山ブロック・砂を多く含む黒褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。
〔その他〕北側に隣接する SE9 井戸跡と規模・形状・底面標高がほぼ同一である。また、西側約 7.5m に位置する SE16 井戸跡と堆積土が類似する。
〔出土遺物〕堆積土より土師器甕ほかが出土した。土師器甕は頸部破片で外面に段を持つ。

【SE17 井戸跡】（第 28 図、写真図版 9 － 5）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕直径 140 ～ 150cm、深さ 120cm で、上部が漏斗形に開く円筒形を呈する。
〔堆積土〕調査中に崩落したため断面図は作成できなかった。黒褐色シルトあるいは粘質シルトで、少なくとも 2 層に細分される。下層に植物遺体を多く含む。いずれも人為的埋土と考えられる。
〔その他〕東側約 7.5m に位置する SE16 井戸跡と堆積土が類似する。
〔遺物〕堆積土より土師器、須恵器甕などが出土した。須恵器甕は外面に平行タタキ目がみられる。

【SE20 井戸跡】（第 28 図、写真図版 9 － 7・8）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕SD19 → SB25 → SE20
〔規模・形状〕直径 100cm、深さ 80cm で、上部がわずかに漏斗形に開く円筒形を呈する。
〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、2 層は均質な黒褐色粘質シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。
〔出土遺物〕堆積土より土師器が出土した。



SE20　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（人為）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土

第 28 図　SE17・SE20 井戸跡

【SE22 井戸跡】（第 29 ～ 31 図、写真図版 10 － 1 ～ 5）

〔位置・確認面〕１区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

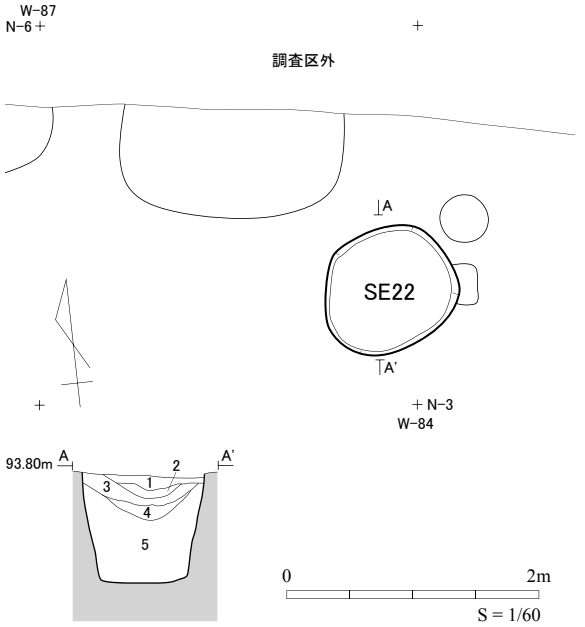
〔重複〕Pit → SE22

〔規模・形状〕直径 100cm、深さ 90cm で、上部に向かってわずかに開く円筒形を呈する。

〔堆積土〕５層に細分される。1･2 層は地山ブロック・粒、小礫を含む黒褐色シルト、３層は地山ブロック・粒を多く含む暗褐色シルト、４・５層は地山ブロック・砂を含む黒色シルト・粘質シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕底面付近の堆積土最下層より鎌（第 31 図 1・2)、曲物（第 31 図３～ 5)、底面より中世陶器甕（第 30 図 1・2）が出土した。第 31 図 1・2 はＬ字状に曲がる鉄製の鎌先と木製の柄からなる。柄は先端から中央付近まで幅１～ 2mm の切り込みが入れられており、切り込み部に鎌先が挟まれている。鎌先は可動性があり、刃部を引き出すと柄の先端付近に打たれた目釘と鎌先基部の曲折部によって固定される仕組みとなっている。また、刃部を引き出したときに鎌先基部の曲折部が接する付近の柄の側面に切欠と小穴がある。第 30 図 1・2 は体部破片で内外面にヨコナデ調整を施す。

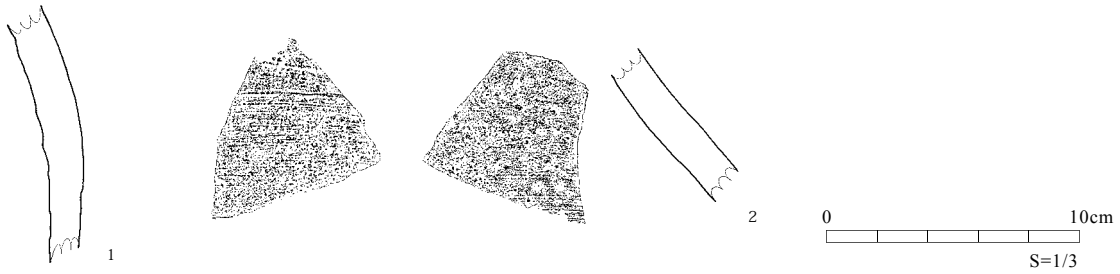
このほか、確認面より土師器、堆積土より土師器甕が出土した。土師器甕は各部位の破片があり外面の頸部に段を持つものがある。



SE22　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒・地山ブロック・礫を含む（人為）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒・腐食木片を含む（人為）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（人為）
4	10YR2/1 黒	シルト	砂を含む（人為）
5	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山ブロックを少量含む（人為）

第 29 図　SE22 井戸跡



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SE22	堆積土底面	中世陶器	甕	内外面：ナデ	-	-	-	一部	105	31-8
2	SE22	堆積土底面	中世陶器	甕	内外面：ナデ	-	-	-	一部	104	31-9

第 30 図　SE22 井戸跡出土遺物（1）

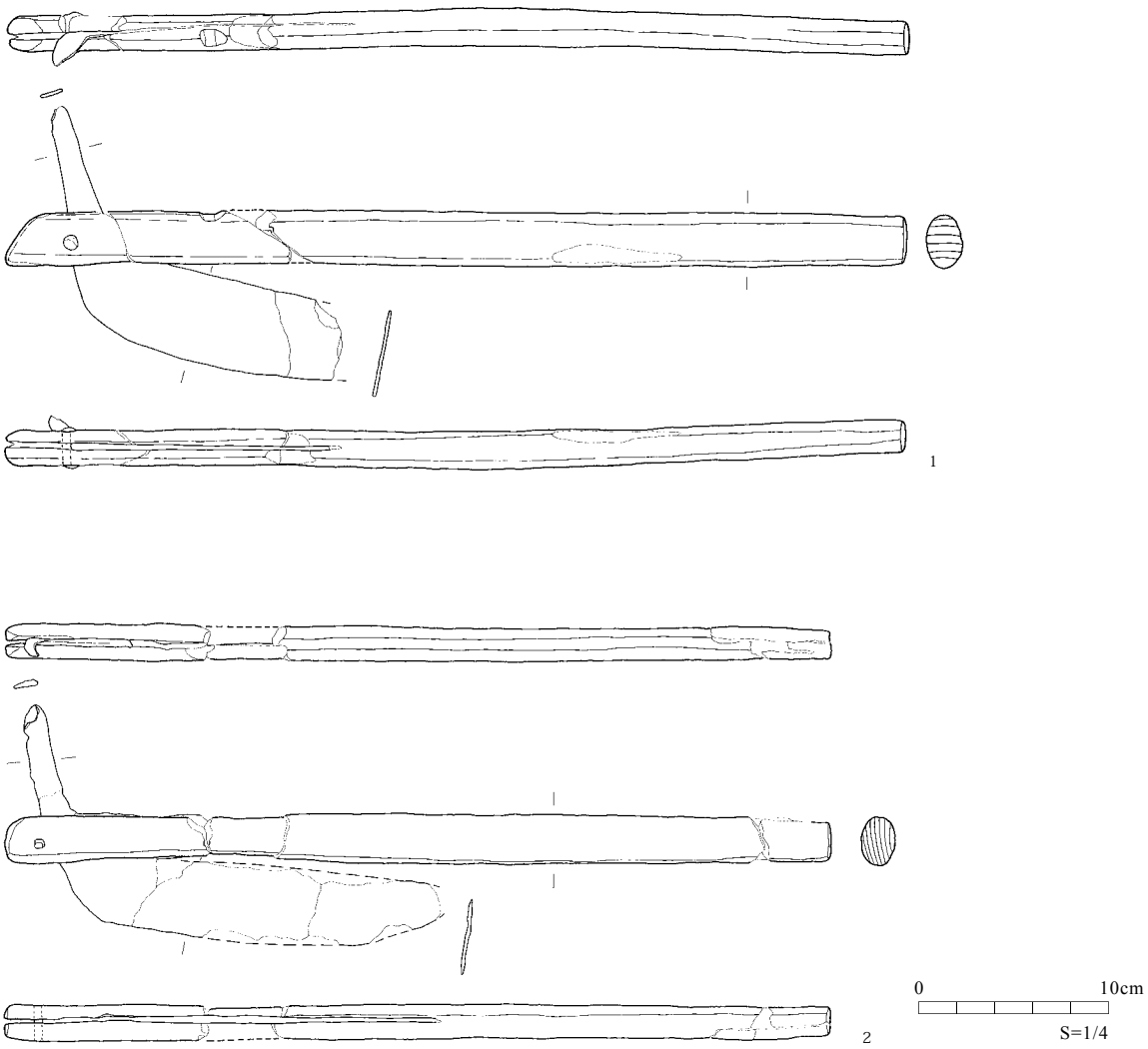
（５）土坑

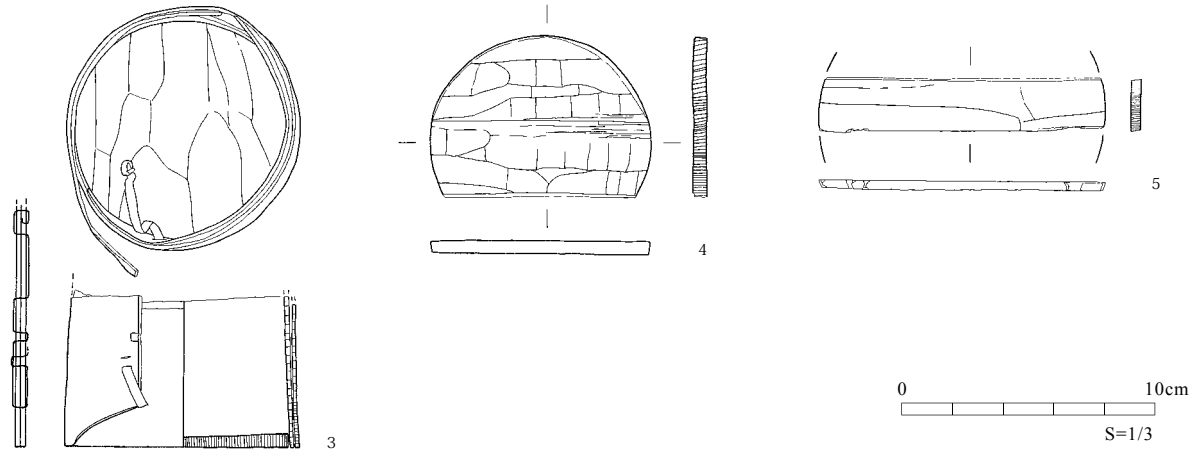
【SK5 土坑】（第 32・33 図、写真図版 10 － 6）

〔位置・確認面〕１区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明だが、平面形は長軸 100cm、短軸 60cm





No.	遺構名	層位	種類	特徴	登録	写真
1	SE22	5 層底面付近	鎌	木製柄：長 43.8cm，幅 2.6cm，厚 1.9cm，径 3mm の小穴 2 か所，うち 1 か所に鉄釘， 鉄製鎌先：刃部長（20.3cm），幅 4.0cm，厚 0.2cm，基部長 6.0cm，幅 1.5cm，厚 0.3cm，基端部曲折	204	32-1
2	SE22	5 層底面付近	鎌	木製柄：長 46.8cm，幅 2.9cm，厚 2.0cm，径 3mm の小穴 2 か所，うち 1 か所に鉄釘， 鉄製鎌先：刃部長：（14.6cm），幅 4.8cm，厚 0.2cm，基部長（5.7cm），幅 1.9cm，厚 0.2cm，基端部曲折	205	32-2
3	SE22	5 層底面付近	曲物（柄杓？）	木製，直径 9.3cm，器高（6.2cm，※図化できない断片を合わせると 9.4cm），側板・底板ともに柾目材，樺皮綴じ	209	32-3
4	SE22	5 層底面付近	曲物（底板）	木製，直径 8.7cm，器高 0.6cm，柾目材，外面に斑点状の黒色付着物有	207	32-4
5	SE22	5 層底面付近	曲物（蓋？）	木製，直径 11.4cm，器高 0.4cm，柾目材	208	32-5

第 31 図　SE22 井戸跡出土遺物（2）

以上の楕円形を呈するとみられる。断面形は深さ 22cm の逆台形を呈し、底面は平坦である。
〔堆積土〕均質な黒色シルトである。自然堆積土と考えられる。
〔出土遺物〕堆積土より曲物（第 33 図 1)、中世陶器甕（第 33 図 2)、土師器の底部破片が出土した。

【SK6 土坑】（第 11 図）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。未精査である。
〔重複〕SB33 → SB8―SB35 → SK37 → SK6
〔規模・形状〕北側の一部が調査区外へ延びるため全体の形状は不明だが、平面形は長軸 230cm 以上、短軸 200cm の不整楕円形を呈するとみられる。
〔出土遺物〕確認面より土師器坏・甕、堆積土より土師器甕が出土した。土師器坏は口縁部・体部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。土師器甕は各部位の破片があり、外面にハケメ調整を施すもの、ケズリ調整を施すもの、胴下部～底部にナデ調整を施すものがある。

【SK13 土坑】（第 34 図）

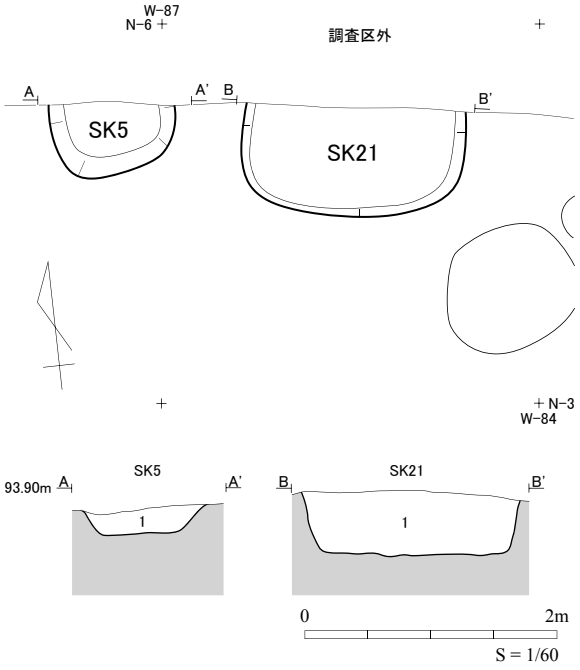
〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 80cm、短軸 72cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 12cm の皿状を呈する。底面は平坦である。
〔堆積土〕砂礫を含む黒色シルトである。自然堆積土と考えられる。
〔出土遺物〕なし

【SK14 土坑】（第 34 図）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 66cm、短軸 45cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 12cm の皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。
〔堆積土〕砂粒を含む黒色シルトである。自然堆積土と考えられる。
〔出土遺物〕なし

【SK21 土坑】（第 32 図、写真図版 10 － 7）

〔位置・確認面〕1 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明だが、平面形は長軸 180cm、短軸 80cm 以上の楕円形を呈するとみられる。断面形は深さ 50cm の逆台形を呈し、底面は平坦である。



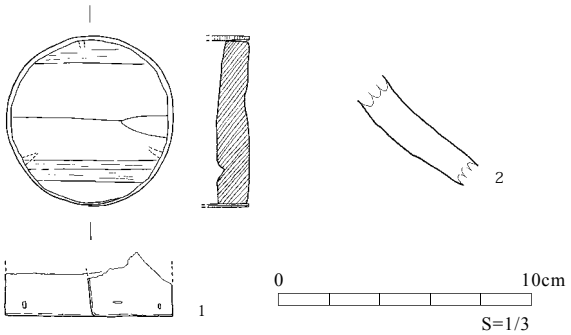
SK5　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土

SK21　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土

第 32 図　SK5・SK21 土坑



No.	遺構名	層位	種類	特徴	登録	写真
1	SK5	堆積土	曲物（柄杓？）	木製，直径 6.7cm，器高（2.5cm)，底板側面：小穴３ヵ所あり，うち１か所に木釘残存，側板・底板共に柾目材，樺皮綴じ	203	31-10

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	残存	登録	写真
2	SK5	堆積土	中世陶器	甕	内外面：ナデ，黒色付着物	一部	107	31-11

第 33 図　SK5 土坑出土遺物

〔堆積土〕均質な黒色シルトである。自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK23 土坑】（第 34 図）

〔位置・確認面〕1 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SK23 → Pit

〔規模・形状〕平面形は長軸 140cm、短軸 70cm の不整楕円形を呈する。断面形は深さ 40cm のＵ字形を呈し、底面は凹凸が見られる。

〔堆積土〕地山粒を含む黒褐色シルトである。自然堆積土と考えられる。

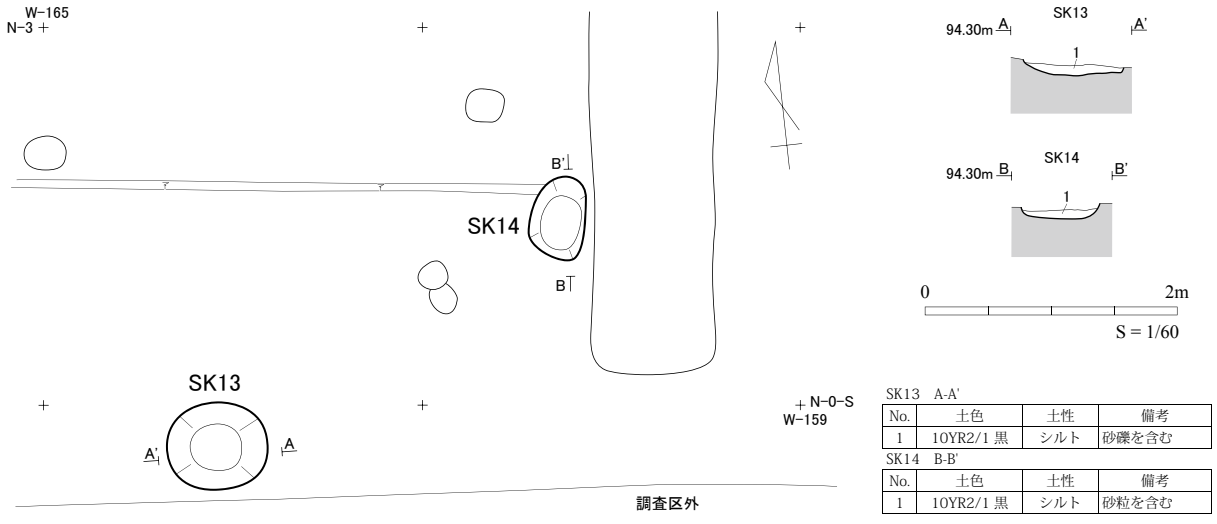
〔出土遺物〕なし

【SK26 土坑】（第 34 図）

〔位置・確認面〕1 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 135cm、短軸 85cm 以上の楕円形を呈するとみられる。断面形は深さ

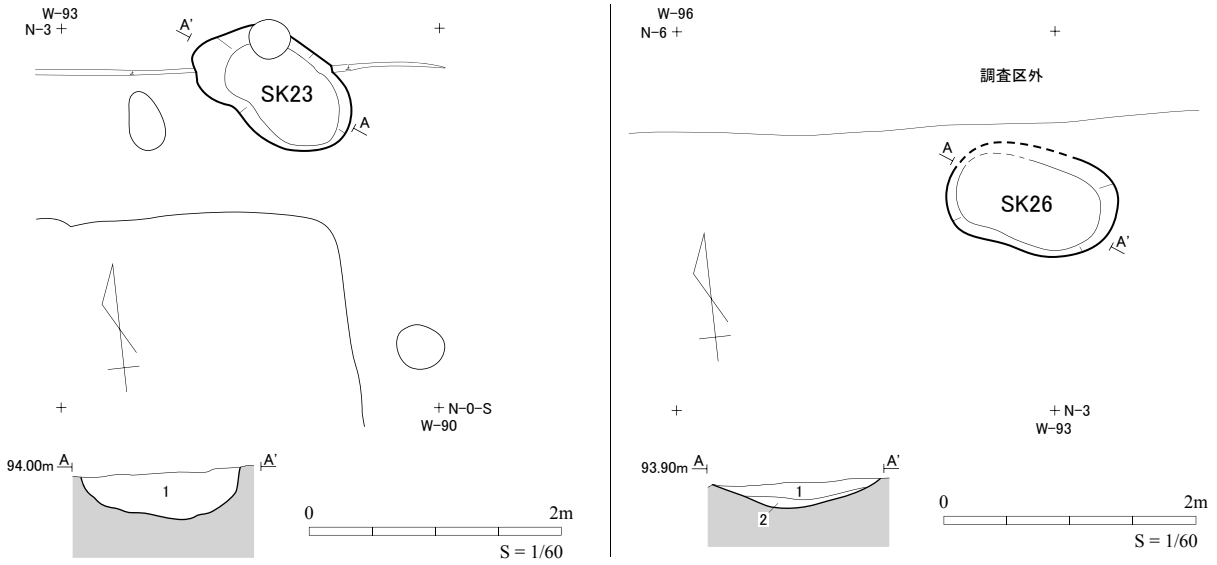


SK13　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	砂礫を含む

SK14　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	砂粒を含む



SK23　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む

SK26　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む

第 34 図　SK13・SK14・SK23・SK26 土坑

20cm の皿状を呈する。

〔堆積土〕２層に細分される。地山粒を含む暗褐色・黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK28 土坑】（第 35 図、写真図版 10 － 9 ～ 11）

〔位置・確認面〕１区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SK28 → SI3 → Pit

〔規模・形状〕平面形は長軸 150cm、短軸 110cm の不整楕円形を呈する。深さ 62cm で断面形は縦方向で逆台形、横方向ではＵ字形を呈する。底面は東側へ僅かに傾斜する。

〔堆積土〕地山ブロックと小礫を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK37 土坑】（第 11 図）

〔位置・確認面〕１区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。未精査である。

〔重複〕SB8―SB35 → SK37 → SK6

〔規模･形状〕北西側を SK6 土坑に壊されているため全体の形状は不明だが、平面形は長軸 208cm 以上、短軸 197cm の不整形を呈する。

〔出土遺物〕なし

【SK38 土坑】（第 35 図）

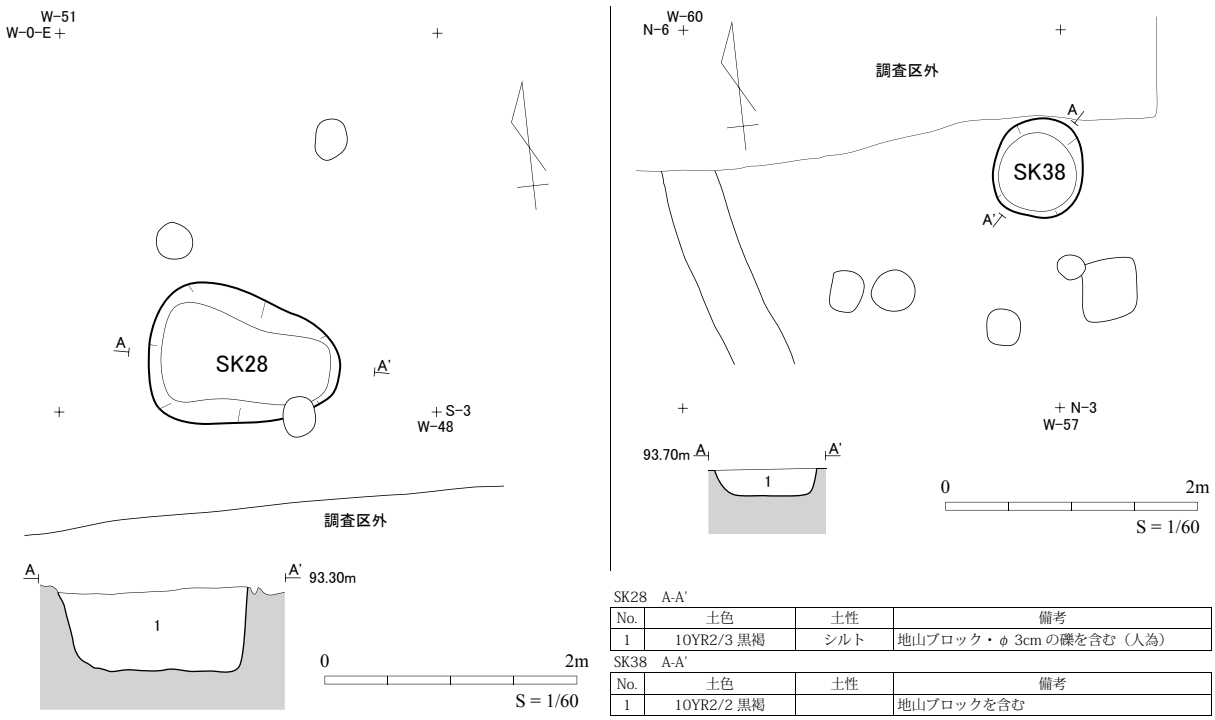
〔位置・確認面〕１区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SK38―SB25

〔規模・形状〕平面形は直径 71 ～ 80cm の不整円形を呈する。断面形は深さ 20cm の逆台形を呈し、底面は平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし



SK28　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロック・φ 3cm の礫を含む（人為）

SK38　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐		地山ブロックを含む

第 35 図　SK28・SK38 土坑

（6）溝跡

【SD7 溝跡】（第 36・37 図、写真図版 10 － 12・13）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ 5.1m を確認し、調査区外の南北へ延びている。上幅 184 ～ 204cm、底幅 126cm で、断面形は深さ 36cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕5 層に細分される。1 層は砂粒を含む黒褐色シルト、2 層は小礫をまばらに含む黒褐色シルト、3 層は小礫をまばらに含む黒褐色粘質シルト、4・5 層は均質な黒褐色粘質シルトである。いずれも自然流入土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より漆器椀（第 37 図 1）、木製鋤（第 37 図 2）、砥石（第 37 図 3）が出土した。1 は内外面漆塗で底面にロクロ爪痕？がみられる。2 は発掘後保管中の事故により自然乾燥してしまったが、現状で図化した。このほか、外面にケズリ調整を施す土師器甕の胴部破片が出土した。

【SD11 溝跡】（第 36 図、写真図版 11 － 1）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SD18 → SD11

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ 6.0m を確認し、調査区外の南北へ延びている。上幅 130 ～ 145cm、底幅 80 ～ 110cm で、断面形は深さ 51 ～ 65cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕5 層に細分される。地山ブロック・粒、植物遺体を含む黒褐色・褐灰色シルトで、いずれも自然流入土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より土師器が出土した。

【SD12 溝跡】（第 36 図、写真図版 11 － 2）

〔位置・確認面〕1 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ 6.0m を確認し、調査区外の南北へ延びている。上幅 190 ～ 220cm、底幅 170 ～ 180cm で、断面形は深さ 31 ～ 45cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕5 層に細分される。1 ～ 4 層は地山ブロック、小礫、植物遺体を含む黒褐色・褐灰色のシルト・粘質シルト、5 層は緑灰色の砂層で、いずれも自然流入土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より土師器甕が出土した。各部位の破片があり外面の胴部にハケメ調整を施し頸部に段を持たないものがある。

【SD15 溝跡】（第 36 図、写真図版 11 － 3）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ 4.5m を確認し、調査区外の北側へ延びている。上幅 90 ～ 106cm、底幅 40 ～ 62cm で、断面形は深さ 27cm のＵ字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

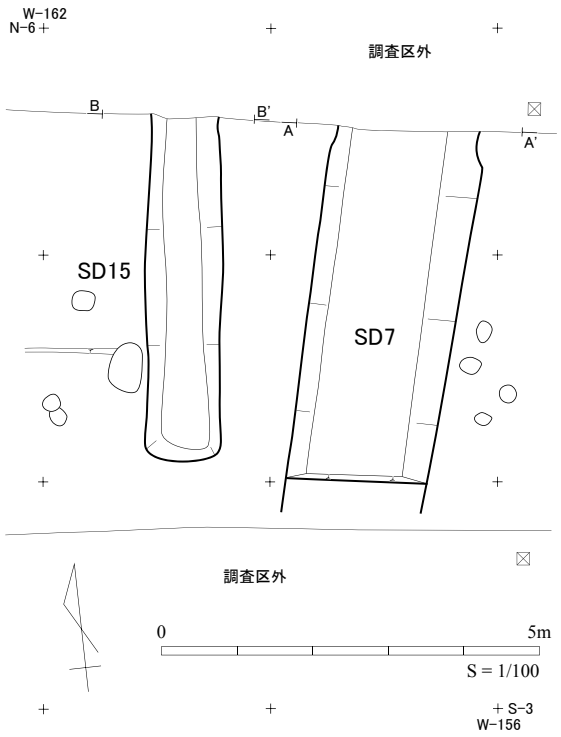
〔堆積土〕3 層に細分される。1 層は砂粒をまばらに含む黒褐色粘質シルト、2 層は均質な黒色粘質シルト、3 層は砂粒を含む黒褐色シルトである。いずれも自然流入土と考えられる。

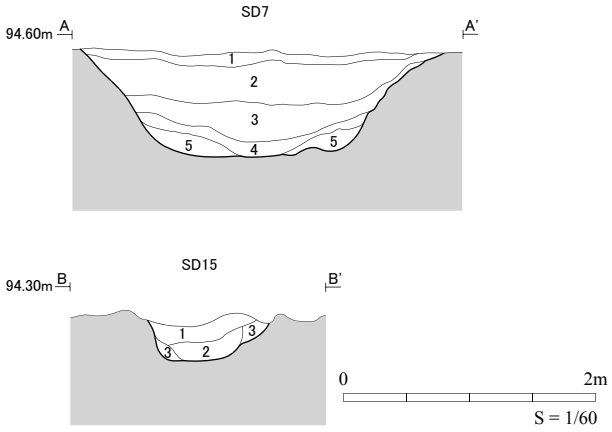
〔出土遺物〕なし

【SD18 溝跡】（第 38 図、写真図版 11 － 1）

〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SD18 → SD11



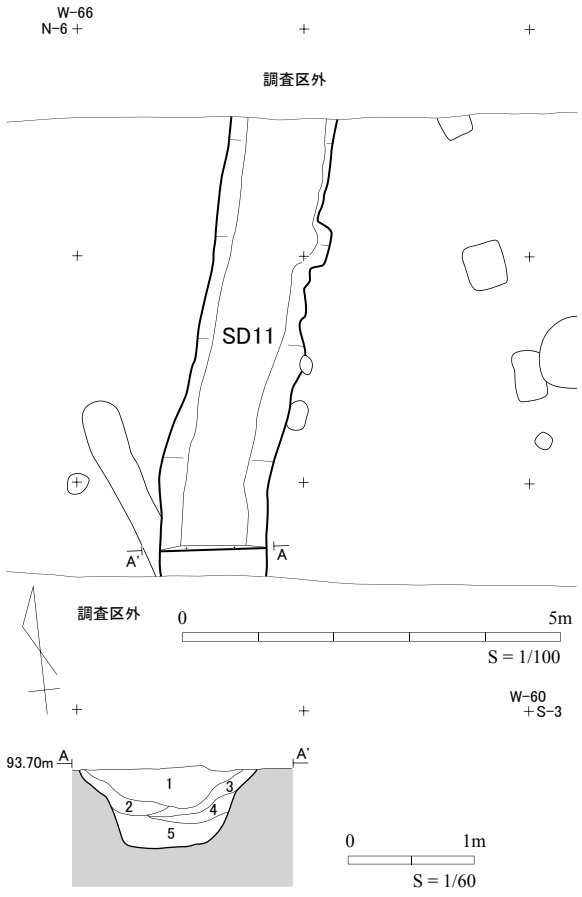


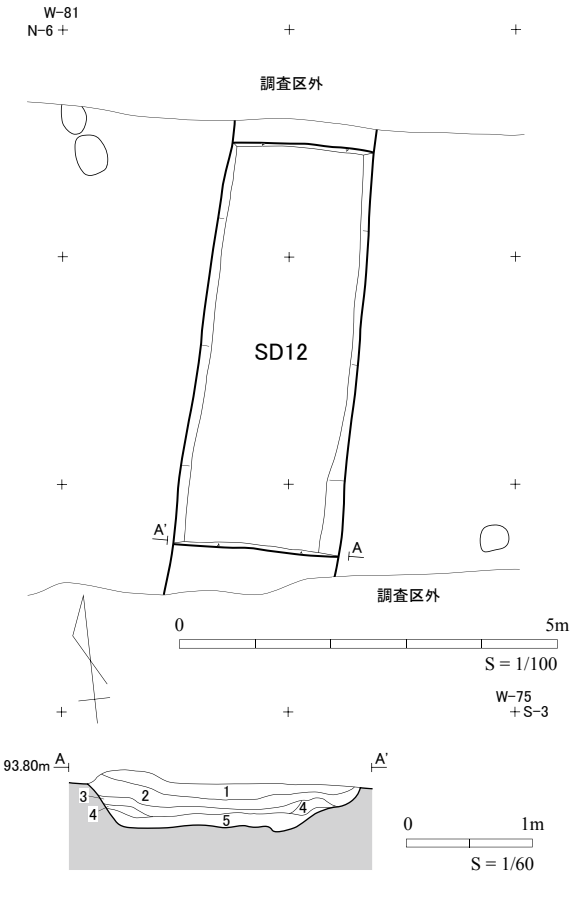
SD7　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	砂を含む
2	10YR3/1 黒褐	シルト	φ 1mm の凝灰岩粒をまばらに含む
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	φ 1mm の凝灰岩粒をまばらに含む
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土
5	2.5YR5/3 黄褐	粘質シルト	均質土

SD15　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	砂質シルト	砂粒をまばらに含む
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土
3	10YR2/2 黒褐	シルト	砂を含む





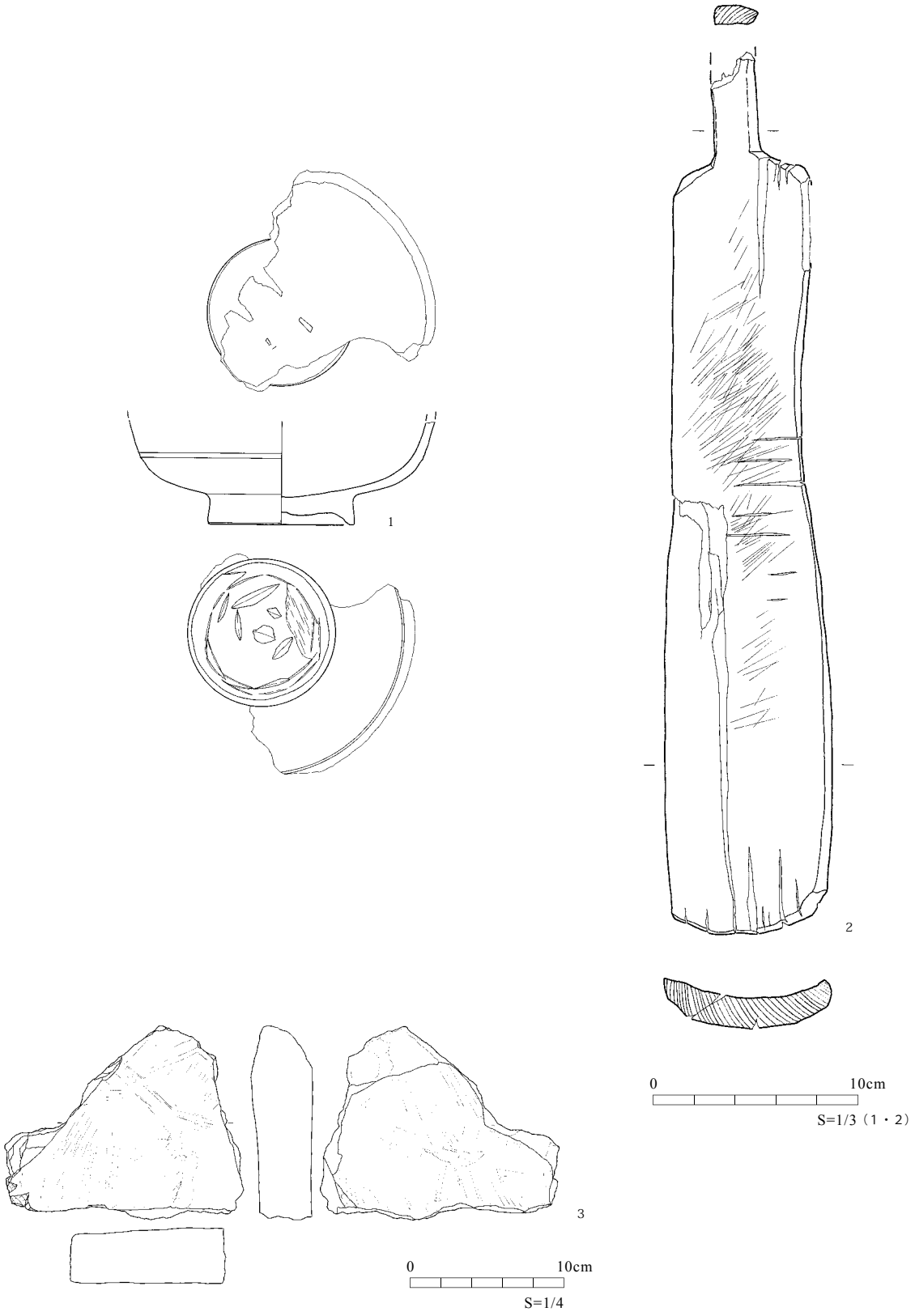
SD11　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒・ブロックを含む
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む
3	10YR4/1 褐灰	シルト	地山ブロック・植物遺体を含む
4	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒・植物遺体を含む
5	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒・植物遺体を含む

SD12　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒、φ 8cm の礫を含む
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山粒・φ 2cm の小礫を含む　植物遺体を少量含む
3	10YR4/1 褐灰	粘質シルト	地山粒・植物遺体を少量含む
4	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロック・φ 3cm の礫を含む
5	10GY5/1 緑灰	砂質シルト	均質土

第 36 図　SD7・SD11・SD12・SD15 溝跡



No.	遺構名	層位	種類	特徴	登録	写真
1	SD7	堆積土	椀（漆器）	木製，口径不明，底径 7.3cm，器高（5.1cm），内外面：漆塗，外面：（底）漆付着なし，ロクロ爪痕？	201	33-1
2	SD7	堆積土	鋤	木製，柾目材，残存長 57.5cm，軸部：残存長 6.6cm，幅 2.9cm，厚 1.1cm，身部：長 50.9cm，幅 8.5 ～ 11.0cm，厚 2.1cm，先端部に使用による磨滅痕，片面に線状の刃物傷（破損後転用か），※乾燥による収縮と亀裂、身部の湾曲が生じている	202	33-2

No.	遺構名	層位	種類	石材	特徴	法量（mm）				登録	写真
						長	幅	厚	重（g）		
3	SD7	堆積土	砥石	砂岩	両面に平坦な磨面，磨面に重複する平行する線条痕，周縁を大きく欠損	160	130.1	38.7	1085	147	33-3

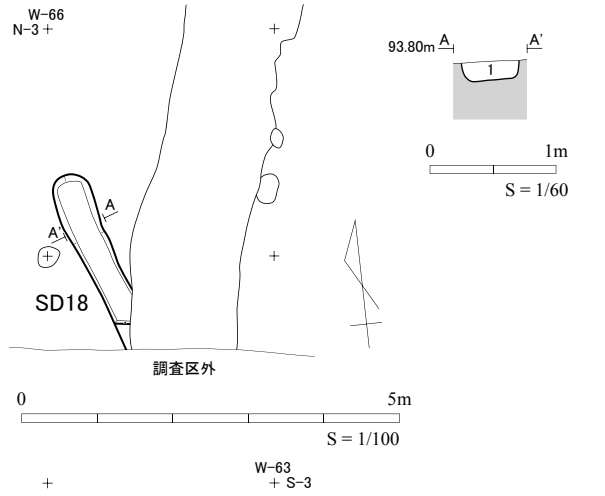
第 37 図　SD7 溝跡出土遺物

〔規模・形状〕北西－南東方向に直線的に延びる。長さ 2.5m を確認し、調査区外の南側へ延びている。上幅 40 ～ 50cm、底幅 30 ～ 40cm で、断面形は深さ 15 ～ 17cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。
〔堆積土〕地山ブロックを少量含む黒褐色シルトで、自然流入土と考えられる。
〔その他〕SD19 溝跡と規模・形状・堆積土が類似する。
〔出土遺物〕なし

【SD19 溝跡】（第 38 図、写真図版 11 － 4）
〔位置・確認面〕1 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕SD19 → SB25 → SE20
〔規模・形状〕北西－南東方向に直線的に延びる。長さ 11.0m を確認し、調査区外の南北へ延びている。上幅 40 ～ 50cm、底幅 20 ～ 40cm で、断面形は深さ 13 ～ 17cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。
〔堆積土〕地山粒と小礫を含む黒褐色シルトで、自然流入土と考えられる。
〔その他〕SD18 溝跡と規模・形状・堆積土が類似する。
〔出土遺物〕なし

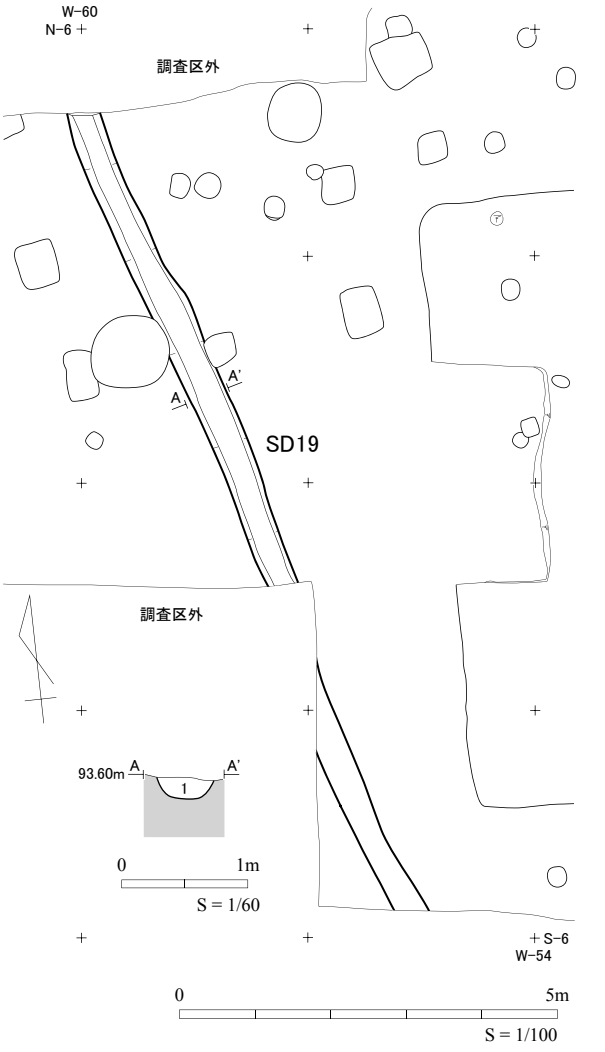
（7）柱穴

組み合わない柱穴の確認面、堆積土より土師器坏・甕、ロクロ土師器坏が出土した。土師器坏は口縁部～体部破片で内面に黒色処理を施すものがある。有段丸底で外面の段に対応する位置の内面に屈曲をもち栗囲式とみられる。また、頸部～体部破片で内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施すもので南小泉とみられるものがある。土師器甕は各部位の破片があり、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施し、頸部に痕跡的な段を持つものと持たないものがある。また、底部に木葉痕を持つものがある。ロクロ土師器坏は底部破片で内面に黒色処理を施す。



SD18　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む



SD19　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒・φ 5cm の礫を含む　地山ブロックを少量含む

第 38 図　SD18・SD19 溝跡

２．２区

（１）竪穴住居跡

【SI301 竪穴住居跡】（第 40・41 図、写真図版 12 － 1・2）

〔位置・確認面〕２区南部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。西半部は削平のため掘方埋土のみ残存する。

〔重複〕SI301 → SI302 → SK309

〔規模・形状〕東西 4.0m、南北 4.0m の隅丸方形を呈する。

〔方向〕住居北辺：N － 65.1° － W

〔壁面〕Ⅳ～Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で床面から 10cm である。

〔床面〕東半部のみ残存し、住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦である。住居北東隅周辺の床面に焼土ブロックと炭化材の集中がみられる。

〔主柱穴〕なし

〔周溝・壁材〕住居北辺と東辺、南辺の一部に上幅 11 ～ 24cm、深さ 4 ～ 11cm の周溝が巡る。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。周溝内の住居壁面側に幅 4 ～ 8cm、深さ 4 ～ 6cm の壁材痕跡を確認した。

〔カマド〕残存しない。住居西辺中央やや南寄りの位置で住居掘方埋土の被熱による赤色化が認められ、カマド燃焼部底面の痕跡と考えられる。

〔貯蔵穴〕なし

〔床下土坑〕なし

〔堆積土〕地山粒を少量含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕床面より土師器坏（第 41 図 1）が出土した。平底で底部が厚く、内面にナデ調整、外面にナデ調整→ハケメ調整を施し、外底面に木葉痕を持つ。土師器甕下半部の製作技法によっている。

　このほか、確認面、住居内堆積土、住居掘方埋土より土師器坏・高坏・甕、床面より磨石が出土した。土師器坏は口縁部破片で内面にミガキ調整を施す。土師器高坏は坏部の破片だが磨滅が著しい。土師器甕は胴部破片で外面にケズリ調整を施す。

【SI302 竪穴住居跡】（第 42 ～ 45 図、写真図版 12 － 3 ～ 9，13 － 2 ～ 11）

〔位置・確認面〕２区南部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。南東部は削平のため掘方埋土のみ残存する。

〔重複〕SI301 － SB308 → SI302 → SK309

〔規模・形状〕東西 3.8m、南北 3.9m の隅丸方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N － 4.9° － E

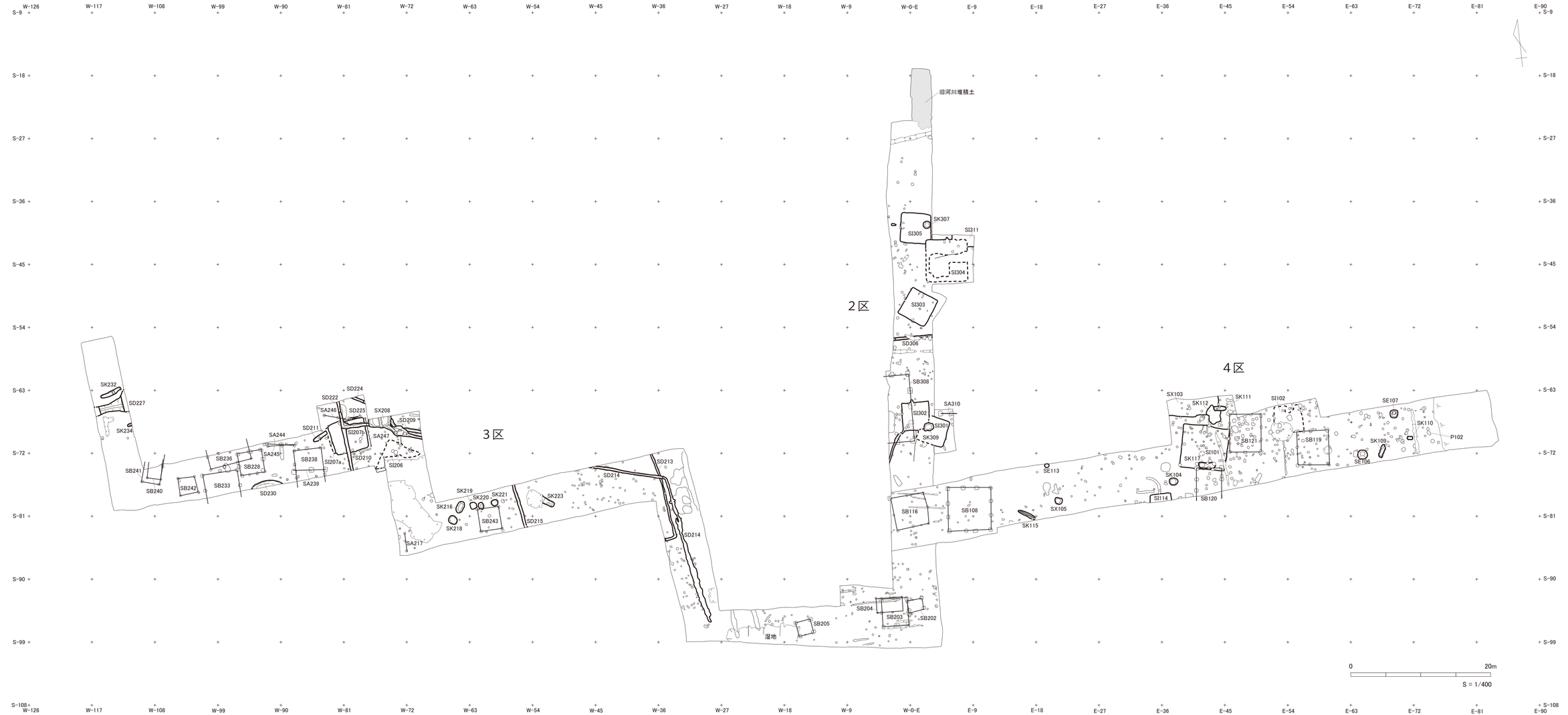
〔壁面〕Ⅳ～Ⅴ層を壁とする。床面から外傾して立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な西壁で床面から 10cm である。

〔床面〕住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦である。

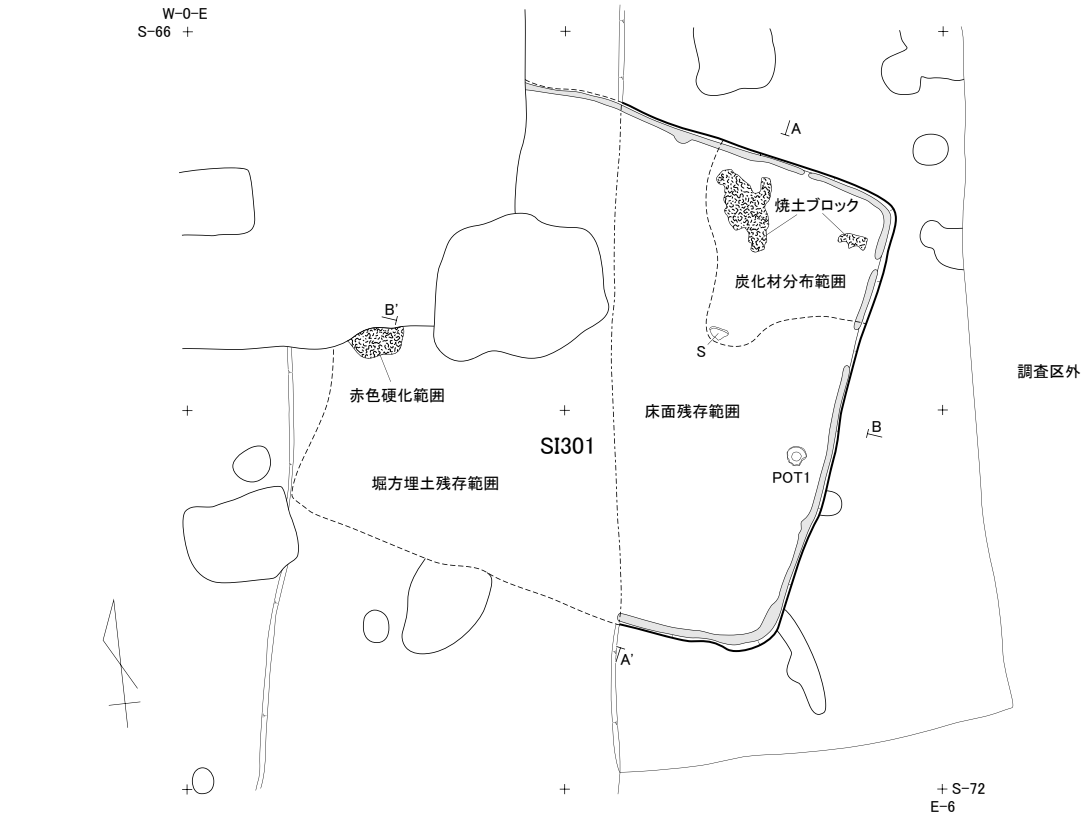
〔主柱穴〕なし

〔周溝・壁材〕カマドの付設される住居北辺中央から北西隅を除く壁面に沿って上幅 46cm、深さ 10cm の周溝が巡る。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。周溝内の住居壁面側に幅 4 ～ 8cm、深さ 4cm の壁材痕跡を確認した。

〔小溝・外延溝〕住居北辺と貯蔵穴の位置する北東隅を除く三辺の壁面から 6 ～ 30cm の位置で上幅 14 ～



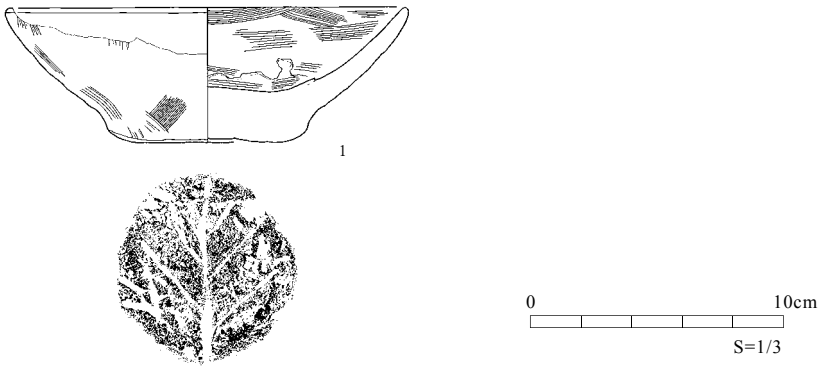
第39図　2～4区遺構配置図



SI301　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（住堆）
2	10YR2/1 黒	シルト	均質土（壁材痕）
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山小ブロックを多く含む（壁材掘）
4	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山大ブロックを多く含む（住掘）

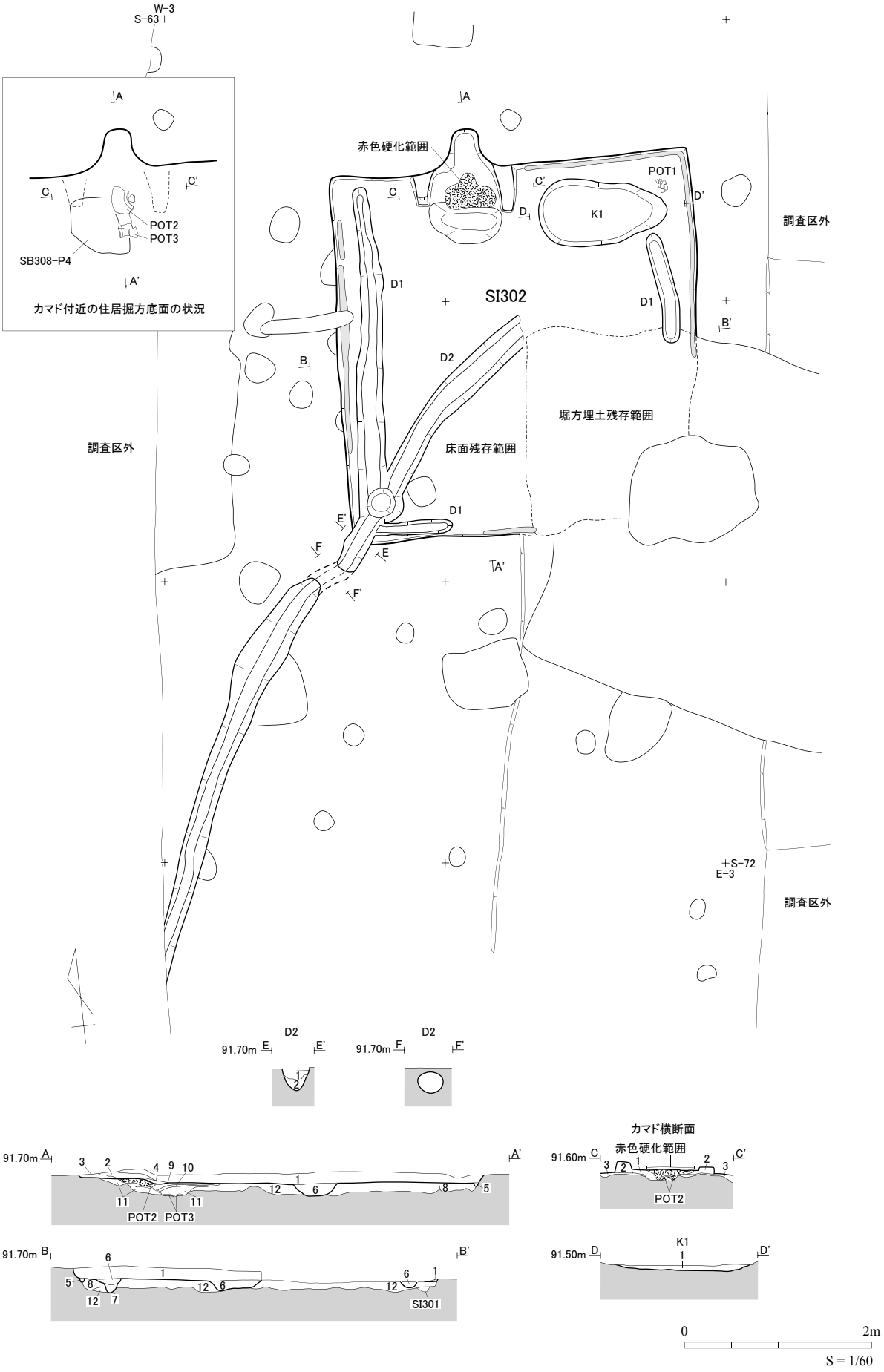
第 40 図　SI301 竪穴住居跡



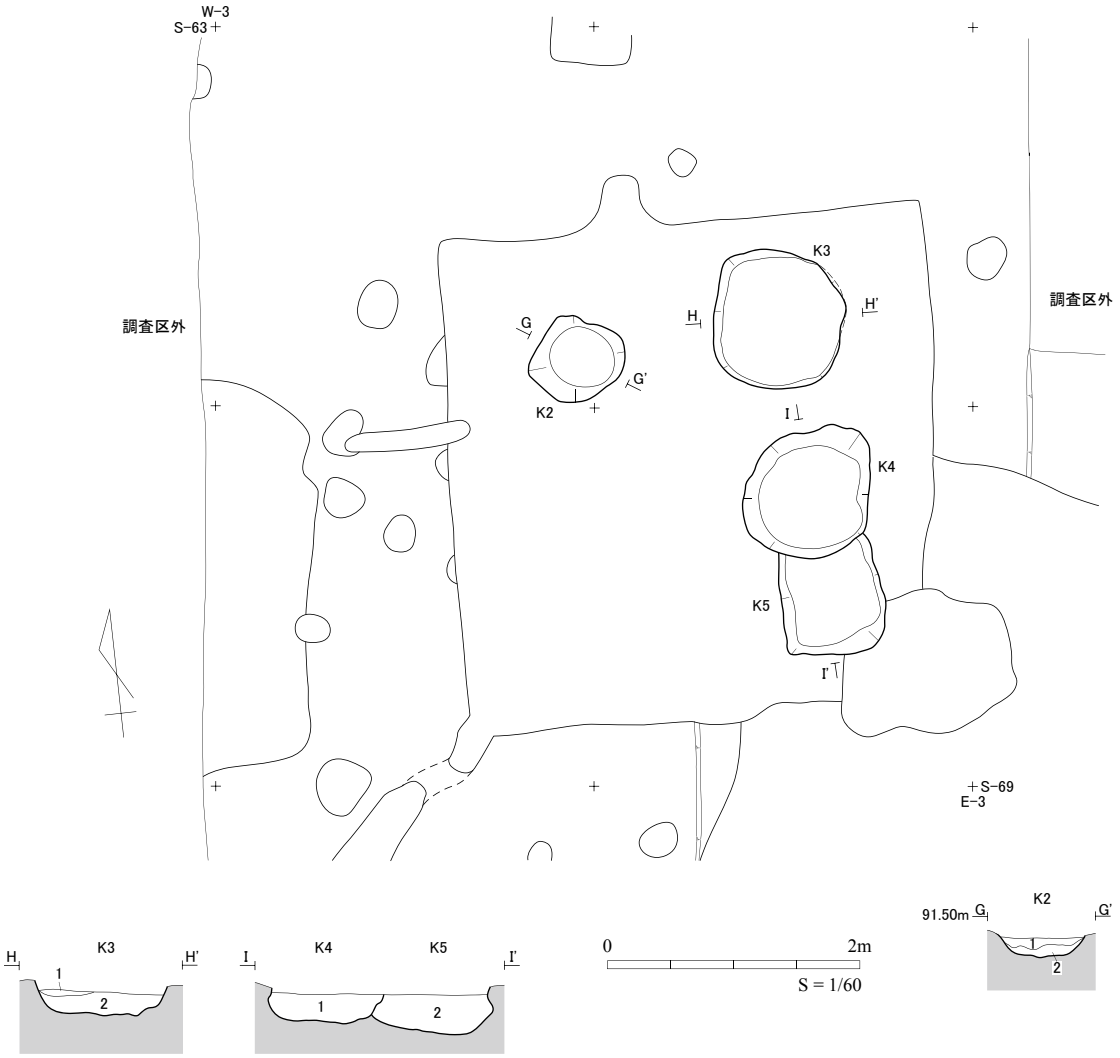
No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI301	床面直上 Pot.1	土師器	坏	内面：ナデ，外面：ナデ→ハケメ，（底）木葉痕	（16.0）	7.9	5.4	2/3	35	33-4

第 41 図　SI301 竪穴住居跡出土遺物

31cm、深さ 8 ～ 14cm の小溝（D1）と、貯蔵穴付近から住居南西隅へ延びて D1 と接続する上幅 24 ～ 34cm、深さ 14cm の小溝（D2）を確認した。D2 はさらに住居南東隅からトンネル状の部分を介して屋外へ 4.5m 以上延びる外延溝と接続している。外延溝は上幅 20 ～ 44cm、深さ 17 ～ 23cm で、トンネル状部分の横断面形は幅 26cm、高さ 21cm の楕円形を呈する。D1・D2 および外延溝の堆積土は



第 42 図　SI302 竪穴住居跡（1）



SI302　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山・焼土・炭化物粒を含む（住堆）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	焼土・炭化物粒を多く含む（竈堆）
3	10YR4/2 灰黄褐	砂質シルト	焼土粒を含む（竈堆）
4	10YR4/1 褐灰	シルト	灰層　焼土・炭化物粒を含む（竈機能時堆）
5	10YR2/1 黒	シルト	均質土（壁材痕）
6	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土（D1・D2 堆）
7	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を多く含む（D1 堆）
8	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（壁材掘）
9	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	白色粘土を主体とする（竈構）
10	10YR2/1 黒	シルト	灰層　炭化物粒を多く含む
11	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	白色粘土・焼土ブロックを含む　Pot2 を含む
12	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	白色粘土・地山ブロック多含む

SI302 カマド　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘質シルト	白色粘土を主体とする（竈構・住居主断面 9 層対応）
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	白色粘土を主体とする（竈側壁構）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	灰層（住居主断面 10 層対応）

SI302 K1　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒褐	シルト	白色粘土･焼土ブロック､炭化物粒を少量含む(人為)

SI302 D1　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少量含む

SI302 K2　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	白色粘土・焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む（人為）
2	10YR4/4 褐	シルト	白色粘土を主体とする（人為）

SI302 K3　H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	白色粘土・焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む（住掘・住居主断面 12 層対応）
2	10YR2/1 黒	粘質土	白色粘土ブロックを少量含む（人為）

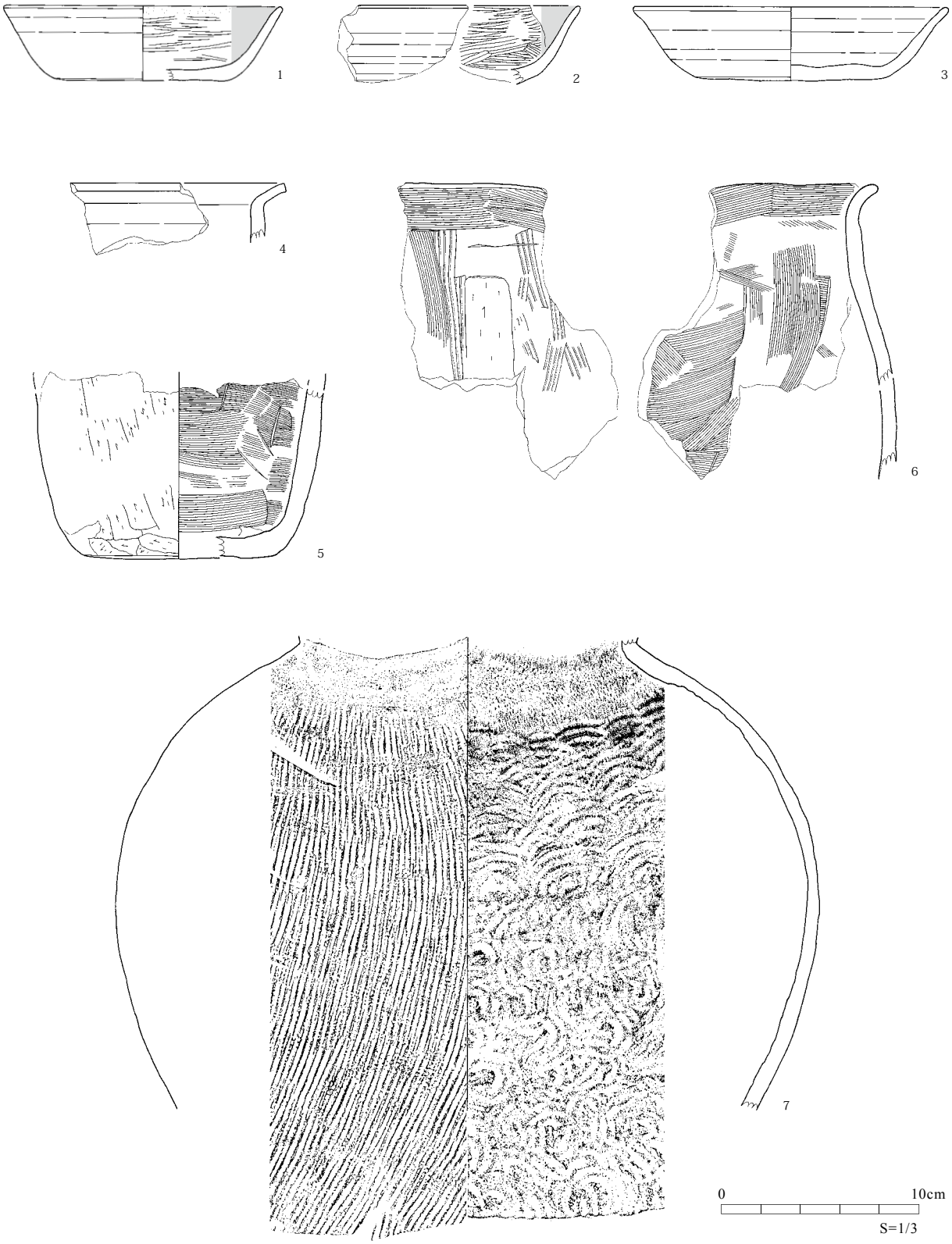
SI302 K4・K5　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	白色粘土ブロックを含む（K4 堆・人為）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	白色粘土ブロック・地山粒を多く含む（K5 堆・人為）

第 43 図　SI302 竪穴住居跡（2）

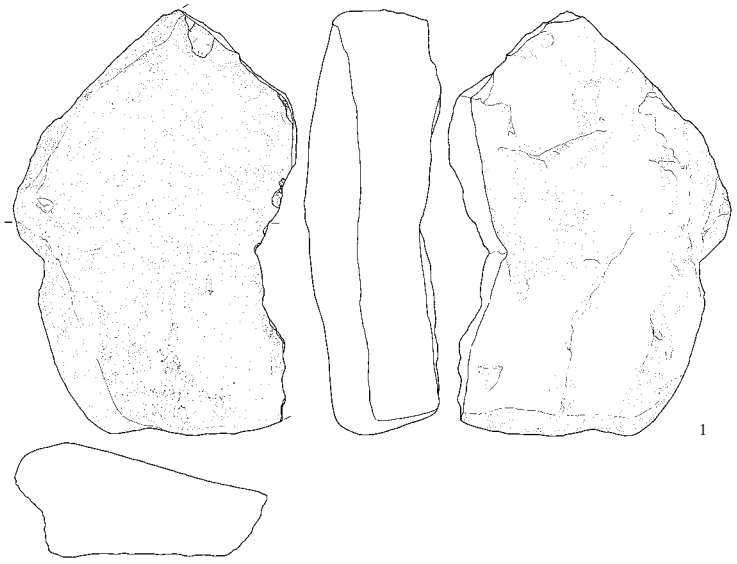
2 層に細分され、1 層は均質な黒褐色シルト、2 層は地山粒を含む黒褐色シルトである。いずれも住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

〔カマド〕住居北辺やや西寄りに付設されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ 122cm、幅 113cm で、焚口幅は側壁先端間で 74cm である。燃焼部底面は幅 74cm、奥行 122cm で、焚口付近が床面より 3cm ほど皿状に窪んでいる。底面には被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は左右とも残存し、長さ 34 ～ 50cm、幅 24 ～ 26cm、高さ 7 ～ 11cm である。白色粘土を主体とする暗褐色粘質シルトで構築されている。奥壁は住居北壁より 42cm 張り出す。



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI302	床面直上 Pot.1	ロクロ土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，（口）磨滅， 外面：ロクロナデ，（体下～底）磨滅	（14.2）	（9.0）	3.8	1/3	30	34-1
2	SI302	住居掘方埋土	ロクロ土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：ロクロナデ	-	-	（3.9）	一部	29	34-2
3	SI302	K5 堆積土	須恵器	坏	内面：ロクロナデ，外面：（体）ロクロナデ，（底）ヘラ切り？→ナデ	（16.0）	（9.6）	3.8	1/4	28	34-3
4	SI302	堆積土	ロクロ土師器	甕	内外面：ロクロナデ	-	-	（3.6）	一部	32	34-4
5	SI302	K5 堆積土	土師器	甕	内面：ヘラナデ，外面：ヘラケズリ，（底）木葉痕→ケズリ，（胴～底）粘土付着	-	（9.8）	（9.5）	一部	31	34-5
6	SI302	住居掘方埋土 Pot.3	土師器	甕	内面：（口）ヨコナデ→（胴）ヘラナデ， 外面：ハケメ→ヘラケズリ・（口）ヨコナデ→ナデ，（胴）粘土付着	-	-	（15.0）	一部	33	34-6
7	SI302	住居掘方埋土 Pot.2	須恵器	甕	内面：同心円文アテ具痕　外面：平行タタキ目	-	-	（23.9）	一部	34	34-7

第 44 図　SI302 竪穴住居跡出土遺物（1）



No.	遺構名	層位	種類	石材	特徴	法量（mm）				登録	写真
						長	幅	厚	重（g）		
1	SI302	床面直上	砥石	安山岩	片面にやや内湾する磨面，側面を長軸方向に欠損	278	188	70	5300	146	35-1

第 45 図　SI302 竪穴住居跡（2）

〔貯蔵穴〕住居北東隅で土坑 1 基（K1）を確認した。平面形は長軸 136cm、短軸 70cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 7cm の皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は白色粘土ブロックと炭化物、焼土を少量含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔床下土坑〕4 基（K2 ～ K5）を確認した。K2 は住居北西部、K3 は住居北東部、K4・5 は住居南東部に位置する。住居掘方埋土の上面から掘り込まれているものが 1 基（K4）、住居掘方底面から掘り込まれているものが 3 基（K2・K3・K5）である。いずれも底面にはⅥ層の白色粘土が露出しており、K4・K5 では土坑壁面が白色粘土層を抉るようにオーバーハングしていることから、白色粘土の採取を意図して掘られたものがあると考えられる。K2 は平面形が長軸 70cm、短軸 66cm の不整円形を呈し、断面形は深さ 16cm の逆台形を呈する。底面は凹凸が見られる。堆積土は 2 層に細分され、1 層は白色粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物を多量に含む黒褐色粘質シルト、2 層は白色粘土を主体とする褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。K3 は平面形が長軸 108cm、短軸 102cm の不整円形を呈し、断面形は深さ 18cm の逆台形を呈する。底面は凹凸が見られる。堆積土は白色粘土ブロックを含む黒色粘質土で、人為的埋土と考えられる。堆積土上面には住居掘方埋土の沈み込みが見られる。K5 は北側を K4 に壊されているため全体の形状が不明であるが、平面形は長軸 92cm 以上、短軸 84cm の隅丸方形を呈し、断面形は深さ 31cm で壁面の抉れるＵ字形を呈する。底面には凹凸が見られる。堆積土は地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。K4 は長軸 106cm、短軸 100cm の不整円形を呈し、断面形は深さ 24cm で壁面の抉れるＵ字型を呈する。底面には凹凸が見られる。堆積土は白色粘土ブロックを含む黒色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕焼土・炭化物・地山粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕住居堆積土よりロクロ土師器甕（第 44 図 4）、床面よりロクロ土師器坏（第 44 図 1）、砥石（第 45 図 1）、K5 床下土坑堆積土より土師器甕（第 44 図 5）、須恵器坏（第 44 図 3）、カマド燃焼部底面に当たる位置の住居掘方底面よりロクロ土師器坏（第 44 図 2）・甕（第 44 図 6）、須恵器甕（第 44 図 7）の破片が敷き並べた状態で確認された。SB308 掘立柱建物跡 P4 の上面に位置しており、住居・カマドの構築にあたり地盤の安定などを意図した可能性がある。

第 44 図 1・2 は内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。1 は体下部～底面の磨滅が著しく切り離し方法と再調整の有無は不明である。第 44 図 3 は底部ヘラ切り？→ナデ調整を施す。第 44 図 4 は口縁部の内外面にロクロナデ調整を施す。第 44 図 5 は外面の下半部に縦方向のケズリ調整、外底面は木葉痕の後にケズリ調整を施す。第 44 図 6 は外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整の後にケズリ調整を施す。5 の胴部～底部、6 の胴部に粘土の固着がみられる。第 44 図 7 は内面に同心円文アテ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。

このほか、住居内堆積土、P1・P4 柱穴堆積土、D1 溝跡堆積土、カマド崩落土、住居掘方埋土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は体部破片で、内面にヘラミガキ→黒色処理を施す。土師器甕は外面にケズリ調整を施すもの、ハケメ調整を施すものがある。

【SI303 竪穴住居跡】（第 46 ～ 48 図、写真図版 13 － 12 ～ 14，14 － 1 ～ 1・2・4・5）

〔位置・確認面〕2 区中央部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SI303 → pit

〔規模・形状〕東西 4.2m、南北 4.2m の隅丸方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N － 22.7° － E

〔壁面〕Ⅳ～Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な西壁で床面から 15cm である。

〔床面〕住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦である。カマド前庭部周辺の長軸 2.1m、短軸 1.8m の範囲で床面の硬化が確認された。

〔主柱穴〕なし

〔周溝〕住居西･南辺と東辺の一部に上幅 9 ～ 16cm、深さ 4 ～ 8cm の周溝が巡る。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔カマド〕住居北辺やや西寄りに付設されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ 78cm、幅 88cm で、焚口幅は側壁先端間で 48cm である。燃焼部底面は幅 54cm、奥行き 78cm で、焚口付近が床面より 3cm ほど皿状に窪んでいる。底面には被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は左右とも残存し、長さ 53 ～ 75cm、幅 14 ～ 22cm、高さ 12 ～ 13cm である。白色粘土粒を含む暗褐色砂質シルトで構築されている。奥壁は住居北壁と一致する。

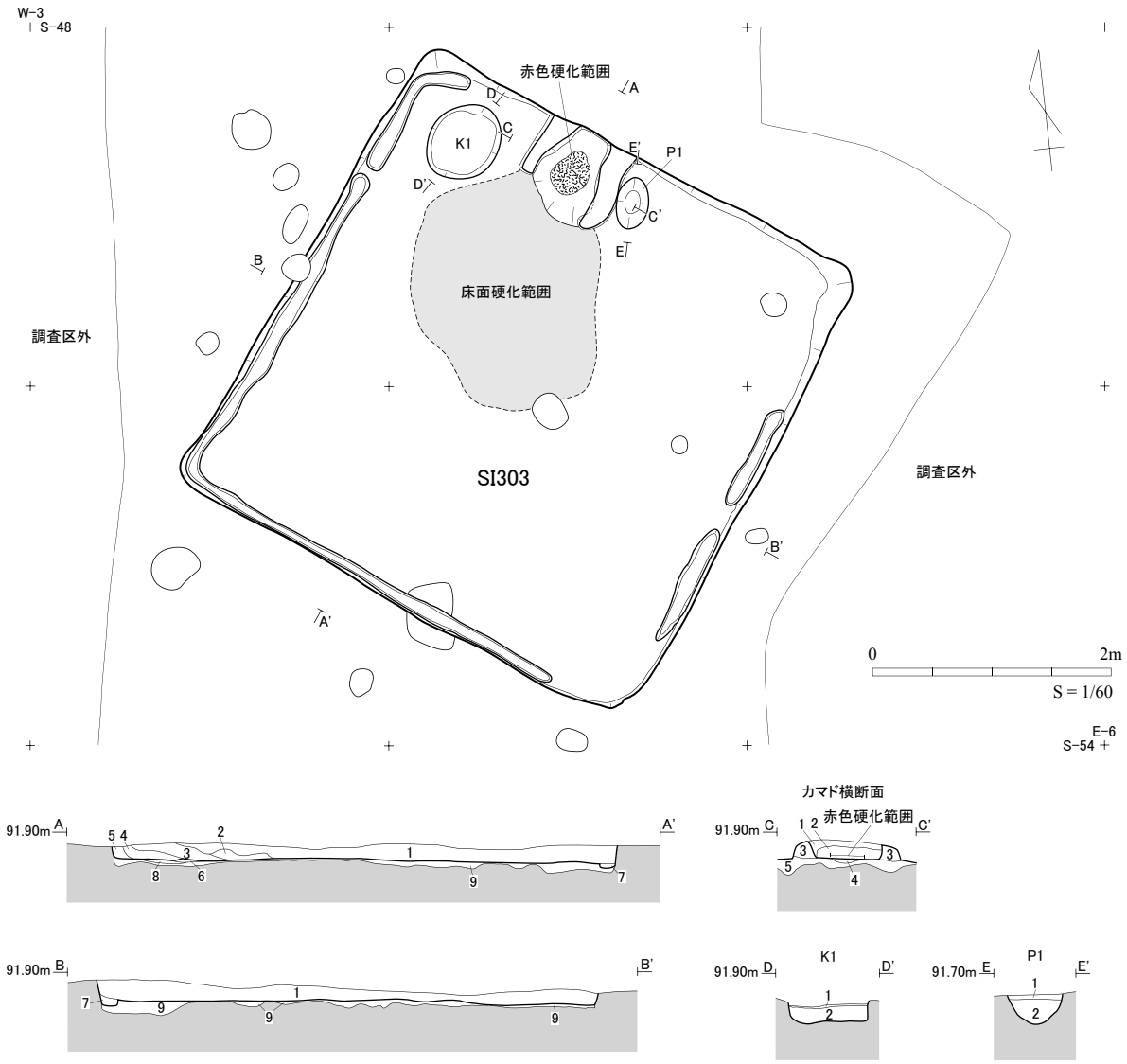
〔貯蔵穴〕住居北西隅で土坑 1 基（K1）を確認した。平面形は長軸 64cm､短軸 58cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 20cm の箱状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 2 層に細分され、1 層は焼土粒・灰を含むにぶい黄褐色シルト、2 層は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔床下土坑〕住居北西隅付近で土坑 1 基（K2）を確認した。住居掘方底面から掘り込まれている。平面形は長軸 134cm、短軸 124cm の不整形を呈し、断面形は深さ 30cm U 字形を呈する。底面にはⅥ層の白色粘土が露出し、凹凸のある皿状を呈する。堆積土は 3 層に細分され、1 層は粒を含む暗褐色シルト、2 層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、3 層は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。いずれも人為的埋土と考えられ、3 層は住居掘方埋土に類似している。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕床面より土師器坏（第 48 図 1）が出土した。平底で浅く､口縁部まで内弯して立ち上がる。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にヘラケズリ調整を施し、外底面に線刻「×」？がみられる。

このほか、確認面、住居内堆積土、住居掘方埋土より土師器坏・甕・小型品・中型品が出土した。土師器坏は口縁部破片で内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施すもの、内外面にミガキ調整を施すもので、南小泉式とみられるものがある。土師器甕は各部位の破片があり外面にナデ調整を施すもの、ハ



SI303　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	白色粘土・ロームブロックを含む（住堆）
2	10YR2/1 黒	シルト	白色粘土大ブロックを多く含む（竈崩）
3	10YR4/2 灰黄褐	粘質シルト	白色粘土を主体とする　下面が被熱により赤色化（竈天井崩？）
4	10YR3/1 黒褐	シルト	地山・炭化物・焼土粒を含む（竈堆）
5	10YR3/1 黒褐	砂質シルト	地山・炭化物粒を多く含む（竈堆）
6	2.5Y3/1 黒褐	シルト	炭化物粒を多く含む（竈機能時堆）
7	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを多く含む（周溝堆）
8	7.5YR4/3 褐	シルト	焼土・炭化物・白色粘土粒を含む（竈機能時堆）
9	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（住掘）

SI303 カマド　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/2 灰黄褐	粘質シルト	白色粘土を主体とする　下面に被熱による赤色化がみられる（竈天井崩？・住居主断面 3 層対応）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山・焼土粒を含む（竈堆・住居主断面 4 層対応）
3	10YR3/4 暗褐	砂質シルト	黒色シルトブロック、焼土・白色粘土粒を含む（竈構）
4	7.5YR4/3 褐	シルト	焼土・炭化物・白色粘土粒を含む（竈機能時堆・住居主断面 8 層対応）
5	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（住掘・住居主断面 9 層対応）

SI303 K1　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	焼土・炭化物粒を含む（人為）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山小ブロックを含む（人為）

SI303 P1　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山・焼土粒を含む（人為）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（人為）

第 46 図　SI303 竪穴住居跡（1）

ケメ調整を施すもの、内外面にナデ調整と赤彩を施すものがある。土師器小型品は体部破片で内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施し、内外面に赤彩を施す。土師器中型品は体部破片で内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施す。

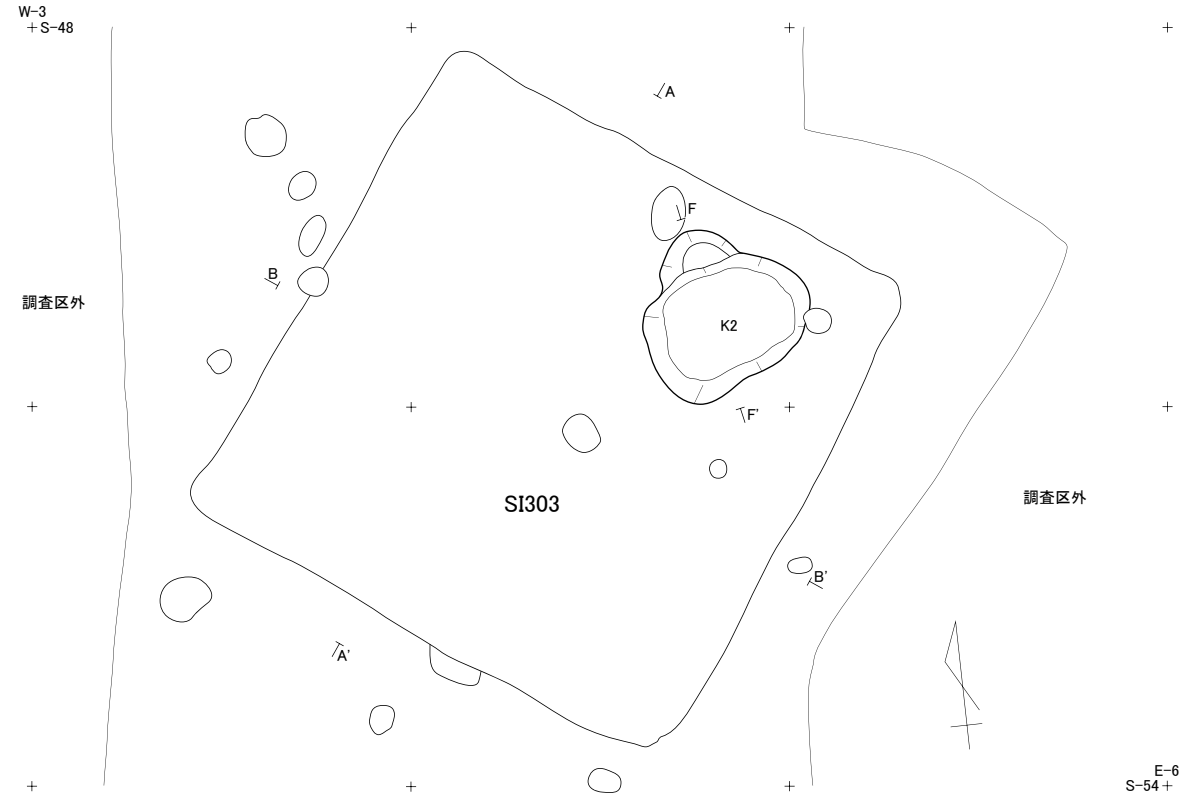
【SI304 竪穴住居跡】（第 49・50 図、写真図版 14 － 3）

〔位置・確認面〕２区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。東部は未精査である。

〔重複〕SI305 － SI311 → SI304

〔規模・形状〕東西 6.0m、南北 6.0m の隅丸正方形を呈する。

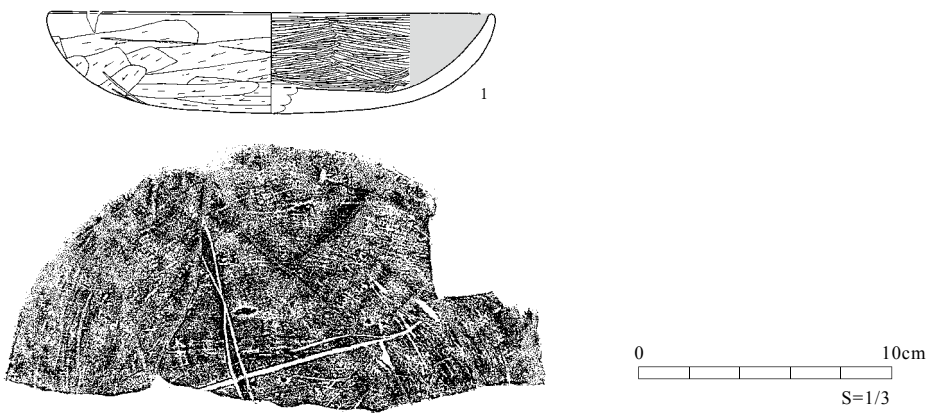
〔方向〕カマド中軸線：N － 6.3° － E



SI303 K2　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山・焼土粒を含む（人為）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	白色粘土粒・地山ブロックを含む（人為）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（人為・住居主断面 9 層と類似）

第 47 図　SI303 竪穴住居跡（2）



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI303	床面直上	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：ヘラケズリ，（底）線刻「×」？	(17.8)	-	4.0	2/5	71	35-2

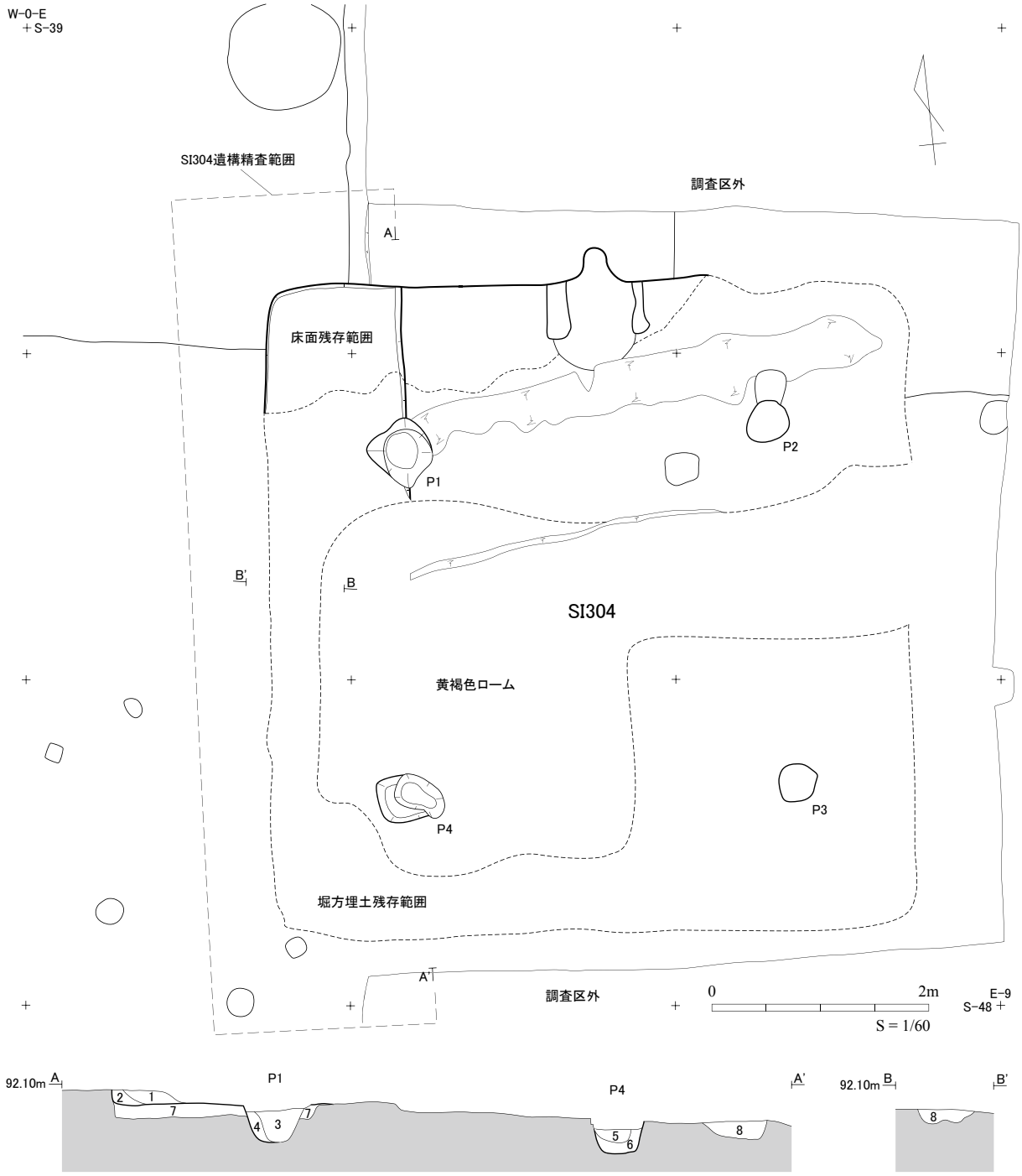
第 48 図　SI303 竪穴住居跡出土遺物

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は住居北西隅周辺で床面から 14cm である。

〔床面〕住居北西隅周辺のみ残存する。掘方埋土を床としている。

〔主柱穴〕4 か所確認した。住居平面形の対角線上に位置する。東側の 2 か所は未精査である。掘方の平面形は長軸 36 ～ 60cm、短軸 32 ～ 48cm の不整方形を呈する。深さは西側の 2 か所で 26 ～ 27cm で、いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認した。掘方埋土は地山ブロックを均質に含む黒褐色シルトである。

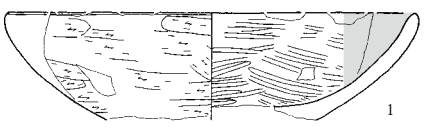
〔周溝・壁材〕不明

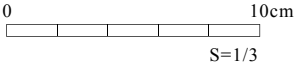


SI304　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（住堆）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山粒をわずかに含む（住堆）
3	10YR2/1 黒	シルト	地山粒をわずかに含む（P1 抜）
4	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（P1 掘）
5	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（P4 抜）
6	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（P4 掘）
7	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（住掘）
8	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（住掘）

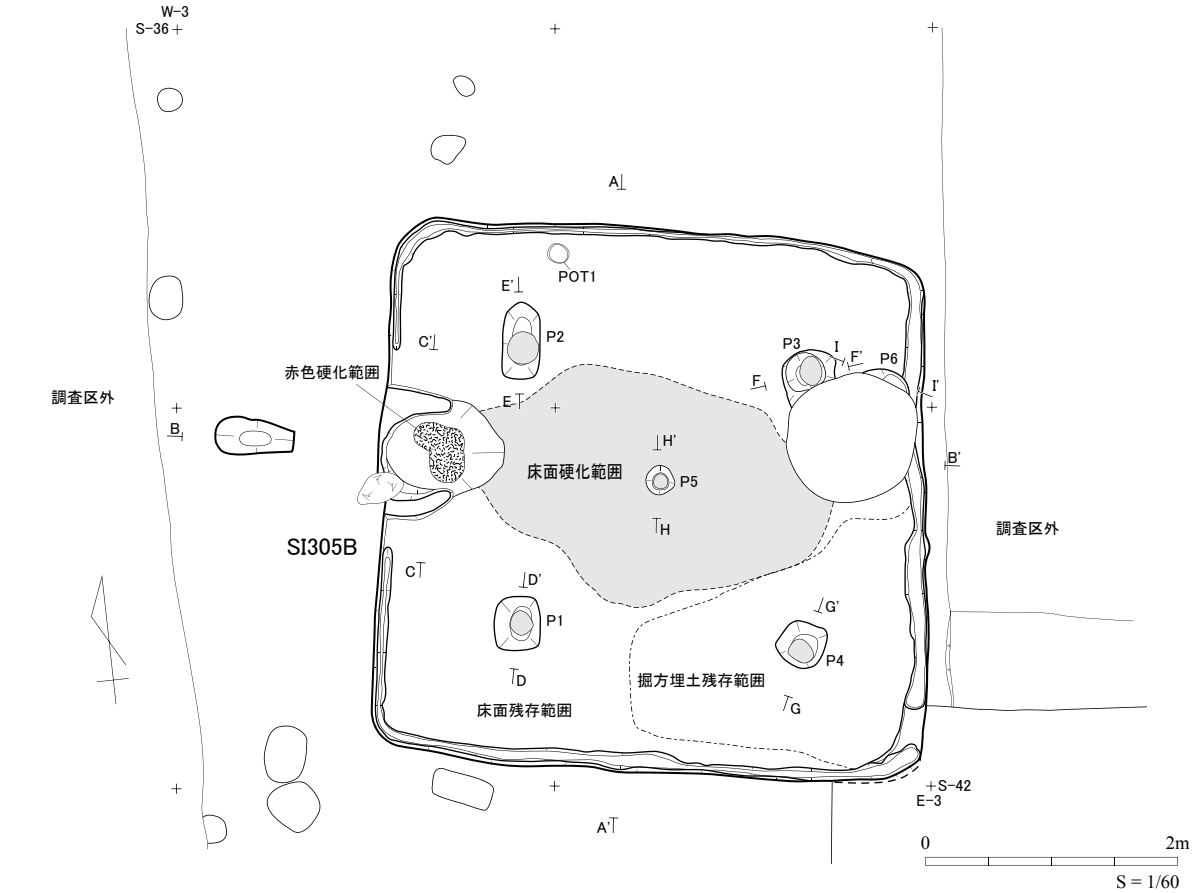
第 49 図　SI304 竪穴住居跡

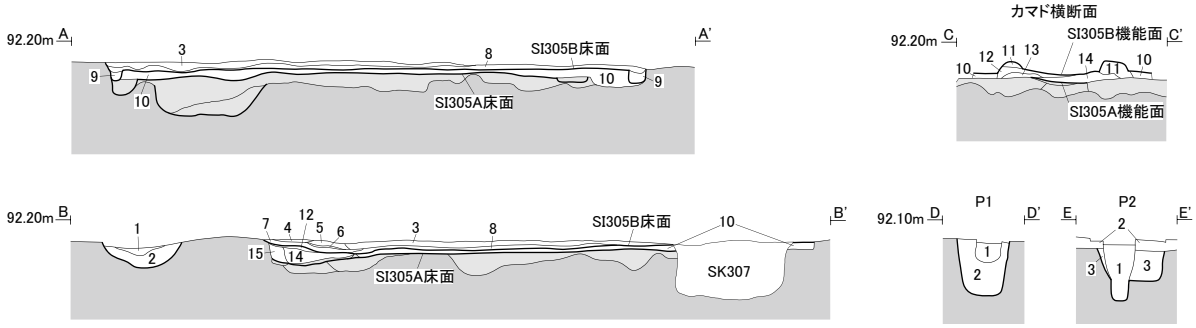


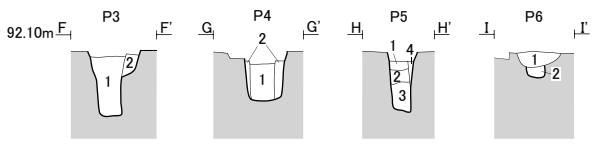


No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI304	堆積土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：ヘラケズリ	(16.4)	-	(4.2)	一部	70	35-3

第 50 図　SI304 竪穴住居跡出土遺物







SI305B　A-A', B-B', C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む（煙出堆）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（煙出堆）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山・焼土粒を含む（住堆）
4	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を含む（竈崩）
5	10YR4/8 赤褐	シルト	焼土ブロック（竈天井崩？）
6	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土・炭化物粒を含む（竈構）
7	5YR4/4 にぶい黄褐	シルト	焼土ブロックを多量に含む　地山粒を少量含む（竈崩）
8	10YR3/2 黒褐	シルト	地山・焼土ブロックを含む（住堆・人為）
9	10YR2/1 黒	シルト	均質土（周溝堆）
10	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む　焼土ブロックを部分的に含む（住掘）
11	10YR3/4 暗褐	シルト	地山粒を含む（竈構）
12	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土ブロック、炭化物・地山粒を含む（竈構）
13	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（竈構）
14	10YR4/4 褐	シルト	焼土・黒色土ブロックを含む（竈構）
15	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（竈構）

SI305B P1　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SI305B P2　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山・焼土粒を含む（住掘・住居主断面 10 層対応）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI305B P3　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を少含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI305B P4　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山粒を少含む（柱痕）
2	10YR4/4 褐	シルト	黒色土を含む（柱掘）

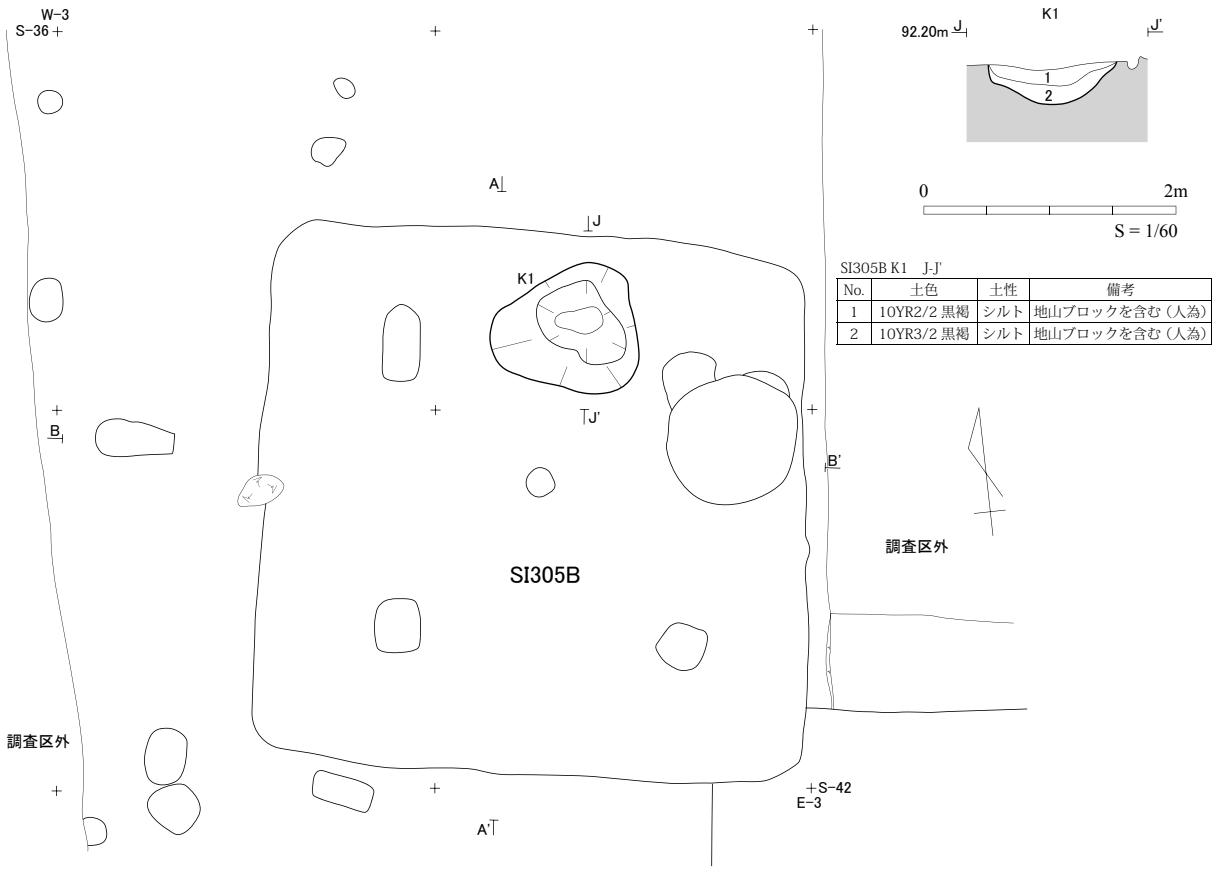
SI305B P5　H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐		地山粒含む（柱抜）
2	10YR4/4 褐		均質土（柱抜）
3	10YR2/2 黒褐		均質土（柱痕）
4	10YR4/4 褐		10YR2/1 黒色シルトブロックを含む（柱掘）

SI305B P6　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロック・焼土粒を含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱痕）

第 51 図　SI305B 竪穴住居跡（1）



SI305B K1　J-J'

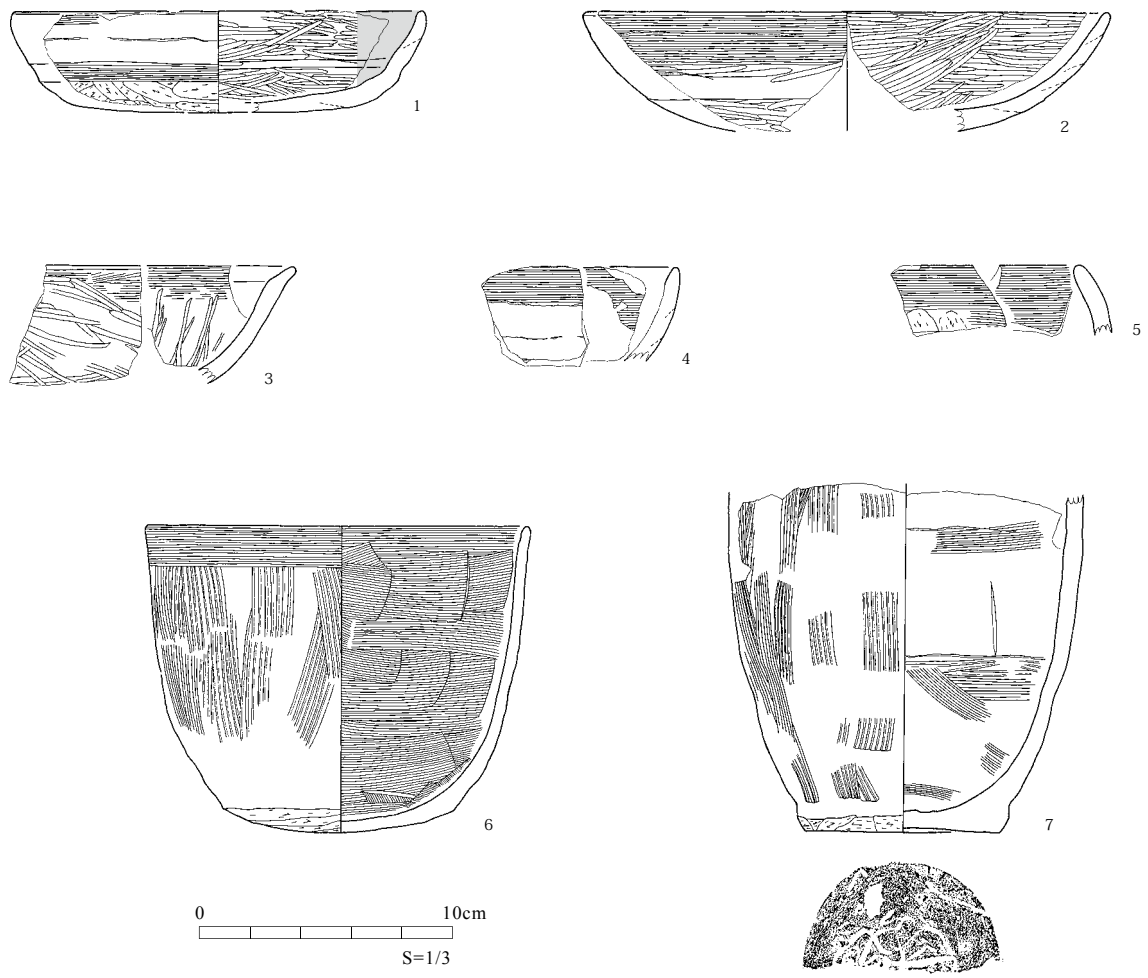
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（人為）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（人為）

第 52 図　SI305B 竪穴住居跡（2）

〔カマド〕住居北辺中央に付設されている。燃焼部と短く延びる煙道を確認した。未精査である。燃焼部は長さ 85cm、幅 95cm で、焚口幅は焚口先端間で 56cm である。側壁は左右とも残存し、長さ 48 ～ 52cm、幅 16 ～ 21cm である。奥壁は住居北壁と一致し、幅 22cm、長さ 30cm の煙道が短く張り出す。
〔貯蔵穴〕なし
〔床下土坑〕不明
〔堆積土〕2 層に細分される。地山粒を含む黒褐色・黒色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。
〔出土遺物〕住居内堆積土より土師器坏（第 50 図 1）が出土した。口縁部まで内弯して立ち上がり、内面にヘラミガキ→黒色処理、外面にヘラケズリ調整を施す。

このほか、確認面、住居内堆積土、住居掘方埋土より土師器坏・甕・小型品などが出土した。土師器坏は口縁部破片で内面にヘラミガキ→黒色処理を施す。有段丸底で外面の段に対応する位置の内面に屈曲を持ち、栗囲式とみられる。土師器甕は胴部破片で外面にハケメ調整を施す。土師器小型品は口縁部破片で内外面にミガキ調整を施す。

【SI305B 竪穴住居跡】（第 51 ～ 53 図、写真図版 14 － 6 ～ 12）
〔位置・確認面〕2 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕SI305A → SI305B → SK307 － SI304
〔規模・形状〕東西 4.4m、南北 4.3m の隅丸方形を呈する。
〔方向〕カマド中軸線：W － 9.3° － N
〔壁面〕北・西壁は SI305A の壁面を踏襲し、東・南壁は 30 ～ 38cm 拡張している。Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で約 6cm である。
〔床面〕南東隅周辺を除いて残存し、住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦である。カマド前庭部周辺から住居中央部にかけての長軸 2.8m、短軸 1.8m の範囲で床面の硬化が確認された。



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI305B	堆積土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理（二次被熱により大半が消失？） 外面：(口）ヨコナデ，(体）ナデ→（体下～底）ヘラケズリ→屈曲部ヘラナデ？	(16.4)	-	(4.0)	一部	41	35-4
2	SI305B	カマド崩落土	土師器	坏	内外面赤彩？（凹部に赤色顔料残存），内面：ヘラミガキ， 外面：(口）ヨコナデ→（体～底）ヘラミガキ，(体）ナデ，(底）ヘラケズリ	(21.0)	-	(4.7)	一部	45	35-5
3	SI305B	床面直上	土師器	坏	内面：(口）ヨコナデ→（体）ヘラミガキ，外面：(口）ヨコナデ→（体）ヘラミガキ	-	-	(4.6)	一部	46	35-6
4	SI305B	確認面	土師器	坏	内外面：(口）ヨコナデ	-	-	(3.9)	一部	39	35-7
5	SI305B	堆積土	土師器	鉢	内面：ヨコナデ，外面：(口）ヨコナデ→（体）ヘラケズリ・ナデ	-	-	(2.8)	一部	40	35-8
6	SI305B	住居掘方埋土 Pot.1	土師器	鉢	内面：(口）ヨコナデ→（体）ヘラナデ， 外面：(体）ハケメ→（口）ヨコナデ，(底）ヘラケズリ	(15.3)	9.1	12.2	3/4	43	35-9
7	SI305B	カマド崩落土	土師器	甕	内面：ハケメ→ナデ，外面：(胴）ハケメ→（底）ナデ→（胴下半）ヘラケズリ	-	(7.7)	(13.8)	一部	44	35-10

第 53 図　SI305B 竪穴住居跡出土遺物

〔主柱穴〕5 か所確認した。4 か所は住居平面形の対角線上に、1 か所は中央に位置する。対角線上に位置する 4 か所の掘方の平面形は長軸 40 ～ 60cm、短軸 28 ～ 38cm の隅丸方形を呈する。深さは 38 ～ 44cm で、いずれも直径 18 ～ 25cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものが 1 か所、掘方底面より 18 ～ 28cm 沈み込むものが 2 か所、28cm 浮き上がるものが 1 か所である。中央の 1 か所は掘方の平面形が直径 22cm の円形を呈し、深さ 48cm である。平面形が直径 12cm の円形を呈し掘方底面に達する柱痕跡を確認した。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトまたは黒色土のブロックを含む褐色シルトである。

〔周溝〕上幅 4 ～ 18cm、深さ 8 ～ 10cm の周溝が全周する。堆積土は均質な黒色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔カマド〕住居西辺やや北寄りに付設されている。SI305A のカマドと同位置である。燃焼部と煙出しピットが残存する。燃焼部は長さ 100cm、幅 108cm で、焚口幅は 60cm である。燃焼部底面は幅 60cm、奥行き 94cm で、焚口付近が床面より 3cm ほど皿状に窪んでいる。底面には被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は左右とも残存し、長さ 54cm、幅 22 ～ 28cm、高さ 9cm である。地山粒を含

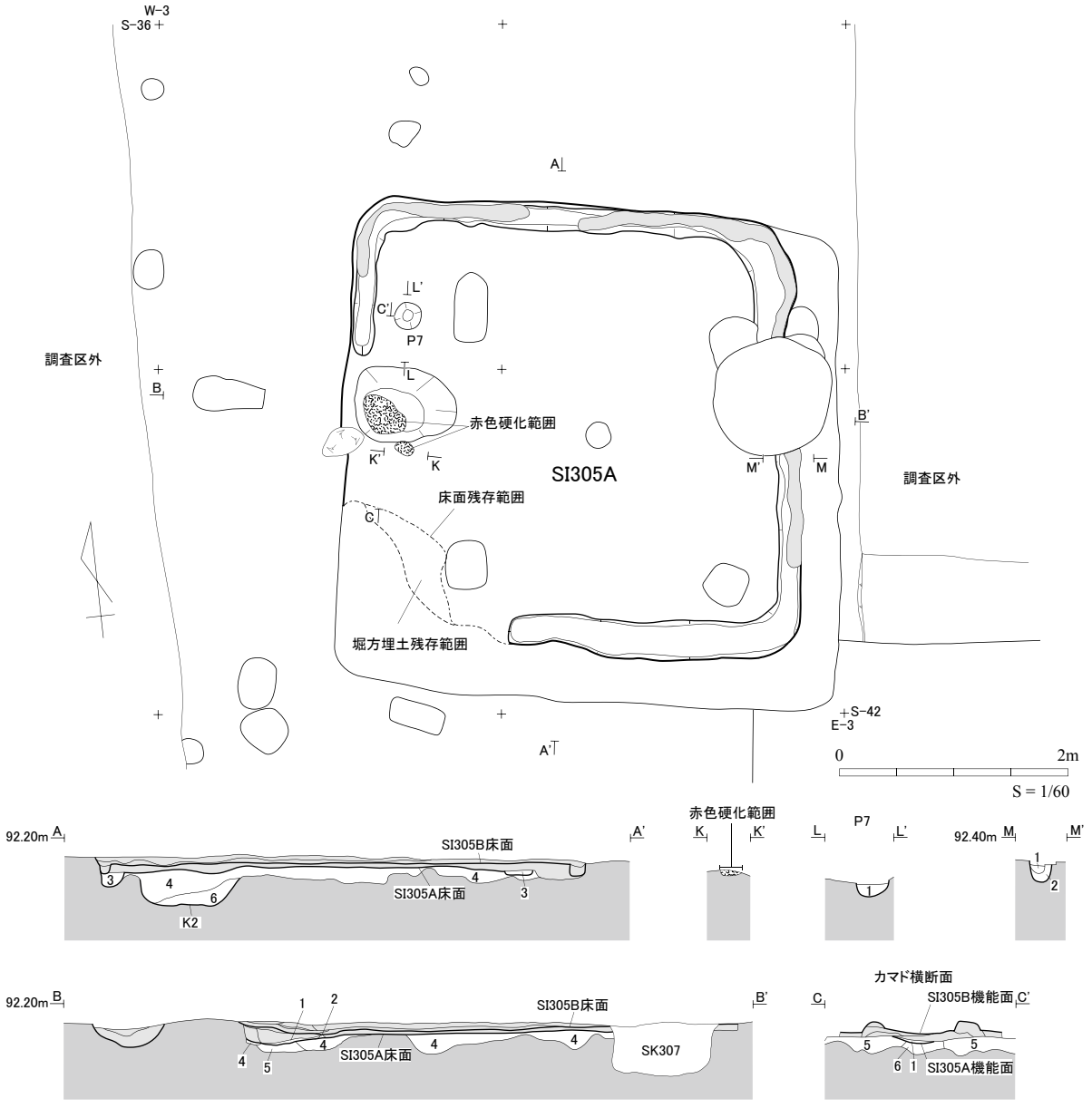
む暗褐色シルトで構築されている。煙道は残存しないが、奥壁の西側 98cm の位置に長軸 62cm、短軸 30cm、深さ 18cm のピットが確認された。位置と形状から煙出しピットと考えられる。

〔貯蔵穴〕なし

〔床下土坑〕住居北側やや東寄りの位置で土坑 1 基（K1）を確認した。住居掘方底面から掘り込まれている。平面形は長軸 116cm、短軸 103cm の隅丸三角形を呈し、断面形は深さ 34cm の皿状を呈する。堆積土は 2 層に細分される。いずれも地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕地山粒・焼土粒を均質に含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面より土師器坏（第 53 図 4）、住居内堆積土より土師器坏（第 53 図 1）・鉢（第 53 図 5）、カマド崩落土より土師器坏（第 53 図 2）・甕（第 53 図 7）、床面より土師器坏（第 53 図 3）・鉢（第



SI305A　A-A', B-B', C-C'

No.	土色	土性	備考
1	5YR4/8 赤褐	シルト	地山・焼土ブロックを多く含む（竈崩）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（竈崩）
3	10YR2/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（壁材掘）
4	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（住掘）
5	10YR3/1 黒褐	シルト	地山・焼土・炭化物粒を含む（住掘）
6	10YR1.7/1 黒	シルト	地山大ブロックを含む（K2 堆・人為）

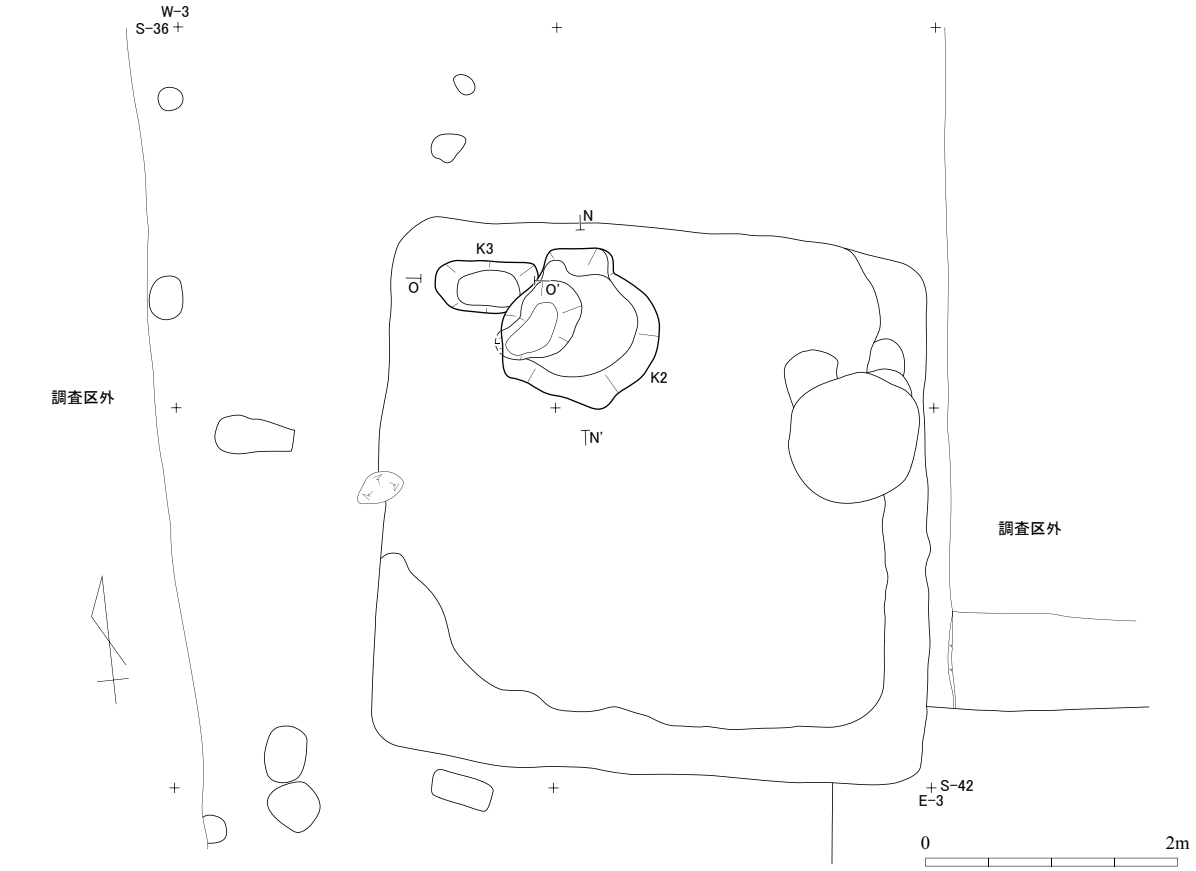
SI305A P7　L-L'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（人為）

SI305A 周溝　M-M'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（壁柱痕）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を含む（壁材掘）

第 54 図　SI305A 竪穴住居跡（1）



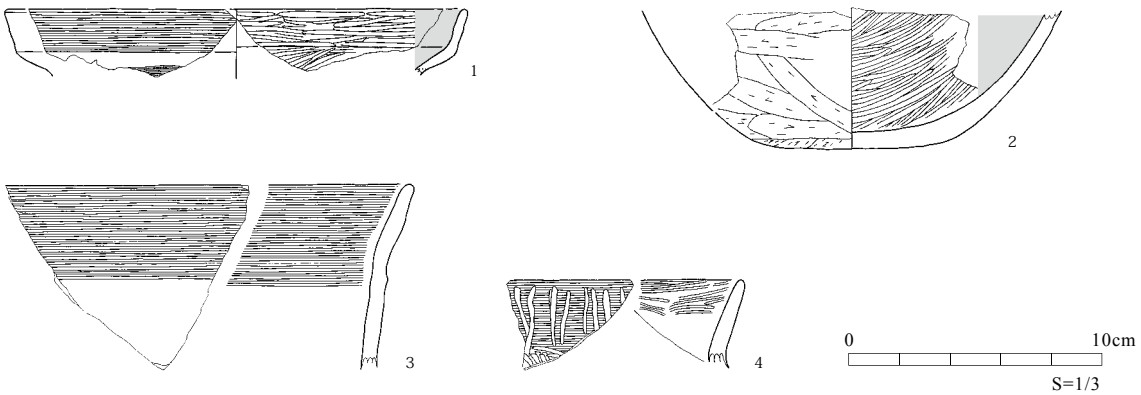
SI305A K2　N-N'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロック・焼土粒を含む（人為）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山大ブロックを多く含む（人為）

SI305A K3　O-O'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロック・焼土粒を多く含む（人為）

第 55 図　SI305A 竪穴住居跡（2）



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI305A	住居掘方埋土	土師器	高坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：(口) ヨコナデ，(体) ナデ	(18.4)	-	(2.7)	一部	36	36-1
2	SI305A	K2 堆積土	土師器	大型坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理（二次被熱により大半が消失？） 外面：(体) ナデ・(底) 木葉痕→（体～底）ヘラケズリ	-	8.0	(5.6)	一部	42	36-2
3	SI305A	周溝内堆積土	土師器	甕	内外面：(口) ヨコナデ	-	-	(7.3)	一部	38	36-3
4	SI305A	住居掘方埋土	土師器	小型壺	内面：(口) ヨコナデ？→ヘラミガキ，外面：(口～頸) ヨコナデ→ヘラミガキ	-	-	(3.5)	一部	37	36-4

第 56 図　SI305A 竪穴住居跡出土遺物

53 図 6）が出土した。1 は平底で外面の体部下端に痕跡的な段を持ち、口縁部が内弯気味に立ち上がる。外面の痕跡的な段に対応する位置の内面に屈曲がみられる。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部下端～底部にヘラケズリ調整を施す。2 は口縁部まで内弯して立ち上がり、体部外面に痕跡的な段を持つ。内面に屈曲は見られない。内面にヘラミガキ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部～底部にヘラミガキ調整を施す。3 は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する。内外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラミガキ調整を施す。4 は口縁部が内弯し、内外面にヨコナデ調整を施す。5 は口縁部が内傾し、内外面にヨコナデ調整、外面の体部にケズリ調整を施す。6 は内面にヘラナデ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部に縦方向のハケメ調整、底部にケズリ調整を施す。7 は内面にハケメ調整の後にナデ調整、外面の胴部にハケメ調整を施す。

このほか、確認面、堆積土、P2 柱穴の柱材抜き取り痕跡、P6 柱穴堆積土、周溝堆積土、カマド崩落土・構築土、住居掘方埋土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は各部位の破片があり、内面に黒色処理、外面にケズリ調整→ミガキ調整を施すものがある。また、内面にミガキ調整、外面にミガキ調整またはケズリ調整を施し、南小泉式とみられるものが混入している。土師器甕は各部位の破片があり、外面にケズリ調整を施すもの、ハケメ調整を施すものがある。

【SI305A 竪穴住居跡】（第 54 ～ 56 図、写真図版 15 － 1 ～ 5）

〔位置・確認面〕２区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SI305A → SI305B → SK307 － SI304

〔規模・形状〕東西 3.9m、南北 4.0m の隅丸方形を呈する。

〔方向〕住居北辺：W － 9.3° － N

〔壁面〕東・南壁は拡張により SI305B に壊されており、残存しない。Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で約 12cm である。

〔床面〕南西隅周辺を除いて残存し、住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦である。

〔主柱穴〕なし

〔周溝〕上幅 18 ～ 34cm、深さ 4 ～ 18cm の周溝がほぼ全周する。堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。周溝内の住居壁面側に幅 4 ～ 18cm、深さ 10cm の壁材痕跡を確認した。

〔カマド〕住居西辺中央に付設されている。燃焼部底面のみ残存する。長軸 90cm、短軸 66cm で、床面より 8cm ほど皿状に窪んでいる。底面には被熱による赤色硬化が確認された。

〔貯蔵穴〕なし

〔床下土坑〕住居北西部で土坑 2 基（K2・K3）を確認した。重複関係にあり、K3 は K2 に壊されている。いずれも住居掘方底面から掘り込まれている。K2 は平面形が長軸 126cm、短軸 124cm の不整円形を呈し、断面形は深さ 30cm の擂鉢状を呈する。堆積土は 2 層に細分される。いずれも地山ブロック・焼土粒を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。K3 は平面形が長軸 80cm、短軸 40cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 26cm の擂鉢状を呈する。堆積土は地山ブロック・焼土粒を多く含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕床面直上に SI305B の構築に伴う住居掘方埋土が堆積している。

〔出土遺物〕周溝堆積土より土師器甕（第 56 図 3）、K2 床下土坑堆積土より土師器大型坏（第 56 図 2）、住居掘方埋土より土師器高坏（第 56 図 1）・小型壺（第 56 図 4）が出土した。1 は体部に屈曲を持ち、内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。外面の調整は口縁部にヨコナデ調整、体部にナデ調整を施す。

このほか、周溝堆積土、K2・K3 床下土坑堆積土、住居掘方埋土より土師器甕が出土した。各部位の破片があり、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部・底部にケズリ調整を施すもの、胴部にハケメ調整を施すものがある。

（2）掘立柱建物跡

【SB308 掘立柱建物跡】(第 57･58 図､写真図版 15-6～9)

〔位置・確認面〕2 区南部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SB308 → SI302 → SK309

〔規模・形状〕東西 1 間（総長 2.6m）以上、南北 4 間（総長 9.5m）の建物跡である。

〔柱穴〕7 か所確認した。北側の 4 か所は未精査である。掘方の平面形は長軸 60 ～ 88cm、短軸 52 ～ 80cm の隅丸長方形を基調とし、深さは 36 ～ 56cm である。掘方埋土は白色粘土ブロックを含む黒色シルトあるいは黒褐色粘質シルト、地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘質シルトである。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認した。精査した 3 か所のうち 1 か所で平面形が直径 16cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：北から 240―230―220―260cm、北側柱列：260cm

〔方向〕東側柱列：N － 1.3° － E

〔出土遺物〕P6 柱穴柱材抜き取り痕跡より土師器甕(第 57 図 1)が出土した。球胴で外面の頸部に沈線･ヨコナデ調整を施し、胴部にハケメ調整を施す。

このほか、P1・P2 柱穴の確認面、P6 柱穴の柱材抜き取り痕跡より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は口縁部破片で磨滅が著しい。土師器甕は各部位の破片があり、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施し、頸部に段を持つもの、底部にケズリ調整を施すものがある。

（3）柱列跡

【SA310 柱列跡】（第 39 図）

〔位置・確認面〕2 区南部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。未精査である。

〔重複〕なし

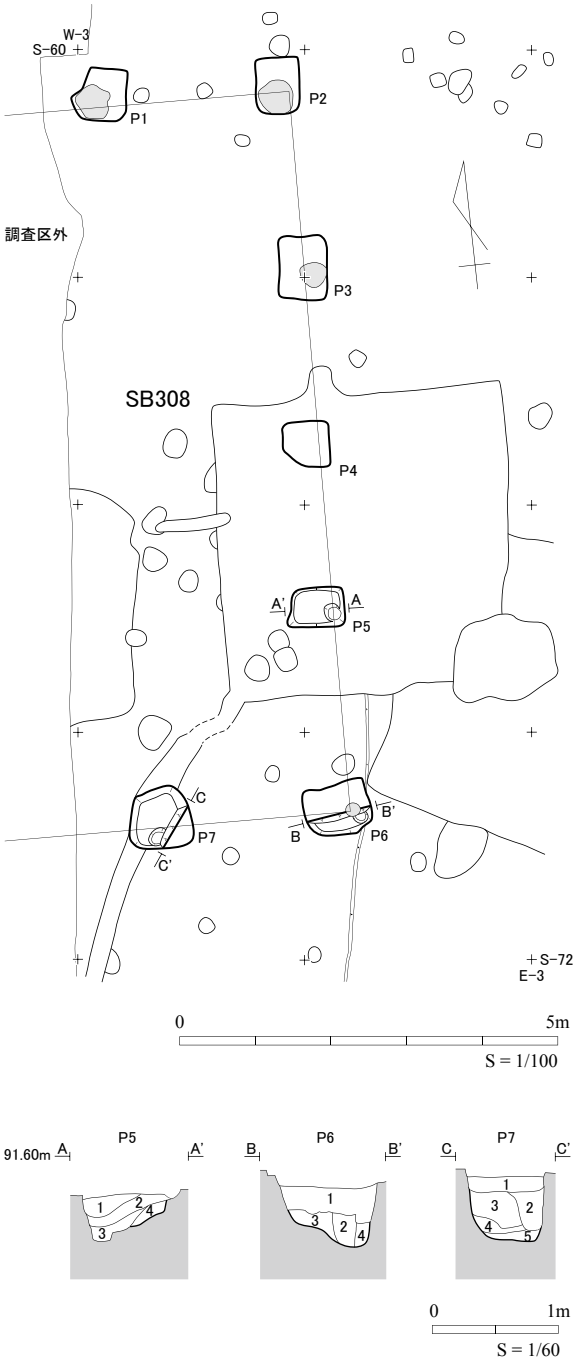
〔規模・形状〕東西 1 間（総長 154cm）以上の柱列跡である。調査区外へ延びる掘立柱建物跡の可能性がある。

〔柱穴〕2 か所確認した。掘方の平面形は長軸 72 ～ 74cm、短軸 50 ～ 60cm の不整形を呈する。

〔柱間寸法〕（154cm）

〔方向〕W － 5.3° － S

〔出土遺物〕なし



SB308 P5　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）
3	10YR2/1　黒	シルト	均質土（柱抜）
4	10YR4/3 にぶい黄褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

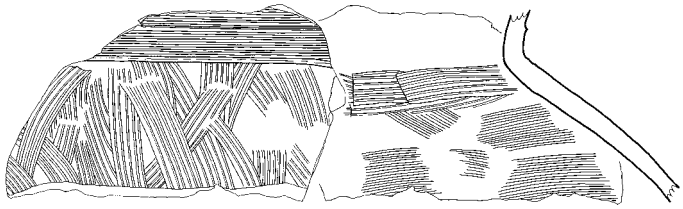
SB308 P6　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む（柱切）
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
3	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
4	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB308 P7　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱抜）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
4	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む（柱掘）
5	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを極めて多量に含む（柱掘）

第 57 図　SB308 掘立柱建物跡



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SB308	P6 抜	土師器	甕	内面：(口) ヨコナデ?→(胴) ナデ→(頸) ハケメ, 外面：(胴) ハケメ→(頸) 沈線・ヨコナデ	-	-	(7.5)	一部	47	36-5

第 58 図　SB308 掘立柱建物跡出土遺物

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SK307	堆積土	ロクロ土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：ロクロナデ，(底) 切り離し不明→ヘラケズリ	-	-	(4.1)	一部	48	36-6

第 59 図　SK307 土坑出土遺物

（4）土坑

【SK307 土坑】（第 59・60 図、写真図版 15 － 10）

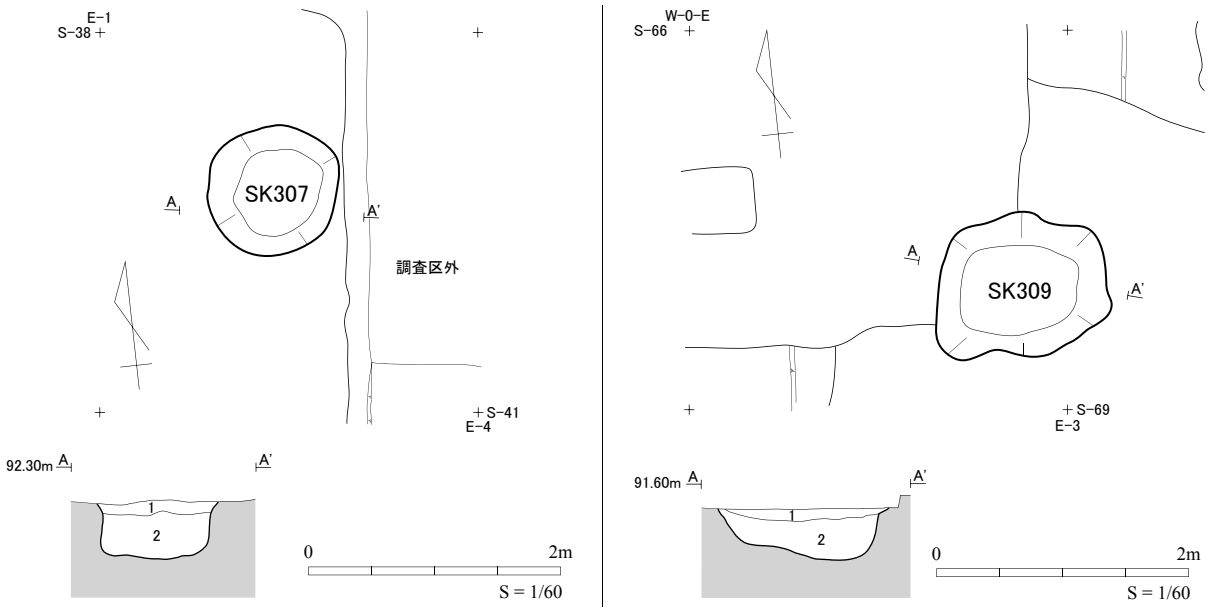
〔位置・確認面〕２区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SI305A → SI305B → SK307

〔規模・形状〕平面形は長軸 110cm、短軸 100cm の略円形を呈し、深さ 46cm の円筒形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕２層に細分される。1 層は少量の地山ブロックを部分的に含む黒褐色シルト、２層は地山・焼土粒を均質に含む黒褐色シルトである。1 層は自然堆積土、２層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土よりロクロ土師器坏（第 59 図 1）が出土した。内面にヘラミガキ調整→黒色処理を



SK307　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを一部に少量含む
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山・焼土粒を含む（人為）

SK309　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を少量含む
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（人為）

第 60 図　SK307・SK309 土坑

施す。切り離し方法は不明で外底面にヘラケズリ調整を施す。

　このほか、堆積土より土師器甕が出土した。口縁部・胴部破片があり、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部に縦方向のケズリ調整を施すものがある。

【SK309 土坑】（第 60 図、写真図版 15 － 11・12）

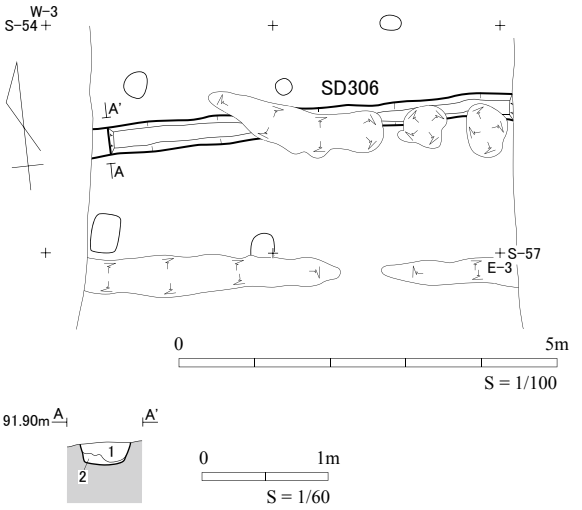
〔位置・確認面〕2 区南部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SI301 → SI302 → SK309

〔規模・形状〕平面形は長軸 150cm、短軸 114cm の不整形を呈し、断面形は深さ 40cm のＵ字形を呈する。底面は凹凸がみられる。

〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は地山粒を少量含む黒褐色シルト、2 層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。1 層は自然堆積土、2 層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし



SD306　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを少量含む
2	10YR5/6 黄褐	粘質土	地山ブロックを極めて多量に含む

第 61 図　SD306 溝跡

（5）溝跡

【SD306 溝跡】（第 61 図、写真図版 17 － 1・2）

〔位置・確認面〕2 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延びる。長さ 5.6m を確認し、調査区外の東西へ延びている。上幅 26 ～ 40cm、底幅 10 ～ 22cm で、断面形は深さ 17cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、鋤鍬痕が確認された。

〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は地山ブロックを少量含む暗褐色シルト、2 層は白色粘土ブロックをきわめて多量に含む黄褐色粘質土である。1 層は自然流入土、2 層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・高坏・甕が出土した。土師器坏は口縁部・体部破片で内面に黒色処理を施す。土師器高坏は脚部の破片でナデ調整を施す。土師器甕は胴部破片で外面にハケメ調整を施すものがある。

（6）柱穴跡

　組み合わない柱穴の確認面より土師器甕が出土した。各部位の破片があり、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にハケメ調整を施し、頸部に段をもつものがある。

３．３区

（１）竪穴住居跡

【SI206 竪穴住居跡】（第 62 図、写真図版 17 － 3 ～ 6）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南東側が残存しないため全体の形状が不明であるが、東西 4.9m 以上、南北 4.7m 以上の隅丸方形を呈するとみられる。

〔方向〕住居西辺：N － 17.7° － E

〔壁面〕残存しない

〔床面〕残存しない

〔主柱穴〕７か所確認した。２時期の変遷がある。a 期の主柱穴は b 期の主柱穴に壊される北東隅をのぞく３か所を確認した。掘方の平面形は長軸 14 ～ 56cm、短軸 14 ～ 50cm の隅丸方形を基調とし、深さ 4 ～ 52cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。1 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、２か所で平面形が直径 14 ～ 22cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものと、20cm ほど沈み込むものとがある。b 期の主柱穴は 4 か所を確認した。掘方の平面形は長軸 26 ～ 66cm、短軸 14 ～ 50cm の隅丸方形を基調とし、深さ 22 ～ 54cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色・暗褐色シルトである。1 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、4 か所で平面形が直径 15 ～ 22cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は２か所で掘方底面に達し、掘方底面から 10cm ほど浮き上がるものと 22cm ほど沈み込むものが各 1 か所ずつである。

〔周溝・壁材〕住居北辺と西辺で上幅 14 ～ 42cm、深さ 16cm の周溝が巡る。堆積土は白色粘土粒を多く含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔カマド〕残存しない

〔貯蔵穴〕なし

〔床下土坑〕住居北西部で土坑 1 基（K1）を確認した。住居掘方底面から掘り込まれている。平面形は長軸 66cm、短軸 48cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 26cm の皿状を呈する。堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕地山粒を少量含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面、住居内堆積土、P1b・P2 柱穴堆積土、住居掘方埋土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は各部位の破片があり、内面に黒色処理を施す。有段丸底で外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施すもの、外面にケズリ調整→ミガキ調整を施すものがある。土師器甕は外面の胴部にハケメ調整→口縁部にヨコナデ調整を施し、頸部に段を持たないものがある。

【SI207 竪穴住居跡】（第 63 ～ 66 図、写真図版 17 － 7 ～ 12，18 － 1）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SD211 → SI312 － SA246 － SD225 → SI207 → SD210 → SD222

〔規模・形状〕東西 4.7m、南北 4.7m の隅丸方形を呈するとみられる。

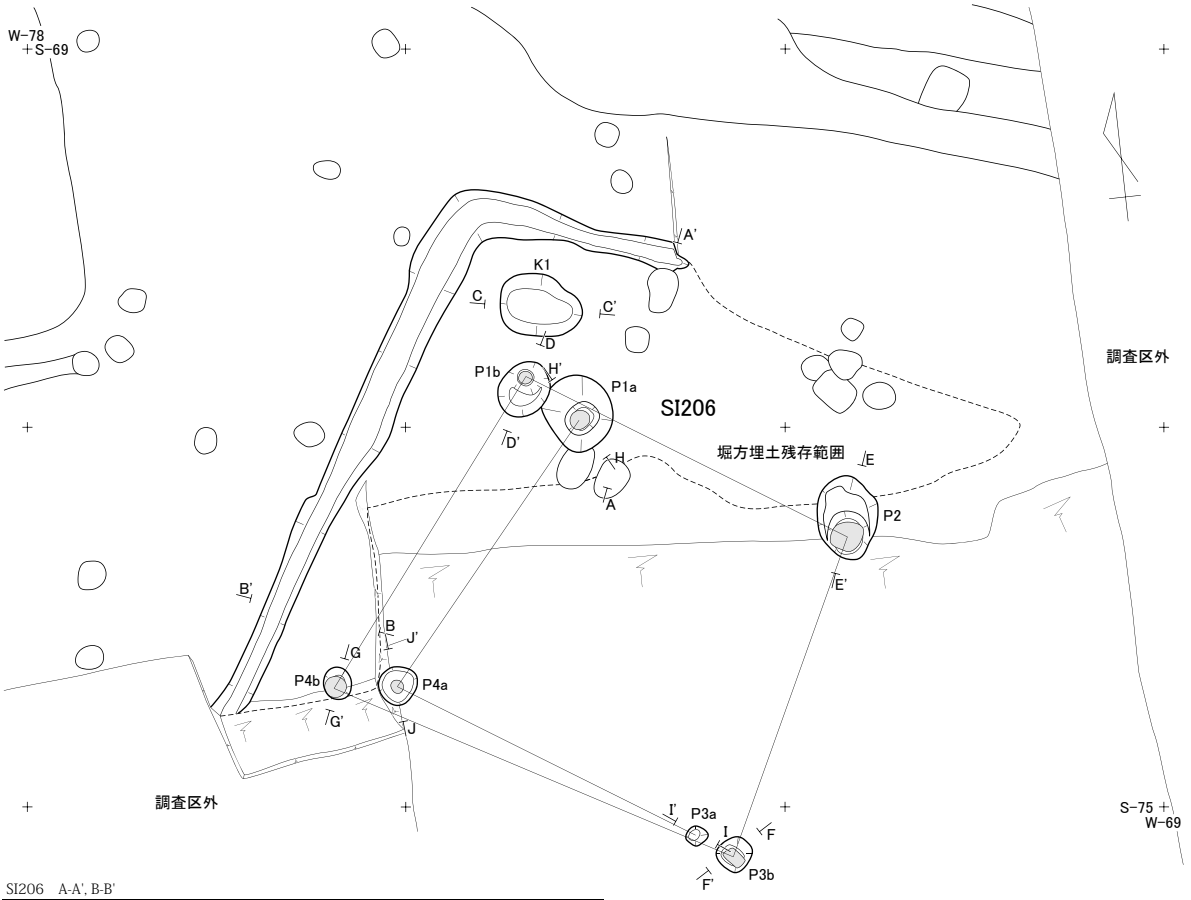
〔方向〕住居東辺：N － 4.7° － W

〔壁面〕残存しない

〔床面〕住居中央部のみ残存し、住居掘方埋土を床とする。

〔主柱穴〕12 か所確認した。３時期の変遷があり、すべてで柱材の抜き取り痕跡を確認した。柱痕跡は残存しない。a 期の主柱穴は b 期あるいは c 期の主柱穴に壊されるため、一部のみが残存する。床面か

らの深さは 42 ～ 71cm である。b 期の主柱穴は a 期よりやや西側に位置をずらしている。掘方の平面形は長軸 40 ～ 92cm、短軸 42 ～ 64cm の隅丸方形を基調とし、深さは 31 ～ 64cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。c 期の主柱穴は a 期あるいは b 期の主柱穴よりも外側に位置をずらしている。掘方の平面形は長軸 60 ～ 74cm、短軸 50 ～ 60cm の隅丸方形を基調とし、深さは



SI206　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（周溝堆）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を多く含む（住掘）

SI206 K1　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山・黒褐色シルトブロックを多く含む（人為）

SI206 P1b　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	—	—	（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	赤褐色シルト粒を少量含む（柱抜）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山・赤褐色シルト粒を含む（柱抜）

SI206 P2　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山小ブロックを含む（柱掘）

SI206 P3b　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SI206 P4b　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI206 P1a　H-H'

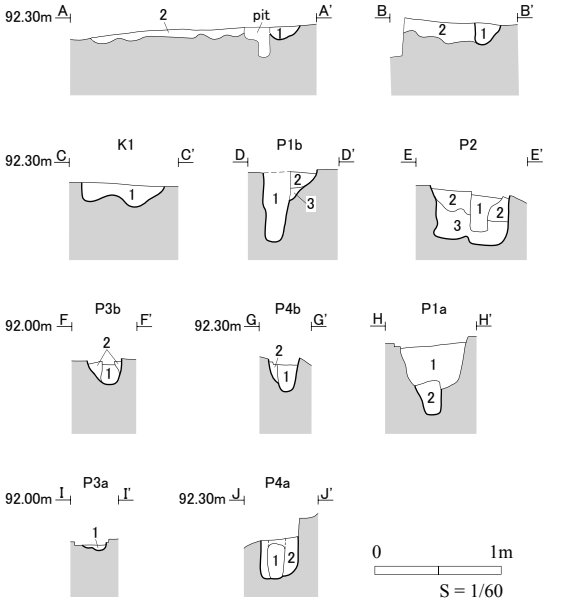
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱切）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を少量含む（柱痕）

SI206 P3a　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山小ブロックを含む

SI206 P4a　J-J'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/1 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）



第 62 図　SI206 竪穴住居跡

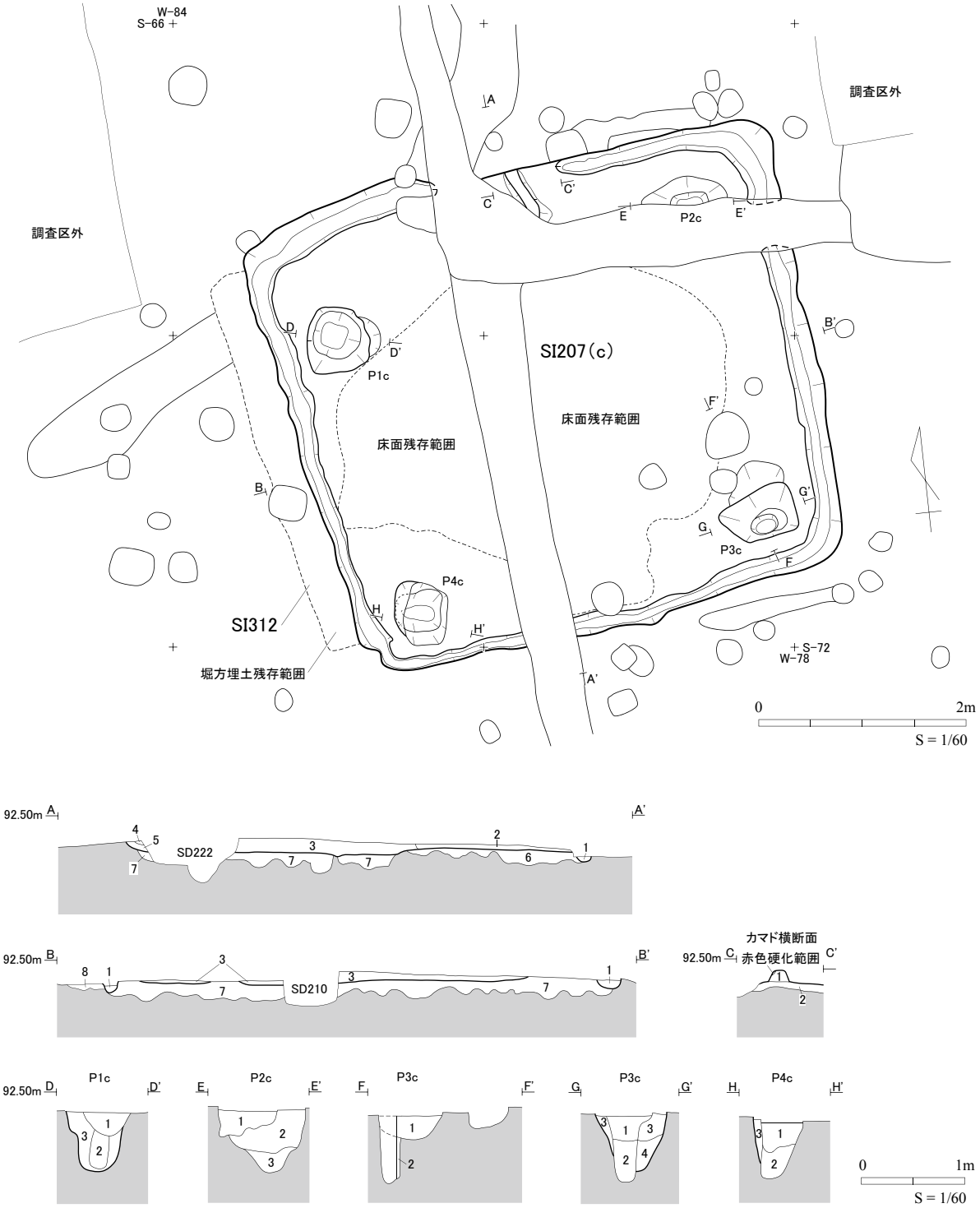
60 ～ 70cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色・暗褐色シルトである。

〔周溝・壁材〕上幅 12 ～ 42cm、深さ 8 ～ 15cm の周溝が全周する。堆積土は焼土・炭化物・地山粒を含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

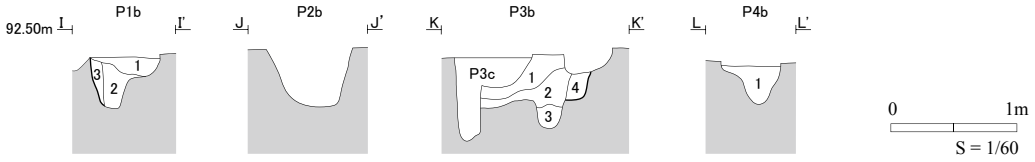
〔カマド〕住居北壁中央付近に付設されている。右側壁と燃焼部底面の一部のみが残存する。右側壁は長さ 60cm、幅 20cm、高さ 10cm である。白色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質シルトで構築されており、内面に被熱による赤色硬化が認められる。奥壁は住居北壁に一致する。

〔貯蔵穴〕なし

〔床下土坑〕なし



第 63 図　SI312・SI207 竪穴住居跡（1）



SI207 P1b　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山・赤褐色シルト粒を多く含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山・赤褐色シルト粒を含む（柱抜）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI207 P3b　K-K'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
4	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI207 P4b　L-L'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロック・赤褐色シルト粒を含む（柱抜）

（第 63 図に対応）

SI207　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山・焼土粒を少量含む（周溝堆）
2	10YR2/1 黒	シルト	小礫を含む（住堆）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土・炭化物・黒褐色シルトの互層（住堆）
4	10YR5/4 にぶい黄褐	シルト	礫・焼土ブロックを含む（竈天井部崩？）
5	10YR3/4 暗褐	シルト	地山・焼土粒を含む（竈機能時堆）
6	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（住掘）
7	10YR2/1 黒	シルト	地山・暗褐色シルトブロックを多く含む（住掘）
8	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（SI312 住掘）

SI207 カマド　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR5/3 にぶい黄褐	砂質シルト	地山ブロックを含む（竈側壁構）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山・暗褐色シルトブロックを多く含む　上面が被熱により赤色化（住掘・住居主断面 7 層対応）

SI207 P1c　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山・赤褐色シルト粒を少量含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
3	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SI207 P2c　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	青灰色粘土ブロックを含む（柱抜）

SI207 P3c　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	赤褐色シルト粒を含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	赤褐色シルト粒を含む（柱抜）

SI207 P3c　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	赤褐色シルト粒を含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	赤褐色シルト粒を含む（柱抜）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を多く含む（柱掘）
4	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒・白色粘土ブロックを含む（柱掘）

SI207 P4c　H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山・赤褐色シルト粒を含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）

第 64 図　SI207 竪穴住居跡（2）

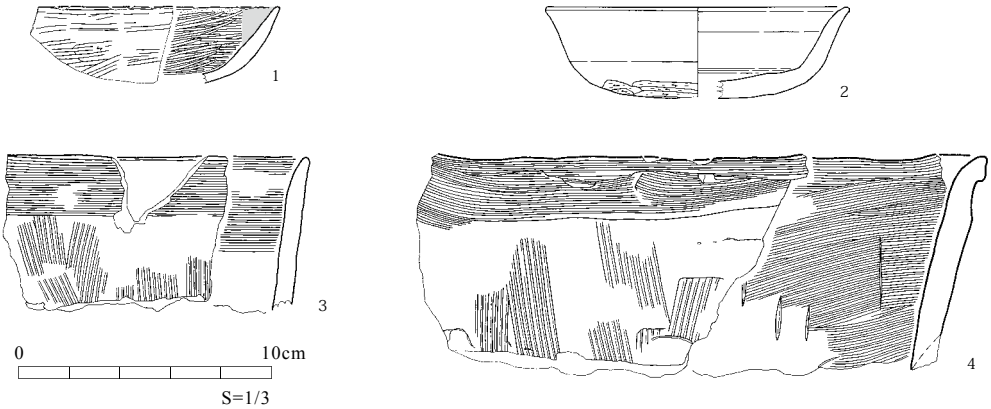
SI207 P3a　O-O'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）

SI207 P4a　P-P'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）

第 65 図　SI207 竪穴住居跡（3）



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI207	P1b 抜	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：ヘラミガキ，ヘラケズリ	-	-	(3.0)	一部	74	36-7
2	SI207	確認面	須恵器	坏	内面：ロクロナデ，外面：ロクロナデ→（底）手持ちヘラケズリ	(12.0)	-	(3.7)	1/3	84	36-8
3	SI207	住居掘方埋土	土師器	鉢	内面：(口）ヨコナデ，外面：(体）ハケメ→（口）ヨコナデ	-	-	(6.1)	一部	75	36-9
4	SI207	P1c 抜	土師器	甕	内面：(口）ヨコナデ→（胴）ヘラナデ，外面：(口）ヨコナデ，(胴）ハケメ	-	-	(8.7)	一部	73	36-10

第 66 図　SI207 竪穴住居跡出土遺物

〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は小礫を含む黒色シルト、2 層は下層から焼土・炭化物・黒色シルトを層状に含む黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕確認面より須恵器坏（第 66 図 2）、P1c 柱穴柱材抜き取り痕跡より土師器甑（第 66 図 4）、P1b 柱穴柱材抜き取り痕跡より土師器坏（第 66 図 1）、住居掘方埋土より土師器鉢（第 66 図 3）が出土した。1 は口縁部まで外傾気味に立ち上がる。内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施す。2 は切り離し方法が不明で外底面に手持ちヘラケズリ調整を施す。3・4 は外面の口縁部にヨコナデ調整、体部・胴部にハケメ調整を施す。

このほか、確認面、住居内堆積土、P1b・P1c・P2b・P3b・P4b・P4c 柱穴柱材抜き取り痕跡、周溝堆積土、住居掘方埋土より土師器坏・甕・小型品・中型品、須恵器坏・甕が出土した。土師器坏は各部位の破片があり、いずれも内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施すもので、頸部に段を持ち栗囲式とみられるものがある。土師器甕は各部位の破片があり、底部に木葉痕を持つものがある。土師器小型品は口縁部破片でヨコナデ調整を施す。土師器中型品は体部下半の破片で外面にケズリ調整を施す。須恵器甕は体部破片で内面に同心円文アテ具痕がみられ、外面にナデ調整を施すもの、内外面にナデ調整を施すものがある。

【SI312 竪穴住居跡】（第 63 図）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SD211 → SI312 → SI207 → SD210 → SD222

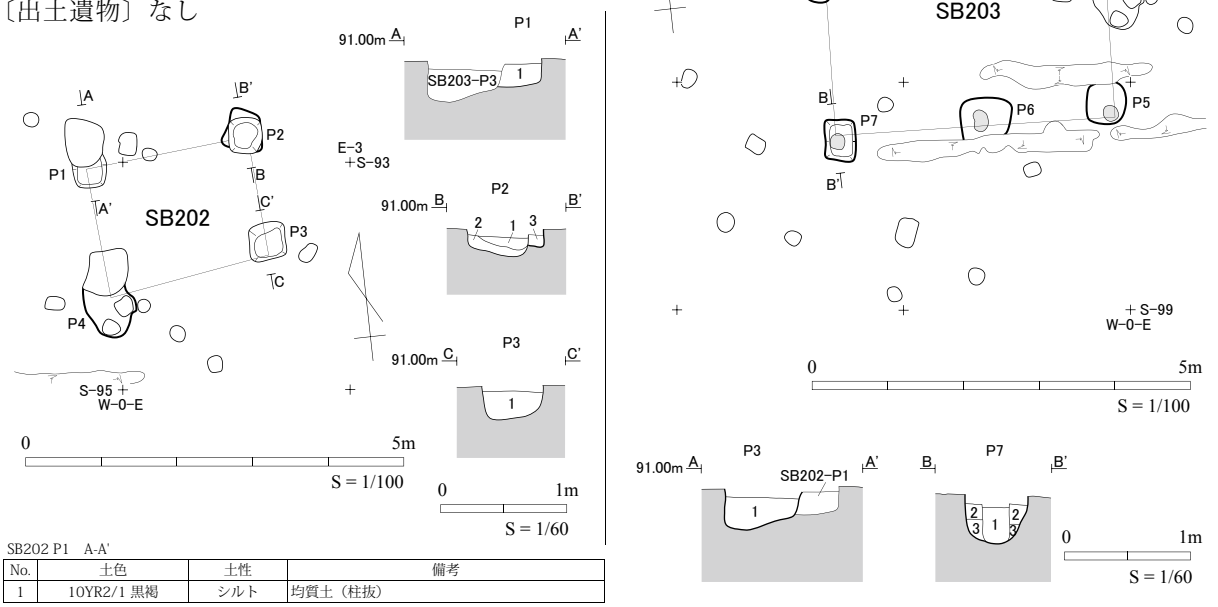
〔規模・形状〕東側を SI207 に壊されるため全体の形状が不明であるが、東西 0.4m 以上、南北 3.8m の隅丸方形を呈するとみられる。

〔方向〕住居西辺：N － 11.7° － W

〔壁面／床面／堆積土〕残存しない

〔主柱穴／周溝・壁材／カマド／貯蔵穴／床下土坑〕不明

〔出土遺物〕なし



SB202 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒褐	シルト	均質土（柱抜）

SB202 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB202 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	地山粒を少量含む（柱抜）

SB203 P3　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）

SB203 P7　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山・青灰色粘土ブロックを含む（柱掘）

第 67 図　SB202・SB203 掘立柱建物跡

（２）掘立柱建物跡

【SB202 掘立柱建物跡】（第 67 図、写真図版 18 － 5）

〔位置・確認面〕３区東部の南向き緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SB202 → SB203

〔規模・形状〕東西 1 間（総長 2.1m）、南北 1 間（総長 1.5m）の建物跡である。

〔柱穴〕4 か所確認した。南西隅の 1 か所は未精査である。掘方の平面形は長軸 48 ～ 60cm、短軸 42 ～ 46cm の隅丸方形を基調とし、深さは 24 ～ 34cm である。掘方埋土は白色粘土粒を含む黒褐色シルトである。3 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕東側柱列：（150cm）、北側柱列：（210cm）

〔方向〕東側柱列：N － 3.7° － E

〔出土遺物〕なし

【SB203 掘立柱建物跡】（第 67 図、写真図版 18 － 2・5）

〔位置・確認面〕３区東部の南向き緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SB202 → SB203 － SB204

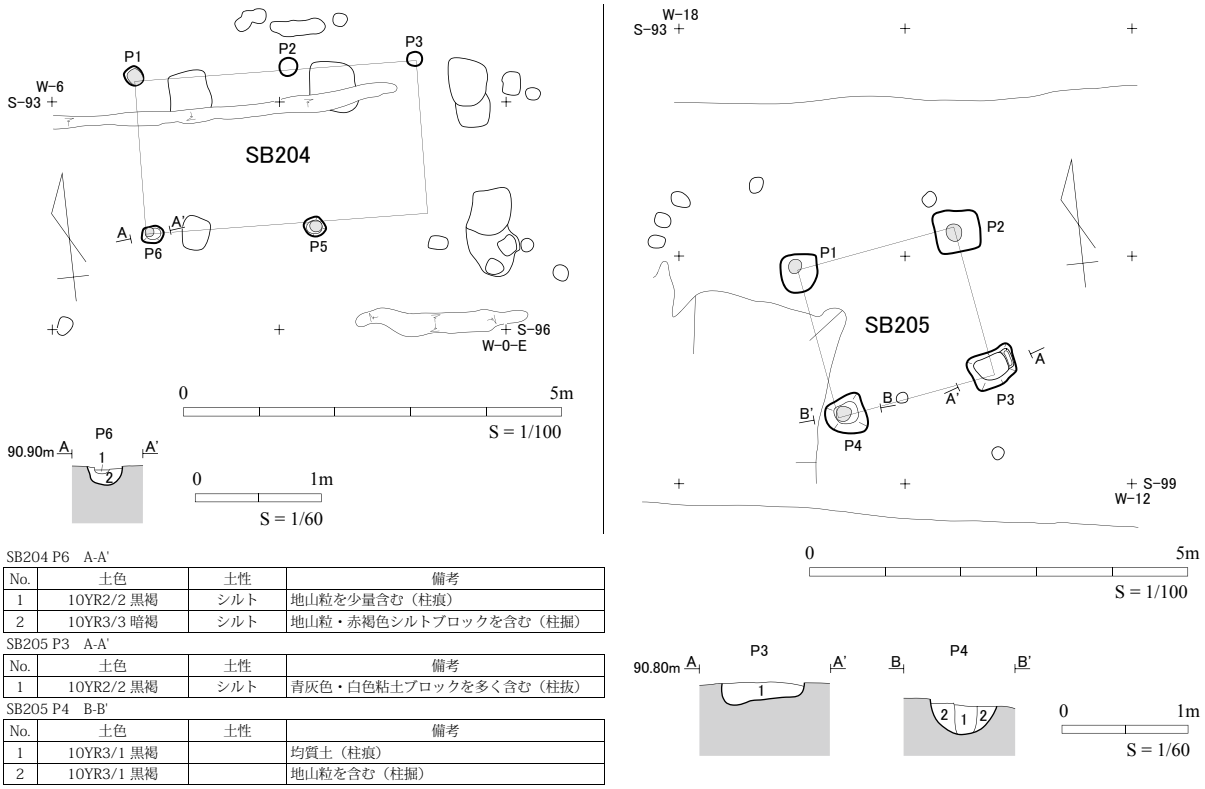
〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.7m）、南北 2 間（総長 4.0m）の建物跡である。

〔柱穴〕8 か所確認し、南西・北東隅の 2 か所のみ精査した。掘方の平面形は長軸 42 ～ 64cm、短軸 36 ～ 60cm の隅丸方形を基調とし、深さは 30 ～ 38cm である。掘方埋土は白色粘土ブロックを含む黒褐色シルトである。2 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、6 か所で平面形が直径 16 ～ 26cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は精査した 1 か所では掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕西側柱列：北から 210―200cm、南側柱列：西から 190―174cm

〔方向〕西側柱列：N － 1.3° － E

〔出土遺物〕P1 柱穴確認面より土師器が出土した。



SB204 P6　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒・赤褐色シルトブロックを含む（柱掘）

SB205 P3　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	青灰色・白色粘土ブロックを多く含む（柱抜）

SB205 P4　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐		均質土（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐		地山粒を含む（柱掘）

第 68 図　SB204・SB205 掘立柱建物跡

【SB204 掘立柱建物跡】（第 68 図、写真図版 18 － 5）

〔位置・確認面〕3 区東部の南向き緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SB202 → SB203 － SB204

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.7m）、南北 1 間（総長 2.0m）の東西棟である。

〔柱穴〕南東隅を除く 5 か所を確認し、南側の 2 か所を精査した。掘方の平面形は長軸 20 ～ 28cm、短軸 18 ～ 24cm の円形を基調とし、深さは 14cm である。掘方埋土は白色粘土粒を含む暗褐色シルトである。2 か所で平面形が直径 12 ～ 16cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものと、8cm 浮き上がるものとがある。

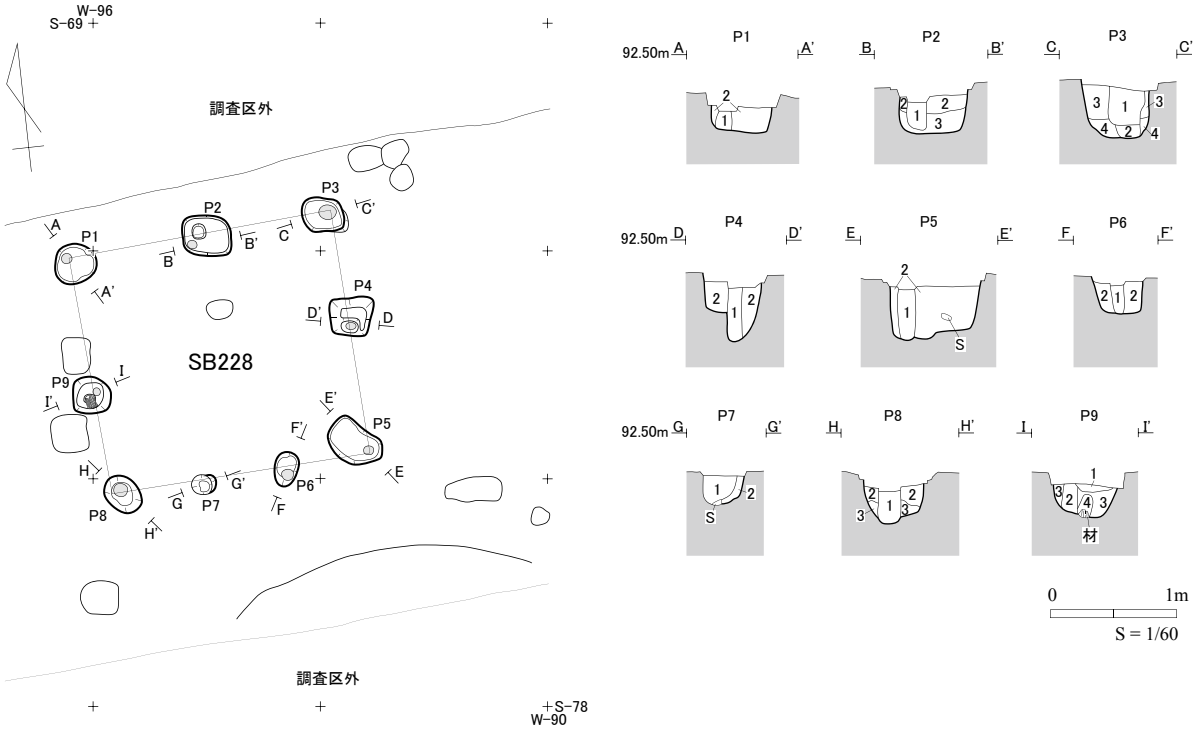
〔柱間寸法〕西側柱列：（210cm）、南側柱列：西から 220―（160）cm

〔方向〕南側柱列：E － 0.8° － S

〔出土遺物〕なし

【SB205 掘立柱建物跡】（第 68 図、写真図版 16 － 2，18 － 5）

〔位置・確認面〕3 区東部の南向き緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。



SB228 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒色	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB228 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む（柱掘）
3	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱痕）

SB228 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	青灰色粘土・赤褐色シルトブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒をごくわずかに含む（柱痕）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
4	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを極めて多く含む（柱掘）

SB228P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB228 P5　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB228 P6　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB228 P7　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB228 P8　H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB228 P9　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロック・砂粒をわずかに含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山粒をごくわずかに含む（柱痕）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
4	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	腐食した木片を含む（材痕）

第 69 図　SB228 掘立柱建物跡

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 1 間（総長 2.2m）、南北 1 間（総長 2.1m）の建物跡である。

〔柱穴〕4 か所を確認し、南側の 2 か所を精査した。掘方の平面形は長軸 48 ～ 60cm、短軸 44 ～ 52cm の隅丸方形を基調とし、深さは 28 ～ 30cm である。掘方埋土は白色粘土粒を含む黒褐色シルトである。1 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、3 か所で平面形が直径 16 ～ 22cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は精査した 1 か所では掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕西側柱列：206cm、北側柱列：216cm

〔方向〕南側柱列：N － 11.7° － W

〔出土遺物〕なし

【SB228 掘立柱建物跡】（第 69 図、写真図版 18 － 6・8 ～ 11）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

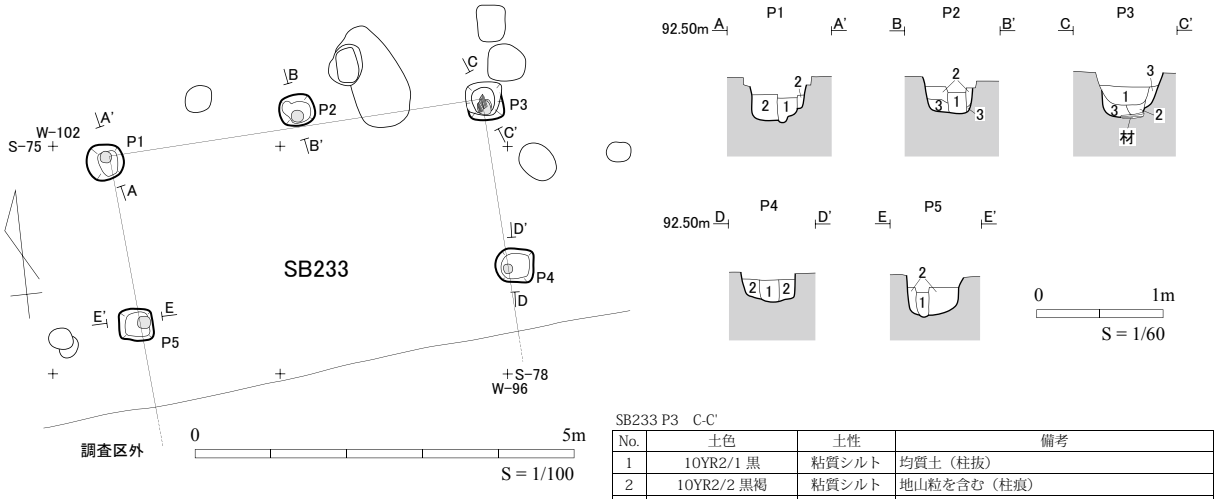
〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.6m）、南北 2 間（総長 3.2m）の建物跡である。

〔柱穴〕9 か所を確認した。建物南側柱列のみ隅柱の間に 2 か所の小柱穴が配置され、3 間（総長 3.4m）となる。掘方の平面形は長軸 50 ～ 78cm、短軸 40 ～ 52cm の隅丸方形または円形を基調とし、深さは 34 ～ 54cm である。小柱穴は掘方の平面形が長軸 32 ～ 48cm、短軸 27 ～ 30cm の楕円形を呈し、深さ 26 ～ 30cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒色・黒褐色・暗褐色粘質シルトである。4 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し､8 か所で平面形が直径 10 ～ 21cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものが 6 か所、3cm 浮き上がるものが 1 か所、3 ～ 5cm 沈み込むものが 2 か所である。

〔柱間寸法〕北側柱列：東から 180―180cm、東側柱列：南から 168―160cm、南側柱列：東から 112―120―116cm

〔方向〕東側柱列：N － 2.7° － W

〔出土遺物〕P3 ～ P5 柱穴確認面、P2･P4 ～ P8 柱穴堆積土より土師器坏･甕ほか、須恵器坏が出土した。土師器坏は口縁部・体部破片があり、内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。土師器甕は胴部破片で



SB233 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山小ブロックをごくわずかに含む（柱掘）

SB233 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱掘）
3	10YR4/3 にぶい黄褐		地山ブロックを多く含む　礫を含む（柱掘）

SB233 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を含む（柱痕）
3	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB233 P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	赤褐色シルト粒を含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒を含む（柱掘）

SB233 P5　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱掘）

第 70 図　SB233 掘立柱建物跡

内外面にナデ調整を施す。須恵器坏は口縁部破片で内外面にロクロナデ調整を施す。

【SB233 掘立柱建物跡】（第 70 図、写真図版 18 － 7・12・13）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 5.0m）、南北 1 間（総長 2.2m）以上の建物跡である。南側が調査区外へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕5 か所確認した。掘方の平面形は長軸 40 ～ 50cm、短軸 38 ～ 42cm の隅丸方形を呈し、深さは 30 ～ 40cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。1 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、5 か所で平面形が直径 10 ～ 20cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達し、1 か所で礎板を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から 260―240cm、東側柱列：220cm

〔方向〕東側柱列：E － 1.0° － N

〔出土遺物〕なし

【SB236 掘立柱建物跡】（第 71 図、写真図版 18 － 7，19 － 1 ～ 3）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

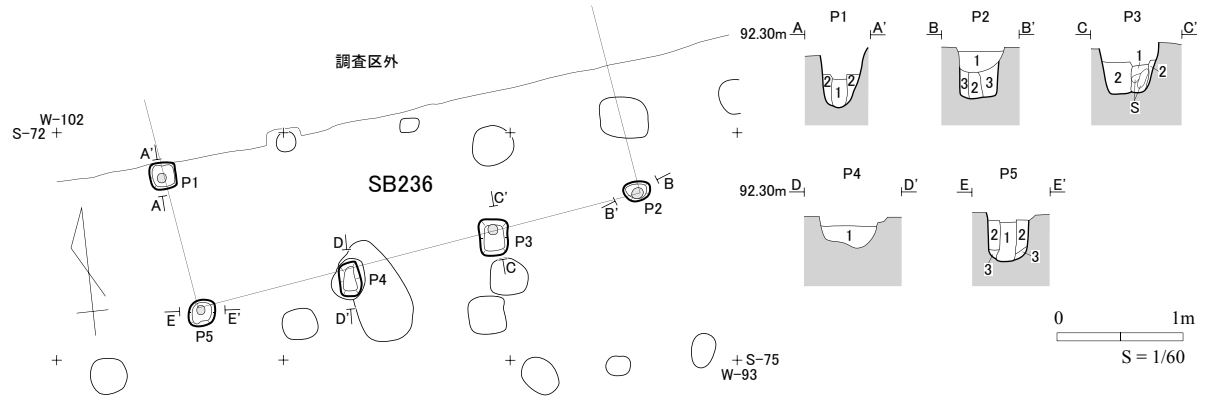
〔規模・形状〕東西 3 間（総長 6.0m）、南北 1 間（総長 1.8m）以上の建物跡である。北側が調査区外へ延びている。

〔柱穴〕5 か所確認した。掘方の平面形は長軸 40 ～ 45cm、短軸 25 ～ 40cm の隅丸方形を基調とし、深さは 10 ～ 40cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒色・黒褐色粘質シルトである。2 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、4 か所で平面形が直径 10 ～ 15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕南側柱列：東から 200―200―200cm、西側柱列：180cm

〔方向〕南側柱列：N － 9.7° － W

〔出土遺物〕なし



SB236 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB236 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB236 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山ブロックを少量含む（柱掘）

SB236 P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱抜）

SB236 P5　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山粒をまばらに含む（柱掘）
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

第 71 図　SB236 掘立柱建物跡

【SB238 掘立柱建物跡】（第 72 図、写真図版 16 － 5，19 － 4 ～ 6）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SB238 → Pit

〔規模・形状〕東西２間（総長 4.0m）、南北２間（総長 4.0m）以上の建物跡である。南側が調査区外へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕６か所確認した。掘方の平面形は一辺が 30 ～ 40cm の隅丸方形を基調とし、深さは 30 ～ 40cm である。掘方埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色・暗褐色粘質シルトである。２か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、５か所で平面形が直径 10 ～ 16cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕北側柱列：東から 200―200cm、西側柱列：北から 200―200cm

〔方向〕西側柱列：N － 1.3° － W

〔出土遺物〕P2 柱穴堆積土より土師器甕が出土した。口縁部破片で内外面にヨコナデ調整を施す。

【SB240 掘立柱建物跡】（第 73 図、写真図版 19－7）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SB240 → SB241

〔規模・形状〕東西１間（総長 2.0m）、南北１間（総長 2.1m）以上の建物跡である。北側が調査区外へ延びている。

〔柱穴〕３か所確認した。掘方の平面形は長軸 24 ～ 28cm、短軸 22 ～ 27cm の隅丸方形で、深さは 33 ～ 38cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。２か所で平面形が直径５～ 5.5cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕東側柱列：214cm、南側柱列：202cm

〔方向〕東側柱列：N － 12.3° － E

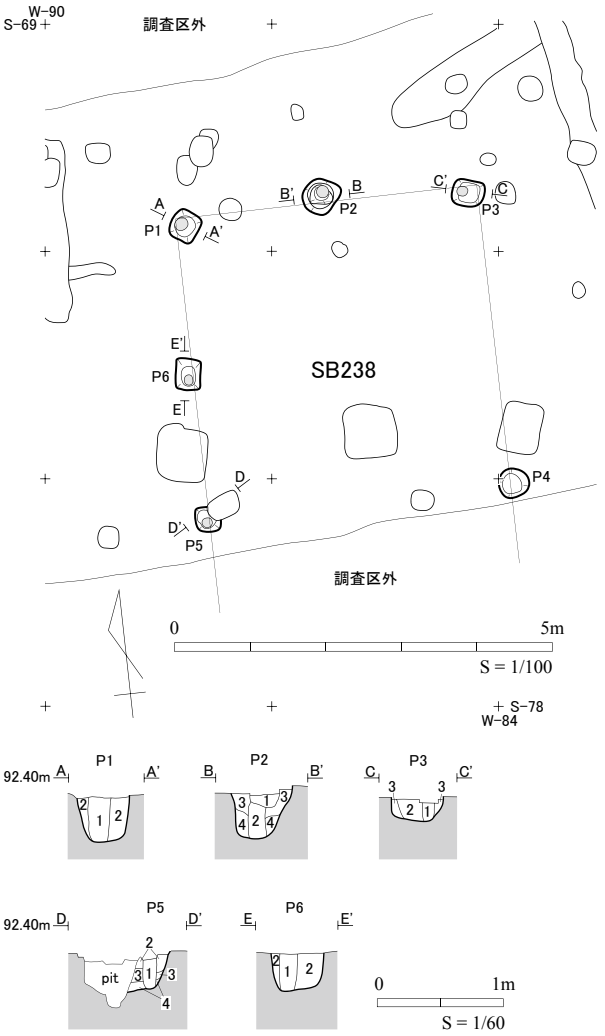
〔出土遺物〕なし

【SB241 掘立柱建物跡】（第 73 図、写真図版 19－8・9）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SB240 → SB241

〔規模・形状〕東西１間（総長 2.6m）、南北１間（総長 2.6m）以上の建物跡である。北側が調査区外へ延びている。



SB238 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	赤褐色シルト粒を少量含む（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB238 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
4	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）

SB238 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）

SB238 P5　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土（柱掘）
3	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む（柱掘）
4	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB238 P6　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	赤褐色シルト粒を含む（柱痕）
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

第 72 図　SB238 掘立柱建物跡

〔柱穴〕3 か所確認した。掘方の平面形は長軸 36 ～ 41cm、短軸 29 ～ 38cm の隅丸方形を基調とし、深さは 36 ～ 48cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルト・粘質シルトである。いずれも平面形が直径 11 ～ 15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものが 2 か所、10cm 沈み込むものが 1 か所である。

〔柱間寸法〕東側柱列：256cm、南側柱列：260cm

〔方向〕東側柱列：N － 14.8° － E

〔出土遺物〕なし

【SB242 掘立柱建物跡】（第 74 図、写真図版 19 － 11）

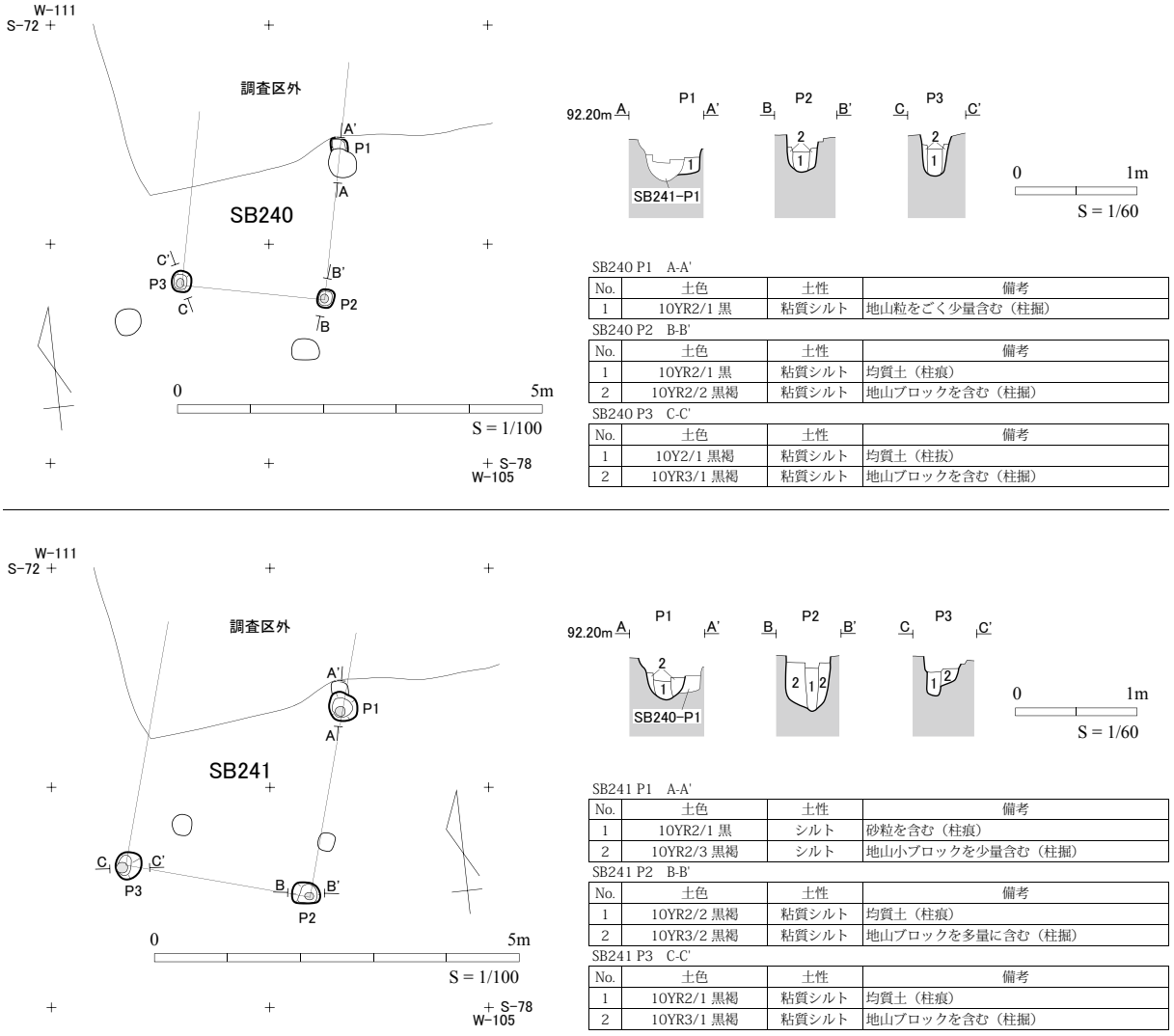
〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 1 間（総長 2.4m）、南北 1 間（総長 2.4m）の建物跡である。

〔柱穴〕4 か所確認した。掘方の平面形は長軸 27 ～ 38cm、短軸 26 ～ 33cm の不整円形を呈し、深さは 35 ～ 40cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。3 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、1 か所で平面形が直径 18cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕東側柱列：244cm、北側柱列：238cm



SB240 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山粒をごく少量含む（柱掘）

SB240 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB240 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10Y2/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB241 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	砂粒を含む（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山小ブロックを少量含む（柱掘）

SB241 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）

SB241 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

第 73 図　SB240・SB241 掘立柱建物跡

〔方向〕東側柱列：N － 7.7° － W

〔出土遺物〕なし

【SB243 掘立柱建物跡】（第 74 図、写真図版 19 － 10・12）

〔位置・確認面〕３区中央部の平坦面に位置する。Ⅵ層上面で確認した。

〔重複〕SB243 → SK220

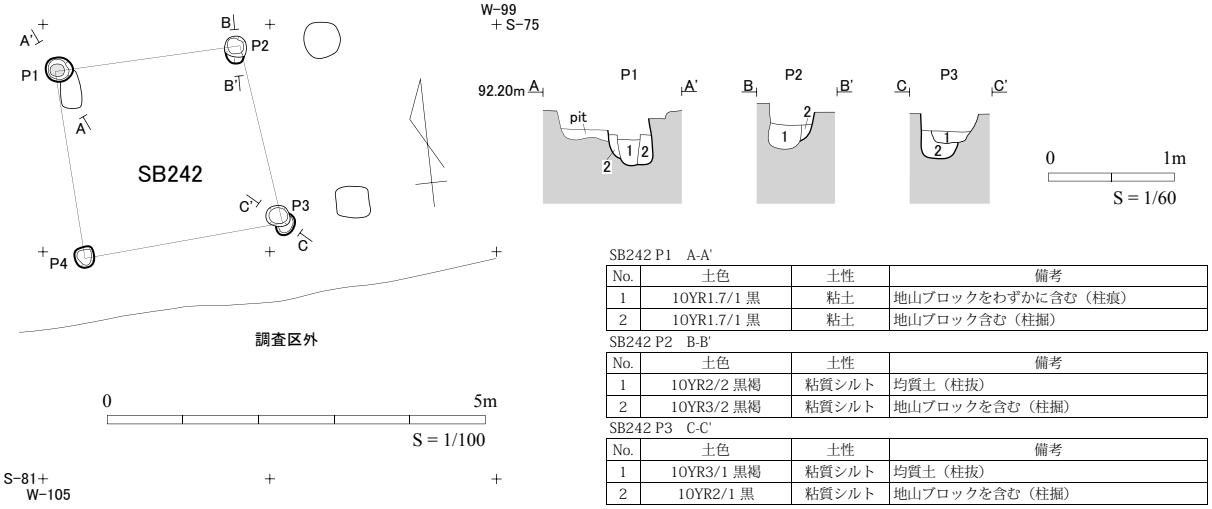
〔規模・形状〕東西 1 間（総長 3.1m）、南北 1 間（総長 3.2m）の建物跡である。

〔柱穴〕4 か所確認した。掘方の平面形は長軸 30 ～ 38cm、短軸 27 ～ 50cm の隅丸方形を基調とし、深さは 28 ～ 37cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色・暗褐色粘質シルトである。いずれも平面形が直径 12 ～ 20cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達し、1 か所で柱材の下部が残存していた。

〔柱間寸法〕東側柱列：318cm、南側柱列：304cm

〔方向〕東側柱列：N － 2.7° － W

〔出土遺物〕なし



SB242 P1　A-A'

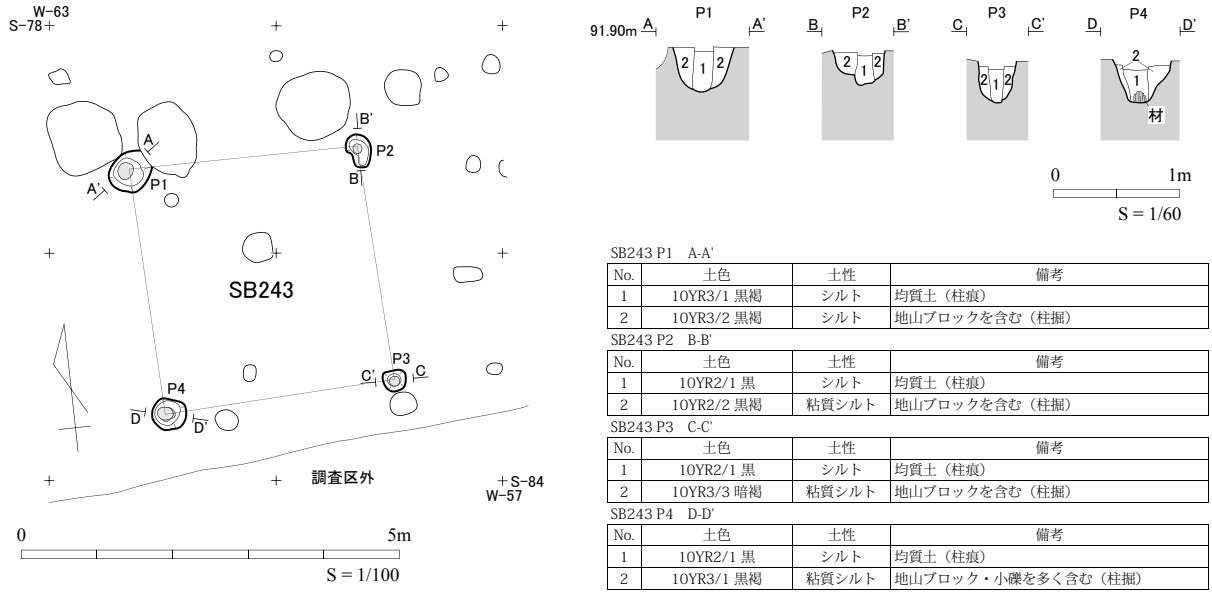
No.	土色	土性	備考
1	10YR1.7/1 黒	粘土	地山ブロックをわずかに含む（柱痕）
2	10YR1.7/1 黒	粘土	地山ブロック含む（柱掘）

SB242 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB242 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱抜）
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）



SB243 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB243 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB243 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB243 P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロック・小礫を多く含む（柱掘）

第 74 図　SB242・SB243 掘立柱建物跡

（3）柱列跡

【SA217 柱列跡】（第 75 図、写真図版 19 － 13・14）

〔位置・確認面〕3 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

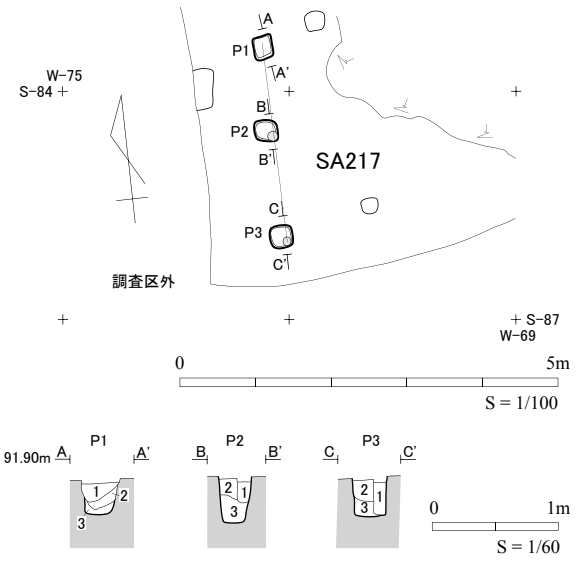
〔規模・形状〕南北 2 間（総長 2.6m）以上の柱列跡である。調査区外の南側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕3 か所確認した。掘方の平面形は長軸 30cm、短軸 24 ～ 28cm の隅丸方形を呈し、深さ 26 ～ 36cm である。掘方埋土は白色粘土ブロック・小礫を多く含む黒褐色・暗褐色・褐灰色粘質シルトである。1 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2 か所で平面形が直径 9 ～ 12cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものと、15cm 浮き上がるものとがある。

〔柱間寸法〕南から 140―120cm

〔方向〕N － 1.3° － W

〔出土遺物〕なし



SA217 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
3	10YR4/1 褐灰	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SA217 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SA217 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
3	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	地山ブロック・小礫を多く含む（柱掘）

第 75 図　SA217 柱列跡

【SA239 柱列跡】（第 76 図、写真図版 16 － 5, 20 － 1・2）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.5m）の柱列跡である。

〔柱穴〕3 か所確認した。掘方の平面形は長軸 70cm、短軸 50 ～ 70cm の隅丸方形を呈し、深さ 40 ～ 50cm である。掘方埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルト・粘質シルトである。2 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、3 か所で平面形が直径 10 ～ 16cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕西から 240―210cm

〔方向〕E － 5.3° － W

〔出土遺物〕P1 柱穴確認面、P2・P3 柱穴堆積土より土師器甕・小型品などが出土した。土師器甕は口縁部・胴部破片で外面にハケメ調整を施す。土師器小型品は口縁部破片で内外面にヨコナデ調整を施す。

【SA244 柱列跡】（第 76 図、写真図版 16 － 5，20 － 3）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

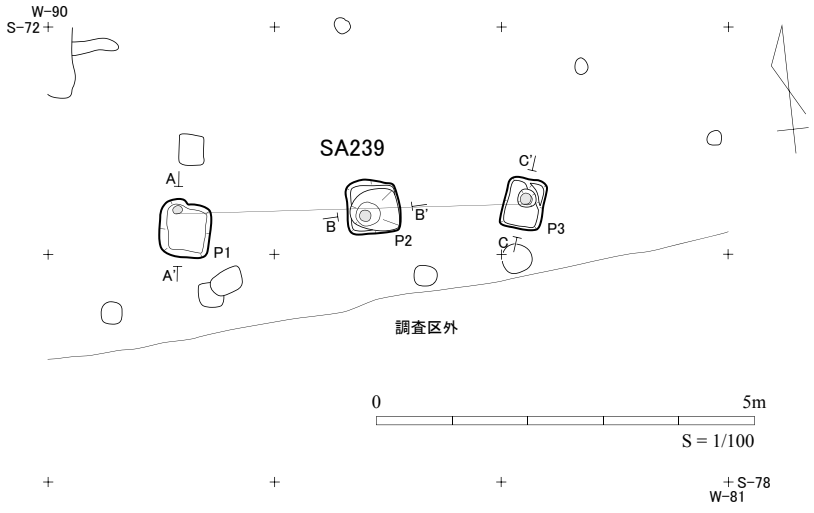
〔重複〕SA244 → SA245

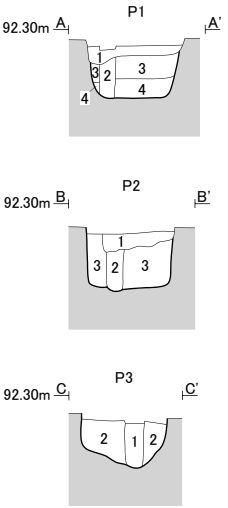
〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.8m）の柱列跡である。

〔柱穴〕3 か所確認した。掘方の平面形は長軸 27 ～ 38cm、短軸 38 ～ 42cm の隅丸方形を基調とし、深さ 49 ～ 51cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。いずれも平面形が直径 9 ～ 12cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から 176―206cm

〔方向〕E － 9.8° － S





SA239 P1　A-A'

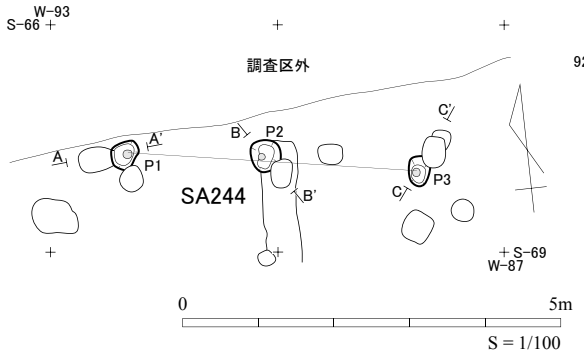
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
4	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）

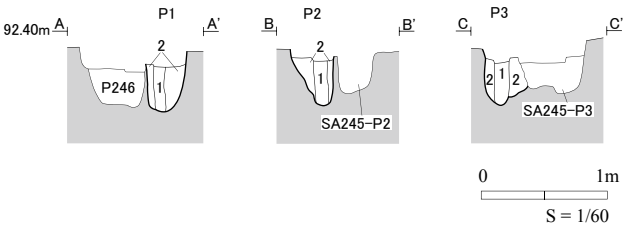
SA239 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土（柱掘）

SA239 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）





SA244 P2　B-B'

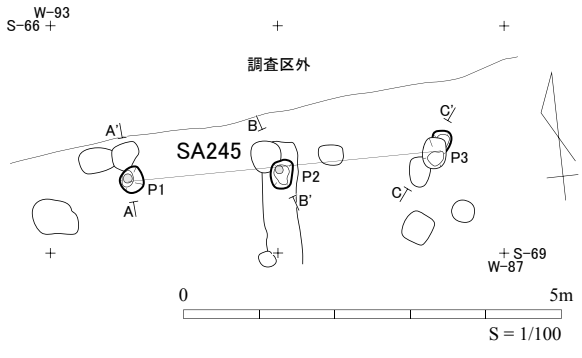
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

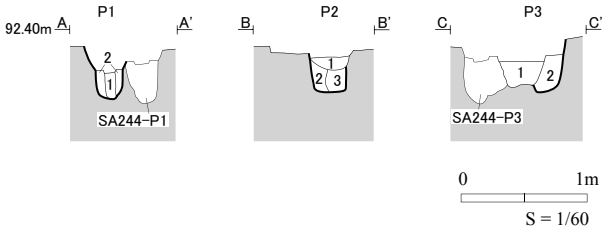
SA244 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SA244 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）





SA245 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	均質土（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山粒を若干含む（柱痕）
3	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SA245 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	均質土（柱痕）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SA245 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	赤褐色シルト・地山粒を含む（柱抜）
2	10YR3/8 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

第 76 図　SA239・SA244・SA245 柱列跡

〔出土遺物〕P1 ～ P3 柱穴確認面、P3 堆積土より土師器坏・甕などが出土した。土師器坏は底部破片で磨滅が著しい。土師器甕は胴部破片で外面にケズリ調整を施す。

【SA245 柱列跡】（第 76 図、写真図版 16 － 5）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SA244 → SA245

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 4.1m）の柱列跡である。

〔柱穴〕3 か所確認した。掘方の平面形は長軸 28 ～ 30cm、短軸 32 ～ 50cm の隅丸方形を基調とし、深さ 40 ～ 55cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。2 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2 か所で平面形が直径 10 ～ 11cm の円形を呈す柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕西から 198―208cm

〔方向〕E － 9.8° － S

〔出土遺物〕なし

【SA246 柱列跡】（第 77 図）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SD225 → SA246 → SI207

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.8m）の柱列跡である。

〔柱穴〕3 か所確認し、東端の 1 か所のみ精査した。掘方の平面形は長軸 36 ～ 68cm、短軸 34 ～ 38cm の隅丸方形または円形を基調とし、深さは精査した 1 か所で 42cm である。掘方埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。1 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、2 か所で平面形が直径 12 ～ 20cm の円形を呈す柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から 196―182cm

〔方向〕W － 15.0° － N

〔出土遺物〕なし

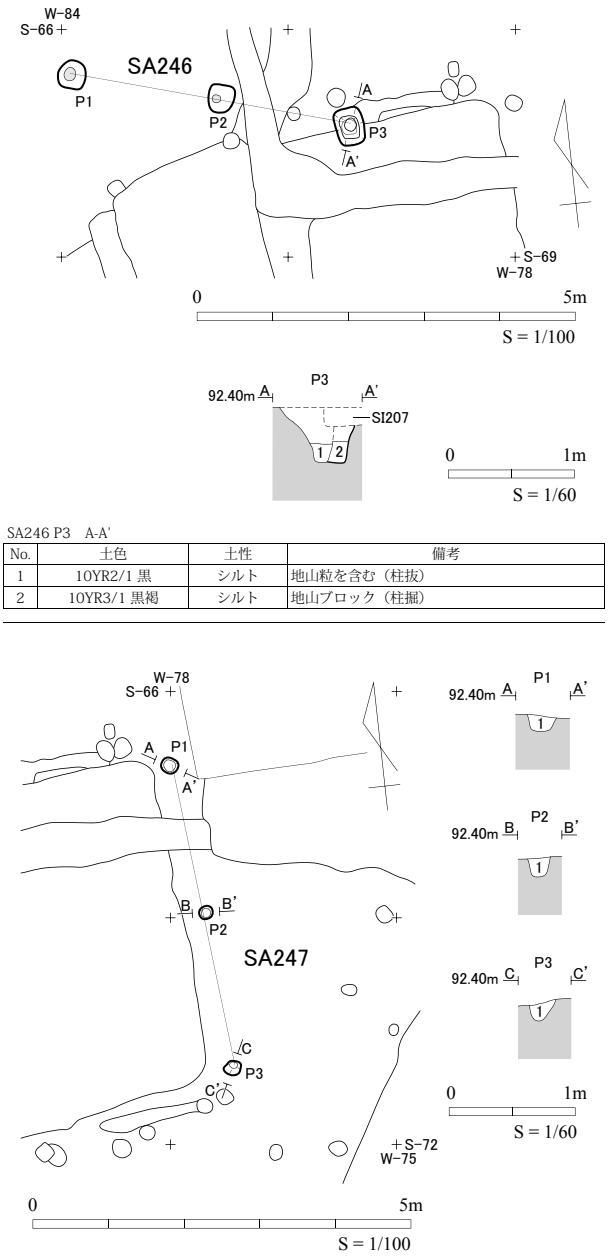
【SA247 柱列跡】（第 77 図）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北 2 間（総長 4.1m）の柱列跡である。

〔柱穴〕3 か所確認した。掘方の平面形は直径 18 ～ 20cm 円形を基調とし、深さは 13 ～ 20cm である。



SA246 P3　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロック（柱掘）

SA247 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土

SA247 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む

SA247 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む

第 77 図　SA246・SA247 柱列跡

堆積土は均質な黒褐色土あるいは地山ブロックを含む黒色・黒褐色シルトである。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北から 200―208cm

〔方向〕N － 5.0° － W

〔出土遺物〕なし

（４）落とし穴状土坑

【SK234 落とし穴状土坑】（第 78 図）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明だが、平面形は長軸 60cm 以上、短軸 48cm の楕円形を呈するとみられる。横断面形は深さ 46 ～ 48cm の漏斗形を呈する。

〔堆積土〕少量の砂を含む黒色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

（５）土坑

【SK216 土坑】（第 78 図）

〔位置・確認面〕３区中央部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 170cm、短軸 98cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 55 ～ 65cm の U 字形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕２層に細分される。１層は白色粘土・炭化物粒を少量含む黒褐色シルト、２層は白色粘土ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土よりロクロ土師器坏が出土した。底部破片で外底面にケズリ調整を施す。

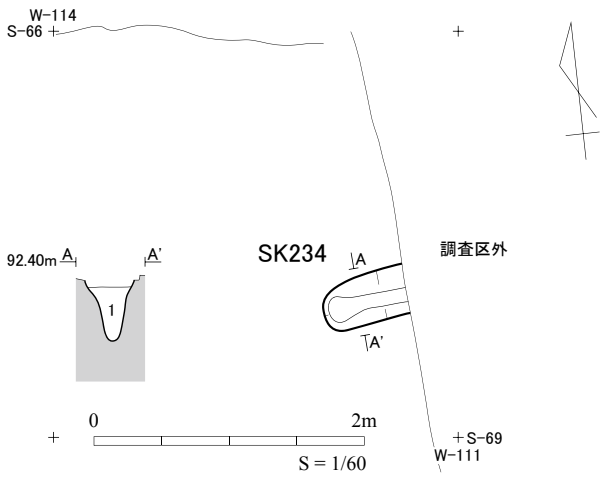
【SK218 土坑】（第 78 図）

〔位置・確認面〕３区中央部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

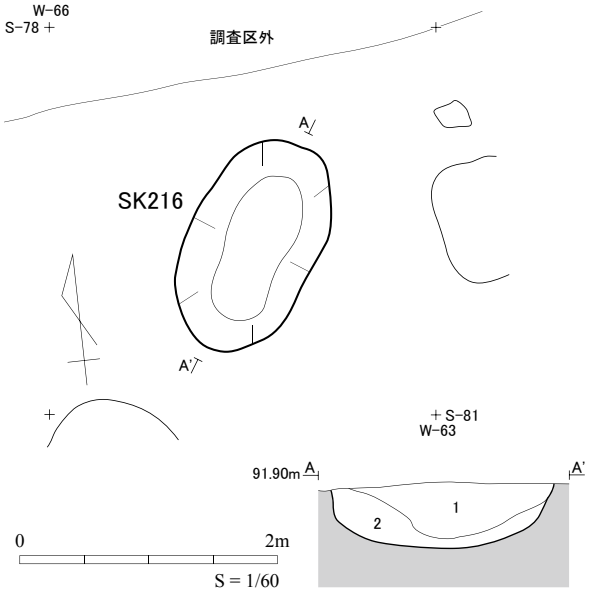
〔規模・形状〕平面形は長軸 130cm、短軸 110cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 13cm の皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕均質な黒色シルトで、自然堆積土と考えられる。



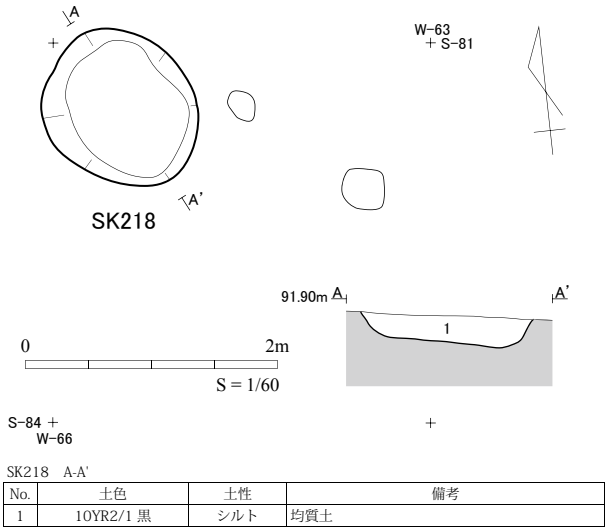
SK234　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘土	砂粒を少量含む



SK216　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒褐	シルト	地山・炭化物粒を少量含む（人為）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（人為）



SK218　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土

第 78 図　SK234 落とし穴状土坑、SK216・SK218 土坑

〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・高坏などが出土した。土師器坏は底部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にケズリ調整を施す。土師器高坏は脚部の破片で、内外面にヨコナデ調整を施す。

【SK219 土坑】（第 79 図）

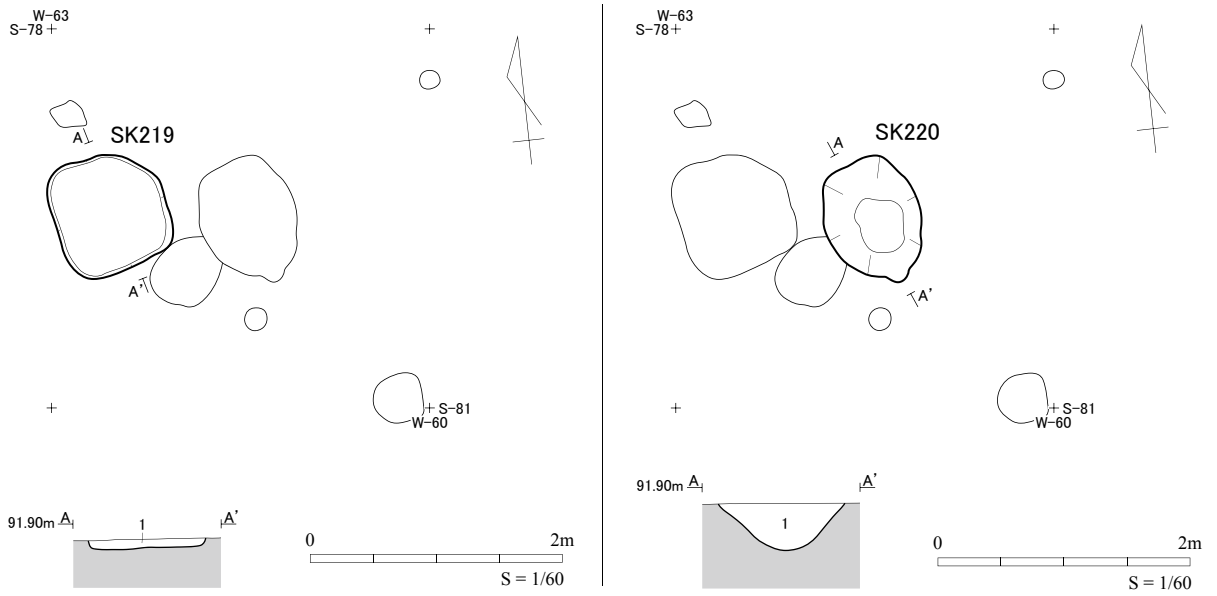
〔位置・確認面〕3 区中央部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕Pit → SK219

〔規模・形状〕平面形は長軸 92cm、短軸 88cm の隅丸方形を呈し、断面形は深さ 7cm の箱状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックを多量に含む暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

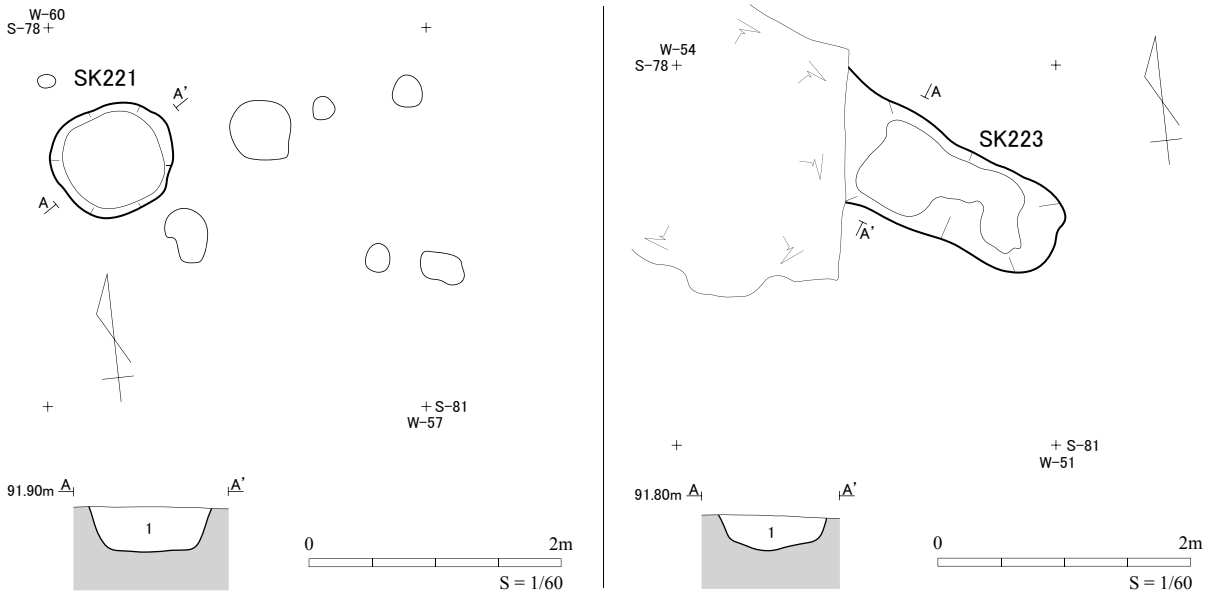


SK219　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む

SK220　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む



SK221　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む

SK223　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土

第 79 図　SK219・SK220・SK221・SK223 土坑

【SK220 土坑】（第 79 図）

〔位置・確認面〕３区中央部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕Pit → SK220

〔規模・形状〕平面形は長軸 100cm、短軸 77cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 38cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK221 土坑】（第 79 図）

〔位置・確認面〕３区中央部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 98cm、短軸 84cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 34cm の皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK223 土坑】（第 79 図）

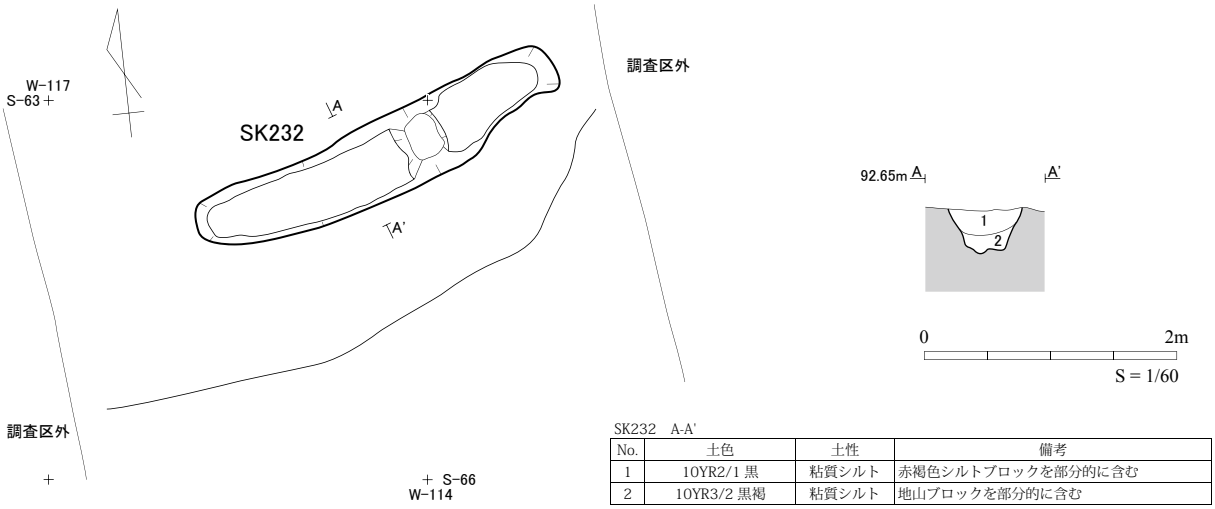
〔位置・確認面〕３区中央部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕西側が残存しないため全体の形状は不明だが、平面形は長軸 174cm 以上、短軸 84cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 29cm の皿状を呈する。底面は凹凸が見られる。

〔堆積土〕均質な黒色シルトで、自然堆積土と考えられる。

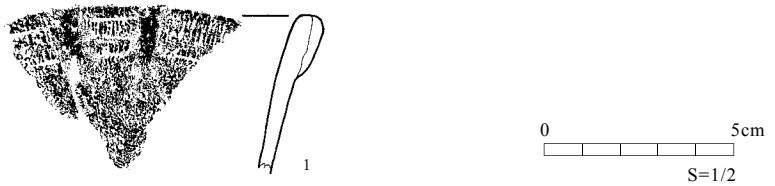
〔出土遺物〕なし



SK232　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	赤褐色シルトブロックを部分的に含む
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを部分的に含む

第 80 図　SK232 土坑



No.	遺構名	層位	種類	器種	特徴	器厚（mm）	登録	写真
1	SK232	堆積土	弥生土器？	壺？	外面：棒状浮文，沈線文，連続爪形文，内面：ミガキ	5.0	123	36-11

第 81 図　SK232 土坑出土遺物

【SK232 土坑】（第 80・81 図）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 300cm、短軸 60cm の溝状を呈し、横断面形は深さ 30 ～ 40cm の逆台形を呈する。底面は凹凸が見られ、中央やや東寄りの一部が 20cm ほど深く落ち込む。

〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は均質な黒色粘質シルト、2 層は地山ブロックを部分的に含む黒褐色粘質シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より弥生土器？（第 81 図 1）が出土した。壺？の口縁部破片で外面に貼付による棒状浮文と鋭い沈線による区画文を施文し、沈線区画内に連続爪形文を充填する。円田式とみられる。

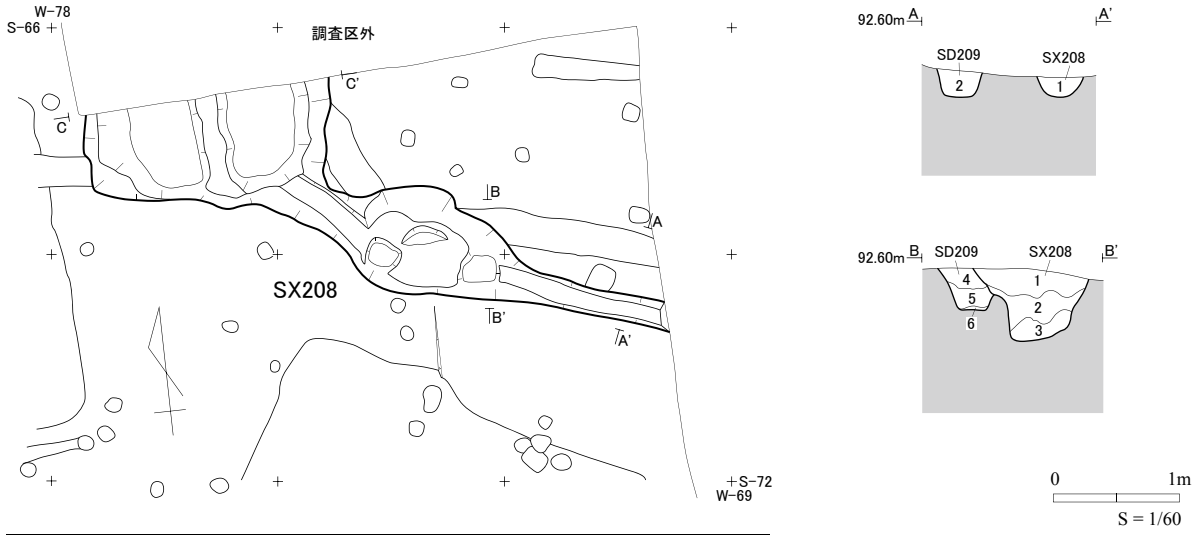
（6）溝跡

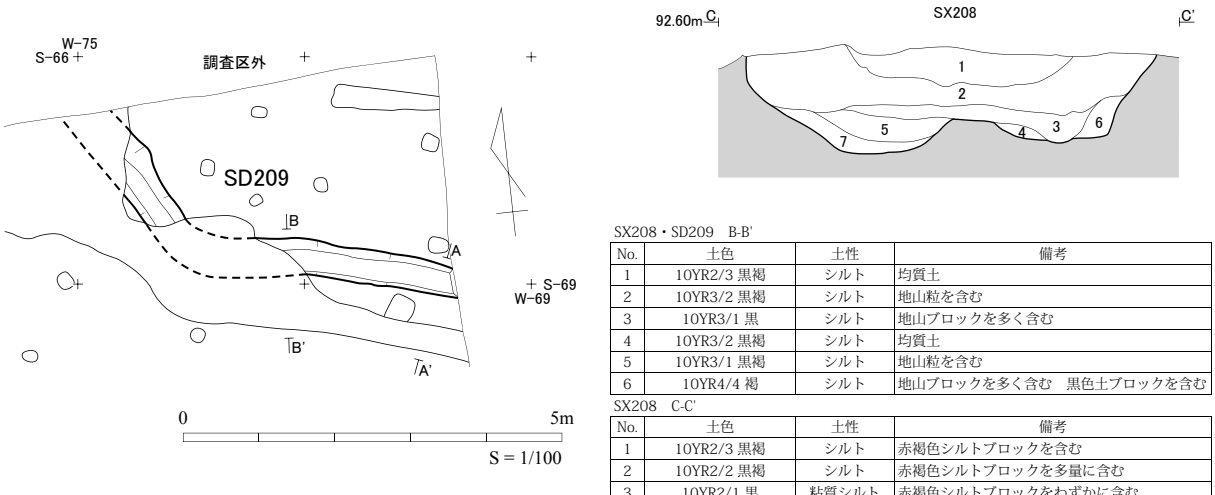
【SD209 溝跡】（第 82 図、写真図版 20 － 4・5・7）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SD209 → SX208

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延び、西側で約 60°の角度で屈曲して北西へ延びる。長さ 5.4m を確





SX208・SD209　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	均質土
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む

SX208・SD209　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	均質土
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒を含む
3	10YR3/1 黒	シルト	地山ブロックを多く含む
4	10YR3/2 黒褐	シルト	均質土
5	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む
6	10YR4/4 褐	シルト	地山ブロックを多く含む　黒色土ブロックを含む

SX208　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	赤褐色シルトブロックを含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	赤褐色シルトブロックを多量に含む
3	10YR2/1 黒	粘質シルト	赤褐色シルトブロックをわずかに含む
4	2.5Y4/2 暗灰褐	粘質シルト	均質土
5	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土
6	10YR3/2 黒褐	シルト	地山粒をわずかに含む
7	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	シルト	均質土

第 82 図　SX208 水溜状遺構・SD209 溝跡

認した。東側は調査区外へ延びており、北西側はSX208に壊されている。上幅38～50cm、底幅20～25cmで、断面形は深さ20～34cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕３層に細分される。1層は均質な黒褐色シルト、2層は地山粒を含む黒褐色シルト、3層は地山ブロック・黒色土ブロックを含む褐色シルトである。1・2層は自然流入土、3層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。外面の口縁部にヨコナデ調整を施し、頸部に段を持つ。土師器甕は頸部破片で外面にハケメ調整を施す。

【SD210溝跡】（第83図、写真図版20－6・9・11）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SI207 → SD210 → SD222

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ7.3mを確認した。南側は調査区外へ延びており、北側はSD222に壊されている。上幅44～72cm、底幅26～56cmで、断面形は深さ24～29cmの箱形を呈する。底面はほぼ平坦で、南へ向かって傾斜している。

〔堆積土〕３層に細分される。1層は均質な黒褐色シルト、2層は地山ブロックを含む黒褐色シルト、3層は黒色土をブロック状に含む黄褐色シルトである。1・2層は自然流入土、3層は人為的埋土と考えられる。

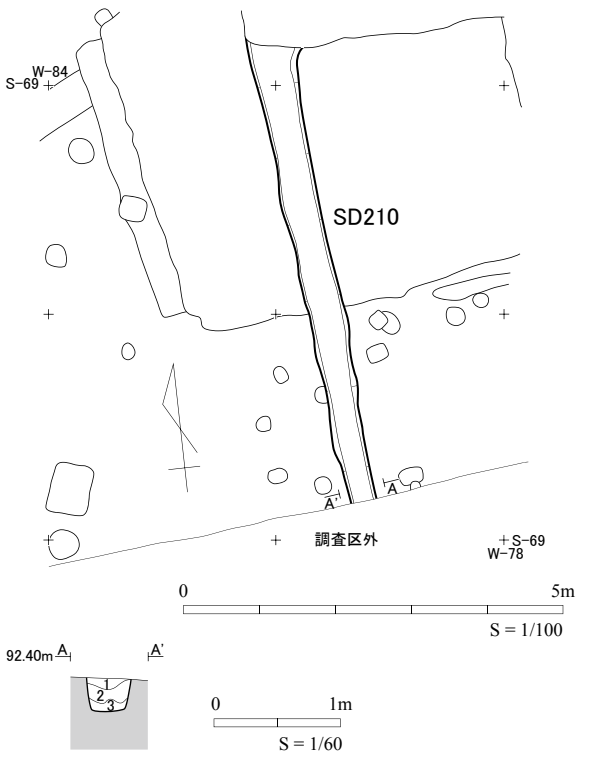
〔出土遺物〕堆積土より土師器甕が出土した。胴部・底部破片で体部の外面にハケメ調整を施すもの、ケズリ調整を施すもの、底部に木葉痕を持つものがある。

【SD211溝跡】（第83図）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

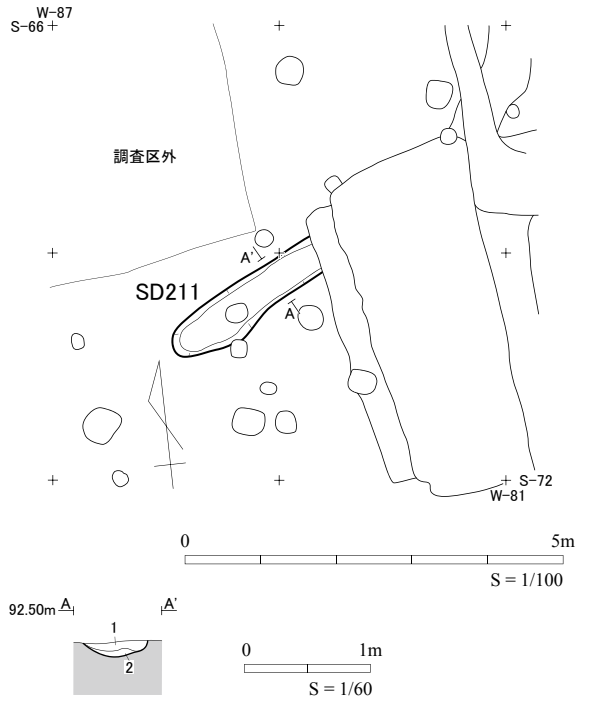
〔重複〕SD211 → SI207

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延びる。長さ2.3mを確認した。東側はSI207に壊されている。上幅48～66cm、底幅34～50cmで、断面形は深さ6～17cmの皿状を呈する。



SD210　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	赤褐色シルトブロックを含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む
3	10YR5/6 黄褐	シルト	黒色・赤褐色シルトブロックを含む



SD211　A-A'

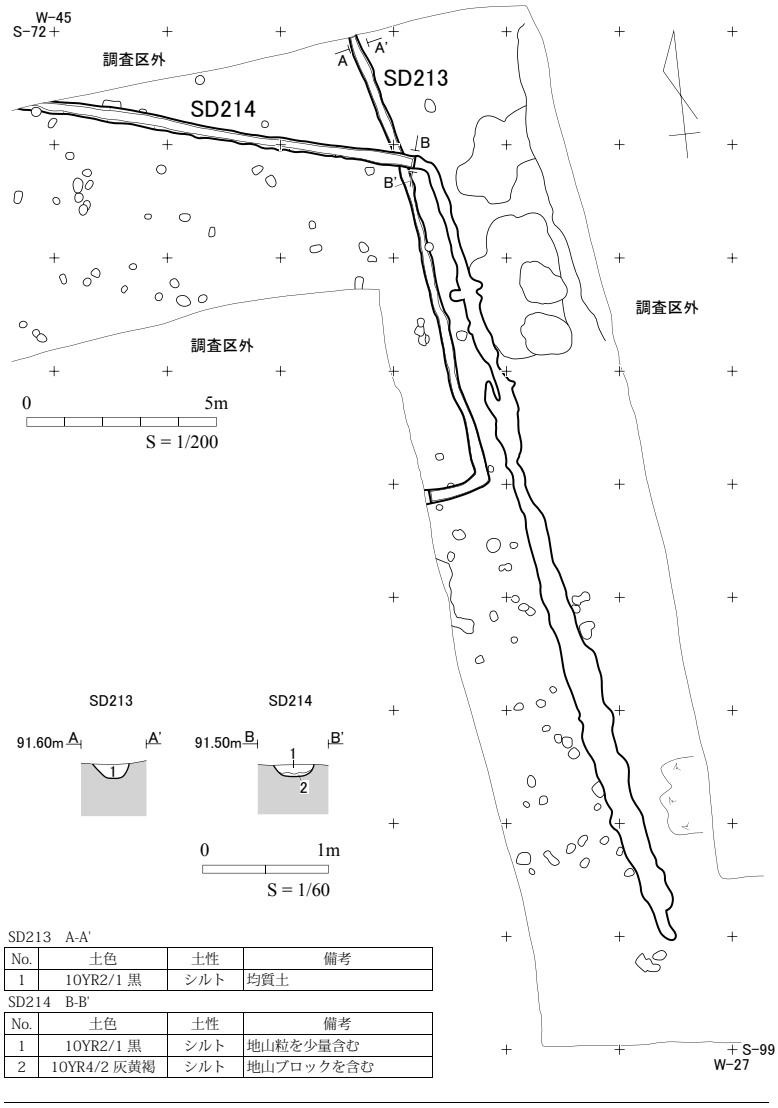
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	赤褐色シルト粒を含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	赤褐色シルト・地山粒を少量含む

第83図　SD210・SD211溝跡

〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は均質な黒褐色シルト、2 層は地山粒を少量含む黒褐色シルトである。いずれも自然流入土と考えられる。
〔出土遺物〕なし

【SD213 溝跡】（第 84 図、写真図版 21 － 1・2）
〔位置・確認面〕3 区中央部の南向き緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〔重複〕SD213 → SD214
〔規模・形状〕南北方向に直線的に延び、南側で 88°の角度で屈曲して西へ延びる。長さ 13.9m を確認した。調査区外の北側と西側へ延びている。上幅 14 ～ 40cm、底幅 7 ～ 40cm で、断面形は深さ 3 ～ 15cm の逆台形を呈する。
〔堆積土〕均質な黒色シルトで、自然流入土と考えられる。
〔出土遺物〕なし

【SD214 溝跡】（第 84 図、写真図版 21 － 1）
〔位置・確認面〕3 区中央部の南向き緩斜面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〔重複〕SD213 → SD214

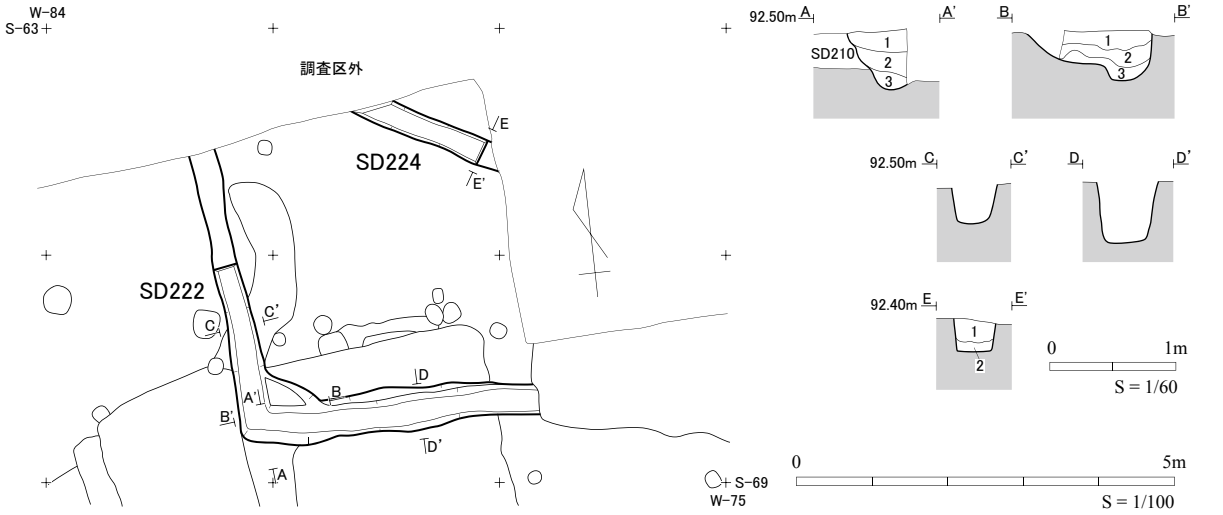


SD213　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土

SD214　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロックを含む



SD222　A-A',B-B',C-C',D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	均質土
2	10YR3/1 黒褐	シルト	地山粒を含む
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む

SD224　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む
2	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を多く含む

第 84 図　SD213・SD214・SD222・SD224 溝跡

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延び、北側で 115°の角度で屈曲して北西へ延びる。長さ 31.6m を確認した。北側は調査区外へ延びており、南側は湿地性堆積層との境界付近で消失している。北部のみ精査した。上幅 28 ～ 84cm で、精査範囲の底幅 16 ～ 28cm、断面形は深さ 10 ～ 17cm のＵ字形を呈する。

〔堆積土〕２層に細分される。1 層は白色粘土粒を少量含む黒色シルト、２層は白色粘土ブロックを含む灰黄褐色シルトである。1 層は自然流入土、２層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD215 溝跡】（第 85 図、写真図版 21 － 3･4･6）

〔位置・確認面〕３区中央部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ 6.2m を確認した。調査区外の南北へ延びている。上幅 31 ～ 40cm、底幅 25 ～ 30cm、断面形は深さ７～ 20cm の皿状を呈する。底面は南へ向かって傾斜しており、鋤鍬痕が確認された。

〔堆積土〕均質な黒色シルトで、自然流入土と考えられる。

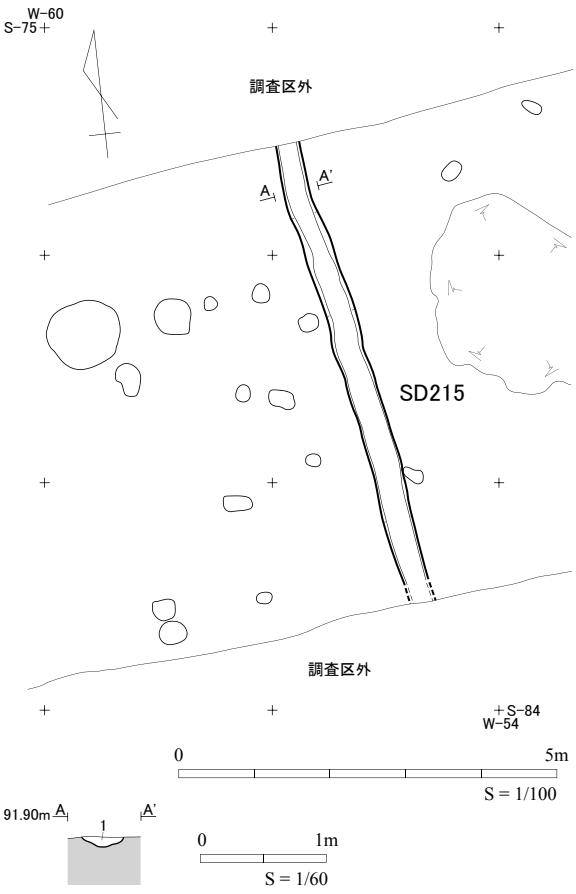
〔出土遺物〕なし

【SD222 溝跡】（第 84 図、写真図版 20 － 6･10･11）

〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

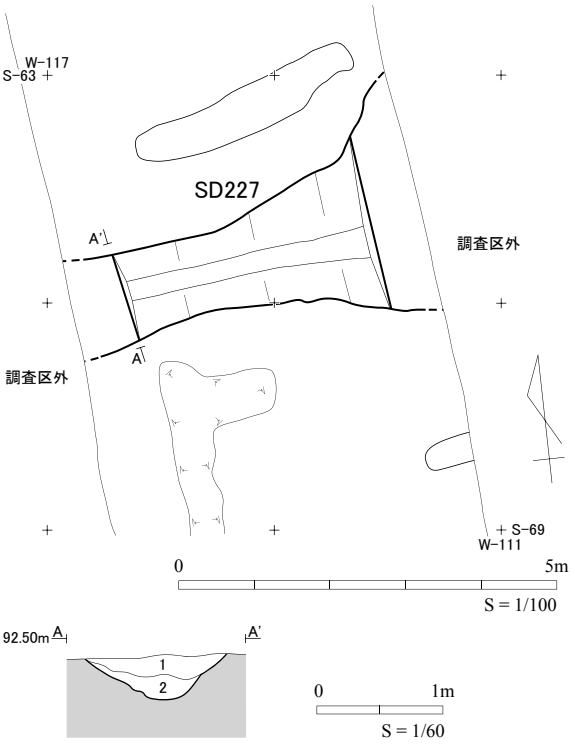
〔重複〕SI207 → SD210 → SD222 → SD208

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延び、西側で 94°の角度で屈曲して直線的に北へ延びる。長さ



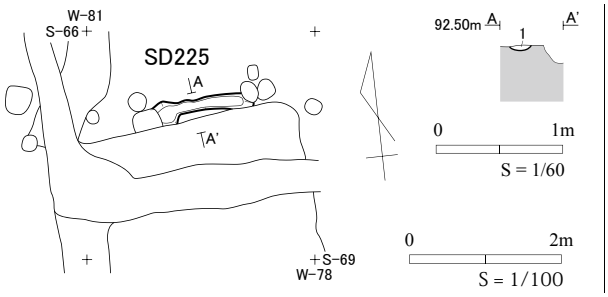
SD215　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土



SD227　A-A'

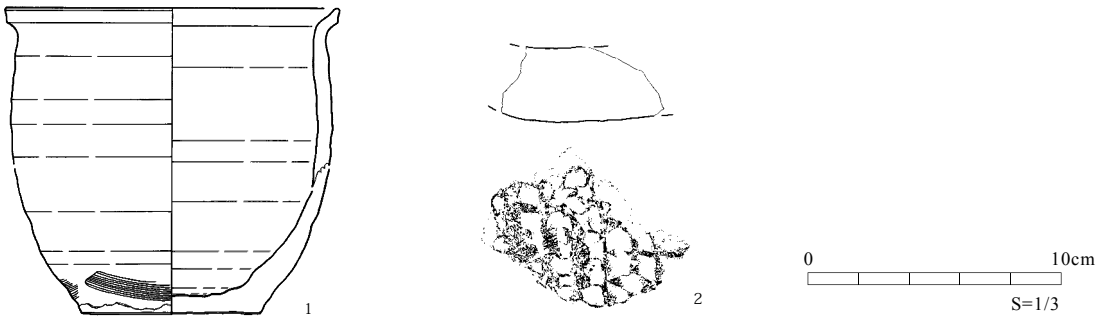
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	砂粒を多く含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	砂を多量に含む



SD225　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む

第 85 図　SD215・SD225・SD227 溝跡



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SD227	堆積土	ロクロ土師器	小型甕	内面：ロクロナデ，外面：ロクロナデ→（胴下）ナデ，（底）切り離し不明→ナデ	(13.2)	7.1	(12.2)	1/2	81	37-1

No.	遺構名	層位	種類	器面調整　・　特徴	器厚(mm)	登録	写真
2	SD227	堆積土	平瓦	凸面：格子タタキ目，周囲欠損	30.0	232	36-12

第 86 図　SD227 溝跡出土遺物

6.9m を確認した。北側は調査区外へ延び、東側は SD208 に壊されている。上幅 34 ～ 50cm、底幅 22 ～ 30cm で、断面形は深さ 34 ～ 58cm の逆台形を呈する。屈曲部では上幅が最大 93cm まで広がる。底面はほぼ平坦で、南へ向かって傾斜している。

〔堆積土〕3 層に細分される。1 層は均質な黒褐色シルト、2 層は地山粒を含む黒褐色シルト、3 層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。1・2 層は自然流入土、3 層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・甕などが出土した。土師器坏は口縁部・体部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。土師器甕は各部位の破片があり、外面にハケメ調整を施すもの、ケズリ調整を施すものがある。

【SD224 溝跡】（第 84 図、写真図版 21 － 5 ・7）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南東－北西方向に直線的に延びる。長さ 2.1m を確認した。調査区外の東側・北側へ延びている。上幅 32 ～ 34cm、底幅 22 ～ 24cm で、断面形は深さ 26cm の箱形を呈する。底面はほぼ平坦で、南東方向へ向かって傾斜している。

〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は地山粒を少量含む黒色シルト、2 層は地山粒を多く含む黒色シルトである。1 層は自然流入土、2 層は人為的埋土と考えられる。

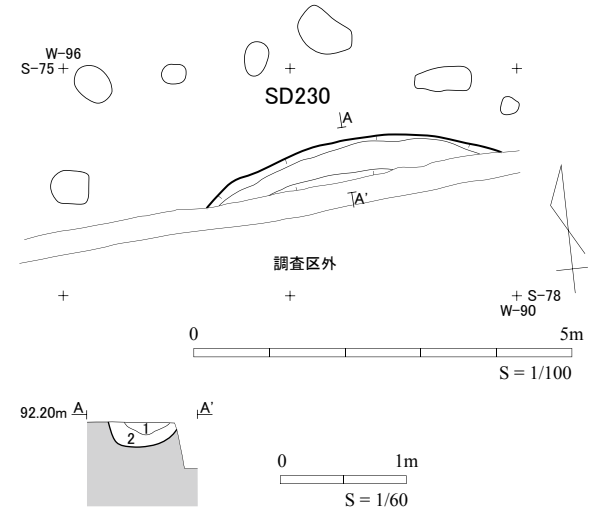
〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・甕などが出土した。土師器坏は口縁部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にヨコナデ調整を施す。土師器甕は胴部破片で外面にハケメ調整を施す。

【SD225 溝跡】（第 85 図）

〔位置・確認面〕3 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕SD225 → Pit → SI207

〔規模・形状〕東西方向に延びる。長さ 1.2m を確認した。両端部を柱穴に壊されている。上幅 14 ～ 32cm、底幅 8 ～ 23cm で、断面形は深さ 8 ～ 15cm の皿状を呈する。底面は西側へ向かって傾斜している。



SD230　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山少ブロックを多く含む
2	10YR2/1 黒	シルト	地山小ブロックをごく少量含む

第 87 図　SD230 溝跡

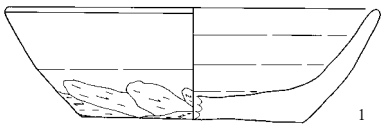
〔堆積土〕地山粒を含む黒褐色シルトで、自然流入土と考えられる。
〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は口縁部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。土師器甕は底部破片で内外面にナデ調整を施す。

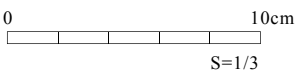
【SD227 溝跡】（第 85・86 図、写真図版 21 － 8・10）
〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕東西方向に延びる。長さ 4.4m を確認した。調査区外の東西へ延びている。上幅 100 ～ 300cm、底幅 24 ～ 44cm で、断面形は深さ 35 ～ 42cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。
〔堆積土〕２層に細分される。1 層は砂を多く含む黒褐色シルト、２層は黒色シルトを含む砂層で、いずれも自然流入土と考えられる。
〔出土遺物〕堆積土よりロクロ土師器小型甕（第 86 図 1）、平瓦（第 86 図 2）が出土した。1 は内外面にロクロナデ調整、外底面にナデ調整を施す。２は凸面に格子タタキ目がみられる。
このほか、堆積土より、ロクロ土師器坏、須恵器甕・小型品が出土した。ロクロ土師器坏は各部位の破片があり、内面に黒色処理を施す。回転糸切の後に体下部～底部にヘラケズリ調整を施す。口縁部内面に黒色付着物がみられる。須恵器甕は胴部破片で内面に同心円文アテ具痕、外面に平行タタキ目のみられるもの、内外面にナデ調整を施すもの、口縁部破片で内外面にロクロナデ調整を施すものがある。須恵器小型品は体部破片で内外面にロクロナデ調整を施す。

【SD230 溝跡】（第 87 図、写真図版 21 － 9・11）
〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕東西方向に弧を描くように延びる。長さ 4.0m を確認した。両端が調査区外の南側へ延びている。上幅 58cm、底幅 40cm で、断面形は深さ 18 ～ 29cm のＵ字形を呈する。底面はやや凹凸が見られる。
〔堆積土〕２層に細分される。1 層は地山小ブロックを多く含む黒褐色シルト、２層は地山小ブロックをわずかに含む黒色シルトで、いずれも自然流入土と考えられる。
〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は口縁部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にヨコナデ調整を施す。土師器甕は胴部破片で外面にケズリ調整を施すもの、ハケメ調整を施すものがある。

（７）水溜状遺構

【SX208 水溜状遺構】（第 82・88 図、写真図版 20 － 4・5・7・8）
〔位置・確認面〕３区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〔重複〕SD209 － SD222 → SX208





No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SX208	堆積土	須恵器	坏	内面：ロクロナデ， 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ，（底）ヘラ切り？→ヘラケズリ，焼成不良	14.9	8.8	4.5	略完形	82	37-2

第 88 図　SX208 水溜状遺構出土遺物

〔規模・形状〕南東－北西方向に緩やかな弧を描きながら延びる溝が大小 2 か所の水溜状部分と接続する。溝は長さ約 5.5 mを確認し、調査区外の東側へ延びている。上幅 37 ～ 53cm、底幅 20 ～ 28cm で、断面形は深さ 21 ～ 47cm のＵ字形を呈する。溝の中間に位置する水溜 1 は平面形が長軸 240cm、短軸 152cm の不整形を呈し、断面形は深さ 44 ～ 60cm で上部が漏斗状に開き下部がＵ字形を呈する。底面には凹凸が見られる。溝の西端に位置する水溜 2 は調査区外の北側へ延びるため全体の形状は不明であるが、平面形が東西 312cm、南北 172cm 以上の不整方形を呈すると見られ、断面形は深さ 52 ～ 79cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に幅 50cm、高さ 15cm の土手状の高まりが南北方向に延びている。

〔堆積土〕溝の堆積土は均質な黒褐色シルトで、自然流入土と考えられる。水溜 1 の堆積土は 3 層に細分される。1 層は均質な黒褐色シルト、2 層は地山粒を含む黒褐色シルト、3 層は地山ブロックを多く含む黒色シルトである。2 層は溝の堆積土と対応する。1・2 層は自然流入土であり、3 層は人為的埋土と考えられる。溜池 2 の堆積土は 7 層に細分される。1・2 層は均質な黒褐色シルト、3 層は均質な黒色粘質シルト、4 層は均質な暗灰黄色粘質シルト、5 層は均質な黒褐色粘質シルト、6 層は地山粒を含む黒褐色シルト、7 層は均質な暗オリーブ褐色シルトである。2 層は溝の堆積土と対応する。1 ～ 5 層は自然流入土であり、6・7 層は壁際の崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より須恵器坏（第 88 図 1）が出土した。底部の切り離しはヘラ切り？で外面の体下部～底部にケズリ調整を施す。厚手で焼成が不良である。

このほか、堆積土より土師器坏・甕、須恵器甕・小型品が出土した。土師器坏は各部位の破片があり、内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にケズリ調整を施す。土師器甕は各部位の破片があり、外面にケズリ調整を施すもの、底部に木葉痕がみられるものがある。須恵器甕は胴部破片で、内面に同心円文アテ具痕、外面に平行タタキ目がみられるもの、内面にナデ調整、外面体下部にケズリ調整を施し、体部に平行タタキ目がみられるものがある。

（8）柱穴

確認面、堆積土・掘方埋土より土師器坏・甕・小型品、須恵器坏が出土した。土師器坏は各部位の破片があり、内面に黒色処理、外面にケズリ調整を施す。土師器甕は胴部破片で外面にケズリ調整、ハケメ調整を施すものがあり、輪積み痕の接合面に刻み目を施すものがみられる。土師器小型品は体部破片で内外面にナデ調整を施す。須恵器坏は体部・底部破片で内外面にロクロナデ調整を施し、底部に回転糸切の後にヘラケズリ調整を施す。

４．４区

（１）竪穴住居跡

【SI101 竪穴住居跡】（第 89 ～ 92 図、写真図版 23 － 1 ～ 7）

〔位置・確認面〕４区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SI101 → SB121・SK117 → SB120

〔規模・形状〕東西 6.6m、南北 6.2m の隅丸方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N － 12.3°－ E

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な南西隅の壁で床面から 20cm である。

〔床面〕住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦である。

〔主柱穴〕４か所確認した。住居平面形の対角線上に位置している。掘方の平面形は長軸 36 ～ 80cm、短軸 36 ～ 56cm の隅丸方形または楕円形を呈し、深さ 36 ～ 70cm である。掘方埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色・暗褐色シルトである。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認し、その底面で平面形が直径８～ 14cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも掘方底面に達する。

〔周溝・壁材〕上幅６～ 16cm、深さ５～ 12cm の周溝がほぼ全周する。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔小溝〕住居南辺の周溝から南西隅の主柱穴（P4）付近に向かって延びる上幅 20cm、深さ 12cm の小溝（D1）を確認した。堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色土で、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

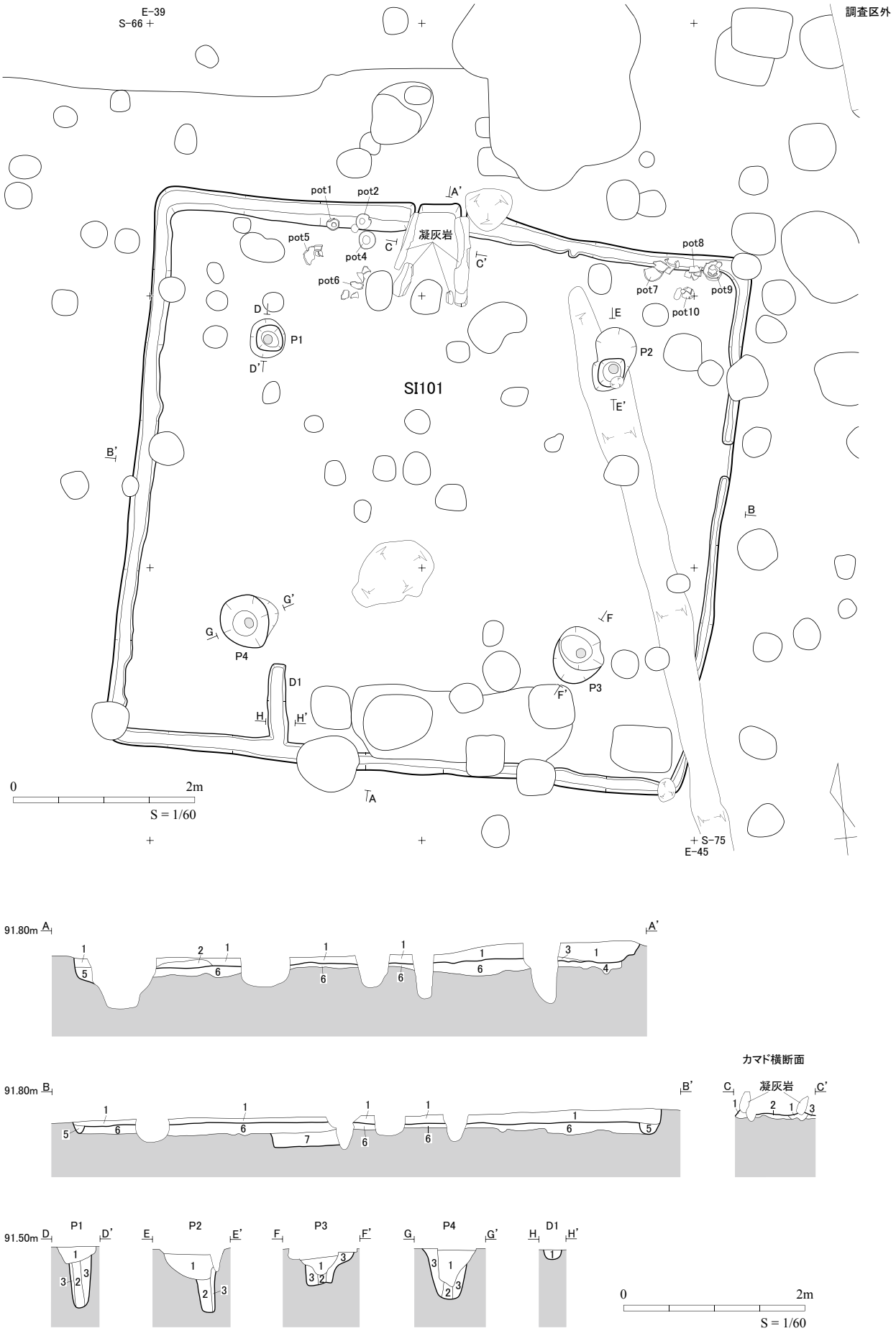
〔カマド〕住居北辺中央に付設されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ 115cm、幅 90cm で、焚口幅は側壁先端間で 70cm である。燃焼部底面は幅 70cm、奥行 90cm で、床面より３～ 4cm ほど高い。底面の地山ブロックの一部に被熱による赤色硬化が認められる。側壁は左右とも残存し、長さ 76 ～ 98cm、幅 12 ～ 16cm、高さ 22 ～ 24cm である。凝灰岩の板石で構築されている。奥壁は住居北壁と一致する。

〔貯蔵穴〕なし

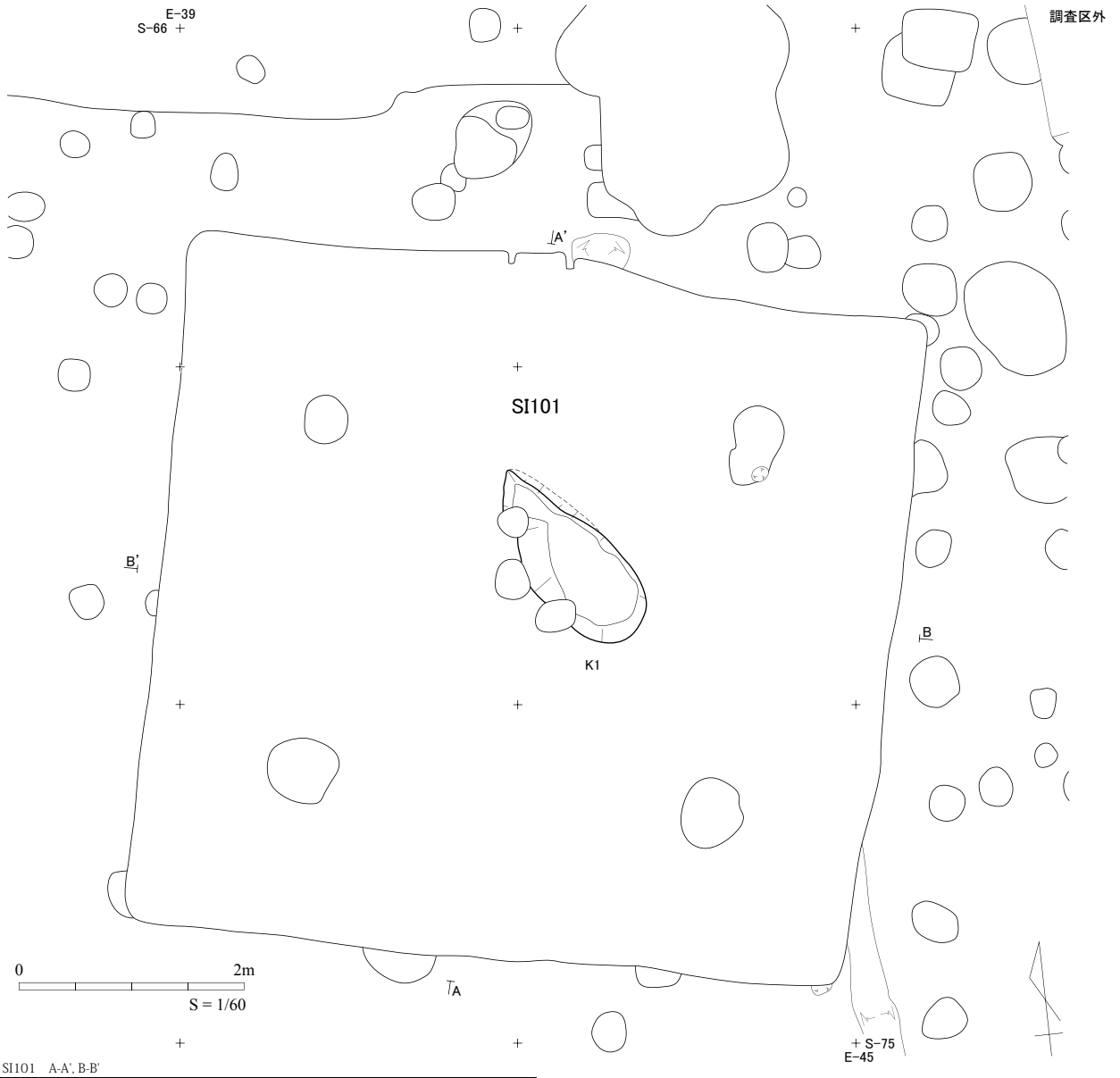
〔床下土坑〕住居中央部で土坑１基（K1）を確認した。住居掘方底面から掘り込まれている。平面形は長軸 180cm、短軸 80cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 40cm の逆台形を呈する。土坑壁面の一部が白色粘土層を抉るようにオーバーハングしている。堆積土は地山粒を含むにぶい黄褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルトで、住居廃絶以降の自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕住居内堆積土より土師器坏（第 91 図 1）・壺（第 91 図 6）、床面より土師器坏（第 91 図２～ 4）・甕（第 91 図 9、第 92 図 10）・小型甕（第 91 図 7・8）・甑（第 92 図 11）、住居掘方埋土より土師器坏（第 91 図 5）が出土した。1・2 は丸底で体部と口縁部の境に屈曲を持つ。体部が内弯し、口縁部が短く外反する。1 は内面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラナデ調整→放射状ミガキ調整を施し、外面にケズリ調整→ヘラミガキ調整を施す。2 は内面の口縁部に横方向のヘラミガキ調整、体部に放射状ヘラミガキ調整を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラケズリ→ヘラミガキ調整を施す。3 は丸底で底部が厚く、体部から口縁部まで内弯する。内面の口縁部にヨコナデ調整→横方向のヘラミガキ調整、体部に放射状ヘラミガキ調整を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、底部にヘラケズリ調整、体部にヘラミガキ調整を施す。体部に線刻「×」？がみられる。4 は平底で体部が内弯する。内面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラナデ調整を施し、外面の体部～底部にヘラケズリ調整、口縁部にヨコナデ調整を施す。5 は平底で体部と口縁部の境に屈曲を持つ。体部が内弯気味に外傾し、口縁部が外反気味に直



第 89 図　SI101 竪穴住居跡（1）



SI101　A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（住堆）
2	10YR6/6 明黄褐	シルト	均質土（上屋構築材の崩落土か）
3	10YR4/4 褐	シルト	焼土・地山粒を含む（竈堆）
4	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（周溝堆）
5	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む　焼土粒をまばらに含む（竈底面構）
6	10YR4/4 褐	シルト	地山ブロックを多く含む（住掘）
7	10YR5/4 にぶい黄褐	シルト	地山粒を含む（K1 堆・人為）

SI101 カマド　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（竈側壁構築材掘）
2	10YR4/6 褐	シルト	地山・焼土ブロックを多く含む（竈底面構）
3	10YR4/4 褐	シルト	地山ブロックを多く含む（住掘）

SI101 P1　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱痕）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックをきわめて多く含む（柱掘）

SI101 P2　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱痕）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱掘）

SI101 P3　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱痕）
3	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SI101 P4　G-G'

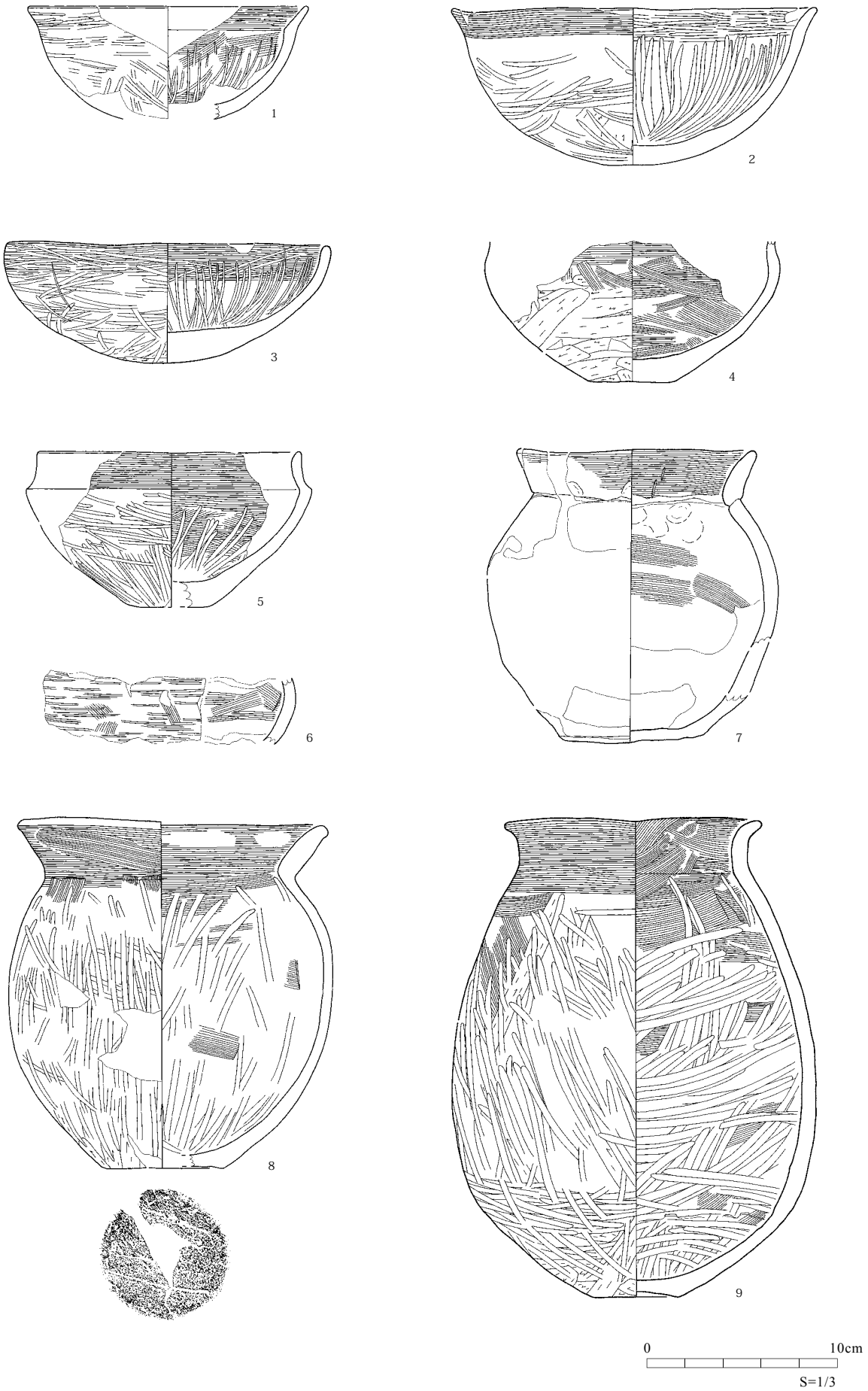
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山・黒色シルトブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SI101 D1　H-H'

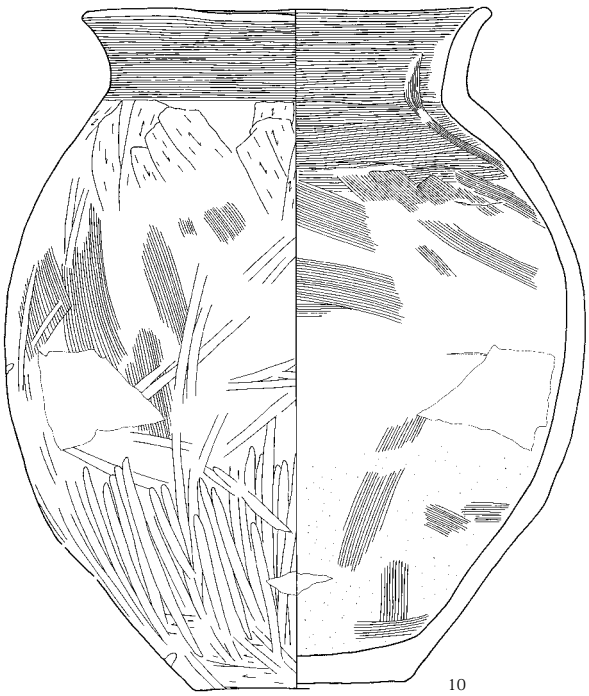
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む

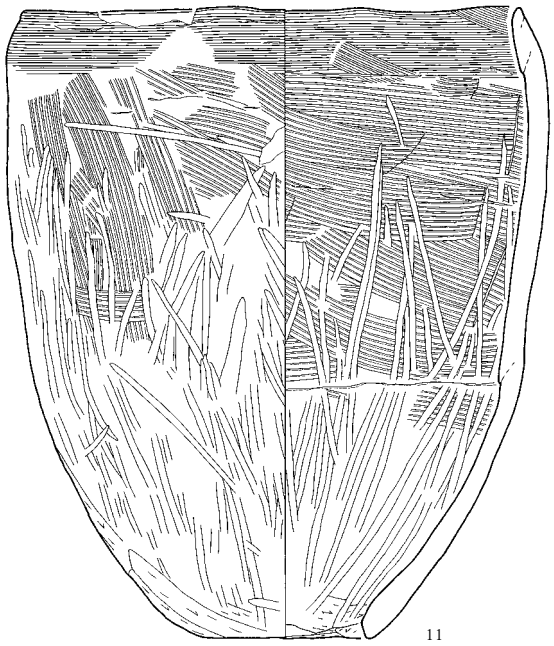
第 90 図　SI101 竪穴住居跡（2）

立する。内面の口縁部にヨコナデ調整→体部にヘラナデ調整→放射状ヘラミガキ調整を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部に放射状→横方向のヘラミガキ調整を施す。6 は内面にヘラナデ調整、外面にナデ→ヘラミガキ調整を施す。7・8・10 は胴部中位に最大径を持つ。9 は胴部下位に最大径を持ち、底部径が小さい。頸部が直立し口縁部が短く外反する。7・10 は胴部外面、8・9 は胴部内外面にヘラミガキ調整を施す。11 は無底式で内外面にハケメ調整→ヘラミガキ調整を施す。



第 91 図　SI101 竪穴住居跡出土遺物（1）





0　10cm

S=1/3

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI101	堆積土	土師器	坏	内面：(口) ヨコナデ→横方向ヘラミガキ，(体) ヘラナデ→放射状ヘラミガキ， (体) ヘラナデ→ヘラミガキ， 外面：ケズリ→ヘラミガキ	14.8	-	6.0	1/5	50	37-3
2	SI101	床面直上 Pot.4	土師器	坏	内面：(口) 横方向ヘラミガキ→(体) 放射状ヘラミガキ， 外面：(口) ヨコナデ，(体～底) ヘラケズリ→ヘラミガキ	19.3	-	8.3	略完形	57	37-4
3	SI101	床面直上 Pot.2	土師器	坏	内外面：焼けはじけ　内面：(口) ヨコナデ→横方向ヘラミガキ→放射状ヘラミガキ， 外面：(口) ヨコナデ・(底) ヘラケズリ→(体) ヘラミガキ→線刻「×」？	17.2	-	6.3	略完形	56	37-5
4	SI101	床面直上 Pot.3	土師器	坏	内面：(頸) ヨコナデ→(体) ヘラナデ， 外面：ヘラケズリ→(頸) ヨコナデ→ヘラナデ，(底) ケズリ→ナデ	-	4.6	(7.4)	2/5	52	38-1
5	SI101	住居掘方埋土	土師器	坏	内面：(体) ヘラナデ→(口) ヨコナデ，(体) ヘラミガキ，(底) 焼けはじけ 外面：(口) ヨコナデ，(体) ヘラミガキ，(底) ケズリ	(13.9)	4.5	8.1	1/3	51	38-3
6	SI101	堆積土	土師器	壺	内面：ヘラナデ，外面：ナデ→ヘラミガキ	-	-	(3.5)	一部	54	38-2
7	SI101	床面直上 Pot.1	土師器	小型甕	内面：(口) ヨコナデ・(胴上) 指オサエ痕→ナデ， 外面：(口) ヨコナデ，(胴) 一部ヘラミガキ，(胴～底) 剥離・磨滅著しい	(12.6)	(7.6)	15.5	1/2	58	38-4
8	SI101	床面直上 Pot.10	土師器	小型甕	内面：(口) ヨコナデ→(胴) ヘラナデ→ヘラミガキ，(口) 磨滅， 外面：(口) ヨコナデ→ヘラナデ→(胴) ヘラミガキ，(胴下) ヘラケズリ→(胴) ヘラミガキ	16.4	6.5	16.3	4/5	60	38-5
9	SI101	床面直上	土師器	甕	内面：(口) ヨコナデ→(口～胴) ヘラナデ→(胴) ヘラミガキ， 外面：ヘラナデ→ヘラケズリ→(口) ヨコナデ・(胴) ヘラミガキ，(底) ケズリ	(13.6)	4.5	25.1	2/3	53	38-6
10	SI101	床面直上 Pot.9	土師器	甕	内面：(口～頸) ヘラナデ→ヨコナデ，(胴) ヘラナデ， 外面：(頸) ヘラケズリ→(口) ヨコナデ，(胴) ヘラナデ・ヘラケズリ→ヘラミガキ， (底) ケズリ→ミガキ	16.2	8.4	27.1	4/5	55	39-1
11	SI101	床面直上 Pot.6	土師器	甑	無底式，内面：(口) ハケメ→ヨコナデ→ヘラナデ，(胴) ハケメ→ヘラミガキ， 外面：(胴) ハケメ→(口) ヨコナデ・(胴) ヘラケズリ→ヘラミガキ	19.7	6.7	25.0	略完形	59	39-2

第 92 図　SI101 竪穴住居跡出土遺物（2）

このほか、確認面、住居内堆積土、床面、カマド燃焼部底面、カマド掘方埋土、住居掘方埋土より土師器坏・甕・小型品が出土した。いずれも南小泉式とみられる。土師器坏は体部～底部破片で内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施すものがある。土師器甕は各部位の破片があり、外面にケズリ調整を施すもの、ナデ調整の後に粗いミガキ調整を施すものがある。土師器小型品は内外面にミガキ調整を施す底部破片、外面にミガキ調整の後に赤彩を施す体部破片がある。

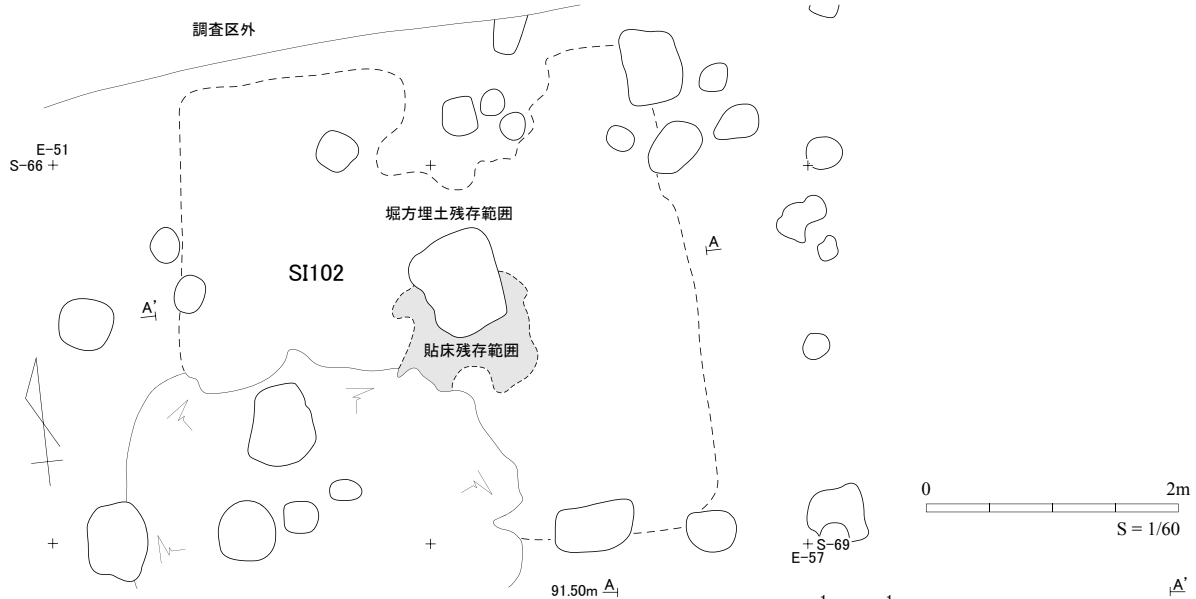
また、住居内堆積土より内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す土師器坏が出土した。栗囲式とみられるものであり、上層からの混入と考えられる。有段丸底で外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施すもの、外面にケズリ調整を施し段を持たないものがある。

【SI102 竪穴住居跡】（第 93 図、写真図版 23 － 8）

〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

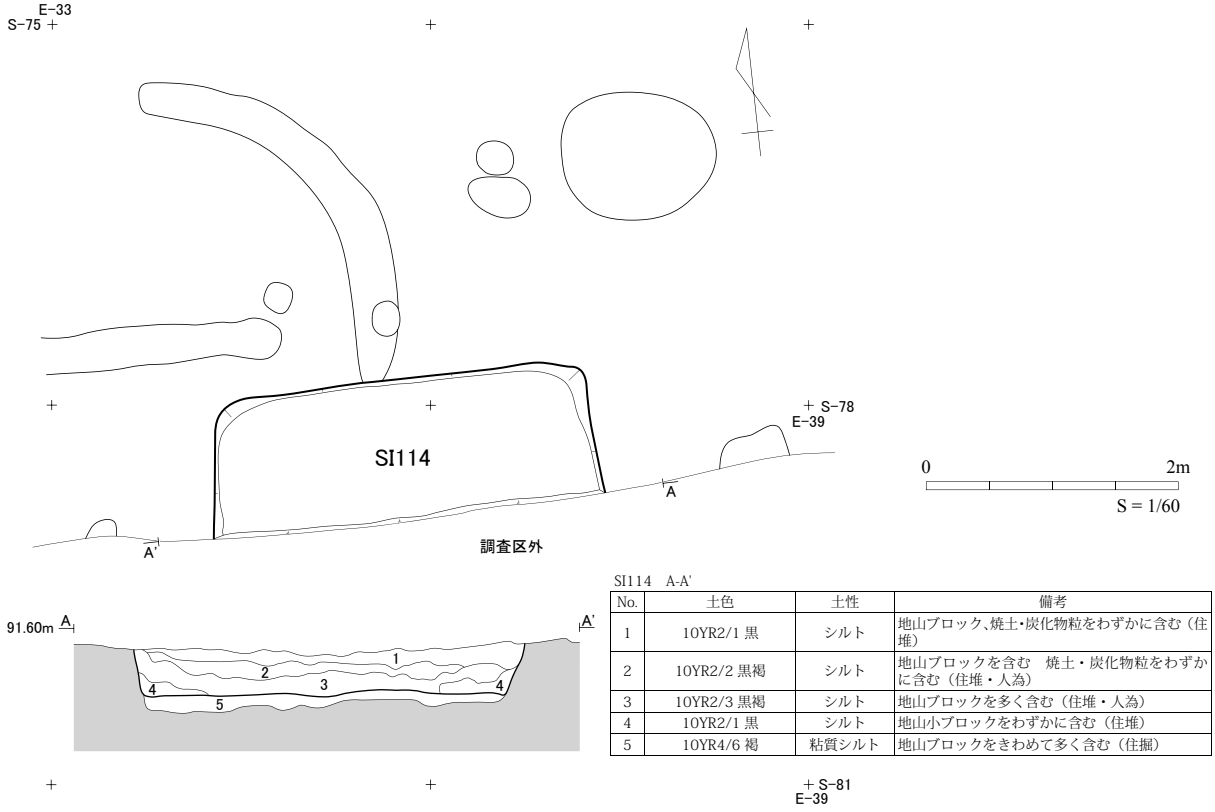
〔重複〕SI102 → SB119

〔規模・形状〕南東部が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 3.4m 以上、南北 3.1m 以上の



SI102　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/6 褐	シルト	地山ブロックを主体とする（貼床）
2	10YR4/6 褐	シルト	地山ブロックを多く含む（住掘）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山・焼土ブロック、炭化物粒を含む（住掘）



SI114　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロック、焼土・炭化物粒をわずかに含む（住堆）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む　焼土・炭化物粒をわずかに含む（住堆・人為）
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（住堆・人為）
4	10YR2/1 黒	シルト	地山小ブロックをわずかに含む（住堆）
5	10YR4/6 褐	粘質シルト	地山ブロックをきわめて多く含む（住掘）

第 93 図　SI102・SI114 竪穴住居跡

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SI114	堆積土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：(口) ヨコナデ，(体) ヘラケズリ→ヘラミガキ	-	-	4.1	一部	62	39-3

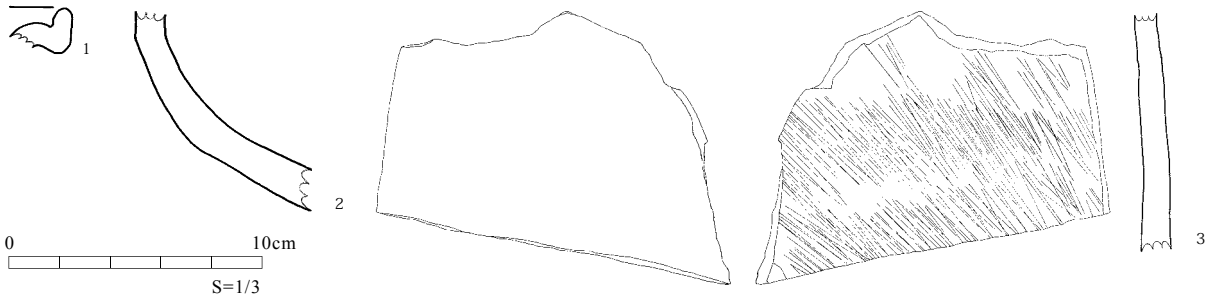
第 94 図　SI114 竪穴住居跡出土遺物

隅丸方形を呈するとみられる。
〔方向〕住居東辺：N － 1.7° － W
〔壁面〕残存しない
〔床面〕大部分は削平により残存しない。住居中央部の東西 1.1m、南北 0.9m の範囲に地山ブロックを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。
〔主柱穴〕なし
〔周溝・壁材〕不明
〔カマド〕不明
〔貯蔵穴〕なし
〔床下土坑〕なし
〔堆積土〕残存しない
〔出土遺物〕確認面、住居掘方埋土より土師器坏・壺・甕が出土した。土師器坏は内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にナデ調整を施す口縁部破片、内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施す体部破片がある。土師器壺は口縁部破片で内面にミガキ調整、外面にナデ調整を施す。甕は頸部破片で外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にケズリ調整を施し、頸部に段を持つものがある。

【SI114 竪穴住居跡】（第 93・94 図、写真図版 23 － 9）
〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕南側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 2.9m 以上、南北 0.8m 以上の隅丸方形を呈するとみられる。
〔方向〕住居北辺：E － 14.0° － N
〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面から外傾して立ち上がり、残存壁高は西壁で床面から 40cm である。
〔床面〕住居掘方埋土を床とする。ほぼ平坦である。
〔主柱穴〕なし
〔周溝・壁材〕なし
〔カマド〕不明
〔貯蔵穴〕不明
〔床下土坑〕なし
〔堆積土〕4 層に細分される。1 層は地山ブロック・焼土粒・炭化物粒を含む黒色シルト、2・3 層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルト、4 層は地山小ブロックをわずかに含む黒色シルトである。1 層は自然堆積土、2・3 層は人為的埋土、4 層は壁際の自然崩落土と考えられる。
〔出土遺物〕住居内堆積土より土師器坏（第 94 図 1）が出土した。有段丸底で内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラケズリ調整→ヘラミガキ調整を施す。このほか、住居内堆積土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は口縁部・頸部・体部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施し、有段丸底のものがある。栗囲式とみられる。土師器甕は胴部・底部破片で底部にケズリ調整を施すものがある。

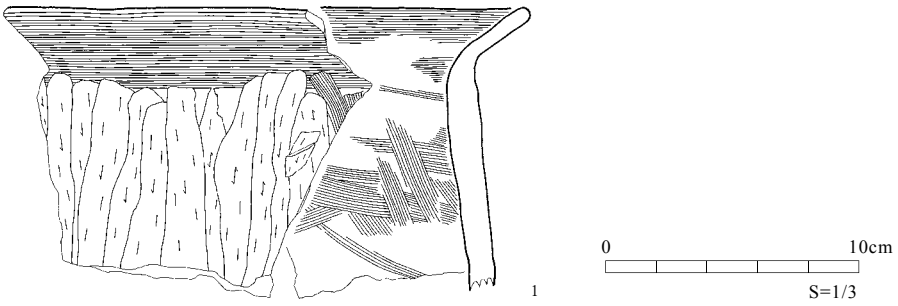
（２）竪穴状遺構

【SX103 竪穴状遺構】（第 39・95 図、写真図版 22 － 7）
〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。未精査である。
〔重複〕SI103 → SK112 → SK111
〔規模・形状〕南東部のみの確認のため全体の形状は不明であるが、東西 5.4m 以上、南北 1.5m 以上の



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SX103	確認面	中世陶器	甕	内外面：ナデ，118 と同一個体？，常滑編年 5 型式	-	-	(2.5)	一部	117	40-1
2	SX103	確認面	中世陶器	甕	内外面：ナデ，117 と同一個体？	-	-	-	一部	118	40-2
3	SX103	確認面	中世陶器	甕	内外面：ナデ？，黒色付着物，内面：磨滅・線条痕（破損後転用？）	-	-	-	一部	119	40-3

第 95 図　SX103 竪穴状遺構出土遺物



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SB108	P1 抜	土師器	甕	内面：(口) ヨコナデ→ (胴) ヘラナデ， 外面：(口) ヨコナデ→ (胴) ヘラナデ→ヘラケズリ	-	-	(11.3)	一部	80	39-4

第 96 図　SB108 掘立柱建物跡出土遺物

隅丸方形を呈するとみられる。

〔方向〕住居南辺：E － 8.0° － N

〔壁面〕残存しない

〔床面〕大部分は削平により残存しない。住居中央部の東西 1.1m、南北 0.9m の範囲に地山ブロックを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴／周溝・壁材／カマド／貯蔵穴／床下土坑〕不明

〔堆積土〕残存しない

〔出土遺物〕確認面より中世陶器甕（第 95 図 1 ～ 3）が出土した。このほか、確認面、住居内堆積土より土師器坏･甕、須恵器坏が出土した。土師器坏は体部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。土師器甕は胴部破片で外面にハケメ調整を施す。須恵器坏は内外面にロクロナデ調整を施す。

（3）掘立柱建物跡

【SB108 掘立柱建物跡】（第 96・97 図、写真図版 24 － 1 ～ 3・5）

〔位置・確認面〕4 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 3 間（総長 6.2m）、南北 3 間（総長 6.3m）の建物跡である。

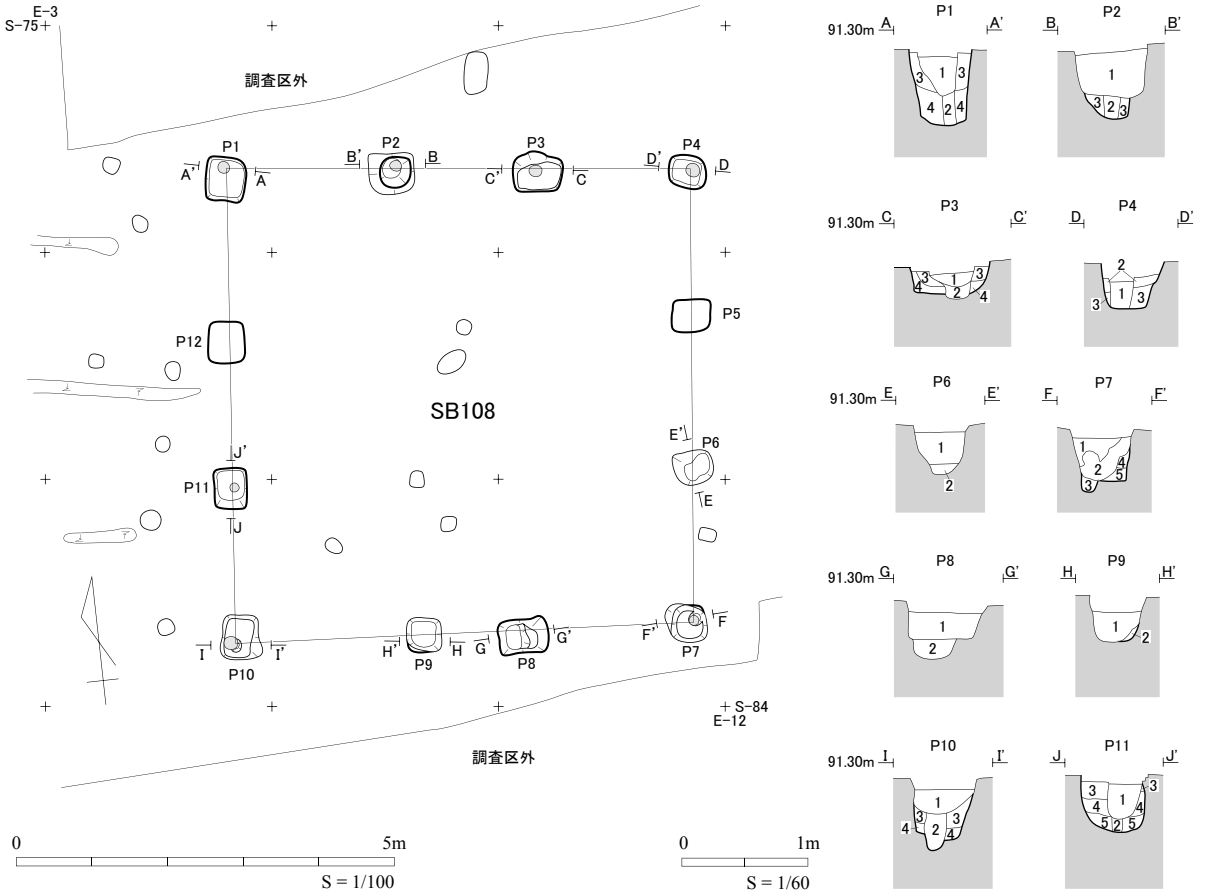
〔柱穴〕12 か所確認した。うち 2 か所は未精査である。掘方の平面形は長軸 44 ～ 66cm、短軸 44 ～ 52cm の隅丸方形を呈し、深さは 30 ～ 60cm である。掘方埋土は地山ブロックを多く含む灰黄褐色粘質シルト、黒褐色シルトなどである。10 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、6 か所で平面形が直径 8 ～ 18cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものが 4 か所、10cm ほど沈

み込むものが２か所である。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から 230―（190）―（200）cm、西側柱列：北から（230）―（200）―220cm

〔方向〕西側柱列：N － 5.3° － E

〔出土遺物〕P1 柱穴柱材抜き取り痕跡より土師器甕（第 96 図 1）が出土した。外面の口縁部にヨコナデ調整、体部に縦方向のケズリ調整を施し、頸部に痕跡的な段がみられる。このほか、P2・P6・P10 柱穴堆積土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は口縁部・体部破片で内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にケズリ調整を施す。土師器甕は胴部破片で内外面にナデ調整を施す。



SB108 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱痕）
3	10YR4/2 灰黄褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB108 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱痕）
3	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB108 P3　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱抜）
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
3	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを少量含む（柱掘）
4	10YR4/2 灰黄褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB108 P4　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を少量含む（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB108 P6　E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山小ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱抜）

SB108 P7　F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR6/4 にぶい黄褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む（柱抜）
2	10YR1.7/1 黒	粘質シルト	地山ブロックをわずかに含む（柱抜）
3	10YR1.7/1 黒	シルト	均質土（柱痕）
4	2.5Y7/4 浅黄	シルト	地山ブロックを多量に含む（柱掘）
5	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱掘）

SB108 P8　G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱抜）

SB108 P9　H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR4/2 灰黄褐	粘質シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB108 P10　I-I'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
4	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB108 P11　J-J'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒	シルト	地山粒を含む（柱痕）
3	10YR2/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
4	10YR3/1 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）
5	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

第 97 図　SB108 掘立柱建物跡

【SB116 掘立柱建物跡】（第 98 図、写真図版 18 － 4，24 － 6）

〔位置・確認面〕4 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 4.7m）、南北 2 間（総長 4.5m）の建物跡である。

〔柱穴〕8 か所確認した。掘方の平面形は長軸 24 ～ 38cm、短軸 24 ～ 32cm の隅丸方形を呈する。東側柱列の 3 か所を精査した結果、深さは 24 ～ 40cm であり、2 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、3 か所で平面形が直径 10 ～ 12cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面に達するものが 2 か所、6cm 浮き上がるものが 1 か所である。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から（234）―（240）cm、東側柱列：北から 214―240cm

〔方向〕西側柱列：N － 5.4° － W

〔出土遺物〕なし

【SB119 掘立柱建物跡】（第 99・100 図、写真図版 24 － 4）

〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 4.5m）、南北 2 間（総長 4.8m）の建物跡である。

〔柱穴〕8 か所確認した。掘方の平面形は長軸 24 ～ 60cm、短軸 22 ～ 56cm の隅丸方形または円形を基調とし、深さ 54 ～ 82cm である。2 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、1 か所で平面形が直径 18cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から（204）―（250）cm、東側柱列：北から 240―250cm

〔方向〕東側柱列：N － 3.3° － W

〔出土遺物〕P5 柱穴堆積土より土師器鉢（第 99 図 1）が出土した。内外面にヘラナデ調整を施す。

【SB120 掘立柱建物跡】（第 100 図、写真図版 22 － 2）

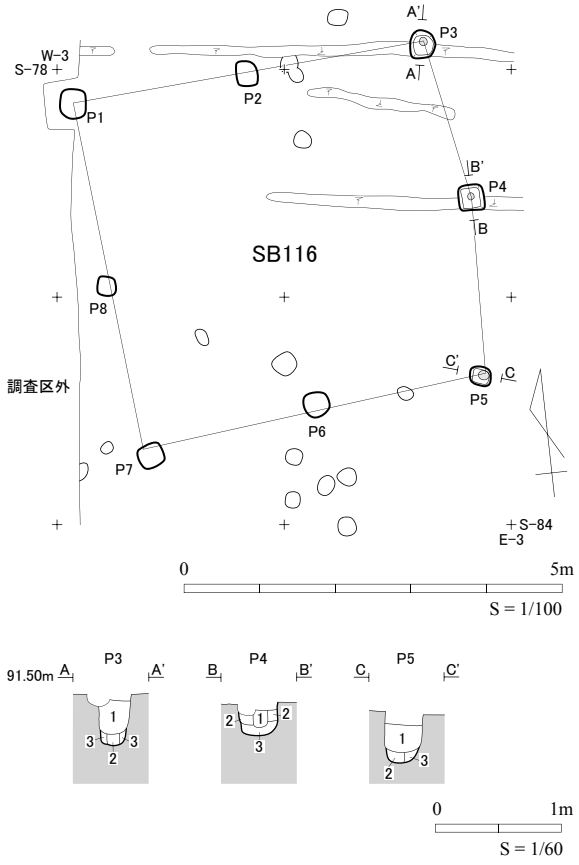
〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SI101 → SK117 → SB120

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 3.7m）、南北 2 間（総長 3.2m）以上の建物跡である。南側が調査区外へ延びている。

〔柱穴〕6 か所確認した。掘方の平面形は長軸 44 ～ 66cm、短軸 40 ～ 52cm の隅丸方形を基調とし、深さ 35 ～ 48cm である。4 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、3 か所で平面形が直径 18 ～ 30cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列：西から（180）―（184）



SB116 P3　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	均質土（柱抜）
2	10YR2/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
3	10YR5/6 黄褐	シルト	地山・黒色シルトブロックを含む（柱掘）

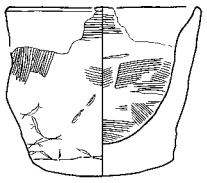
SB116 P4　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱掘）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱掘）

SB116 P5　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒	シルト	地山ブロックを少量含む（柱抜）
2	10YR2/1 黒褐	シルト	均質土（柱痕）
3	10YR3/1 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

第 98 図　SB118 掘立柱建物跡



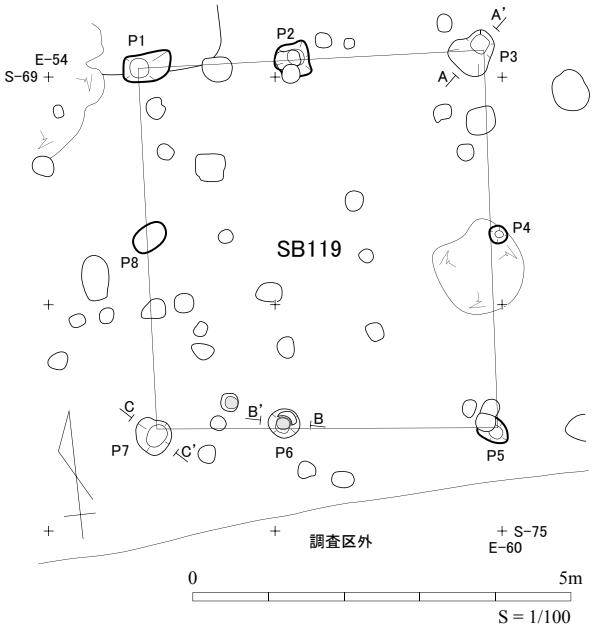
1

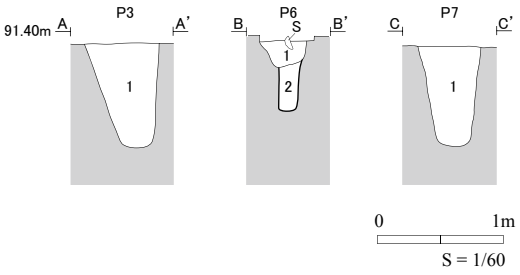
0　10cm

S=1/3

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SB119	P5 堆積土	土師器	ミニチュア土器（鉢）	内外面：ヘラナデ	(7.8)	5.6	6.7	4/5	77	39-5

第 99 図　SB119 掘立柱建物跡出土遺物





SB119 P3　A-A'

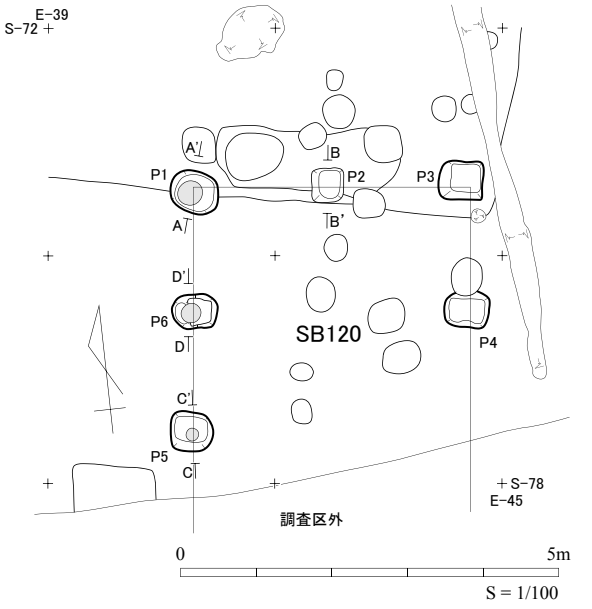
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）

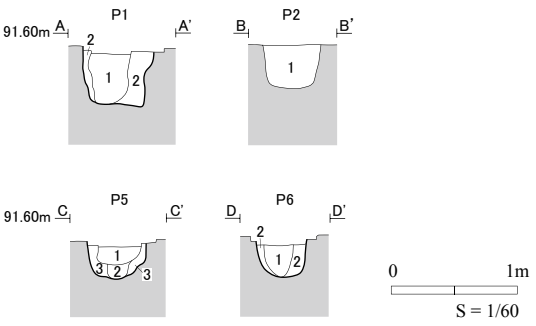
SB119 P6　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山粒を含む（柱痕）

SB119 P7　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱抜）





SB120 P1　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックをまばらに含む（柱痕）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB120 P2　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）

SB120 P5　C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒を含む（柱抜）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
3	10YR4/4 褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SB120 P6　D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む（柱痕）
2	10YR3/2 黒褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

第 100 図　SB119・SB120 掘立柱建物跡

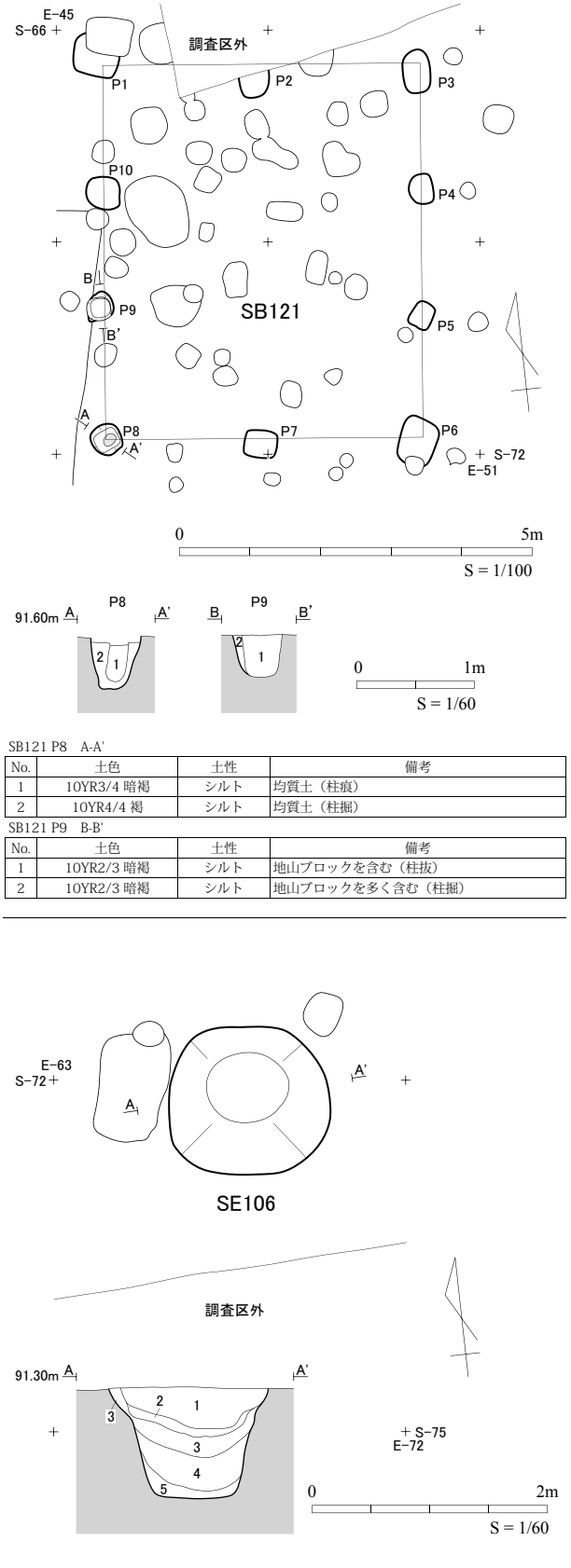
cm、西側柱列：北から 160―160cm
〔方向〕西側柱列：N － 6.8° － E
〔出土遺物〕なし

【SB121 掘立柱建物跡】(第 101 図、写真図版 22 － 2, 24 － 9)
〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕SI101 → SB121 → Pit
〔規模・形状〕東西 2 間（総長 4.5m）、南北 2 間（総長 5.4m）の南北棟である。
〔柱穴〕10 か所確認した。掘方の平面形は長軸 36 ～ 66cm、短軸 29 ～ 52cm の隅丸方形を基調とする。西側柱列のうち南側の 2 か所を精査した結果、深さは 36 ～ 46cm であり、1 か所で柱材の抜き取り痕跡を確認し、1 か所で平面形が直径 19cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は掘方底面から 6cm 浮き上がる。
〔柱間寸法〕南側柱列：西から（224）―（222）cm、西側柱列：北から（190）―（165）―（181）cm
〔方向〕西側柱列：N － 6.6° － E
〔出土遺物〕なし

（4）井戸跡

【SE106 井戸跡】（第 102 図、写真図版 25 － 1・2）
〔位置・確認面〕4 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕長軸 130cm、短軸 124cm、深さ 80cm で上部が漏斗状に開く円筒形を呈する。
〔堆積土〕5 層に細分される。凝灰岩質の岩片を含む黒褐色シルト・粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。
〔出土遺物〕確認面より土師器甕などが出土した。土師器甕は底部破片で内外面にナデ調整を施す。

【SE107 井戸跡】（第 101 図、写真図版 25 － 3）
〔位置・確認面〕4 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕直径 112cm、深さ 130cm で上部が漏斗状に開く円筒形を呈する。底面は平坦で、中央北寄りの長軸 55cm、短軸 50cm の範囲が深さ 24cm の段状に窪んでいる。
〔堆積土〕調査中に崩落したため不明である。



SB121 P8　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	均質土（柱痕）
2	10YR4/4 褐	シルト	均質土（柱掘）

SB121 P9　B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐	シルト	地山ブロックを含む（柱抜）
2	10YR2/3 暗褐	シルト	地山ブロックを多く含む（柱掘）

SE106　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	凝灰質岩片を含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	凝灰質岩片をわずかに含む　黒色シルトブロックを含む
3	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質土
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	凝灰質岩片を多く含む
5	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む

第 101 図　SB121 掘立柱建物跡、SE106 井戸跡

〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は体部破片で内面に黒色処理を施す。土師器甕は口縁部・胴部破片で内外面にナデ調整を施す。

【SE113 井戸跡】（第 102・103 図、写真図版 25 － 4・6）

〔位置・確認面〕4 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕長軸 64cm、短軸 54cm、深さ 136cm の円筒形を呈する。

〔堆積土〕調査中に崩落したため不明である。

〔出土遺物〕底面より土師器甕（第 103 図 1）が出土した。球胴で頸部に段を持つ。内面の口縁部にハケメ→ヨコナデ調整、胴部にヘラナデ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴上部にハケメ調整、胴下部に縦方向のヘラケズリ調整→ヘラミガキ調整を施し、底部に木葉痕を持つ。

（５）落とし穴状土坑

【SK115 落とし穴状土坑】（第 104 図、写真図版 22 － 9・10）

〔位置・確認面〕4 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 260cm、短軸 48cm の溝状を呈する。横断面形は深さ 99cm のＶ字形を呈する。

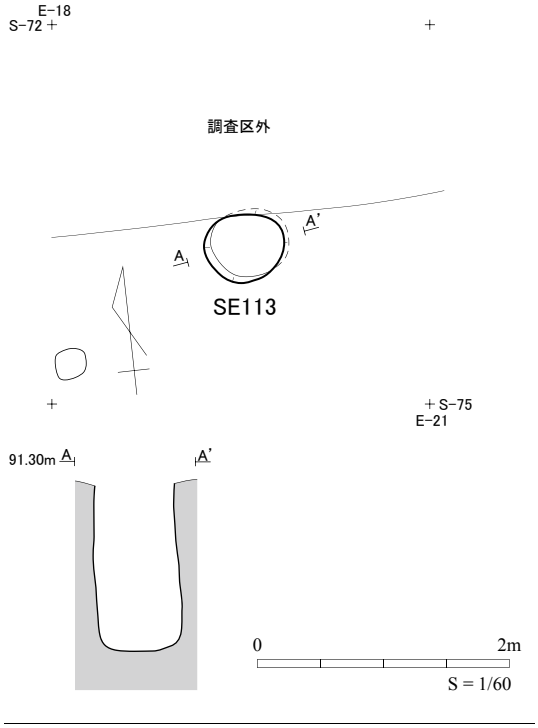
〔堆積土〕4 層に細分される。1 層は均質な黒褐色シルト、2 層は白色粘土ブロックを含む黒褐色粘質シルト、3 層は白色粘土ブロックを多量に含む灰黄褐色粘質シルト、4 層は均質な黒褐色粘質シルトで、いずれも自然堆積土あるいは自然崩落土と考えられる。

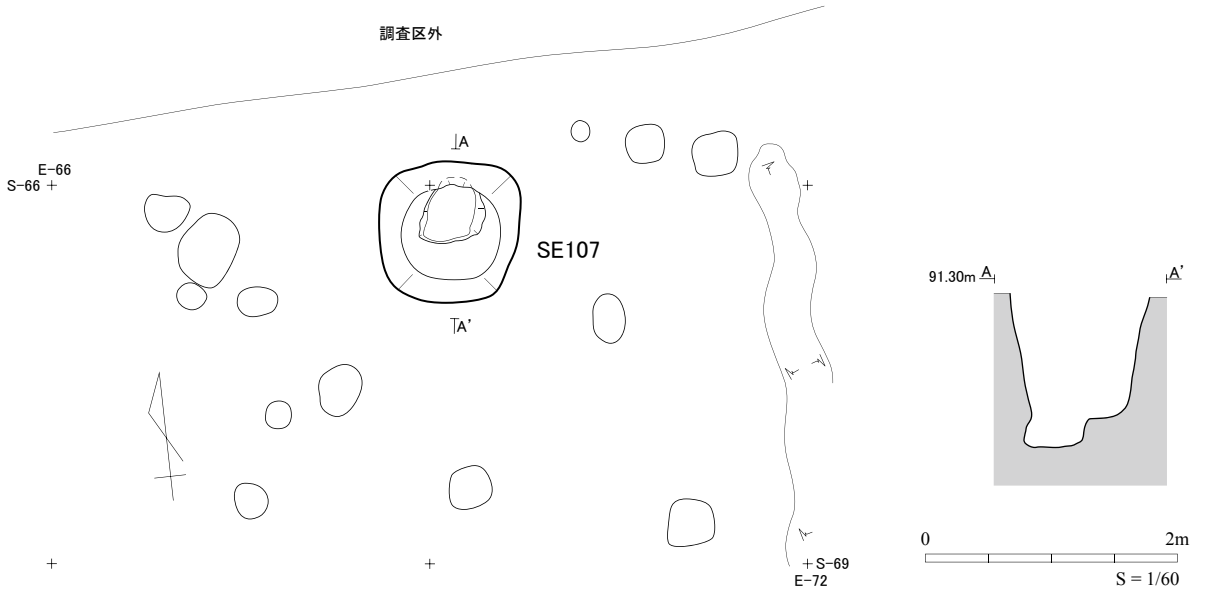
〔出土遺物〕なし

（６）土坑

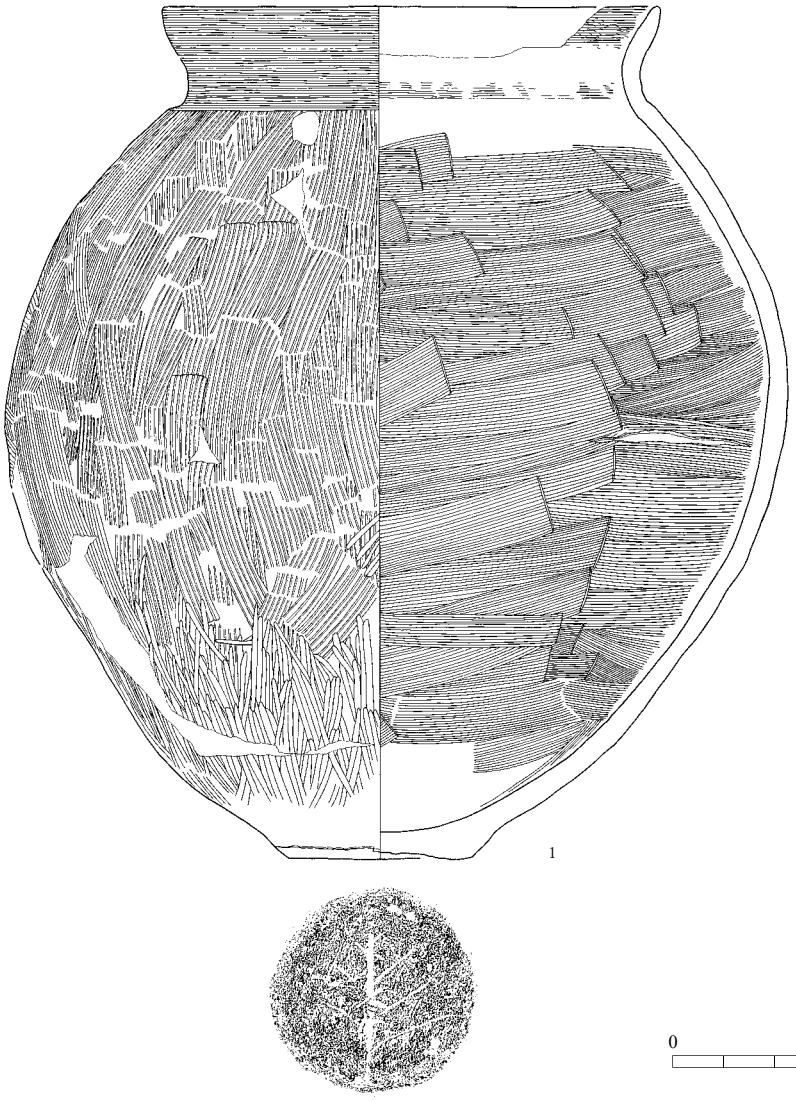
【SK104 土坑】（第 104 図）

〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ





第 102 図　SE107・SE113 井戸跡



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SE113	堆積土	土師器	甕	内面：（口）ハケメ→ヨコナデ，（胴）ヘラナデ，外面：（胴）ハケメ・（胴下～底部付近）縦方向ヘラケズリ→（胴下～底部付近）ヘラミガキ，（底）木葉痕	（19.8）	7.4	33.8	略完形	83	40-4

第 103 図　SE113 井戸跡出土遺物

層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 120cm、短軸 100cm の不整円形を呈し、断面形は深さ 23cm の皿状を呈する。

〔堆積土〕2 層に細分される。地山粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面・堆積土より土師器坏・甕、須恵器甕が出土した。土師器甕は胴部破片で内外面にナデ調整を施す。須恵器甕は胴部破片で内外面にナデ調整を施す。

【SK109 土坑】（第 104 図）

〔位置・確認面〕4 区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 188cm、短軸 60cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 24cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕2 層に細分される。地山ブロックを多く含む黒褐色・暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK110 土坑】（第 105 図、写真図版 22 － 8）

〔位置・確認面〕４区東部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 80cm、短軸 44cm の隅丸方形を呈し、断面形は深さ 40cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕３層に細分される。地山ブロックを多く含む黒褐色・暗褐色・極暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より土師器甕・壺などが出土した。土師器甕は口縁部～胴部破片で外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にヘラナデ調整を施し、頸部に痕跡的な段を持つ。土師器壺は頸部破片で内外面にミガキ調整の後に赤彩を施す。

【SK111 土坑】（第 105 図）

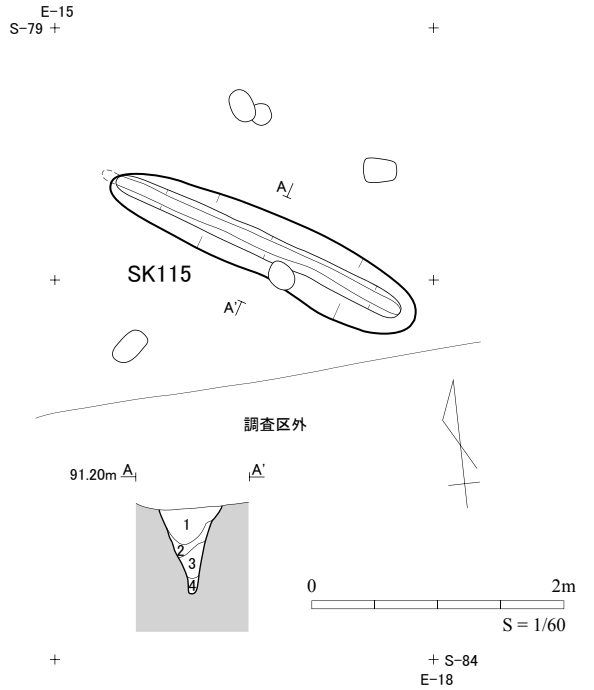
〔位置・確認面〕４区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SX103 → SK112 → SK111 → Pit

〔規模・形状〕平面形は長軸 180cm、短軸 60cm の不整楕円形を呈し、断面形は深さ 15cm の皿状を呈する。

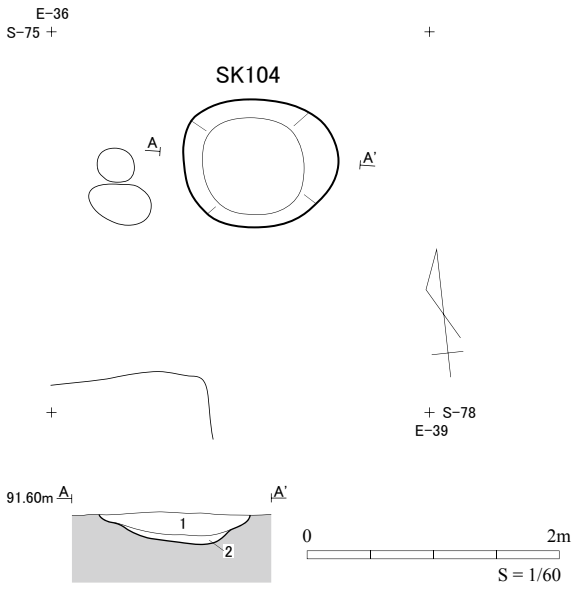
〔堆積土〕地山粒をわずかに含む黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし



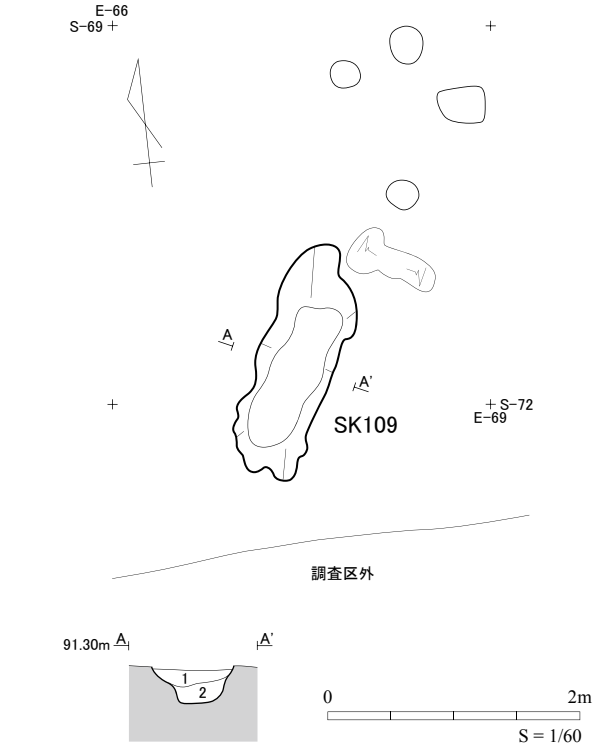
SK115　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む
3	10YR4/2 灰黄褐	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む
4	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	均質土



SK104　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒をごく少量含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山粒を含む



SK109　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山小ブロックを含む（人為）
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ブロックをきわめて多く含む（人為）

第 104 図　SK115 落とし穴状土坑、SK104・SK109 土坑

【SK112 土坑】（第 105 図）

〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SX103 → SK112 → SK111

〔規模･形状〕平面形は長軸 276cm、短軸 280cm の不整形を呈する。断面形は深さ 12cm の皿状を呈し、底面は凹凸が見られる。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK117 土坑】（第 106・107 図）

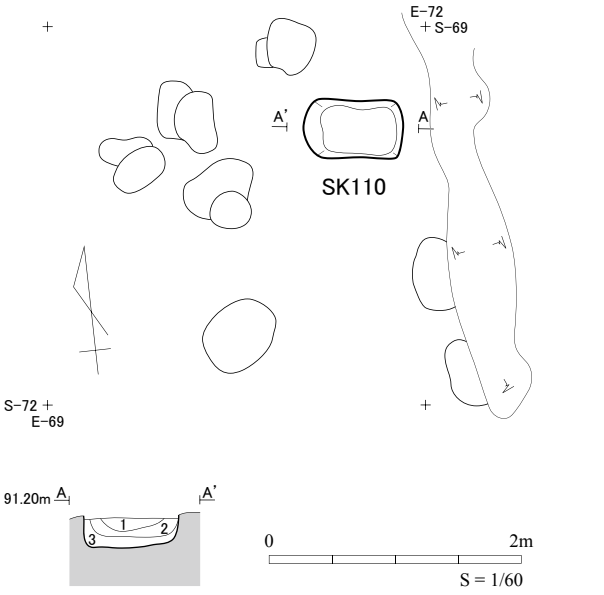
〔位置・確認面〕4 区中央部の平坦面に位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕SI101 → Pit → SK117 → Pit

〔規模・形状〕平面形は長軸 260cm、短軸 80cm の不整な隅丸長方形を呈する。横断面形は深さ 30cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

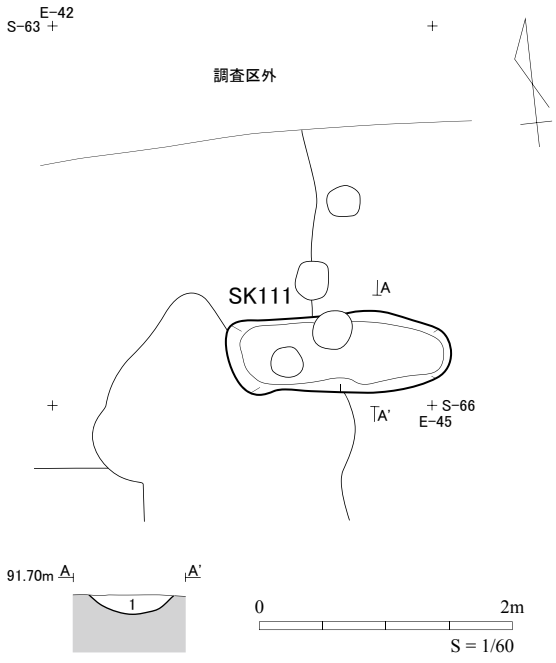
〔堆積土〕地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より土師器坏（第 107 図 1）が出土した。丸底で体部と口縁部の境に屈曲を持ち、体部が内弯し、口縁部が外反する。内外面にヘラナデ調整→ヘラミガキ調整を施す。このほか、堆積土より土師器甕が出土した。口縁部破片で内外面にヨコナデ調整を施し、外面に黒色付着物がみられる。



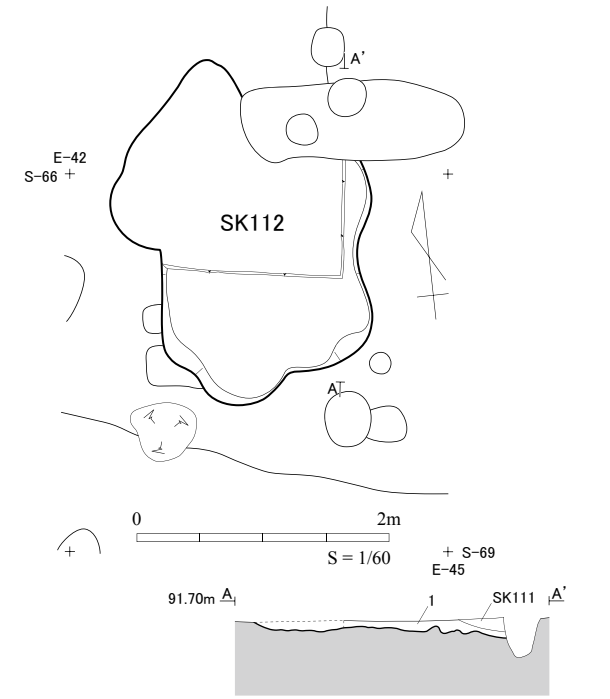
SK110　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR2/3 極暗褐	シルト	地山ブロックを含む（人為）
2	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックをきわめて多く含む（人為）
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山粒をきわめて多く含む（人為）



SK111　A-A'

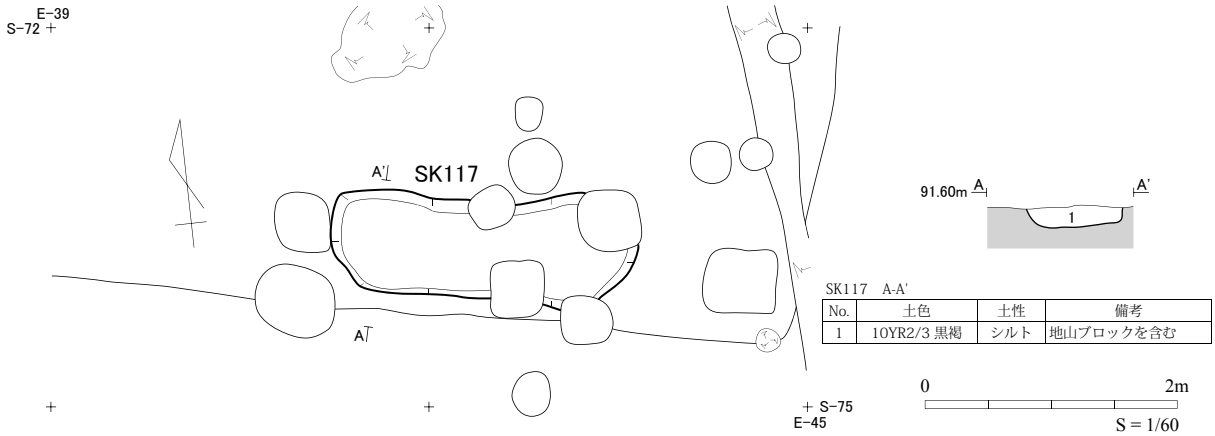
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	地山粒をわずかに含む



SK112　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

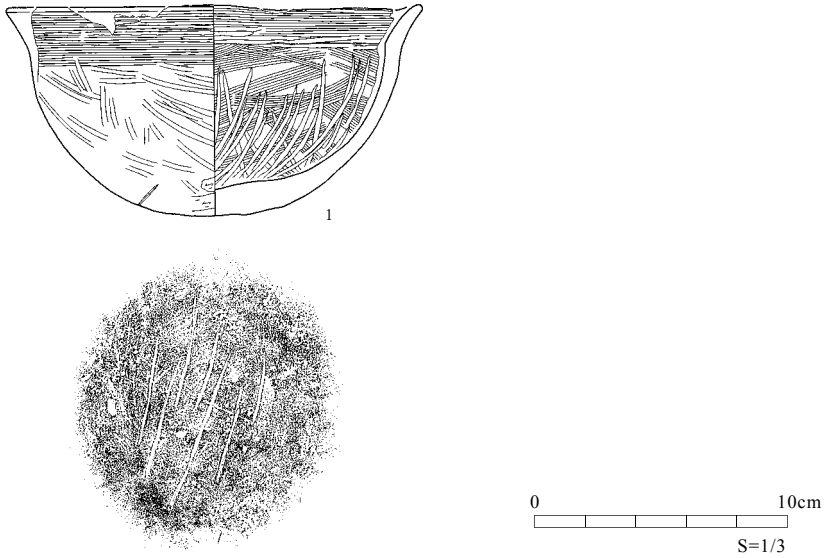
第 105 図　SK110・SK111・112 土坑



SK117　A-A'

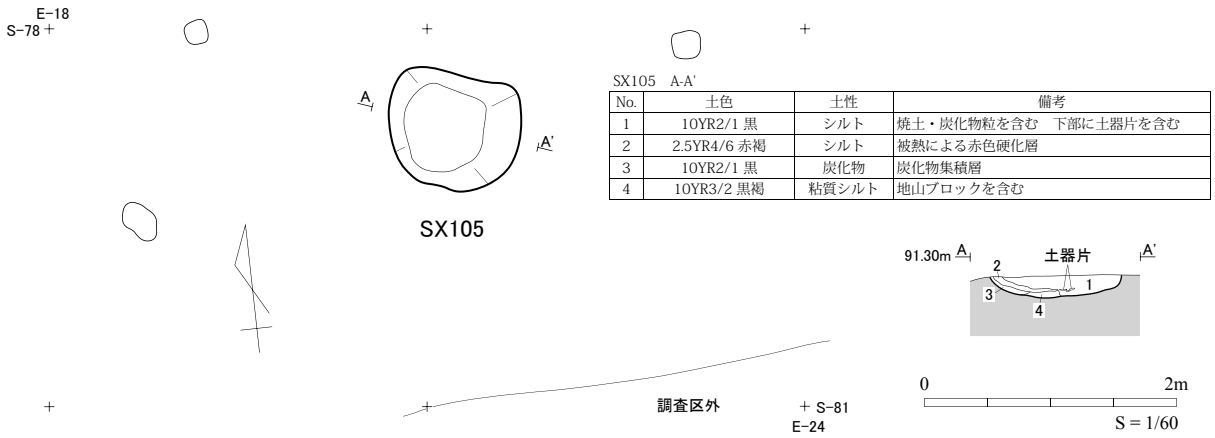
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ブロックを含む

第 106 図　SK117 土坑



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	SK117	堆積土	土師器	坏	内面：(体) ヘラナデ→ (口) ヨコナデ→ (体) ヘラミガキ, 外面：(口) ヨコナデ→ヘラミガキ, (底) 線刻	16.6	-	8.4	4/5	79	41-1

第 107 図　SK117 土坑出土遺物



SX105　A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	焼土・炭化物粒を含む　下部に土器片を含む
2	2.5YR4/6 赤褐	シルト	被熱による赤色硬化層
3	10YR2/1 黒	炭化物	炭化物集積層
4	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	地山ブロックを含む

第 108 図　SX105 焼成遺構

（7）焼成遺構

【SX105 焼成遺構】（第 108 図、写真図版 22 － 4 ～ 6）

〔位置・確認面〕4 区西部の平坦面に位置する。Ⅳ層上面で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 100cm、短軸 80cm の不整円形を呈する。断面形は深さ 22cm のＵ字形で、底面は皿状を呈する。

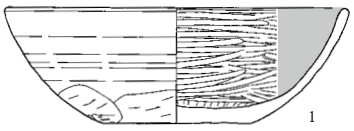
〔堆積土〕4 層に細分される。1 層は焼土粒・炭化物粒を含む黒色シルト、2 層は赤褐色の焼土層、3 層は炭化物集積層、4 層は地山ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。2 層上面は被熱による赤色硬化が認められ、焼け面を形成している。

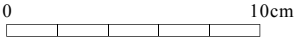
〔出土遺物〕堆積土 2 層上面～ 1 層下部より土師器甕・甑が出土した。被熱により破砕して小片となっている。土師器甕は 2 個体分が認められ、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にナデ調整、底部にケズリ調整を施す。土師器甑は 1 個体分が認められ、外面の胴部にナデ調整を施し、底部に直径 3.8cm の穿孔を施す。

（8）柱穴（第 39・109 図）

組み合わない柱穴のうち P102 確認面よりロクロ土師器坏（第 109 図 1）が出土した。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にロクロナデ調整を施し、底部は回転糸切の後にヘラケズリ調整を施す。

このほか、確認面、柱材抜き取り痕跡、堆積土、柱痕跡、掘方埋土より土師器坏・甕・小型品、須恵器高台付坏・甕、金属製品が出土した。土師器坏は各部位の破片があり、有段丸底で内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施す栗囲式とみられるもの、内外面にミガキ調整を施す南小泉式とみられるものがある。土師器甕は口縁部・胴部破片で外面にケズリ調整を施すもの、ハケメ調整を施すもの、内外面にナデ調整を施すもの、底部に木葉痕がみられるものがある。須恵器高台付坏は底部破片で内外面にロクロナデ調整を施す。須恵器甕は胴部破片で内面に平行アテ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。金属製品は小片で種類が不明である。





S=1/3

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整　・　特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	P102	確認面	ロクロ土師器	坏	内面：（底）放射状ヘラミガキ→（体）横方向ヘラミガキ→黒色処理， 外面：ロクロナデ→ヘラケズリ，（底）回転糸切→ヘラケズリ	（13.7）	5.8	4.7	2/3	78	41-2

第 109 図　柱穴跡出土遺物

５．その他の出土遺物

（１）土師器（第 110 図）

１区表土より土師器坏（第 110 図 3）、２区遺構確認面より土師器坏（第 110 図 2）、4 区遺構確認面より土師器坏（第 110 図 1）・高坏（第 110 図 5）・不明品（第 110 図 6）、4 区撹乱より土師器坏（第 110 図 4）が出土した。

1 は外面の体部と口縁部の境に段を持ち、内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にヘラミガキ調整を施す。2 は外面の体部と口縁部の境に痕跡的な段を持ち、内面にヘラミガキ→黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ調整を施す。3 は内面にヘラミガキ調整？→黒色処理、外面にヘラケズリ調整を施す。4 は内面にヨコナデ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラケズリ調整を施す。5 は坏部内面にヘラミガキ調整→黒色処理、脚部内面にナデ調整→ケズリ調整→ヘラミガキ調整、外面にヘラナデ調整→ヘラケズリ調整を施す。6 は内面にヘラナデ調整→盲孔、外面にヘラケズリ調整とハケメ調整を施す。

このほか、1 区表土より土師器甕、撹乱より土師器甕、遺構確認面より土師器坏・甕などが出土した。土師器坏は口縁部・底部破片があり、内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にヘラケズリ調整を施し国分寺下層式とみられるもの、体部破片で内面にヘラミガキ調整、外面にナデ調整またはケズリ調整を施し南小泉式とみられるものがある。土師器甕は各部位の破片があり、口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施し、頸部に段を持つものと持たないもの、痕跡的な段を持つものがある。また、底部に木葉痕を持つものがある。

２区遺構確認面より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は体部破片で内面にミガキ調整、外面にケズリ調整を施し南小泉式とみられるものがある。土師器甕は各部位の破片があり、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施し、頸部に段を持つものがある。

３区表土より土師器坏・甕、遺構確認面より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は各部位の破片があり、有段丸底で内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にヘラケズリ調整を施し栗囲式とみられる。土師器甕は口縁部・胴部破片で外面にハケメ調整を施すもの、ヘラケズリ調整を施すものがある。

4 区遺構確認面より土師器坏・甕など、撹乱より土師器坏・甕が出土した。土師器坏は口縁部・底部破片があり、有段丸底で内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施し栗囲式とみられるもの、内面にヘラミガキ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施し南小泉式とみられるものがある。土師器甕は胴部・底部破片で外面にケズリ調整を施すもの、ハケメ調整を施すものがある。

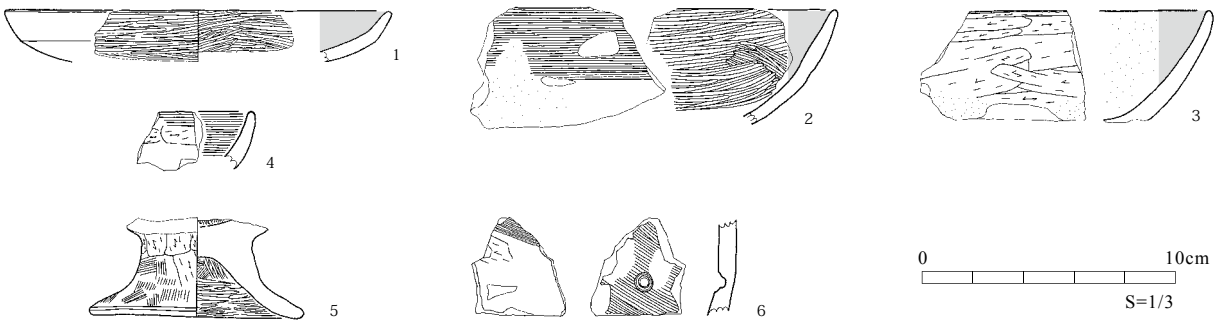
（２）ロクロ土師器（第 110 図）

１区表土よりロクロ土師器坏（第 110 図 7）、4 区遺構確認面よりロクロ土師器坏（第 110 図 8・9）が出土した。いずれも内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施し、8・9 は底部のヘラミガキ調整が放射状となる。8 は回転糸切→外面の体下部～底面にヘラケズリ調整を施し、外底面に墨書「人」？がみられる。9 は回転糸切→外面の体下部にヘラケズリ調整を施し、外底面に再調整を施さない。

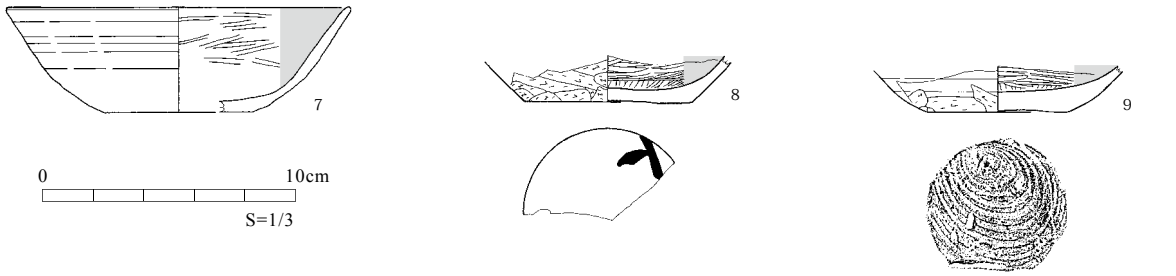
このほか、２区遺構確認面よりロクロ土師器坏、３区遺構確認面よりロクロ土師器甕、4 区遺構確認面よりロクロ土師器坏が出土した。ロクロ土師器坏は内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。ロクロ土師器甕は内外面にロクロナデ調整を施す口縁部破片、胴下部にケズリ調整を施し底部に回転糸切痕がみられる底部破片がある。

（３）須恵器（第 110 図）

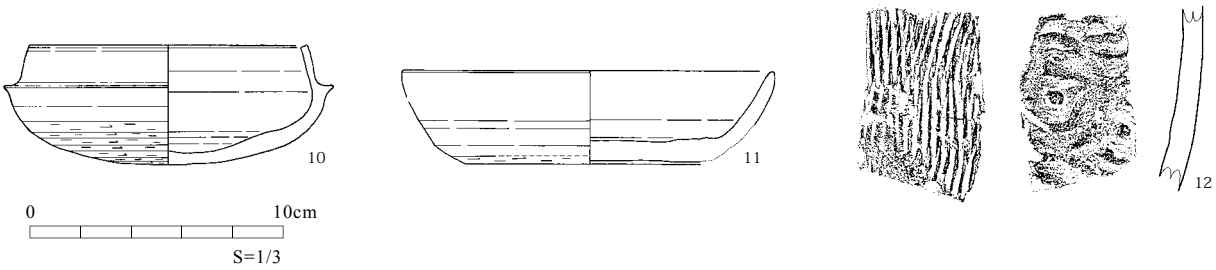
１区表土より須恵器甕（第 110 図 12）、３区遺構確認面より須恵器坏（第 110 図 11）、4 区遺構確認面より須恵器坏（第 110 図 10）が出土した。10 は丸底で体部から口縁部にかけて内傾し、外面の体部



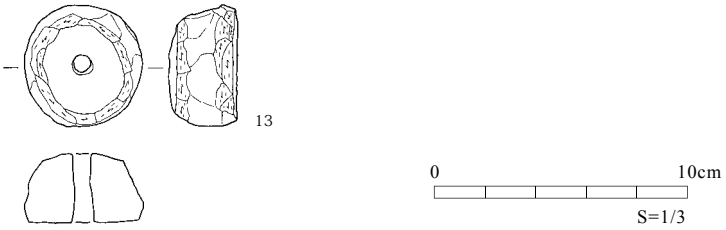
No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	4 区	確認面	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：ヘラミガキ	15.4	-	(2.0)	一部	66	41-3
2	2 区	確認面	土師器	坏	内面：ヘラミガキ→黒色処理，外面：(口）ヨコナデ	-	-	(4.8)	一部	49	41-4
3	1B 区	表土	土師器	坏	内面：ヘラミガキ？→黒色処理，外面：ヘラケズリ	-	-	4.4	一部	72	41-5
4	4 区	攪乱	土師器	坏	内面：ヨコナデ，外面：ヨコナデ→ヘラケズリ	-	-	(2.3)	一部	69	41-7
5	4 区	確認面	土師器	高坏（脚部）	内面：(坏）ヘラミガキ→黒色処理，(脚）ナデ→ケズリ→ヘラミガキ，外面：(脚）ヘラナデ→ヘラケズリ	-	8.5	(4.0)	一部	67	41-8
6	4 区	確認面	土師器	不明	内面：ヘラナデ→盲孔，外面：ヘラケズリ・ハケメ	-	-	(3.8)	一部	68	41-6



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
7	4 区	表土	ロクロ土師器	坏	内面：(体）ヘラミガキ→黒色処理，外面：ロクロナデ					19	41-9
8	4 区	確認面	ロクロ土師器	坏	内面：(底）放射状・(体）横方向ヘラミガキ→黒色処理，外面：ヘラケズリ，(底）回転糸切り→ヘラケズリ，(底）墨書「人」？	-	(6.6)	(1.9)	一部	64	41-10
9	4 区	確認面	ロクロ土師器	坏	内面：(底）放射状ヘラミガキ（体）横方向ヘラミガキ→黒色処理，外面：ロクロナデ→ヘラケズリ，(底）回転糸切り→無調整	-	5.6	(1.8)	一部	65	41-11

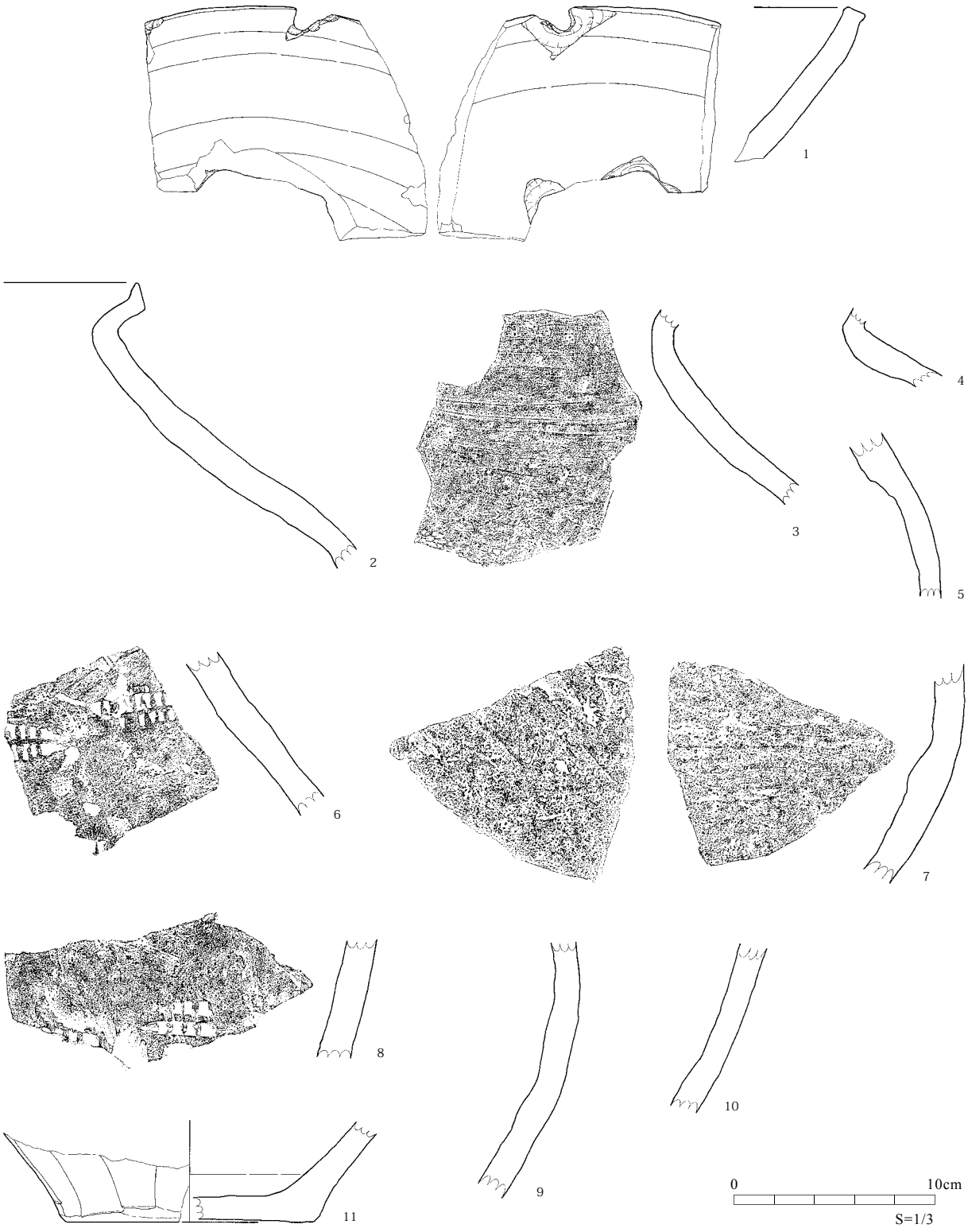


No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整 ・ 特徴	法量（cm）			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
10	4 区	確認面	須恵器	坏	内面：ロクロナデ，外面：(体）ロクロナデ→（体下～底）回転ヘラケズリ	(11.0)	-	4.7	1/4	63	42-1
11	3 区	確認面	須恵器	坏	内面：ロクロナデ，外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ，(底）切り離し不明→回転ヘラケズリ，焼成不良・外面（体下）焼けはじけ著しい	14.8	9.8	3.7	2/3	76	42-2
12	1B 区	表土	須恵器	甕	内面：同心円文アテ具痕，外面：平行タタキ目	-	-	-	一部	20	42-3



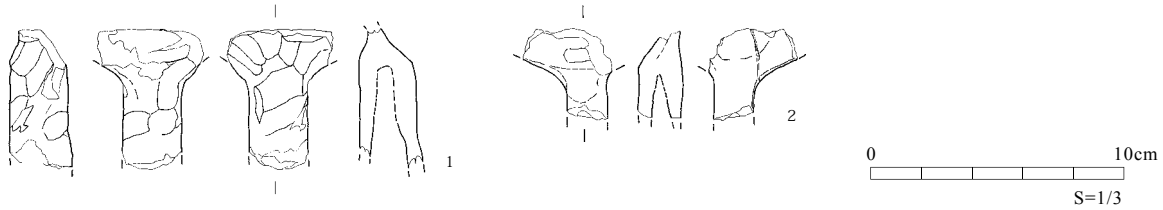
No.	遺構名	層位	種類	特徴	法量（mm）				登録	写真
					長	幅	厚	重（g）		
13	3 区	攪乱（SI207 を壊す）	紡錘車	土製，孔径 9mm，ナデ→ケズリ	48	47	27	67.5	231	42-4

第 110 図　その他の出土遺物（1）　土師器・ロクロ土師器・須恵器・土製品

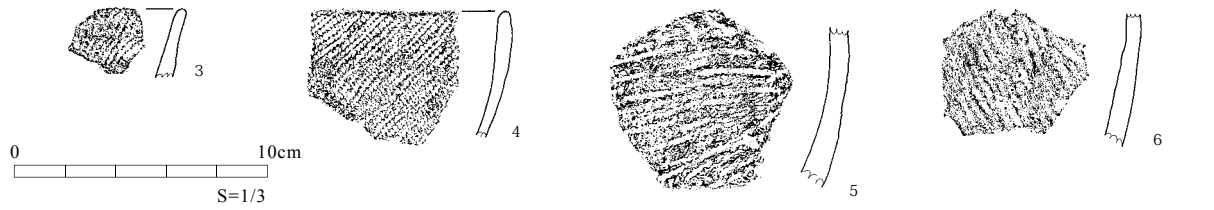


No.	遺構名	層位	種類	器種	部位	器面調整　・　特徴	残存	登録	写真
1	４区	攪乱	中世陶器	擂鉢	口縁部	内外面：ロクロナデ，破損後再加工？，残存高 7.7cm	一部	115	42-5
2	1B区	表土	中世陶器	甕	口縁部～胴上部	内外面：ナデ，残存高 14.2cm，常滑編年４型式	一部	101	42-6
3	４区	攪乱	中世陶器	甕	口縁部～胴上部	内外面：ナデ	一部	114	42-7
4	２区	確認面	中世陶器	甕	頸部	内面：ナデ，外面：不明，自然釉？	一部	109	42-8
5	1B区	表土	中世陶器	甕	胴上部	内外面：ナデ	一部	102	42-9
6	４区	攪乱	中世陶器	甕	胴上部	内面：ナデ，外面：ナデ→細格子押印	一部	116	43-1
7	４区	確認面	中世陶器	甕	胴下部	内外面：ナデ	一部	111	43-2
8	４区	確認面	中世陶器	甕	胴下部	内面：ナデ，外面：ナデ→格子状押印	一部	110	43-3
9	1B区	表土	中世陶器	甕	胴下部	内面：ナデ，外面：ヘラナデ	一部	103	43-4
10	４区	確認面	中世陶器	甕	胴下部	内外面：ナデ	一部	112	43-5
11	４区	攪乱	中世陶器	甕	底部	内面：ナデ（回転による），外面：ヘラナデ，残存高 12.4cm	一部	113	43-6

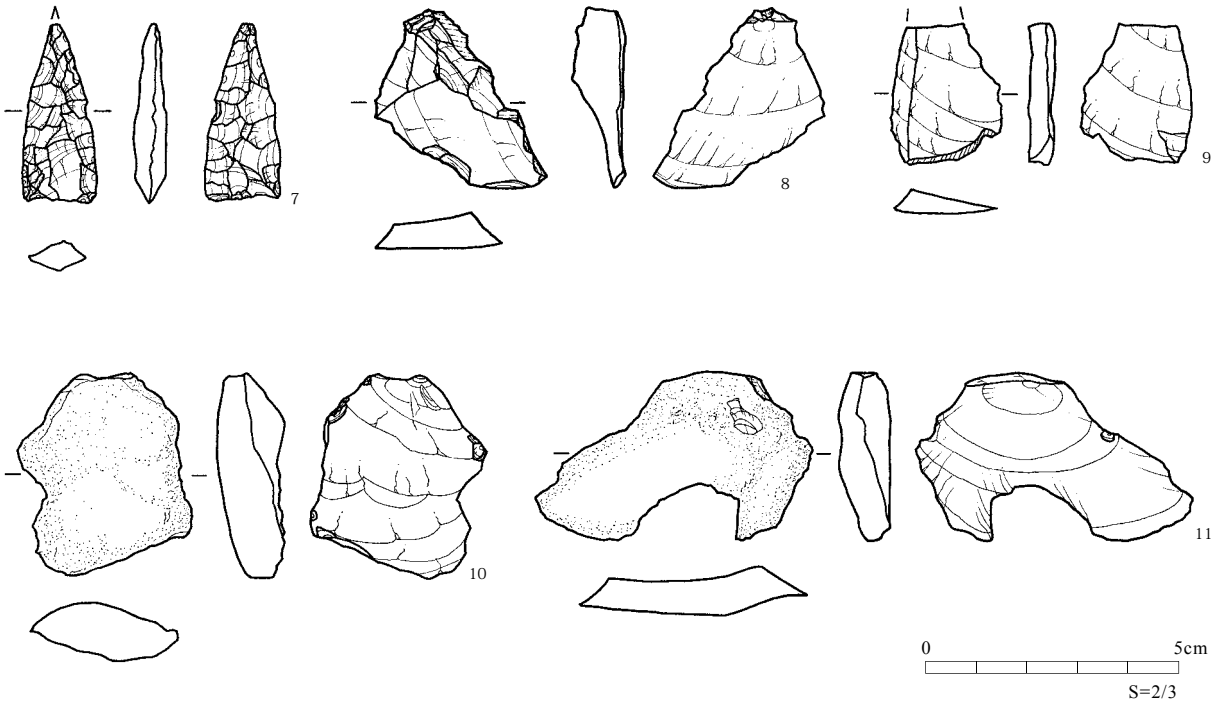
第 111 図　その他の出土遺物（2）　中世陶器



No.	遺構名	層位	種類	器種	特徴	登録	写真
1	3 区	表土	陶器	焙烙	把手基部破片，残存長 5.6cm，把手部径 2.3cm	108	43-8
2	1B 区	表採	陶器	焙烙	把手基部破片，残存長 3.5cm，把手部径 1.7cm	106	43-7



No.	遺構名	層位	種類	器種	特徴	器厚（mm）	登録	写真
3	SI207	住居掘方埋土	縄文土器	深鉢	外面：縄文（LR?），内面：ナデ，内外面：磨滅	6.0	122	44-1
4	SI10	堆積土	縄文土器	深鉢	外面：縄文（LR），内面：ナデ	6.0	125	44-2
5	4 区	確認面	縄文土器	深鉢	外面：撚糸文（LR），内面：ナデ，内外面：磨滅	10.0	124	44-3
6	1A 区	確認面	縄文土器	深鉢	外面：縄文（LR），内外面：磨滅	8.0	121	44-4



No.	遺構名	層位	種類	石材	特徴	法量（mm）				登録	写真
						長	幅	厚	重（g）		
7	SI3a	堆積土	石鏃	流紋岩	平基無茎石鏃，先端欠損，両側縁は緩やかに外弯，下半部は基部からの長く平坦な調整によって厚みが薄くなる	23.1	9.8	3.3	0.7	144	44-5
8	SI1	K1 堆積土	二次加工剥片	頁岩	縦長剥片素材，左側縁下半部の背面側に二次加工，末端ヒンジフラクチャー，背面右半部の調整剥離の後，打面転位を行なって本剥片を剥離	38.7	23.3	10.2	7.3	141	44-6
9	SI2	確認面	剥片	凝灰岩	打面欠損，背面の稜は左側縁と平行，背面末端に礫面を残す	30.2	20.8	5.3	3	142	44-7
10	SK6	確認面	剥片	メノウ	末端がステップとなる剥片，単剥離打面，背面は転礫面，バルブが発達，主剥離面中央にメノウの同心円構造がみられる	41.1	35.1	13.5	16.6	145	44-8
11	SI2	堆積土	剥片	珪質頁岩	末端が大きく内湾，背面は転礫面，単剥離打面，バルブが発達	51.6	45.7	7.5	9.2	143	44-9

第 112 図　その他の出土遺物（3）　近世陶器・縄文土器・石器

と口縁部の境に段を持ち、口唇部に弱い段を持つ。内外面にロクロナデ調整を施し、外面の体下部～底部に回転ヘラケズリ調整を施す。11 は底部の切り離し方法が不明で外底面に回転ヘラケズリ調整を施す。12 は内面に同心円文アテ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。10 は陶邑田辺編年（田辺 1966・1981）Ⅱ期 MT15 型式、陶邑中村編年（中村 1978・1981）Ⅱ型式 1 段階に該当し、6 世紀前半頃と考えられる。大崎市名生館遺跡 SK48 土坑出土土器（宮城県多賀城跡調査研究所 1986）、山形県中山町物見台遺跡出土土器（山形県教育委員会 1987）、福島県いわき市朝日長者遺跡第 41 号住居跡出土土器（いわき市教育委員会 1981）などに類例がみられるが、東北地方に窯跡は未発見である。11 は大和町鳥屋窯跡三角田南地区 1 号窯跡出土土器（東北学院大学考古学研究部 1975）、大崎市日の出山窯跡 C 地点 3 号竪穴住居跡出土土器（色麻町教育委員会 1993）、福島県相馬市善光寺遺跡 9 号窯跡（福島県教育委員会 1989）などに類例がみられる。鳥屋 1 号窯跡は 8 世紀第 1 四半期、日の出山 3 号住居跡・善光寺 9 号窯跡は 8 世紀第 2 四半期に位置づけられていることから、概ね 8 世紀前半頃と考えられる。

このほか、1 区表土より須恵器甕、1 区遺構確認面より須恵器坏・甕などが出土した。須恵器坏は底部破片で底面に回転ヘラ切痕がみられる。須恵器甕は胴部破片で内面に同心円文アテ具痕、外面に平行タタキ目がみられるもの、格子タタキ目がみられるもの、内外面にナデ調整を施すものがある。ほかに体部破片で内外面にロクロナデ調整を施す須恵器がある。また、3 区表土より須恵器坏・甕、遺構確認面より須恵器坏・甕が出土した。須恵器坏は口縁部破片で内外面にロクロナデ調整を施すもの、底部に回転ヘラ切り痕のみられるものがある。須恵器甕は口縁部・胴部破片で内外面にロクロナデ調整を施すもの、内面にナデ調整を施し、外面に平行タタキ目がみられるものがある。4 区では遺構確認面より須恵器甕など、撹乱より須恵器坏・甕が出土した。須恵器坏は底部破片で内面にロクロナデ調整、外底面に回転糸切痕がみられる。須恵器甕は胴部・頸部破片で内面にヨコナデ調整を施し、外面に平行タタキ目がみられるもの、内面に同心円文アテ具痕、外面に平行タタキ目がみられるものがある。

（４）土製品（第 110 図）

3 区の SI207 竪穴住居跡を壊す撹乱より土製紡錘車（第 110 図 13）が出土した。ナデ調整の後、側面の上下端にケズリ調整を施す。中央に径 9mm の貫通孔がみられる。

（５）中世陶器（第 111 図）

1 区表土より甕（第 111 図 2･5･9）、2 区遺構確認面より甕（第 111 図 4）、4 区遺構確認面より甕（第 111 図 7・8・10）、4 区撹乱より甕（第 111 図 3・6・11）、擂鉢（第 111 図 1）が出土した。1 は内外面にロクロナデ調整を施し、破損後に剥離による再加工？が施されている。2 ～ 11 は内外面にナデ調整を施し、11 は内面に回転によるナデ調整を施す。6・8 は格子状押印がみられる。

（６）近世陶器（第 112 図）

1 区・3 区表土より焙烙（第 112 図 1・2）が出土した。いずれも把手基部の破片である。

（７）縄文土器（第 112 図）

1 区遺構確認面、3 区 SI207 竪穴住居跡の住居掘方埋土、4 区遺構確認面、4 区 SI10 竪穴住居跡の堆積土から縄文土器（第 112 図 3 ～ 6）が出土した。いずれも小破片で磨滅がみられる。深鉢の口縁部・胴部破片があり、縄文（LR）、撚糸文（LR）を施文するものがある。

（８）石器（第 112 図）

1 区 SI1 竪穴住居跡 K1 の堆積土 2 層より二次加工剥片（第 112 図 8）、SI2 竪穴住居跡確認面より剥片（第 112 図 9）、堆積土より剥片（第 112 図 11）、SI3 竪穴住居跡 SI3a の堆積土より石鏃（第 112 図 7）、SK6 土坑の確認面より剥片（第 112 図 10）が出土した。7 は流紋岩製の平基無茎で、先端部を欠損する。8 は頁岩製で左側縁下半部の背面側に二次加工を施す。9 は凝灰岩製、10 はメノウ製、11 は珪質頁岩製で、10・11 は背面に転礫面をもつ。

第 5 章　自然科学的分析

第 1 節　窪田遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1．測定対象試料

窪田遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字田中（北緯 38° 7′ 23″、東経 140° 41′ 9″）に所在し、円田盆地北西部の低平な舌状丘陵上に立地する。測定対象試料は、SI1 竪穴住居跡 P3 柱穴出土柱材（1：IAAA-103282）、同 P4 柱穴出土柱材（2：IAAA-103283）の合計 2 点である（第 3 表）。この竪穴住居跡から出土した土器は、その型式学的特徴から 7 世紀末～ 8 世紀前葉頃と推定されている。

2．測定の意義

遺構および土器型式の年代を理化学的分析によって明らかにする。

3．化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
（2）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 3 表に記載する。
（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
（6）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4．測定方法

3MV タンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5．算出方法

（1）$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第 3 表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 3 表に、補正していない値を参考値として第 4 表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を四捨五入して 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を第 3 表に、補正していない値を参考値として第 4 表に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6．測定結果

SI1 竪穴住居跡出土試料の ^{14}C 年代は、P3 柱穴出土柱材 1 が 1220 ± 30yrBP、P4 柱穴出土柱材 2 が 1370 ± 30yrBP である。2 つの柱材は同じ住居跡に属するが、測定結果には年代差が認められる。暦年較正年代（1 σ）は、1 が 774 ～ 870cal AD、2 が 644 ～ 667cal AD の範囲で示され、出土土器について土器型式から推定されている年代観に対して 1 は新しく、2 はやや古い値となっている。

試料の炭素含有率はいずれも 60％弱で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

第 3 表　試料一覧および ^{14}C 年代

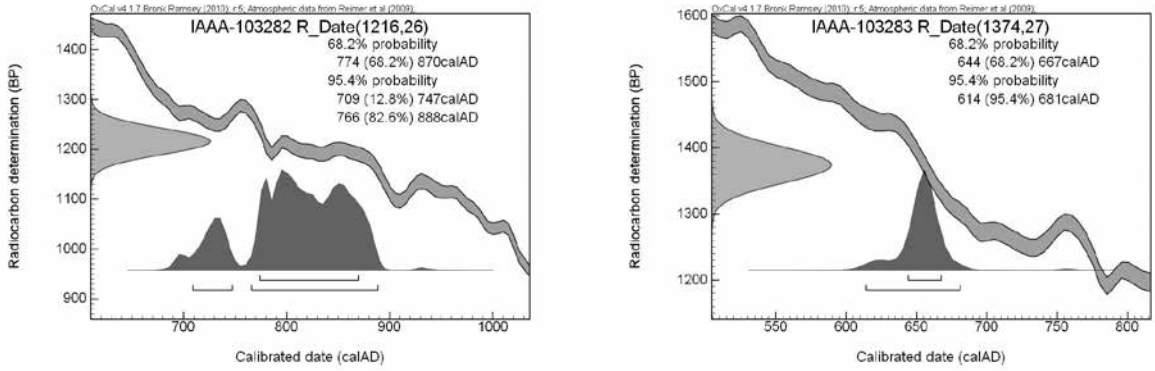
測定番号	試料名	採取場所（登録番号）	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-103282	1	SI1 竪穴住居跡 P3 柱穴　柱材	木片	AAA	-26.45 ± 0.52	1,220 ± 30	85.94 ± 0.28
IAAA-103283	2	SI1 竪穴住居跡 P4 柱穴　柱材	木片	AAA	-26.60 ± 0.43	1,370 ± 30	84.27 ± 0.29

［#4213］

第 4 表　^{14}C 年代と暦年較正年代

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-103282	1,240 ± 30	85.69 ± 0.27	1,216 ± 26	774calAD - 870calAD (68.2%)	709calAD - 747calAD (12.8%) 766calAD - 888calAD (82.6%)
IAAA-103283	1,400 ± 30	84.00 ± 0.28	1,374 ± 27	644calAD - 667calAD (68.2%)	614calAD - 681calAD (95.4%)

［参考値］



［参考］暦年較正年代グラフ

第 6 章　考　　察

第 4 章で記載した本遺跡の発掘調査結果を踏まえて、あらためて遺構と遺物について検討を加え、遺構の時期と変遷、遺跡の性格などについて考察する。なお、今回の発掘調査で確認した遺構と遺物は縄文時代から近世までのものがあるが、主体となるのは古墳・奈良・平安時代のものである。

第 1 節　遺物の特徴と編年的位置づけ

出土した遺物は、古墳・奈良・平安時代の土器類（土師器・ロクロ土師器・須恵器）が主体を占める。このほか、中世陶器、近世陶器、木製品（曲物・鋤）、漆器（椀）、鉄製品（鎌）、縄文土器、弥生土器、石器などがある。ここでは、古墳・奈良・平安時代の土器類のうち、出土状況などからある程度の一括性が認められる遺構出土土器について検討し、編年的な位置づけを試みることとする。

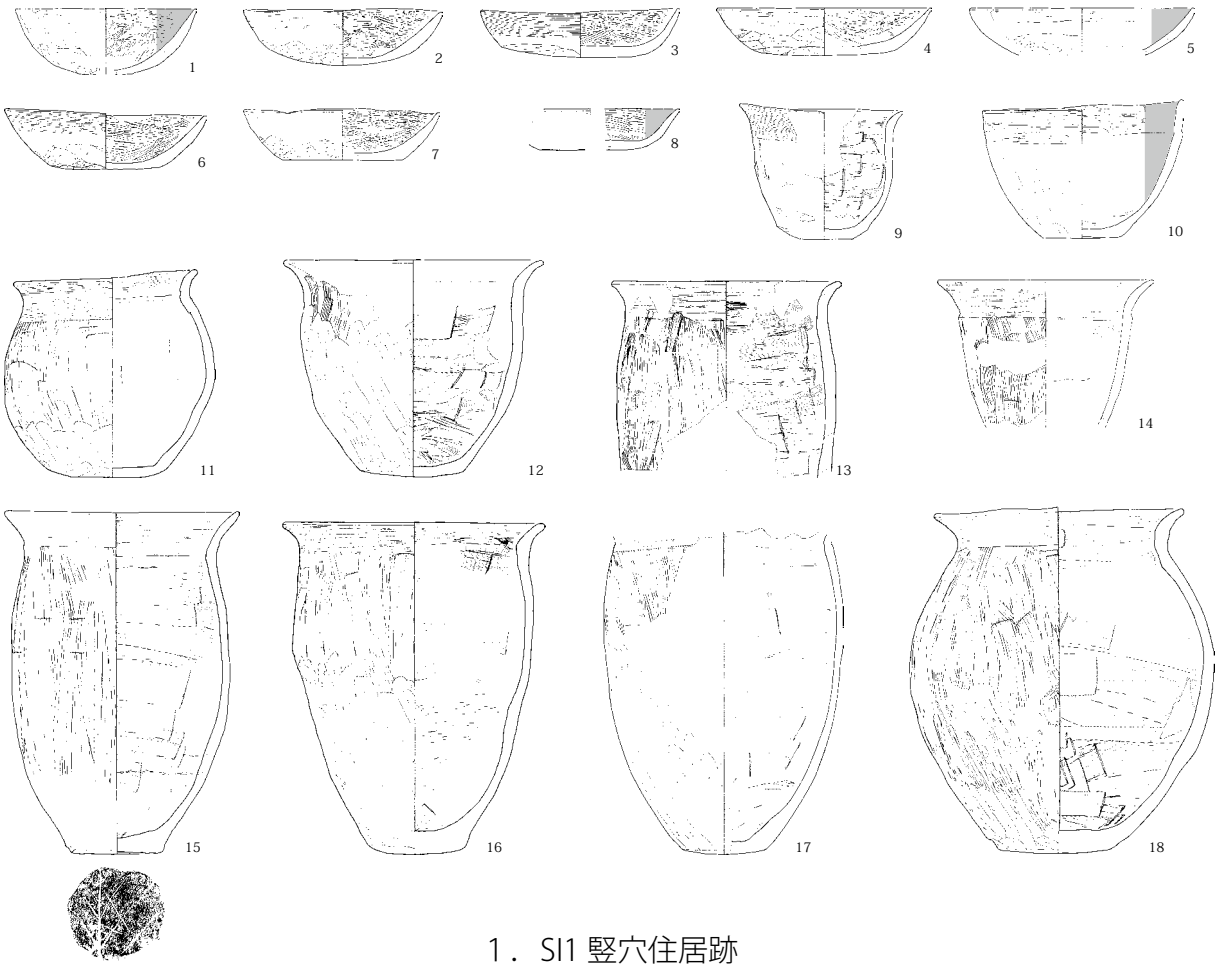
なお、検討にあたり古墳時代中期の土器編年については高橋誠明氏（1999）による宮城県の編年（以下高橋編年）、古墳時代後期～奈良時代の土器編年については、村田晃一氏（2007）による宮城県中・南部の編年（以下村田編年）、菅原祥夫氏（2007）による福島県の編年（以下菅原編年）などの先行研究を適宜参照することとする。

1．SI1 竪穴住居跡出土土器　（第 113 図 1）

確認面より土師器小型甕（9・14）、堆積土より土師器坏（1・5・8）・鉢（10）、カマド崩落土より土師器坏（2・7）、床面より土師器坏（3・4・6）・甕（13、15 ～ 18）・小型甕（11・12）が出土した。

土師器坏は厚手で重量感のあるものが多く、丸底（1・2）、平底風丸底（3 ～ 5・8）、平底（6・7）のものがある。いずれも外面の口縁部にヨコナデ調整、体部～底部にヘラケズリ調整を施す。内面の調整はヘラミガキ調整（2 ～ 4・7）、ヘラナデ調整（6）のみで黒色処理を施さないものが多く、ヘラミガキ調整（8）、ヨコナデ調整（5）の後に黒色処理を施すものが少数である。1 はヘラミガキ調整→黒色処理？を施す。土師器鉢（10）は内面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。外面は口縁部にヨコナデ調整、体部～底部にヘラケズリ調整を施し、頸部に段を持つ。外面の段に対応する位置の内面には屈曲がみられる。土師器小型甕は胴上部に最大径を持つもの（9・12・14）と中位に最大径を持つもの（11）がある。いずれも外面の口縁部にヨコナデ調整、体部に縦方向のハケメ調整を施し、11・12 は外面の下半部にヘラケズリ調整を施す。14 は外面の頸部に明瞭な段を形成するが、他は見られない。土師器甕は長胴のもの（13・15 ～ 17）と胴部が内弯し球胴状を呈するもの（18）がある。15 は外面の頸部に痕跡的な段を形成するが、他は見られない。外面の調整はいずれも口縁部にヨコナデ調整、胴部に縦方向のハケメ調整を施し、16・17 は下半部に縦方向のヘラケズリ調整、18 は下半部に縦方向のヘラケズリ調整→ヘラミガキ調整を施す。15 は外底面に木葉痕を持つ。

これらは器種構成とその形態的特徴から奈良時代の国分寺下層式（氏家 1967、桑原 1976）の範疇に含まれる。このうち、土師器坏類（1 ～ 8）は金属器模倣形態と考えられ、村田編年（宮城県中・南部）における器種分類で坏 G とされた平底あるいは平底風の坏に該当する。坏 G は村田編年 4 段階（7 世紀中頃～後半）から認められ、7 段階（8 世紀中頃～後半）で坏の主要器種となり、8 段階半ば（8 世紀後半）で急激に減って姿を消す。また、菅原編年（福島県浜通り地方南部）における器種分類では坏 G・



1．SI1 竪穴住居跡

2．SI3 竪穴住居跡

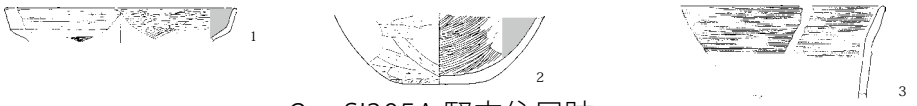
3．SI302 竪穴住居跡

4．SI207 竪穴住居跡

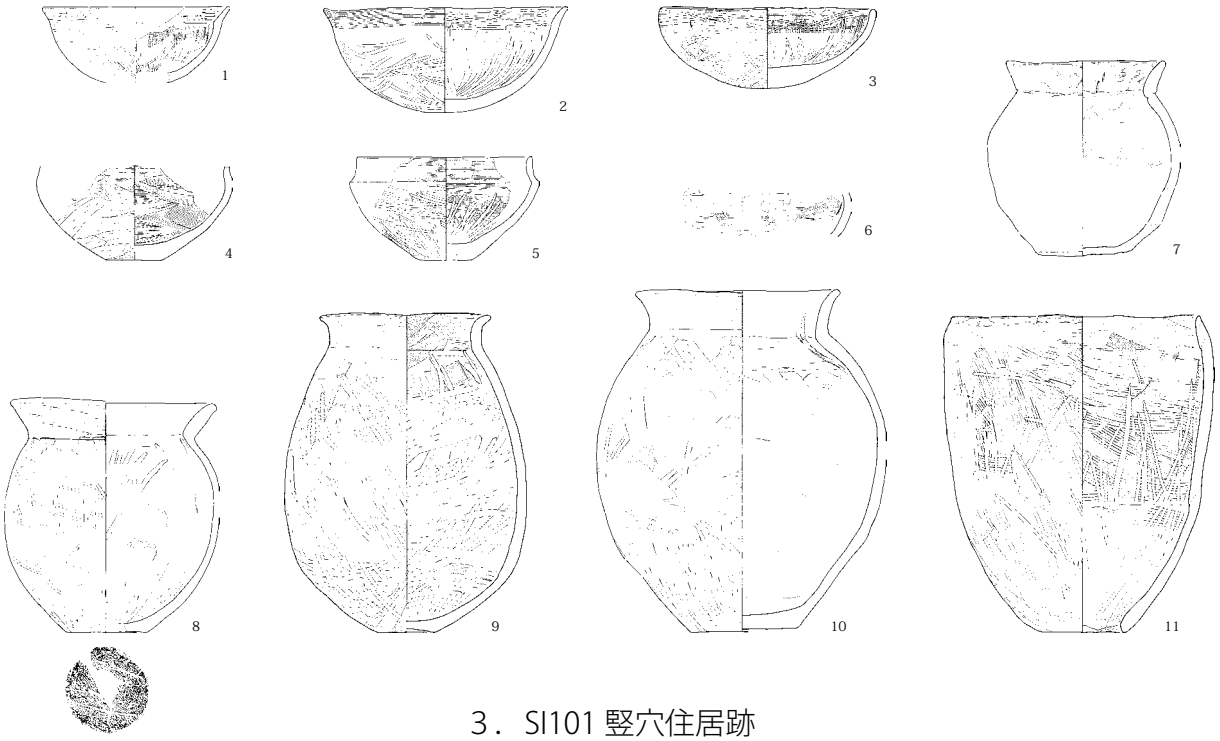
(S=1/6)

第 113 図　主な遺構出土土器（1）

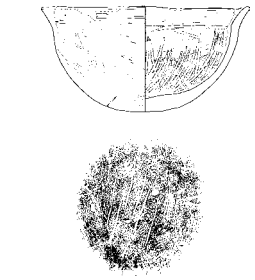
1．SI305B 竪穴住居跡



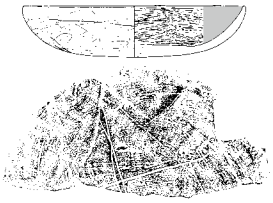
2．SI305A 竪穴住居跡



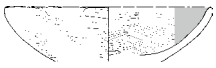
3．SI101 竪穴住居跡



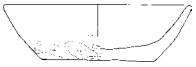
4．SK117 土坑



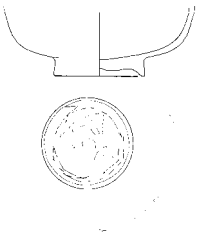
5．SI303 竪穴住居跡



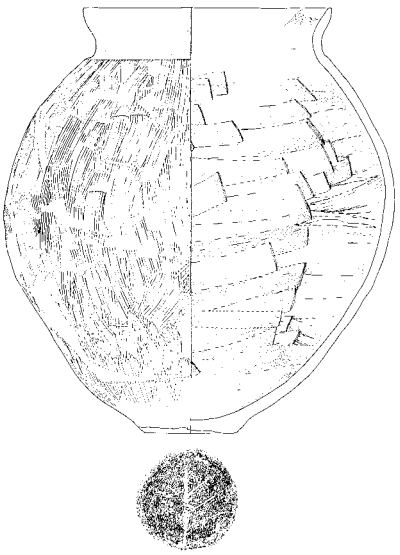
6．SI304 竪穴住居跡



7．SX208 水溜状遺構



8．SD7 溝跡



9．SE113 井戸跡

（S=1/6）

第 114 図　主な遺構出土土器（2）

Ｈとされた平底あるいは平底風の坏に該当する。菅原編年Ⅴ期末（7 世紀後半）に出現し、ロクロ土師器に転換する直前の 8 世紀後半まで確認できる。平底器形の特徴はロクロ土師器に引き継がれている。鉢類（10）は村田編年 1 ～ 6 段階（5 世紀末～ 8 世紀前半）に認められる鉢Ｂに該当し、頸部に段を形成する点で古相を示す。小型甕類（9・11・12・14）は村田編年 1 ～ 7 段階（5 世紀末～ 8 世紀後半）に認められる甕 C1･C2 に該当し、頸部に段を形成するものが少数ある。甕類は村田編年 2 ～ 8 段階（6 世紀中葉～ 9 世紀初頭）に認められる甕 A2（15）、6 ～ 8 段階（8 世紀前半～ 9 世紀初頭）に認められる甕 A5（16・17）に該当し、いずれも 7 段階の主要器種とされている。また、球胴状で外面の胴部にハケメ調整、胴部下半にヘラケズリ調整→ヘラミガキ調整を施すもの（18）が認められる。

土師器坏類の特徴に着目してこれらの類例を求めると、加美町壇の越遺跡 SI1280 住居跡出土土器（加美町教育委員会 2004）、大崎市名生館官衙遺跡 SK1529 土坑出土土器（古川市教育委員会 2004）、東松島市赤井遺跡 SB418 建物跡（矢本町教育委員会 2001）、利府町硯沢窯跡Ｂ地区 4 号住居跡（宮城県教育委員会 1987）、蔵王町堀の内遺跡 14 号竪穴住居跡（蔵王町教育委員会 1997）、福島県いわき市五反田Ａ遺跡 1 号竪穴住居跡・ 1 号溝跡出土土器（いわき市教育委員会 1999）、福島県相馬市明神遺跡 1 号住居跡（福島県教育委員会 2006）、福島県南相馬市の原町火力発電所関連遺跡金沢地区のⅡ・Ⅲ群土器（福島県教育委員会 1995）などが挙げられる。名生館官衙 SK1529 土坑は 7 世紀末～ 8 世紀初頭、堀の内 14 号住居跡は 7 世紀末～ 8 世紀前半、五反田Ａ 1 号住居・1 号溝跡は 8 世紀第 1 四半期、硯沢Ｂ 4 号住居跡は 8 世紀第 2 四半期、赤井 SB418 建物跡は 8 世紀前葉、壇の越 SI1280 住居跡・明神 1 号住居跡は 8 世紀中葉に、また金沢Ⅱ群土器は 7 世紀末～ 8 世紀第 1 四半期、Ⅲ群土器は 8 世紀中葉前半に位置づけられており、7 世紀末～ 8 世紀中葉の年代幅の中で捉えられる。

なお、土師器坏類のうち 2 ～ 4・6・7 は内面がヘラミガキ調整で仕上げられ黒色処理を施さない。内面に黒色処理を施す在地土師器の特徴とは異なり、いわゆる関東系土師器の範疇で捉えられる可能性がある。同様の特徴を持つものは上述の類例のうち、名生館官衙 SK1529 土坑、赤井 SB418 建物跡、堀の内 14 号住居跡にみられる。また、甕類のうち 18 は胴部にハケメ調整を施す点で在地土師器の特徴を持つが、胴部下半のヘラミガキ調整は在地土師器には見られない調整技法である。また、球胴状の器形も坏類の特徴から求められる 7 世紀末以降の在地土師器の器種構成には一般的でない。類例としては、前述の金沢Ⅱ群土器に位置づけられる南相馬市大船迫Ａ遺跡 17 号住居跡出土土器（いわき市教育委員会 1999）がある。胴部下半の内外面にヘラミガキ調整を施すもので、常総型甕を祖型とする関東系土師器と考えられている。

以上のことから、SI1 竪穴住居跡出土土器は 7 世紀末～ 8 世紀中葉の年代幅の中で捉えられ、関東系土師器の特徴を加味すれば 7 世紀末～ 8 世紀前葉を中心とした時期に位置づけられよう[註 1）]。

註 1）SI3 竪穴住居跡 P3･P4 柱穴出土柱材を試料として実施した AMS 法による放射性炭素年代測定の結果（第 5 章）では、暦年較正値で P3 柱材が 774 ～ 870cal AD、P4 柱材が 644 ～ 667cal AD と示された。土器の年代観からみれば、P3 柱材は新しく、P4 柱材はやや古い値となっている。P4 柱材の年代については古木効果（註 2）の影響が考えられる。P3 柱材の年代については、本土器群の年代が 8 世紀後半頃まで降る可能性を示すものではあるが、P4 柱材に古木効果を考慮しても両者の年代的隔たりは大きく、竪穴住居において同時に機能した柱材の年代としては不適当であると考えられる。このため、現段階では土器群の特徴から導き出された年代観に従う。

註 2）木材の貯蔵や再利用などにより、測定結果が示す木材の伐採年代が遺構の構築年代よりも著しく古い値となる現象。また、年輪を形成しながら長期にわたって成長する樹木の特性上、芯部の方が樹皮側の年輪より古い炭素情報を記録しているため、加工材の場合は使用部位によって伐採年代よりもさらに古い年代を示すことがある。

2．SI3 竪穴住居跡出土土器（第 113 図 2）

住居掘方埋土より土師器坏(1 ～ 3)･壺(5)が出土した。住居堆積土より出土した土師器坏(第 19 図 4)は混入とみられる。1 ～ 3 は有段丸底で内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。外面の調整は口縁部にヨコナデ調整、体部～底部にヘラケズリ調整を施す。4 は球胴で口縁部が外傾する。外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にハケメ調整を施し、頸部に痕跡的な段を持つ。

これらは、坏類の形態的特徴から古墳時代後期の栗囲式（氏家 1957）の範疇に含まれる。土師器坏類は村田編年における器種分類で坏Ｂあるいは坏Ｄとされた有段丸底坏であり、細部の特徴は村田編年 4 段階（7 世紀中頃～後半）との共通性が高い。

以上のことから、SI3 竪穴住居跡出土土器は 7 世紀中頃～後半に位置づけられる。

3．SI302 竪穴住居跡出土土器（第 113 図 3）

住居堆積土よりロクロ土師器甕（4）、床面よりロクロ土師器坏（1）、K5 床下土坑堆積土より土師器甕（5）､須恵器坏（3）､カマド燃焼部底面に当たる位置の住居掘方底面よりロクロ土師器坏（2）･甕（6）、須恵器甕（7）が出土した。

1・2 は内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す。1 は体下部～底面の磨滅が著しく切り離し方法と再調整の有無は不明である。3 はヘラ切り？→ナデ調整を施す。4 は口縁部の内外面にロクロナデ調整を施す。5 は外面の下半部に縦方向のケズリ調整、外底面は木葉痕の後にケズリ調整を施す。6 は外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整の後にケズリ調整を施す。5 の胴部～底部、6 の胴部に粘土の固着がみられる。7 は内面に同心円文アテ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。

これらは、ロクロ調整の土師器坏・甕を含むことから、平安時代の表杉ノ入式（氏家 1957・1967）の範疇に含まれる。このうち、ロクロ土師器坏は村田編年における器種分類で坏Ｈ２とされたものに該当する。口径に対する器高の割合が高く逆台形を呈し、須恵器坏とも器形が類似している。坏Ｈは非ロクロ成形の平底坏の形や法量を踏襲しながら製作にロクロを導入したものとされ、村田編年 7 段階（8 世紀中頃～後半）に出現し、8 段階（8 世紀末～ 9 世紀初頭）の主要器種である。また、須恵器坏は利府町大貝窯跡 1 号・16 号窯跡出土土器（利府町教育委員会 2004)、山元町北名生東窯跡出土土器（宮城県教育委員会 1991)、福島県いわき市金山窯跡Ｂ地区出土土器（熊谷・原川 1977）などに類例がみられる。北名生東窯跡は 8 世紀第 4 四半期、大貝 1 号・16 号窯跡、金山Ｂ窯跡地区は 8 世紀第 4 四半期～ 9 世紀第 1 四半期に位置づけられている。

以上のことから、SI302 竪穴住居跡出土土器は 8 世紀末～ 9 世紀初頭に位置づけられる。

4．SI305B 竪穴住居跡出土土器（第 114 図 1）

確認面より土師器坏（3)、住居内堆積土より土師器坏（1)･鉢（4)、カマド崩落土より土師器坏（2)･甕（6)､床面より土師器鉢（5）が出土した。床面より出土した土師器坏（第 53 図 3）は混入とみられる。

1 は平底で外面の体部下端に段を持ち、口縁部が内弯気味に立ち上がる。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部下端～底部にヘラケズリ調整を施す。2 は口縁部まで内弯して立ち上がり、体部外面に痕跡的な段を持つ。内面にヘラミガキ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部～底部にヘラミガキ調整を施す。3 は口縁部が内弯し、内外面にヨコナデ調整を施す。4 は口縁部が内傾し、内外面にヨコナデ調整、外面の体部にケズリ調整を施す。5 は内面にヘラナデ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部に縦方向のハケメ調整、底部にケズリ調整を施す。6 は内面にハケメ調整

の後にナデ調整、外面の胴部にハケメ調整を施す。

これらは器種構成とその形態的特徴から奈良時代の国分寺下層式（氏家 1957・1967）の範疇に含まれる。このうち、土師器坏は蔵王町堀の内遺跡 11 号竪穴住居跡出土土器（蔵王町教育委員会 1997）などに類例がみられる。堀の内 11 号住居跡は 7 世紀末～ 8 世紀前半に位置づけられている。村田編年における器種分類では坏 C とされた有段丸底坏あるいは坏 F とされた盤状坏に該当し、細部の特徴は村田編年 6 段階（8 世紀前半）との共通性が高い。

以上のことから、SI305B 出土土器は 8 世紀前半に位置づけられる。

なお、土師器坏のうち 3 は内面がヨコナデ調整によって仕上げられており、内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施す在地土師器の調整技法とは異なる。このような特徴を持つ土器は蔵王町六角遺跡 SI91・SI210 竪穴住居跡出土土器（蔵王町教育委員会 2008）などに類例があり、関東系土師器と考えられる。

5．SI305A 竪穴住居跡出土土器 （第 114 図 2）

周溝堆積土より土師器甕（3）、K2 床下土坑堆積土より土師器大型坏（2）、住居掘方埋土より土師器高坏（1）が出土した。住居掘方埋土より出土した小型壺（第 56 図 4）は混入とみられる。1 は体部に屈曲を持つ。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にナデ調整を施す。

これらは、高坏の形態的特徴などから古墳時代後期の栗囲式（氏家 1957）の範疇に含まれる。高坏？は坏部の形態が村田編年における器種分類で高坏 D とされたものに類似する。大型坏は金属器模倣形態と考えられ、村田編年で椀 B とされたものにそれぞれ類似する。高坏 D は村田編年 4 ～ 5 段階（7 世紀中頃～ 8 世紀初頭）、椀 B は村田編年 4 段階～ 7 段階（7 世紀中頃～ 8 世紀後半）に認められる。

以上のことに加えて、SI305B 竪穴住居跡出土土器との連続性を考慮すれば、SI305A 竪穴住居跡出土土器は 7 世紀末～ 8 世紀初頭（村田編年 5 段階）に位置づけられよう。

6．SI207 竪穴住居跡出土土器 （第 113 図 4）

確認面より須恵器坏（2）、P1c 柱穴柱材抜き取り痕跡より土師器甑（4）、P1b 柱穴柱材抜き取り痕跡より土師器坏（1）、住居掘方埋土より土師器鉢（3）が出土した。1 は口縁部まで外傾気味に立ち上がる。内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施す。2 は切り離し方法が不明で外底面にヘラケズリ調整を施す。3・4 は外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にハケメ調整を施す。

このうち、須恵器坏は仙台市大蓮寺窯跡 5 号窯跡出土土器（仙台市教育委員会 1993）、福島県いわき市五反田 A 遺跡 1 号住居跡出土土器（いわき市教育委員会 1999）などに類例がみられ、いずれも 8 世紀第 1 四半期に位置づけられている。土師器坏・鉢・甑は奈良時代の国分寺下層式（氏家 1967・桑原 1976）の範疇に含まれるものであろう。

以上のことから、SI207 竪穴住居跡出土土器は 8 世紀初頭に位置づけられる。

7．SI101 竪穴住居跡出土土器 （第 114 図 3）

住居内堆積土より土師器坏（1）・壺（6）、床面より土師器坏（2 ～ 4）・甕（9・10）・小型甕（7・8）・甑（11）、住居掘方埋土より土師器坏（5）が出土した。

1・2 は丸底で体部と口縁部の境に屈曲を持つ。体部が内弯し、口縁部が短く外反する。1 は内面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラナデ調整→放射状ミガキ調整を施し、外面にケズリ調整→ヘラミガキ調整を施す。2 は内面の口縁部に横方向のヘラミガキ調整、体部に放射状ヘラミガキ調整を施し、外

面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラケズリ→ヘラミガキ調整を施す。3 は丸底で底部が厚く、体部から口縁部まで内弯する。内面の口縁部にヨコナデ調整→横方向のヘラミガキ調整、体部に放射状ヘラミガキ調整を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、底部にヘラケズリ調整、体部にヘラミガキ調整を施す。体部に線刻「×」？がみられる。4 は平底で体部が内弯する。内面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラナデ調整を施し、外面の体部～底部にヘラケズリ調整、口縁部にヨコナデ調整を施す。5 は平底で体部と口縁部の境に屈曲を持つ。体部が内弯気味に外傾し、口縁部が外反気味に直立する。内面の口縁部にヨコナデ調整→体部にヘラナデ調整→放射状ヘラミガキ調整を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部に放射状→横方向のヘラミガキ調整を施す。6 は内面にヘラナデ調整、外面にナデ→ヘラミガキ調整を施す。7・8・10 は胴部中位に最大径を持つ。9 は胴部下位に最大径を持ち、底部径が小さい。頸部が直立し口縁部が短く外反する。7・10 は胴部外面、8・9 は胴部内外面にヘラミガキ調整を施す。11 は無底式で内外面にハケメ調整→ヘラミガキ調整を施す。

これらは器種構成とその形態的特徴から古墳時代中期の南小泉式あるいは引田式（氏家 1957）の範疇に含まれる。このうち、1 は高橋編年における器種分類で坏 B2、2 は坏 B1、3 は坏 D、9 は甕 C、10 は甕 A に該当し、その形態的特徴などから SI101 竪穴住居跡出土土器は高橋編年Ⅱ－ 2 段階に位置づけられる。吾妻俊典氏（2003）による編年では土器組成 3 とされた土器群であり、山元町合戦原遺跡（宮城県教育委員会 1991）において南小泉式新段階とされたⅡ群土器、藤沢敦氏（1992）による編年で引田式新段階とされた土器群にほぼ対応する。これらの類例は合戦原遺跡第 4 号住居跡出土土器（宮城県教育委員会 1991）、仙台市藤田新田遺跡 SI245 住居跡出土土器（仙台市教育委員会 1994）、下ノ内遺跡 SI16 住居跡出土土器（仙台市教育委員会 1990）などがあり、須恵器共伴例（TK208 ～ TK23 型式）との検討などから 5 世紀中頃～後半とされている。

以上のことから、S101 竪穴住居跡出土土器は 5 世紀中頃～後半に位置づけられる。

また、本遺跡の南東約 300m に位置する都遺跡でも南小泉式期の竪穴住居跡 1 軒（都遺跡 SI2）が確認されている（蔵王町教育委員会 2005）。都遺跡 SI2 竪穴住居跡出土土器は器種構成に高坏を安定的に含むこと、坏類が平底主体であることなどから SI101 竪穴住居跡出土土器より古相を示す。類例としては仙台市藤田新田遺跡 SI201 住居跡出土土器（宮城県教育委員会 1994）などがあり、須恵器共伴例（ON46 ～ TK208 型式）との検討などから 5 世紀中頃に位置づけられる。よって、都 SI2 竪穴住居跡→ SI101 竪穴住居跡の変遷が考えられる。

8．その他の出土遺物

（1）SI303 竪穴住居跡出土土器（第 114 図 5）

床面より土師器坏が出土した。平底で浅く、口縁部まで内弯して立ち上がる。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にヘラケズリ調整を施し、外底面に線刻「×」？がみられる。このほか、土師器坏・甕などの小片が出土しているが、いずれも非ロクロ調整のものである。

5 は金属器模倣形態と考えられ、村田編年における器種分類で坏 G とされた平底あるいは平底風の坏に該当する。坏 G は村田編年 4 段階（7 世紀中頃～後半）から認められ、7 段階（8 世紀中頃～後半）で坏の主要器種となり、8 段階半ば（8 世紀後半）で急激に減って姿を消すとされている。蔵王町六角遺跡 SI91・SI621 竪穴住居跡出土土器（蔵王町教育委員会 2008）、多賀城市山王遺跡 SD2124 溝跡（宮城県教育委員会 1994）などに類例がみられ、山王 SD2124 溝跡では少数のロクロ土師器を伴う。六角 SI91・SI621 住居跡は 8 世紀前半～中頃、山王 SD2124 溝跡は 8 世紀後半に位置づけられている。

以上のことから、SI303 竪穴住居跡出土土器は 8 世紀前半～中頃に位置づけられる。

（2）SI304 竪穴住居跡出土土器（第 114 図 6）

住居内堆積土より土師器坏が出土した。口縁部まで内弯して立ち上がり、内面にヘラミガキ→黒色処理、外面にヘラケズリ調整を施す。このほか、有段丸底の土師器坏の小破片などが出土している。6 は SI303 竪穴住居跡出土土器（第 114 図 5）と類似する特徴がみられることから 8 世紀前半～中頃と考えられるが、有段丸底の坏を伴うことから 8 世紀前半頃の年代を考えておきたい。

（3）SK117 土坑出土土器（第 114 図 4）

堆積土より土師器坏が出土した。丸底で体部と口縁部の境に屈曲を持ち、体部が内弯し、口縁部が外反する。内外面にヘラナデ調整→ヘラミガキ調整を施す。SI101 竪穴住居跡出土土器（第 114 図 2）と類似する特徴がみられることから 5 世紀中頃～後半の年代を考えておきたい。

（4）SE113 井戸跡出土土器（第 114 図 9）

底面より土師器甕が出土した。球胴で頸部に段を持つ。内面の口縁部にハケメ→ヨコナデ調整、胴部にヘラナデ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴上部にハケメ調整、胴下部に縦方向のヘラケズリ調整→ヘラミガキ調整を施し、底部に木葉痕を持つ。SI1 竪穴住居跡出土土器（第 113 図 18）とは外面頸部の段の有無や口縁部の形状に違いが認められるもの、胴部下半の調整技法が共通しており、同様にいわゆる関東系土師器の範疇でとらえられる可能性がある。SI1 竪穴住居跡出土土器と同様に 7 世紀末～ 8 世紀前葉の年代を考えておきたい。

（5）SX208 水溜状遺構出土土器（第 114 図 7）

堆積土より須恵器坏が出土した。底部の切り離しはヘラ切り？で外面の体下部～底部にケズリ調整を施す。厚手で焼成が不良である。色麻町日の出山窯跡 C 地点第 9 号竪穴住居跡出土土器（色麻町教育委員会 1993）、大衡村大衡窯跡群萱刈場窯跡 A 地点 SR2 窯跡出土土器（宮城県教育委員会 1995）などに類例がみられ、いずれも 8 世紀第 2 四半期に位置づけられている。このことから、SX208 水溜状遺構出土土器についても 8 世紀前半頃の年代を考えておきたい。

（6）SD7 溝跡出土漆器（第 114 図 8）

堆積土より漆器椀が出土した。体部は内弯しながら立ち上がる椀形で、内外面とも黒漆塗りで仕上げられている。総高台の内側を浅く削って高台としており、底部が厚い。高台内面には漆の付着がみられない。仙台市中野高柳遺跡 SX1397 遺物包含層下層出土漆器（宮城県教育委員会 2006）に類例がみられ、13 世紀前半～中頃に位置づけられている。このことから、SD7 溝跡出土漆器についても 13 世紀代を中心とした年代が考えられる。

以上、第 4 章で記載した調査結果と本節で行なった主要な遺構出土遺物の検討を踏まえて各遺構出土遺物の年代を整理すると、第 5 表のようにまとめられる。

第 5 表　遺構出土遺物の年代

5 世紀中頃～後半	SK101・SK117
7 世紀中頃～後半	SI3・SI114・SK218・SB308
7 世紀末～ 8 世紀前葉	SI1・SI207・SI305A・SE113
8 世紀前半～中頃	SI304・SI305B・SI303・SX208
8 世紀末～ 9 世紀初頭	SI302・SK307
9 世紀頃	SI2・SB31・SK216・SD227
13 世紀	SX103・SD7
年代不確定	弥生時代：SK232 7 ～ 8 世紀：SI102・SI206・SI301・SI312・SB8・SB25・SB27・SB32・SB33・SB35・SB36・SB108・SB116・SB119・SB228・SB238・SB308・SA239・SA244・SA245・SK6・SK37・SK104・SK110・SD209・SD210・SD222・SD224・SD225・SD230・SD306・SE106・SE107・SX105 中世～近世：SK5（中世）・SE22（中世～近世）
遺構外出土遺物	6 世紀前半：4 区遺構確認面出土須恵器坏

第２節　遺構の特徴と遺跡の性格

確認した遺構は、竪穴住居跡 15 軒、竪穴状遺構 1 基、掘立柱建物跡 25 棟、柱列跡 8 条、井戸跡 9 基、落とし穴状土坑 2 基、土坑 25 基、溝跡 18 条、水溜状遺構 1 基、焼成遺構 1 基、柱穴多数である。

これらの遺構について、第 1 節で検討した出土遺物の年代と、各遺構の新旧関係などから機能時期を推定し、Ⅰ～Ⅸ期の遺構期に分類した（第 6 表）。時期を特定できる遺物が出土していない遺構については、推定できる年代の範囲を示した。また、掘立柱建物跡については出土する遺物が小片であることが多く、遺物から遺構期を特定することが難しいが、周辺の出土遺物などからほとんどが本遺跡の主体となるⅤ～Ⅶ期（7 世紀中頃～ 8 世紀中頃）に属するものと推定される。これらについては遺構の主軸方向分類に基づいて帰属する遺構期を推定した。

ここでは、平成 15 年度に行なった本遺跡南部（南 1 ・ 2 区、第 7 図）における調査成果（蔵王町教育委員会 2005）のほか、本遺跡周辺に位置する都遺跡、十郎田遺跡、六角遺跡、戸ノ内遺跡、原遺跡などの調査成果も適宜参照しながら、各遺構期の特徴と様相を述べ、本遺跡の性格について考察する。

１．遺構の時期と特徴

（１）Ⅰ・Ⅱ期

Ⅰ期（縄文時代）　落とし穴状土坑 2 基（SK115・SK234）があり、3・4 区の平坦面に位置する。遺物は出土していない。落とし穴状土坑は本遺跡のほか、六角遺跡、原遺跡、戸ノ内遺跡など円田盆地北縁部の遺跡で多数確認されている。これらについては円田盆地北部における集落の形成時期が弥生時代中期頃ないしは古墳時代前期以降と考えられることに加えて、遺跡西方の高木丘陵上に立地する複数の縄文時代の集落との関連性などから縄文時代中～後期に属する可能性が考えられる。

Ⅱ期（弥生時代）　土坑 1 基（SK232）があり、3 区の平坦面に位置する。円田式土器とみられる弥生土器の壺の口縁部破片が出土しているが、遺構の性格については不明である。

（２）Ⅲ・Ⅳ期

Ⅲ期（5 世紀中頃～後半）　竪穴住居跡 1 軒（SI101）、土坑 1 基（SK117）があり、4 区の平坦面に位置する。南 1 区で確認した竪穴住居跡 2 軒（南 SI9・南 SI18）は未精査であるが確認面出土遺物の特徴からⅢ期の可能性があり、Ⅲ期の遺構は 4 区～南 1 区にかけての本遺跡中央部に分布するものと考えられる。また、本遺跡が立地する丘陵の先端部に位置する都遺跡 SI2 竪穴住居跡もⅢ期に位置づけられ、都 SI2 竪穴住居跡→ SI101 竪穴住居跡の変遷関係にあるものと考えられる。以下、SI101 竪穴住居跡と都 SI2 竪穴住居跡の構造について検討する。

住居の構造　SI101 竪穴住居跡は 6.6m × 6.2m の規模で住居北壁中央やや左寄りの位置にカマドを付設し、貯蔵穴は持たない。遺物はカマド左側と住居北東隅の床面で出土している。都 SI2 竪穴住居跡は 5.4m × 5.1m の規模で住居北壁中央やや左寄りの位置にカマドを付設し、カマド右側に貯蔵穴を持つ。遺物は貯蔵穴と住居南西側の床面で出土している。カマドが住居北壁やや左寄りの位置に付設されること、遺物がカマド周辺と住居南西または北東隅の 2 か所にまとまりをもつことが共通点として指摘できる。

カマドの構造　SI101 竪穴住居跡・都 SI2 竪穴住居跡のカマドはいずれも燃焼部側壁を凝灰岩切石によって構築している。側壁はいずれも奥壁から焚口部まで平行して直線的に伸び、燃焼部底面の幅にあまり変化がない。燃焼部の奥行きはいずれも約 90㎝で、都 SI2 竪穴住居跡では奥壁から煙道が 80㎝伸びる。

5 世紀中頃と考えられている仙台市南小泉遺跡（26 次）SI1・SI5 竪穴住居跡（仙台市教育委員会 1998）のカマドは、燃焼部側壁が奥壁から焚口まで平行して直線的で長く伸び（約 90 ～ 110cm）、燃

第 6 表　遺構の機能時期

遺構期	時代・時期	年代	帰属する遺構		
Ⅰ期	縄文時代		SK115・SK234		
Ⅱ期	弥生時代		SK232		
Ⅲ期	古墳時代中期後半	5 世紀中頃～後半	SI101・SK117　（古墳時代中期）南 SI9・南 SI18		
Ⅳ期	古墳時代後期前半	6 世紀前半	（4 区遺構確認面：須恵器坏）		
Ⅴ期	古墳時代後期後葉（飛鳥時代後半）	7 世紀中頃～後半	SI3・SI114 SB308・SD306 SK218	SI102・SB8・SB27・SB202・SB203・SB204・SB228・SB233・SB238・SB242・SA34・SD209・SD210・SD214・SD222・SD224	SK6 SK37 SK104 SK110 SD225 SD230 SE106 SE107 SX105
Ⅵ期	飛鳥時代後葉～奈良時代初頭	7 世紀末～ 8 世紀前葉	SI1 SI207・SA247 SI305A 南 SI1 SE113・SX208	SI312・SB25・SB32・SB33・SB35・SB36・SB116・SB205・SB236・SB243・SA217・SD213・SD215	
Ⅶ期	奈良時代前半	8 世紀前半～中頃	SI304・SI305B SI303・南 SI3b	南 SI3a・南 SI14・SB108・SB119・SB120・SB121・SB240・SB241・SA239・SA244・SA245・SA246・SA310 SI206・SI301	
Ⅷ期	平安時代初頭	8 世紀末～ 9 世紀初頭	SI302・SK307　（平安時代）SI2・SB31・SK216・SD227		
Ⅸ期	中世前半	13 世紀	SX103・SD7・SD11・SD12　（中世）SK5　（中世～近世）SE22		
時期不明			SK218〔→ SI3〕・SK111〔← SX103〕・SK112〔← SX103〕・SK309〔← SI302〕・SD211〔→ SI312〕・SE9・SE10・SE16・SE17・SE20・SK13・SK14・SK21・SK23・SK26・SK38・SK109・SK219・SK220・SK221・SK223・SD15・SD18・SD19		

※表中文字色は以下のように主軸方向を示す。青色：ほぼ南北方向（A 群）、紫色：やや西偏（B 群）、赤色：やや東偏（C 群）、緑色：大きく東偏（D 群）
※表中太字は出土遺物の年代・遺構の新旧関係による判定、細字は遺構の特徴・配置などによる推定を示す。矢印記号は遺構の新旧関係（古→新）を示す。

焼部底面の幅に変化がないという点で SI101・都 SI2 竪穴住居跡と共通した特徴を持つ。

なお、南小泉 SI1・SI5 竪穴住居跡のカマドは構築材に粘土を用いているのに対して、SI101 竪穴住居跡と都 SI2 竪穴住居跡では凝灰岩切石を多用している。円田盆地周辺では古墳時代後期以降も凝灰岩切石を用いたカマドが散見されることから、地域的な特色と言える。基本的な構造を踏襲しながら、地域ごとの地質学的背景に応じて構築材が選択されたと考えられる。

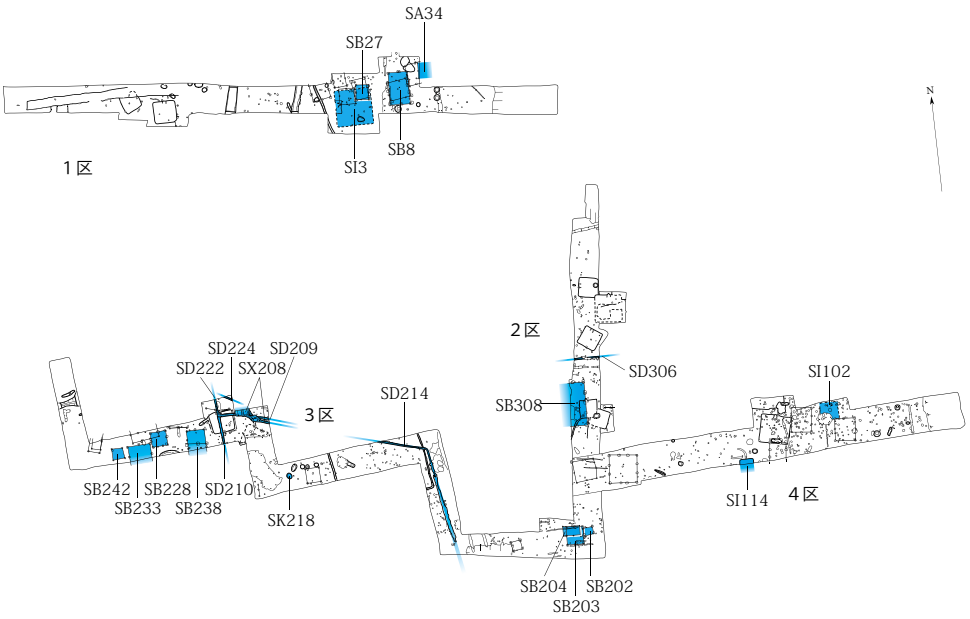
Ⅳ期（6 世紀前半）　遺構は確認されていないが、陶邑田辺編年Ⅱ期 MT15 型式の須恵器坏が出土していることから周辺にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

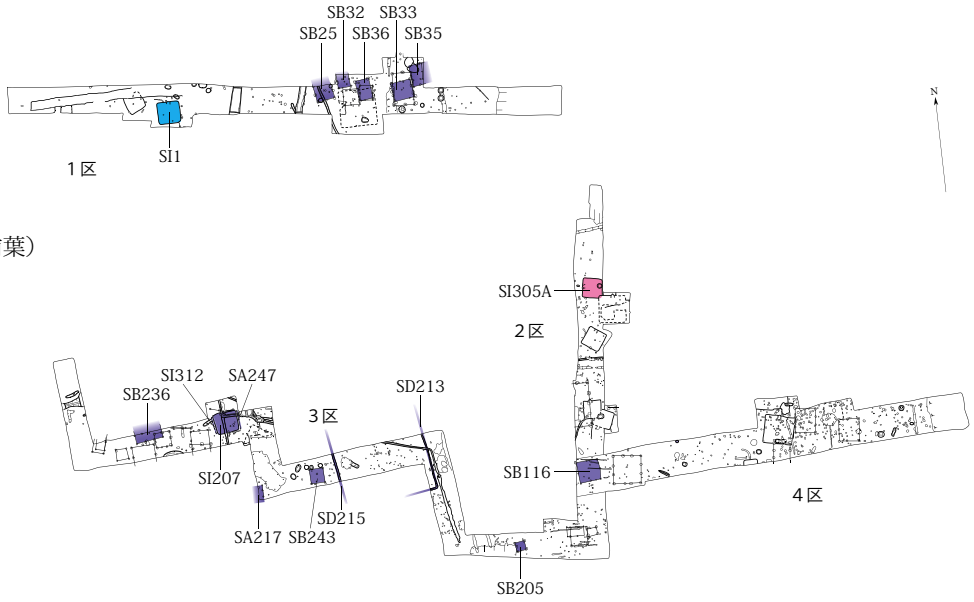
（3）Ⅴ～Ⅶ期

Ⅴ～Ⅶ期の遺構　Ⅴ期（7 世紀中頃～後半）の遺構には竪穴住居跡 2 軒（SI3・SI114）、掘立柱建物跡 1 棟（SB308）、溝跡 1 条（SD306）、土坑 1 基（SK218）があり、Ⅵ期（7 世紀末～ 8 世紀前葉）の遺構には竪穴住居跡 4 軒（SI1・SI207・SI305A・南 SI1）、柱列跡 1 条（SA247）、井戸跡 1 基（SE113）、水溜状遺構 1 基（SX208）が、Ⅶ期（8 世紀前半～中頃）の遺構には竪穴住居跡 4 軒（SI303・SI304・SI305B・南 SI3b）がある。このほか、竪穴住居跡 6 軒、掘立柱建物跡 24 棟、柱列跡 7 条、土坑 4 基、溝跡 9 条、井戸跡 2 基、焼成遺構 1 基がⅤ～Ⅶ期に位置づけられる。

竪穴住居跡と掘立柱建物跡の主軸方向　A 群：ほぼ南北方向を基準とするもの、B 群：やや西に偏るもの、C 群：やや東に偏るもの、D 群：大きく東に偏るものの 4 つに大別できる。帰属時期が明らかなものについて見ると、Ⅴ期では A 群：SI3・SI114・SB308、Ⅵ期では A 群：SI1、B 群：SI207・SA247、C 群：SI305A、D 群：南部 SI1 であり、Ⅶ期では C 群：SI304・SI305B、D 群：SI303・南部 SI3b となる。Ⅴ期は A 群のみ、Ⅶ期は C・D 群のみで構成され、Ⅵ期の SI305A はⅦ期の SI305B へと連続的に変遷することを考慮すると、A 群→ B 群→ C・D 群の変遷が想定できる。この変遷は前後の時期と重複関係を持ちながらも、概ねⅤ期→Ⅵ期→Ⅶ期の変遷と対応するものと考えられる。

これに基づいて分類すると、Ⅴ期では A 群：竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 10 棟、柱列跡 1 条、溝跡 6 条、Ⅵ期では A 群：竪穴住居跡 1 軒、B 群：竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 9 棟、柱列跡 2 条、C 群：竪穴住居跡 1 軒、D 群：竪穴住居跡 1 軒、Ⅶ期では C 群：竪穴住居跡 4 軒、掘立柱建物跡 6 棟、柱列跡 5 条、





第 115 図　Ⅴ～Ⅶ期の主要遺構配置

D 群：竪穴住居跡 4 軒となる（第 3 表）。上述した帰属時期が明らかな遺構の主軸方向から見れば、Ⅴ・Ⅶ期に分類されたものの一部がⅥ期に属する可能性は残るが、変遷の大まかな前後関係としては大過ないと考えられる。以下、ここで求めた 3 時期の変遷に基づいて検討を進めることとする。

竪穴住居跡の分布　竪穴住居跡は 16 軒あり、1 区東部、2 区、3 区西部、南 2 区の平坦面にそれぞれまとまって分布する。遺構期ごとにみるとⅤ期は 1 区東部と 4 区、Ⅵ期は 1 区中央部、2 区、3 区西部、南 2 区に分布し、Ⅶ期は 2 区、南 2 区に分布する。

竪穴住居跡の構造　主柱穴を持つものは 9 軒であり、7 軒は主柱穴を持たない構造である。主柱穴は基本的に 4 か所であるが、SI3 竪穴住居跡は 6 か所、SI305B 竪穴住居跡は 5 か所に主柱穴を持つ。カマドの位置についてみると、Ⅴ期では北壁 1 軒、Ⅵ期では北壁 2 軒・東壁 1 軒・西壁 1 軒、Ⅶ期では北壁 5 軒・西壁 2 軒である。各時期を通して北壁を基本としながら、地形的要因によってカマド位置が選択された可能性が考えられる。カマド脇に貯蔵穴を持つものは 5 軒であり、SI1 竪穴住居跡では貯蔵穴手前に土手状の高まりが付属する。また、住居床面または掘方底面から土坑が掘り込まれ、人為的に埋め戻された後に床面が構築されているものが 3 軒あり、カマドや床面の構築に用いた粘土を採掘したと考えられる。

大型竪穴住居跡　Ⅴ期の SI3 竪穴住居跡は東西・南北 8.0m の規模で、6 か所の主柱穴を持つ。床面が残存しないが住居北壁中央にカマドの痕跡が認められ、北西隅に貯蔵穴を持つ。北側の旧河川跡を挟んで対向する位置の十郎田遺跡でも東西 6.7m、南北 8.0m の規模で 4 か所の主柱穴を持ち、住居北壁中央にカマドを付設する竪穴住居跡（SI51）が確認されており、ほぼ同時期と考えられる（蔵王町教育委員会 2010）。十郎田遺跡では 7 世紀中頃～後半とみられる材木塀と一部大溝による区画施設が確認され、区画内外で同時期の竪穴住居跡が複数確認されている（蔵王町教育委員会 2010）。これらの竪穴住居跡と比較しても SI3 竪穴住居跡と十郎田 SI51 竪穴住居跡は群を抜いて規模が大きいことから、集落内でも特別な意味合いを持つ施設であったと考えられる。

掘立柱建物跡の分布　掘立柱建物跡は 26 棟あり、1 区東部、2 区南部～ 3 区東部、3 区西部、4 区周辺にそれぞれまとまって分布する。このほかに柱列跡の一部も調査区外へ延びる掘立柱建物跡の可能性がある。遺構期ごとにみるとⅤ期は 1 区東部、3 区西部、2 区南部～ 3 区東部、Ⅵ期は 1 区東部、3 区西部、4 区西部、Ⅶ期は 3 区西部と 4 区に分布のまとまりがある。十郎田遺跡と隣接する北側の 1 区周辺から、南側の 3・4 区周辺へ分布を移していることが窺われる。

掘立柱建物跡の規模と構造　確認した掘立柱建物跡はすべて側柱建物である。柱穴掘方の平面形は方形を基本とし、小規模な建物では小型の円形となるものがみられる。調査区外へ延びるものが多いが、確認している規模で見るとⅤ期では 1 × 1 間：2 棟、1 × 2 間：3 棟、2 × 2 間：3 棟、2 × 3 間：1 棟、1 × 4 間：1 棟、Ⅵ期では 1 × 1 間：5 棟、1 × 2 間：1 棟、2 × 2 間：2 棟、3 × 1 間：1 棟、Ⅶ期では 1 × 1 間：2 棟、2 × 2 間：2 棟、2 × 3 間：1 棟、3 × 3 間：1 棟である。Ⅴ期では 2 × 3 間の SB8 掘立柱建物跡、1 間以上× 4 間の SB308 掘立柱建物跡のように建物規模・掘方規模ともに大きなものがみられ、SB308 掘立柱建物跡は区画溝（SD306）を伴う可能性もある。Ⅵ期ではやや小規模なものが多くなる。Ⅶ期になると 3 × 3 間の SB108 掘立柱建物跡のようにやや規模の大きなものが再び現れ、4 区周辺に計画的な配置が窺えるが、柱穴掘方の規模は小型化している。

その他の遺構　このほかに時期が明確な遺構としてはⅥ期の井戸跡 1 基（SE113）があり、4 区西部に位置する。また、SD209・SD210・SD214・SD222・SD224 溝跡と SX208 水溜状遺構については、配置関係から関連性が想定される。SX208 水溜状遺構堆積土出土遺物はⅦ期前半の特徴を示すものの、SD210・SD222 溝跡の方位は A 群と同じほぼ南北方向を基準とすること、SI207 竪穴住居跡を壊していることから、Ⅵ期の後半に作られ、Ⅶ期までに埋没したと考えられる。SD213・SD215 溝跡については

方形の小区画を形成している可能性が考えられる。方位はＢ群と同じくやや西偏しており、Ⅵ期に位置づけられる。４区西部に位置するSX105焼成遺構は長軸100cm、短軸80cmの不整円形を呈する土坑に焼け面と焼土・炭化物集積層を形成している。遺物は焼土層中より被熱により破砕して小片となった土師器甕２個体、甑１個体が確認された。いずれも長胴形で甑は平底の底部中央に直径3.8cmの穿孔を施す。確認できる調整はナデ調整が主体で時期的な位置づけが難しいが、Ⅵ～Ⅶ期とみられる。

（５）Ⅷ期

Ⅷ期（平安時代初頭）の遺構　竪穴住居跡１軒（SI302）、土坑１基（SK307）がある。このほか、竪穴住居跡１軒（SI2）、掘立柱建物跡１棟（SB31）、土坑１基（SK216）、溝跡１条（SD227）がⅧ期に位置づけられる可能性がある。

竪穴住居跡の分布と構造　SI2竪穴住居跡は１区に位置する。主軸方向は大きく東偏し、カマドは住居東壁中央付近に付設する。SI302竪穴住居跡は２区に位置し、ほぼ南北方向である。住居北壁の左寄りの位置にカマドを付設し、カマド右側に貯蔵穴を持つ。SI302竪穴住居跡では住居北辺を除く３辺の床面にコの字形に溝が掘られ、貯蔵穴のある住居北東側から斜めに延びる溝と住居南西隅で接続する。溝は住居南西隅の外側でトンネル状に掘り抜かれ、さらに長さ4.5m以上の外延溝が延びている。旧地形は外延溝の延びる方向へ向かってわずかに傾斜しており、住居内の排水を意図した施設と考えられる。

（６）Ⅸ期

Ⅸ期（中世前半）の遺構　竪穴状遺構１基（SX103）、溝跡３条（SD7･SD11･SD12）がある。このほか、土坑１基（SK5）、井戸跡１基（SE22）がⅨ期に位置づけられる可能性がある。

分布と特徴　４区に位置するSX103竪穴状遺構（未精査）を除く溝跡３条、土坑１基、井戸跡１基が１区に位置する。SD7・SD12溝跡は規模が類似しており、SD11溝跡はやや規模が小さい。いずれもやや西偏して南北方向に延びており、同一の区割りに基づいて掘られたと考えられる。

２．各時期の様相と遺跡の性格

（１）Ⅰ期：縄文時代

集落は形成されていない。落とし穴状土坑２基がある。円田盆地北部は西側の高木丘陵から派生する丘陵の末端部が、低平な微高地状の地形を形成しながら盆地底面の低地と接する地域である。低湿地の水場に面した本遺跡のような微高地が落とし穴猟の狩猟場として利用されていたことが窺える。

（２）Ⅱ期：弥生時代

土坑１基があるが、性格は不明である。円田盆地周辺では弥生時代中期以降に遺跡数が増加する傾向があることから、低地を利用する生業形態への変化に伴って形成された集落が周辺に存在する可能性が考えられる。

（３）Ⅲ期：５世紀中頃～後半

最初の集落が形成される。竪穴住居跡３軒、土坑１基が遺跡中央部の平坦面に分布する。住居跡のカマド構造は同時期の仙台市南小泉遺跡などで確認されているものと同様に燃焼部の幅が狭く奥行きを長く取るものであり、当該期のカマド構造の特徴が把握できる。

（４）Ⅳ期：６世紀前半

遺構は確認されなかったが、須恵器坏が出土した。当該期の資料は町内では初出である。東北地方では６世紀代の須恵器窯跡は未発見であり、須恵器の出土量もあまり多くない。Ⅲ期に後続する時期の円田盆地周辺に、須恵器を入手できる階層の人物が存在したことを示唆するものと言える。

（５）Ｖ期：７世紀中頃～後半

少なくとも６世紀中頃～７世紀前半の断絶期を挟んで、再び集落が形成される。竪穴住居と掘立柱建物からなり、掘立柱建物が主体である。建物群は遺跡中央部の平坦面の広い範囲にいくつかのまとまりを持ちながら配置される。

旧河川跡を挟んだ北側に隣接する十郎田遺跡では材木塀と一部大溝による区画施設を伴う集落が形成されており、密接な関連が想定される。竪穴住居を主体として一部に掘立柱建物を伴う十郎田集落と比較して、窪田集落では掘立柱建物の多さが目立つ。集落全体を区画する施設は持たないが、掘立柱建物の一部は区画溝を伴う可能性があり、このほかにも水路あるいは区画溝と考えられる施設がある。

また､十郎田集落の大型竪穴住居（SI51）と旧河川跡を挟んで対向する位置にやはり大型竪穴住居（SI3）が作られており、いずれも集落内で特殊な意味合いを持つ施設であった可能性が高い。十郎田集落と窪田集落の様相については十郎田遺跡の正式報告を踏まえてあらためて検討する予定であるが、両集落の一体性あるいは対置性を示していると考えられる。

（６）Ⅵ期（７世紀末～８世紀前葉）

Ｖ期から継続して集落を形成する。竪穴住居と掘立柱建物からなり、掘立柱建物が主体である。建物群の配置は基本的にＶ期を踏襲するものの、建物規模はやや小さくなる。竪穴住居跡出土土器には関東系土師器と考えられるものが含まれている（SI1 竪穴住居）。

なお、この時期に窪田集落の南東約 300m に位置する都遺跡で材木塀と大溝による区画施設の内部に大型掘立柱建物などを配置する官衙的な施設が造営され、Ⅶ期まで継続したと考えられる。

（７）Ⅶ期（８世紀前半～中頃）

Ⅵ期から継続して集落を形成する。竪穴住居と掘立柱建物からなり、掘立柱建物が主体である。建物群は十郎田集落に隣接する北部には配置されなくなり、中央～南部に分布の中心を移す。中央部に竪穴住居がやや密集して作られる。掘立柱建物は西部と東部に配置され、東部ではやや規模の大きな建物が計画的に配置されたことが窺われる。

検討中ながら、十郎田集落はⅥ期の早い段階に一旦廃絶した可能性が高く、その後８世紀末まで断絶する。窪田集落で北部の建物群が消失することと、十郎田集落の廃絶が呼応している可能性がある。都遺跡の施設はこの時期まで継続したと考えられる。

また、この時期に窪田集落の北西約 700m に位置する六角遺跡では大溝による区画施設を伴う集落が形成される。六角集落では、住居のカマド構造や土器様相から関東系移民の存在が強く示唆されている。窪田集落の竪穴住居跡出土土器にも六角集落と同様に関東系土師器とみられるものが含まれている（SI305B 竪穴住居）。

（８）Ⅷ期（8 世紀末～９世紀初頭）

Ⅶ期とは断絶期を経て再び集落が形成される。丘陵平坦面に竪穴住居と掘立柱建物が散在する。隣接する十郎田集落などでも断絶期と集落の再形成期は一致しており、Ⅶ期の終焉からⅧ期の開始までの間に地域の集団構造の再編成が行なわれた可能性が考えられる。

（９）Ⅸ期（13 世紀）

丘陵平坦面に区画溝などが形成される。建物跡は未確認ながら井戸跡を伴う可能性があり、屋敷地などとして利用されたと考えられる。

第７章　総　　括

１．窪田遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字平沢字窪田・田中地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の円田盆地北西部に形成された標高約 92m の低平な舌状丘陵上に立地している。

２．今回の発掘調査は県営ほ場整備事業を原因とする事前調査として実施した。調査区は遺跡範囲の北半部に位置し、発掘調査面積は 4,029㎡である。

３．確認した遺構は、竪穴住居跡 15 軒、竪穴状遺構 1 基、掘立柱建物跡 25 棟、柱列跡 8 条、井戸跡 9 基、落とし穴状土坑 2 基、土坑 25 基、溝跡 18 条、水溜状遺構 1 基、焼成遺構 1 基、柱穴多数である。

４．出土した遺物は、土師器、ロクロ土師器、須恵器、中世陶器、近世陶器、縄文土器、弥生土器、石器、木製品（曲物･鋤）、漆器（椀）、鉄製品（鎌）などである。このうち、主体を占めるのは古墳･奈良・平安時代の土器類（土師器、ロクロ土師器、須恵器）である。

５．発掘調査結果を検討した結果、下記のことが明らかとなった。

・縄文時代とみられる落とし穴状土坑 2 基が確認され、低湿地の水場に面した微高地が縄文時代の落とし穴猟の狩猟場として利用されていたことが判明した。

・古墳時代中期後半の竪穴住居跡などが確認され、当該期の住居構造などの特徴が把握された。

・飛鳥時代後半～奈良時代前半にかけての集落跡が確認され、３時期に変遷することが判明した。集落は掘立柱建物と竪穴住居などで構成され、掘立柱建物の一部はやや規模が大きく計画的に配置されている。出土土器には関東系土師器とみられるものが含まれている。周辺の十郎田遺跡・都遺跡・六角遺跡などの集落と密接な関連が窺われる。

・平安時代初頭の集落跡が確認され、外延溝をもつ竪穴住居跡の構造などが判明した。

・中世前半の溝跡などが確認され、屋敷地の一部とみられる。

６．今回の発掘調査成果は、円田盆地周辺に居住した当時の人びとの具体的な暮らしぶりを知る上で貴重な手掛かりとなるものである。

引用・参考文献（編著者名五十音順）

会田 容弘 2000「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通－東北地方南部のありかた－」山形考古 6-4
吾妻 俊典 2003「陸奥南部におけるカマド出現期の土器」宮城考古学 5
板垣 直俊・豊島 正幸・寺戸 恒夫 1981「仙台およびその周辺に分布する愛島軽石層」東北地理 37
いわき市教育委員会 1981『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書 6
いわき市教育委員会 1999『五反田 A 遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書 57
氏家 和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」歴史 14
氏家 和典 1967「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良･平安土師器の諸問題－」『山形県の考古と歴史』
大阪府近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし』大阪府近つ飛鳥博物館図録 40
蔵王町史編纂委員会 1987『蔵王町史　資料編Ⅰ』
蔵王町史編纂委員会 1994『蔵王町史　通史編』
蔵王町教育委員会 1990『堀の内遺跡』蔵王町文化財調査報告書
蔵王町教育委員会 1997『堀の内遺跡』蔵王町文化財調査報告書 1
蔵王町教育委員会 2002『諏訪舘前遺跡』蔵王町文化財調査報告書 2
蔵王町教育委員会 2005『都遺跡ほか』蔵王町文化財調査報告書 3
蔵王町教育委員会 2006『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』蔵王町文化財調査報告書 4
蔵王町教育委員会 2007『中沢 A 遺跡』蔵王町文化財調査報告書 5
蔵王町教育委員会 2008『六角遺跡 － 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 －』蔵王町文化財調査報告書 6
蔵王町教育委員会 2009a『戸ノ内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 8
蔵王町教育委員会 2009b「円田盆地周辺における 7 ～ 8 世紀の様相」『戸ノ内遺跡 － 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 －』蔵王町文化財調査報告書 8
蔵王町教育委員会 2009c『青竹遺跡』蔵王町文化財調査報告書 9
蔵王町教育委員会 2010「十郎田遺跡の 7 世紀集落」『宮城考古学』12
蔵王町教育委員会 2011『西浦 B 遺跡－商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書 10(印刷中)
白鳥 良一・古川 一明 1998「8 東北」「2 土師器の編年」『古墳時代の研究　6　土師器と須恵器』有山閣
加美町教育委員会 2004『壇の越遺跡Ⅴ』加美町文化財調査報告書 1
熊谷 常正・原川 雄二 1977「いわき市金山窯跡群出土遺物について」福島考古 18
桑原 滋郎 1976「東北地方北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について」考古学雑誌 61-4
色麻町教育委員会 1993『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書 1
柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会 1995『上野山古墳群分布調査報告書 － 宮城県柴田郡に所在する東北最大規模の高塚古墳群 －』
菅原 祥夫 2007a「ⅰ．福島県中通り地方南部」「第Ⅱ章 東北・北海道における 6 ～ 8 世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人編
菅原 祥夫 2007b「ⅱ．福島県中通り地方中部」同上
菅原 祥夫 2007c「ⅲ．福島県浜通り地方南部」同上
菅原 祥夫 2007d「ⅳ．福島県会津地方」　同上
仙台市教育委員会 1990『下ノ内遺跡 － 仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ －』仙台市文化財調査報告書 136
仙台市教育委員会 1993『大蓮寺窯跡 － 第 2・3 次調査 －』仙台市文化財調査報告書 168
仙台市教育委員会 1998『南小泉遺跡第 26 次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 225 集
高橋 誠明 1999「宮城県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』5
田辺 昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
田辺 昭三 1981『須恵器大成』角川書店
辻 秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15 ～ 18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
東北学院大学考古学研究部 1975「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」温故 9
東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール 2006「賀篭沢遺跡 2003 ～ 2006 年度発掘調査の成果」第 20 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集
東北古代土器研究会 2005『東北古代土器集成 － 古墳後期～奈良・集落編 － ＜福島＞』研究報告 1
東北古代土器研究会 2005『東北古代土器集成 － 古墳後期～奈良・集落編 － ＜宮城＞』研究報告 2
東北古代土器研究会 2008『東北古代土器集成 － 須恵器・窯跡編＜陸奥＞ －』研究報告 3
東北古代土器研究会 2008『東北古代土器集成 － 須恵器・窯跡編＜出羽＞ －』研究報告 4

中村 浩 1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書 30　大阪府教育委員会
中村 浩 1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房
福島県教育委員会 1989『国道 113 号バイパス遺跡調査報告Ⅵ（善光寺遺跡）』福島県文化財調査報告書 192
福島県教育委員会 1995『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書 310
福島県教育委員会 2006『明神遺跡』常磐自動車道遺跡調査報告 46
藤沢 敦 1998「中期古墳の展開と変革 － 東北 － 」『中期古墳の展開と変革』第 44 回埋蔵文化財研究集会
藤沢 敦 2000「阿武隈川下流域の前方後円墳（その 1）」宮城考古学 2
古川市教育委員会 2004『名生館官衙遺跡ＸＸ』宮城県古川市文化財調査報告書 27
宮城県教育委員会 1980『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ（伊原沢下遺跡・大橋遺跡・持長地遺跡）』宮城県文化財調査報告書 80
宮城県教育委員会 1981『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ（東山遺跡）』宮城県文化財調査報告書 81
宮城県教育委員会 1984『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ（二屋敷遺跡）』宮城県文化財調査報告書 99
宮城県教育委員会 1987『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書 116
宮城県教育委員会 1989『三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 131
宮城県教育委員会 1990『寂光寺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 135
宮城県教育委員会 1991『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 140
宮城県教育委員会 1992『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書 160
宮城県教育委員会 1994a『山王遺跡八幡地区の調査 － 県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅰ － 』宮城県文化財調査報告書 162
宮城県教育委員会 1994b『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書 163
宮城県教育委員会 1995『大畑遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 168
宮城県教育委員会 2002「窪田遺跡・都遺跡・新城館跡」『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 188
宮城県教育委員会 2003「十郎田遺跡ほか」『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 195
宮城県教育委員会 2006『中野高柳遺跡Ⅳ － 宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書Ⅳ － 』宮城県文化財調査報告書 204
宮城県教育委員会 2010『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 222
宮城県多賀城跡調査研究所 1986『名生館遺跡』多賀城関連遺跡発掘調査報告書 11
村田 晃一 2007「V. 宮城県中部から南部」「第Ⅱ章 東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人編
村田町教育委員会 1988『北日ノ崎窯跡』村田町文化財調査報告書 6
村田町教育委員会 1991『新峯崎遺跡』宮城県村田町文化財調査報告書 9
村田町教育委員会・千塚山古墳測量調査団 1992『千塚山古墳測量調査報告書』宮城県村田町文化財調査報告 11
矢本町教育委員会 2001『赤井遺跡Ⅰ』矢本町文化財調査報告書 14
利府町教育委員会 2004『大貝窯跡群』利府町文化財調査報告書 12
山形県教育委員会 1987『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 107
渡邊 泰伸 1998「9 東北」「3 須恵器の編年」『古墳時代の研究　6　土師器と須恵器』有山閣

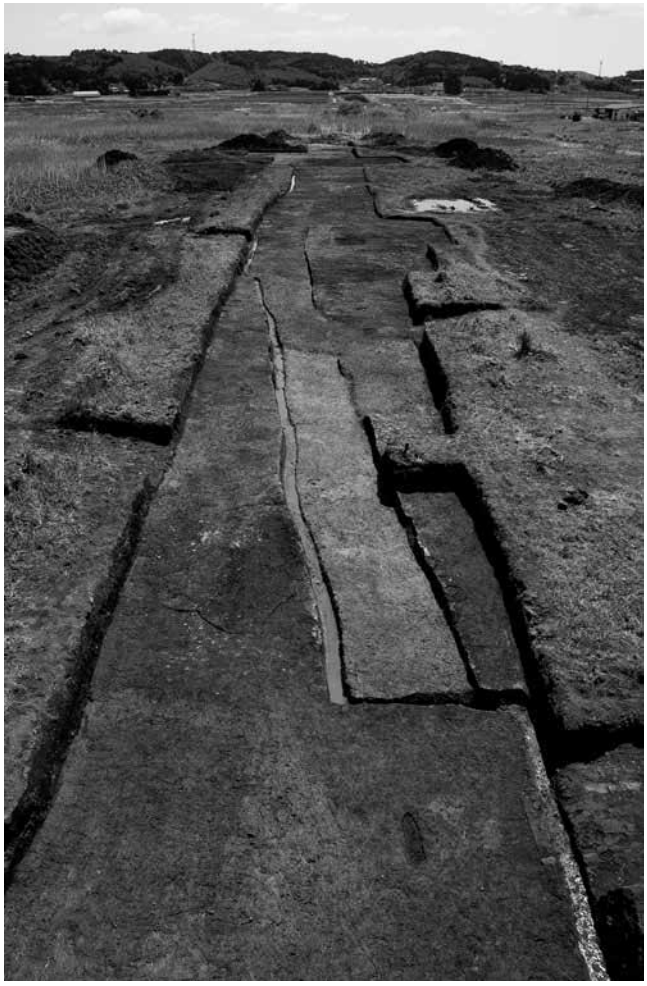
写　真　図　版

1．窪田遺跡 航空写真

2．窪田遺跡 遠景（東から）

写真図版 2

1．1区 遺構確認状況（東から）



2．1区 遺構確認状況（中央部・西から）

3．1区 遺構確認状況（東端部・南西から）

1．1 区 遺構確認状況（西部・東から）

2．1 区 遺構確認状況（中央部・南から）

3．1 区 遺構確認状況（中央部・南から）

4．SI1 竪穴住居跡（南から）

写真図版 4

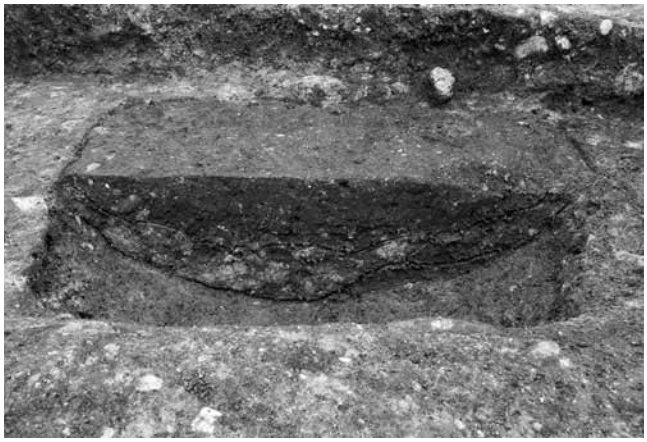
1．SI1 竪穴住居跡 カマド（南から）

2．SI1 竪穴住居跡 K1 周辺遺物出土状況（南から）

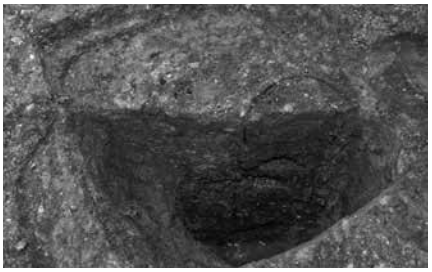
3．SI1 竪穴住居跡 カマド周辺遺物出土状況（南から）

4．SI1 竪穴住居跡 K1 周辺遺物出土状況（東から）

5．SI1 竪穴住居跡 遺物出土状況（西から）



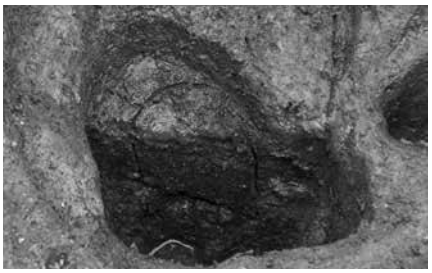
5．SI1 竪穴住居跡 K1 断面（南から）



7．SI1 竪穴住居跡 P1 断面（西から）

8．SI1 竪穴住居跡 P2 断面（北から）

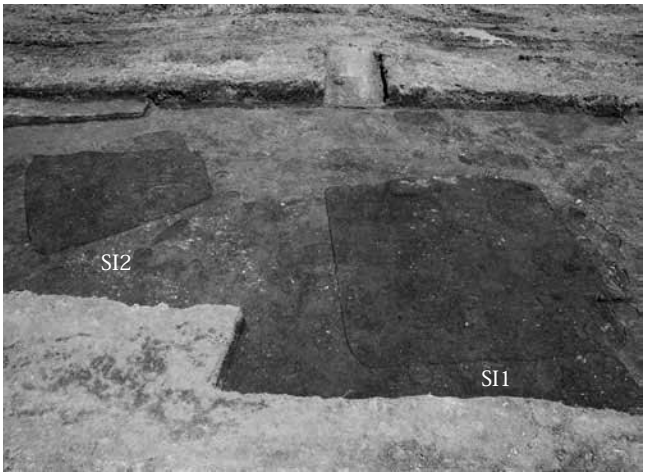
9．SI1 竪穴住居跡 P3 断面（北から）



10．SI1 竪穴住居跡 P4 断面（西から）

11．SI1 竪穴住居跡 P6 断面（西から）

12．SI1 竪穴住居跡 P5 断面（南から）



1．SI1・SI2 竪穴住居跡 確認状況（南から）

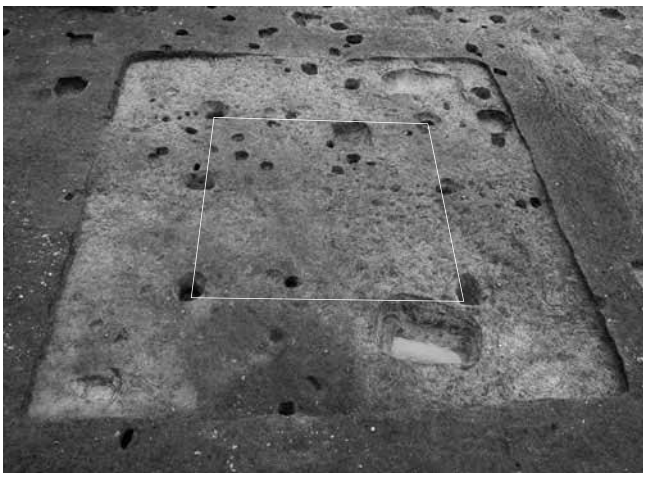
2．SI1 竪穴住居跡 調査風景

3．SI2 竪穴住居跡（西から）

4．SI2 竪穴住居跡 カマド（西から）

5．SI2 竪穴住居跡 P4 断面（西から）

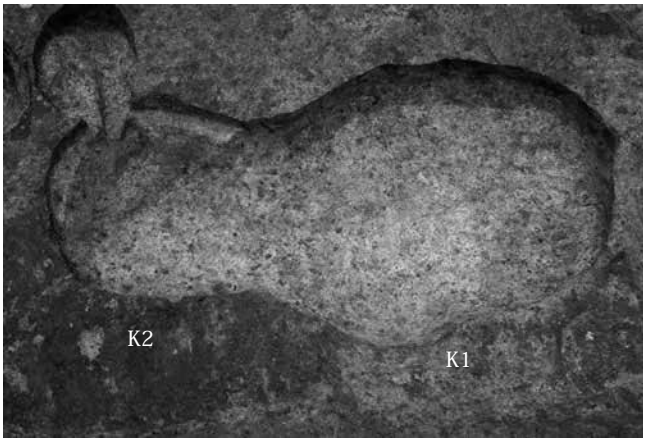
6．SI3 竪穴住居跡 確認状況（南から）



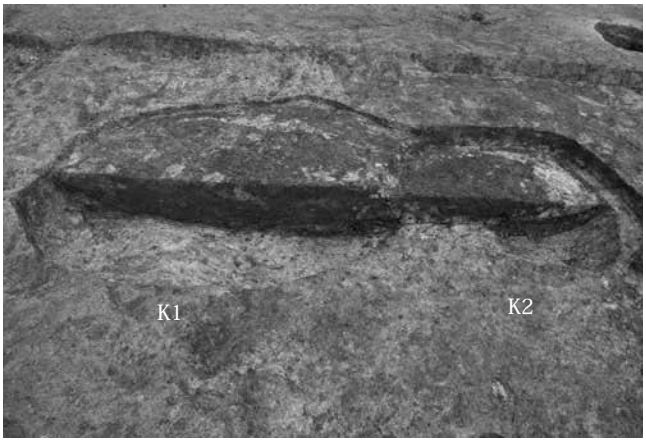
7．SI3 竪穴住居跡 完掘状況（南から）

8．SI3 竪穴住居跡 主柱穴位置（南から）

写真図版 6

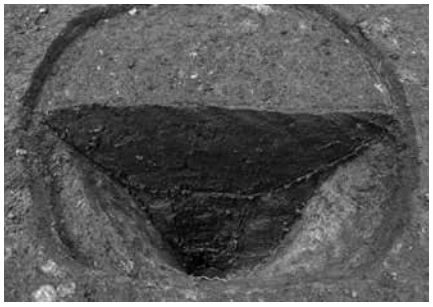


1．SI3 竪穴住居跡 K1・K2 完掘状況（北から）



2．SI3 竪穴住居跡 K1・K2 断面（南から）

3．SI3 竪穴住居跡 P2 断面（東から）



4．SI3 竪穴住居跡 P4 断面（東から）

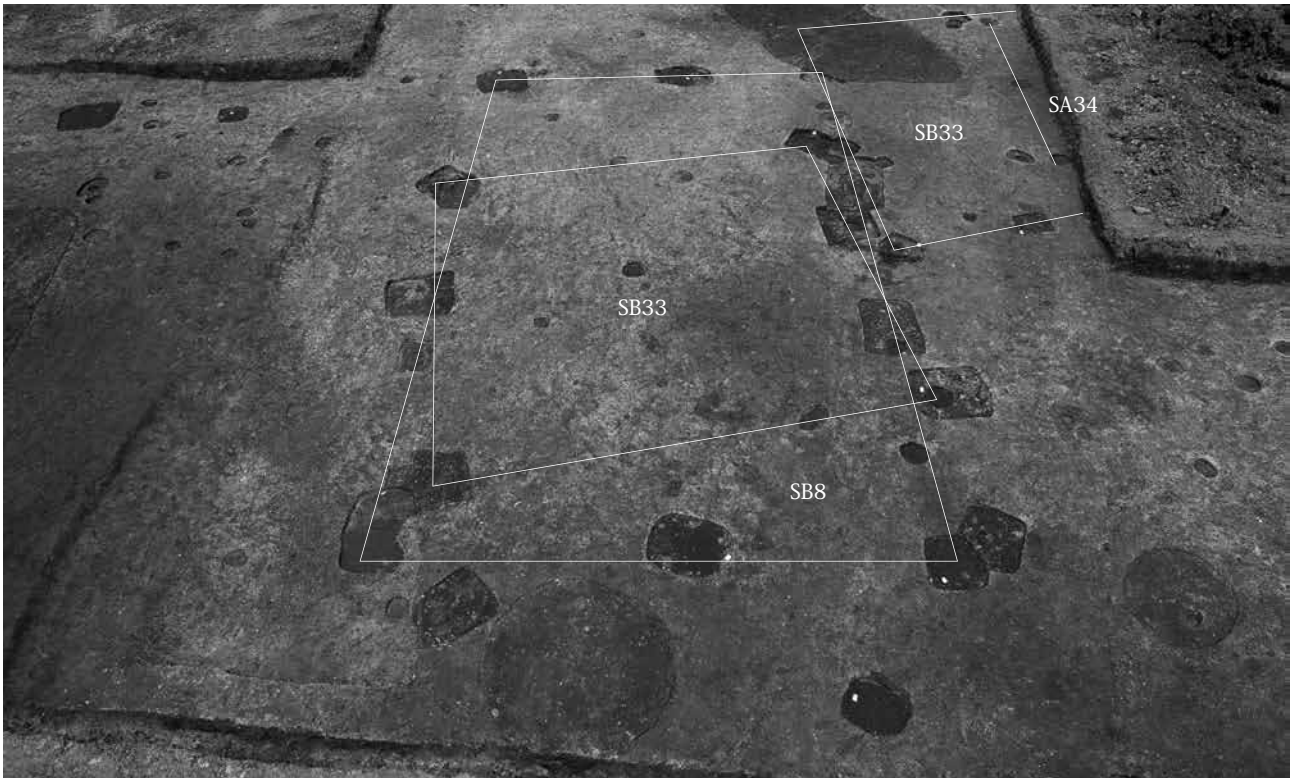
5．SI3 竪穴住居跡 周溝断面（西から）

6．SI3 竪穴住居跡 集合写真（東西・南北 8.0m の大型竪穴住居跡、南から）

7．1 区 遺構確認作業風景

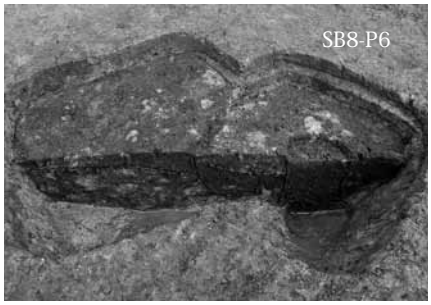
8．1 区 遺構確認作業風景

9．1 区 遺構確認作業風景



1．SB8 掘立柱建物跡 確認状況（南から）

2．SB8 掘立柱建物跡 P1 断面（南から）



3．SB8 掘立柱建物跡 P6 断面（西から）

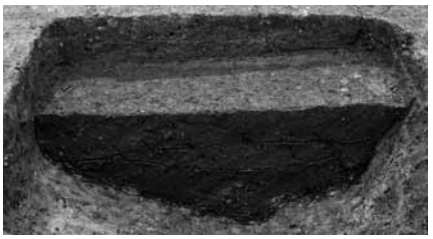
4．SB8 掘立柱建物跡 P7 断面（北から）

5．1 区 掘立柱建物跡調査風景

6．1 区 遺構実測作業風景

7．1 区 遺構断面実測作業風景

8．SB25 掘立柱建物跡 完掘状況（南から）



9．SB25 掘立柱建物跡 P3 断面（東から）

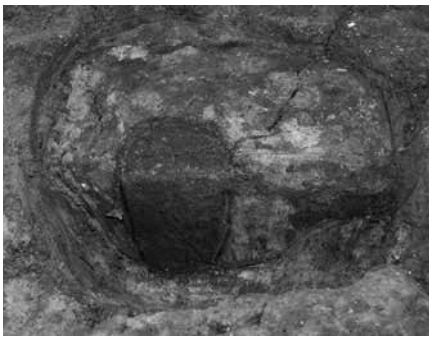
10. SB25 掘立柱建物跡 P5 断面（西から）

写真図版 8

1．SB27 掘立柱建物跡 確認状況（南から）

2．SB27 掘立柱建物跡 P1 断面（南から）

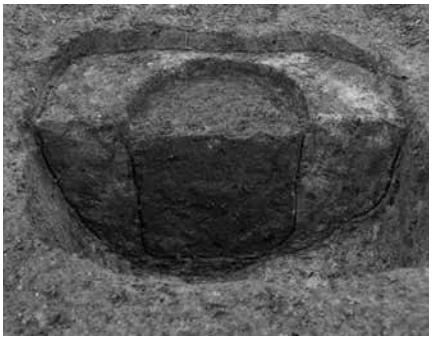
3．SB27 掘立柱建物跡 P3 断面（東から）



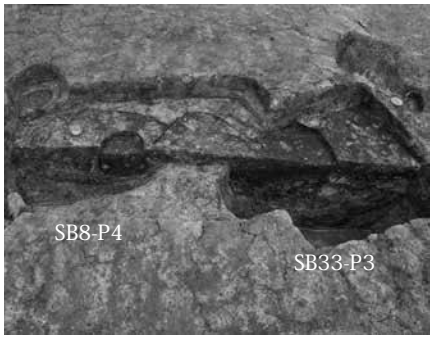
4．SB31 掘立柱建物跡 P3 断面（東から）

5．SB31 掘立柱建物跡 P4 断面（西から）

6．SB31 掘立柱建物跡 P6 断面（南から）



7．SB32 掘立柱建物跡 P4 断面（東から）



8．SB8-P4・SB33-P3 断面（西から）

9．SB35 掘立柱建物跡 P2 断面（北から）

10．SE9 井戸跡 完掘状況（北から）

11．SE9 井戸跡 断面（南から）

1．SE10 井戸跡 完掘状況（東から）

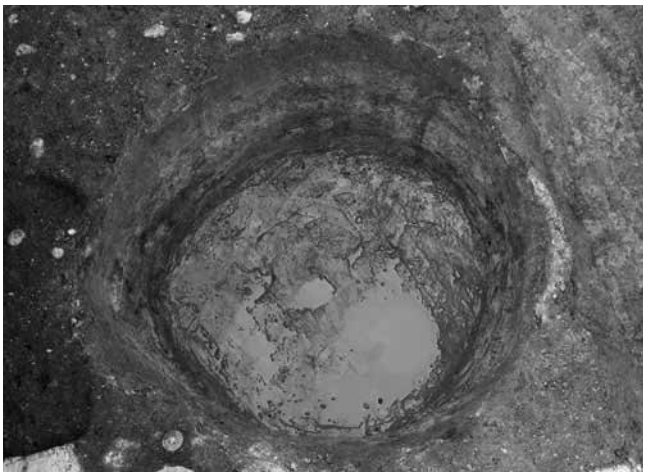
2．SE10 井戸跡 断面（西から）

3．SE16 井戸跡 完掘状況（南から）

4．SE16 井戸跡 断面（南から）

5．SE17 井戸跡 完掘状況（北から）

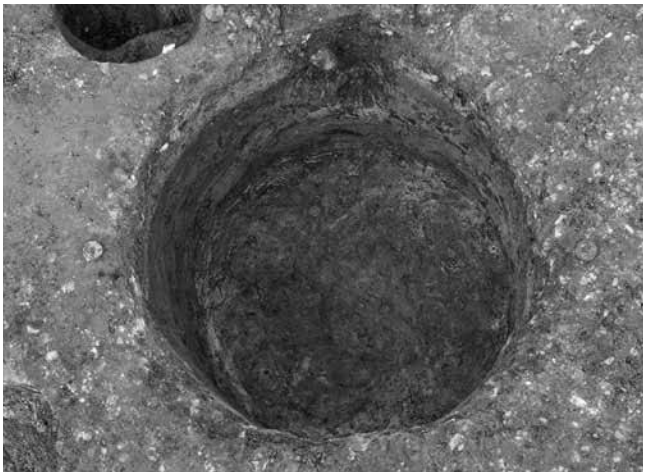
6．SE10 井戸跡 調査風景



7．SE20 井戸跡 完掘状況（南から）

8．SE20 井戸跡 断面（東から）

写真図版 10

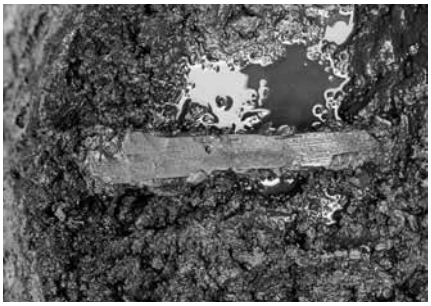


1．SE22 井戸跡 完掘状況（西から）

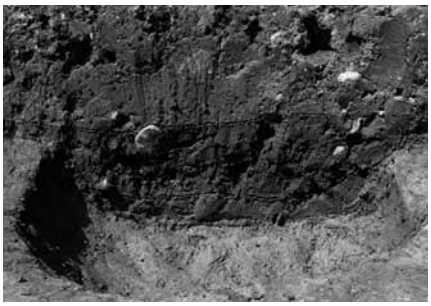
2．SE22 井戸跡 断面（西から）

3．SE22井戸跡 鉄製鎌(No.204)出土状況(北から)

4．SE22井戸跡 鉄製鎌(No.205)出土状況(北から)



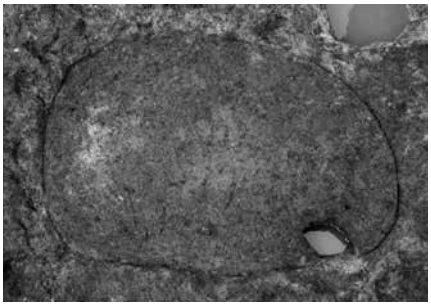
5．SE22井戸跡 曲物側板出土状況(北から)



6．SK5 土坑 断面（南から）

7．SK21 土坑 断面（南から）

8．SI1 竪穴住居跡 調査風景



9．SK28 土坑 確認状況（南から）

10．SK28 土坑 完掘状況（南から）

11．SK28 土坑 断面（南から）

12．SD7 溝跡 断面（南から）

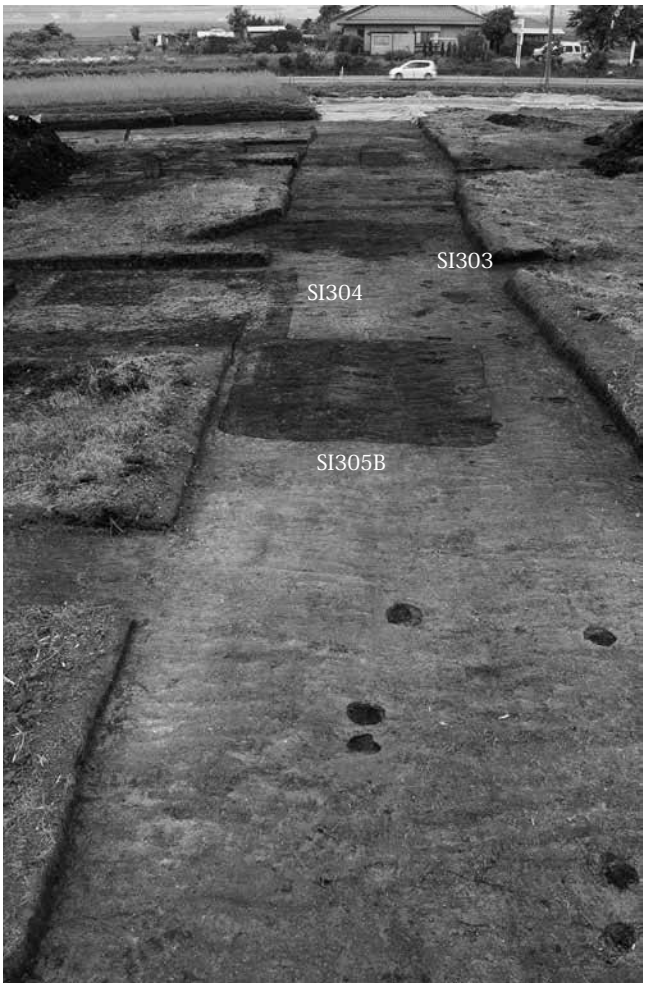
13．SD7 溝跡 漆器椀（No.201）出土状況

1．SD11・SD18 溝跡 断面（北から）

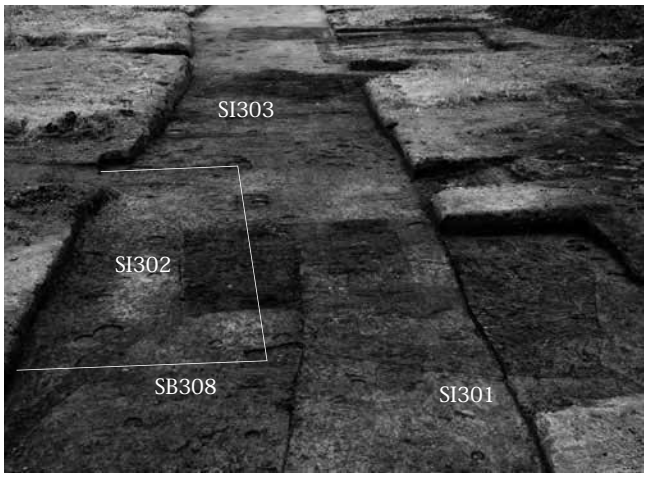
2．SD12 溝跡 断面（北から）

3．SD15 溝跡 断面（南から）

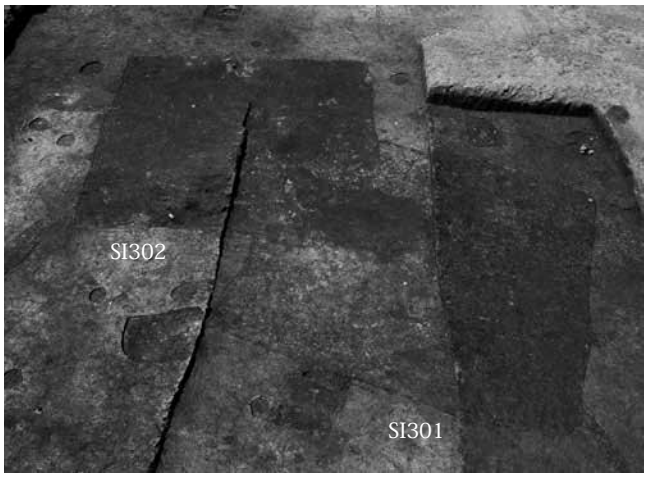
4．SD19 溝跡 断面（南から）



5．2区遺構確認状況（北から）



6．2区 遺構確認状況（中央部・南から）



7．SI301・SI302 竪穴住居跡 確認状況（南から）

写真図版 12

1．SI301 竪穴住居跡（南から）

2．SI301 竪穴住居跡 遺物出土状況（南から）

3．SI302 竪穴住居跡 カマド（南から）

4．SI302 竪穴住居跡（南から）

5．SI302 竪穴住居跡 カマド下遺物出土状況（南から）

6．SI302 竪穴住居跡 遺物出土状況（南西から）

7．SI302 竪穴住居跡 床下土坑確認状況（南から）

8．SI302 竪穴住居跡 D1 断面（北東から）

9．SI302 竪穴住居跡 外延溝完掘状況（南から）

1．SI303 竪穴住居跡 調査風景

2．SI302 竪穴住居跡 外延溝完掘状況（北東から）

3．SI302 竪穴住居跡 外延溝完掘状況（南西から）

4．SI302 竪穴住居跡 外延溝調査風景

5．SI302 竪穴住居跡 調査風景

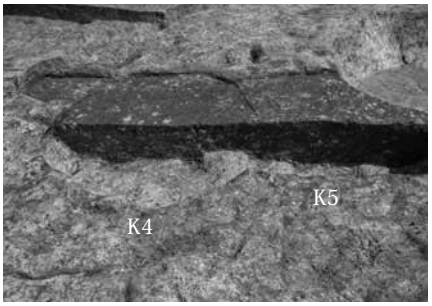
8．SI302 竪穴住居跡 K4・K5 完掘状況（南から）

6．SI302 竪穴住居跡 K2 完掘状況（南から）

7．SI302 竪穴住居跡 K2 断面（南から）

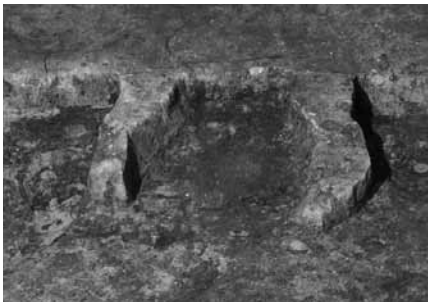
9．SI302 竪穴住居跡 K3 完掘状況（南から）

10．SI302 竪穴住居跡 K3 断面（南から）



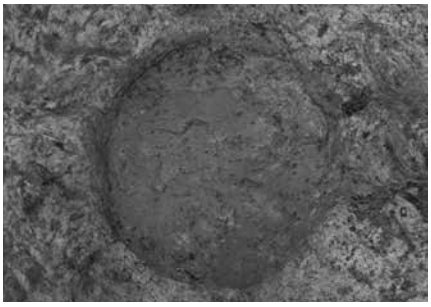
11．SI302 竪穴住居跡 K4・K5 断面（西から）

12．SI303 竪穴住居跡（南西から）


13．SI303 竪穴住居跡 カマド（南西から）

14．SI303 竪穴住居跡 P1 断面（東から）

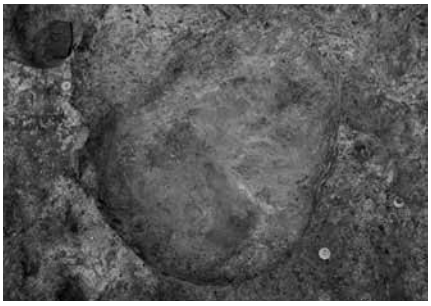
写真図版 14



1．SI303竪穴住居跡K1完掘状況（南西から）

2．SI303竪穴住居跡K1断面（北西から）

3．SI304 竪穴住居跡 確認状況（南から）



4．SI303竪穴住居跡K2完掘状況（南から）

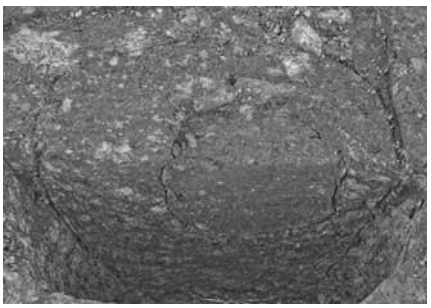
5．SI303 竪穴住居跡 K2 断面（西から）

6．SI305B竪穴住居跡 主柱穴位置（東から）

7．SI305B 竪穴住居跡（東から）

8．SI305B竪穴住居跡 カマド（東から）

9．SI305B竪穴住居跡遺物出土状況（西から）

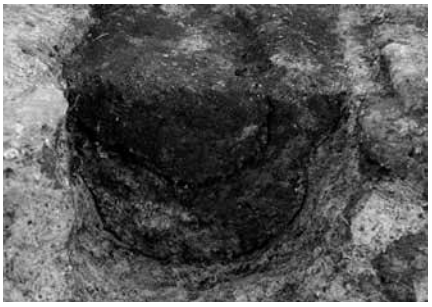


10. SI305B竪穴住居跡P1断面（東から）

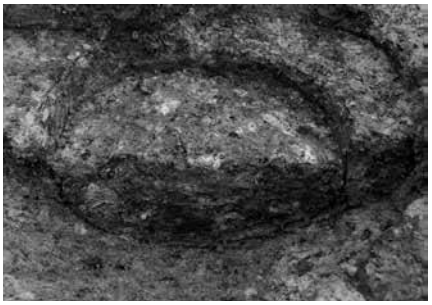
11. SI305B竪穴住居跡P4断面（東から）

12. SI305B竪穴住居跡P5断面（東から）

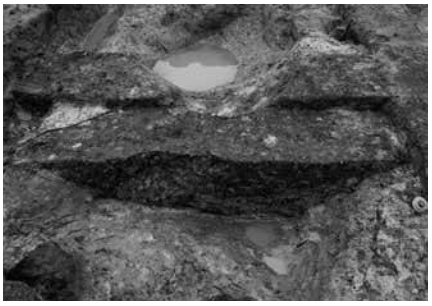
1．SI305A 竪穴住居跡（東から）



2．SI305A 竪穴住居跡 周溝断面（北から）

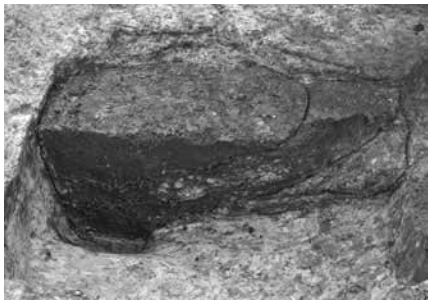


3．SI305A 竪穴住居跡 P7 断面（東から）



4．SI305A 竪穴住居跡 K2 断面（西から）

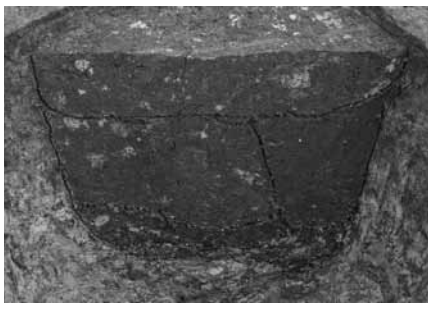
5．SI305A 竪穴住居跡 K3 断面（南から）



6．SB308 掘立柱建物跡 P5 断面（北から）

7．SB308 掘立柱建物跡 確認状況（南から）

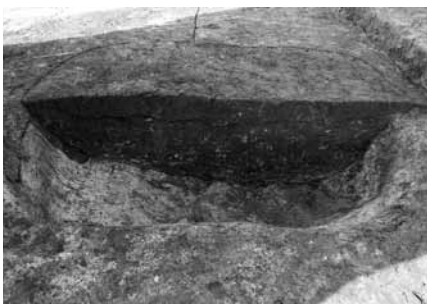
8．SB308 掘立柱建物跡 P6 断面（南から）



9．SB308 掘立柱建物跡 P7 断面（西から）

10．SK307 土坑 断面（南から）

11．SK309 土坑 完掘状況（北から）

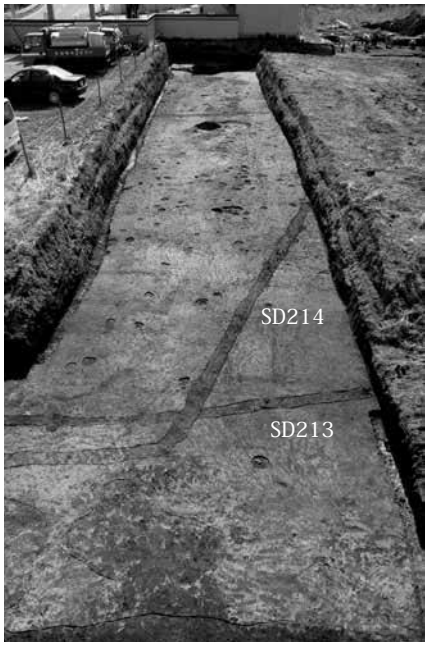


12．SK309 土坑 断面（南から）

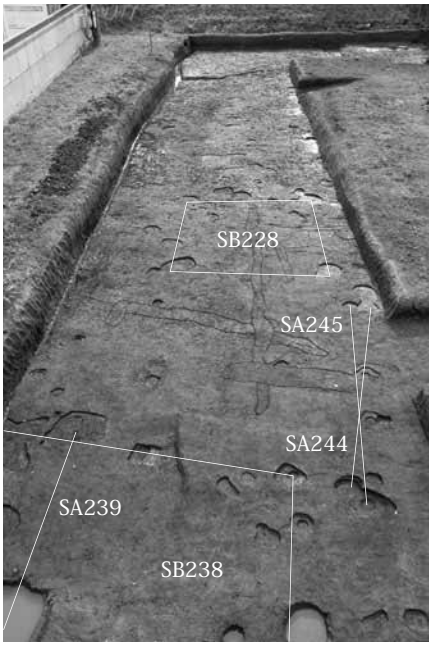
1．3区 遺構確認状況（東部・北から）

2．3区 遺構確認状況（東部・西から）

3．3区 遺構確認状況（中央部・北から）

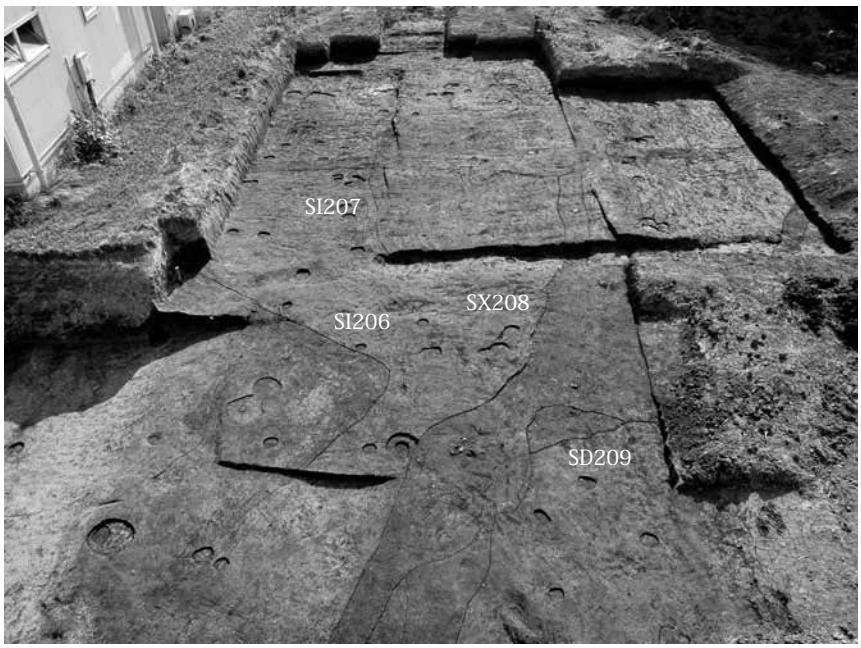


4．3区 遺構確認状況（中央部・東から）



5．3区 遺構確認状況（西部・東から）

6．3区 遺構確認状況（西部・北から）

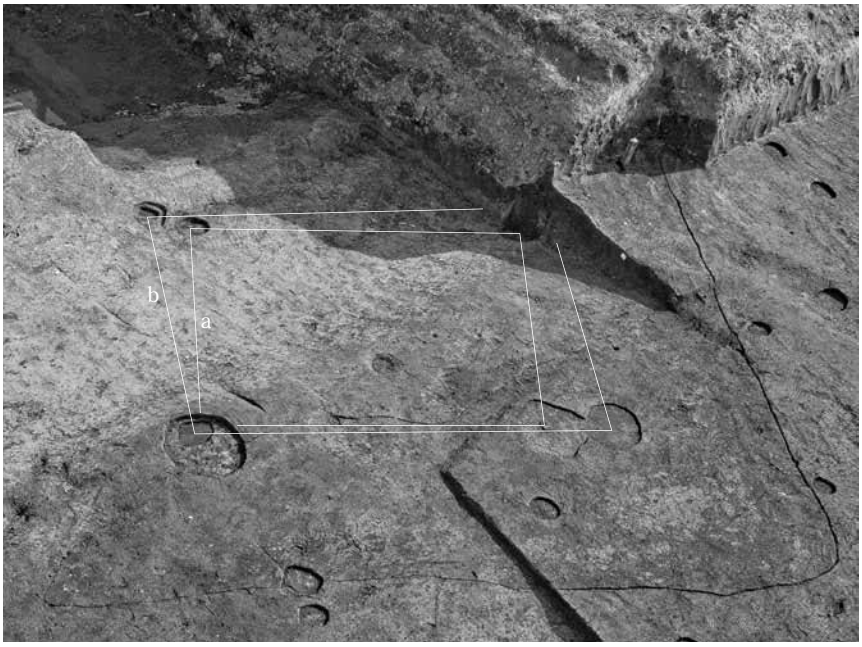


7．3区 遺構確認状況（西部・東から）

1．SD306 溝跡 鋤鍬痕完掘状況（東から）

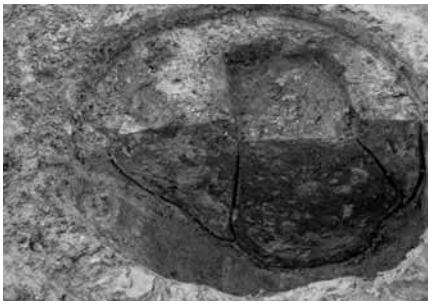
2．SD306 溝跡 断面（東から）

3．SI206 竪穴住居跡 P1a 断面（北東から）

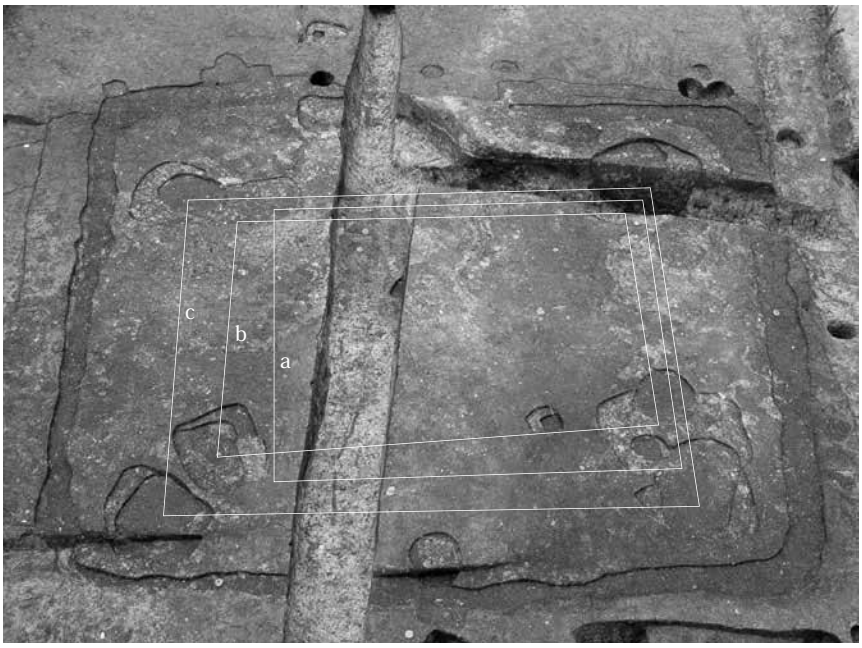


4．SI206 竪穴住居跡 確認状況（北から）

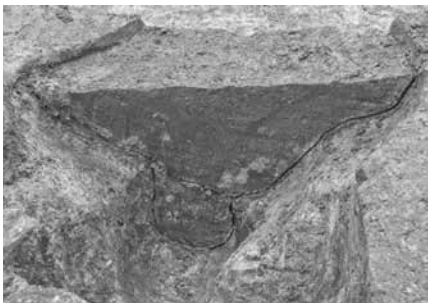
5．SI206 竪穴住居跡 P2 断面（西から）



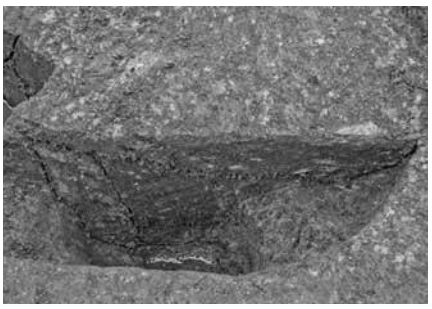
6．SI206 竪穴住居跡 P3b 断面（北西から）



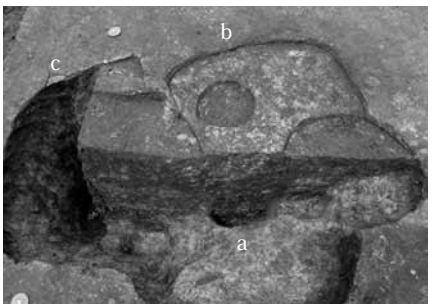
7．SI207 竪穴住居跡（南から）



8．SI207 竪穴住居跡 P4a 断面（西から）



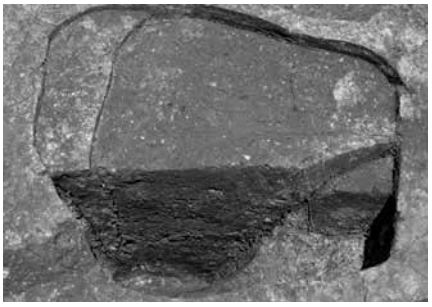
9．SI207 竪穴住居跡 P1b 断面（南から）



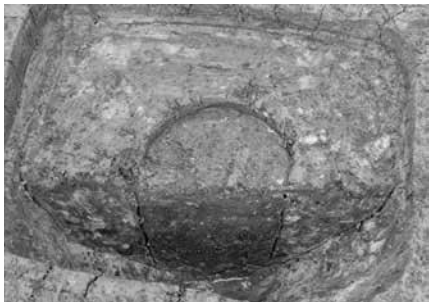
10．SI207 竪穴住居跡 P3abc 断面（東から）

11．SI207 竪穴住居跡 P1c 断面（南から）

12．SI207 竪穴住居跡 P3c 断面（南から）

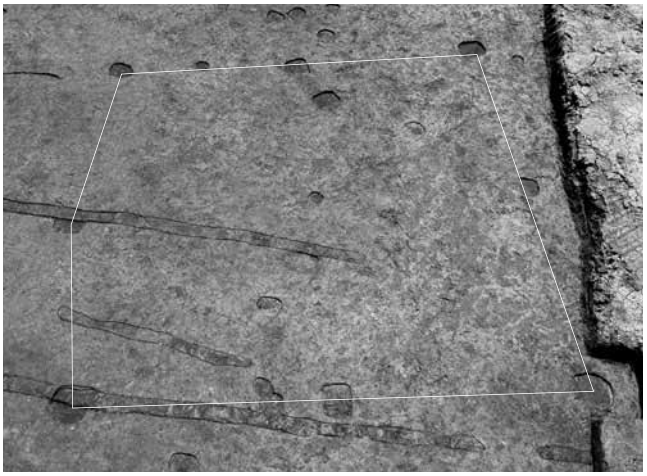


1．SI207 竪穴住居跡 P4c 断面（南から）

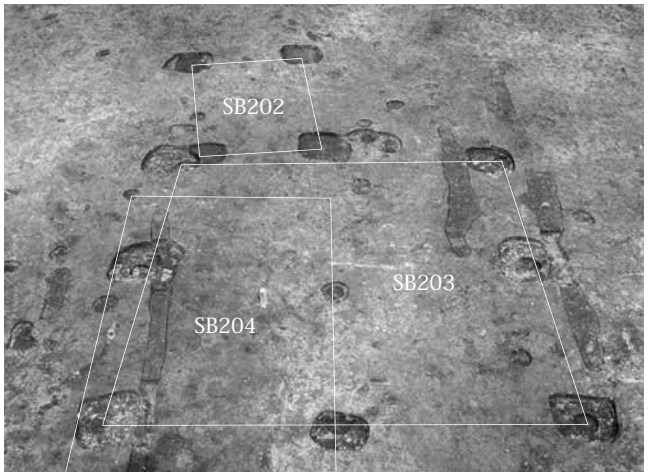


2．SB203 掘立柱建物跡 P7 断面（西から）

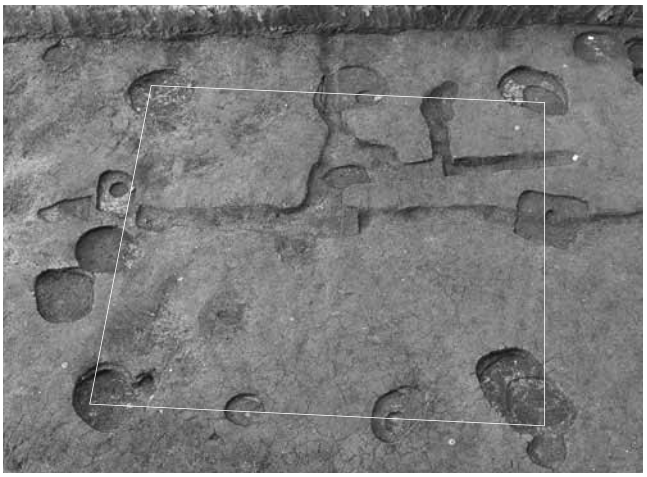
3．SB205 掘立柱建物跡 P4 断面（北から）



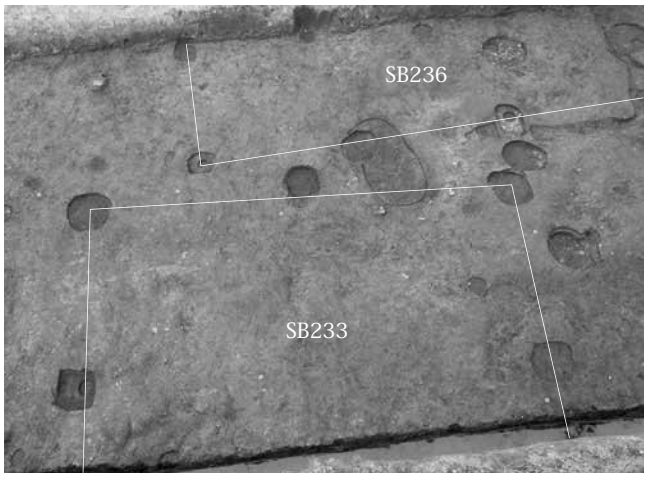
4．SB116 掘立柱建物跡 確認状況（北から）



5．SB202・SB203 掘立柱建物跡 確認状況（西から）

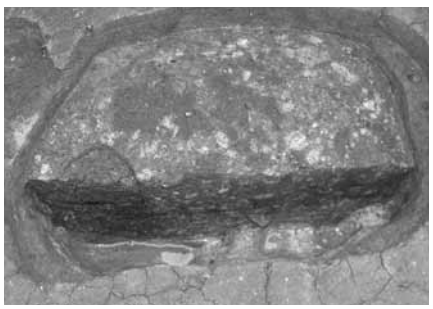


6．SB228 掘立柱建物跡 確認状況（南から）



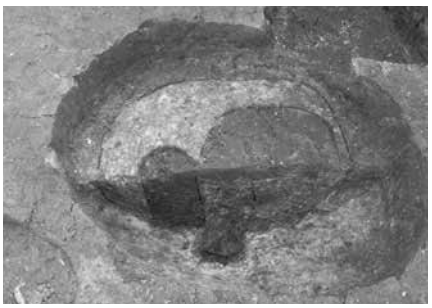
7．SB233 掘立柱建物跡 確認状況（南から）

8．SB228 掘立柱建物跡 P3 断面（南から）



9．SB228 掘立柱建物跡 P5 断面（北東から）

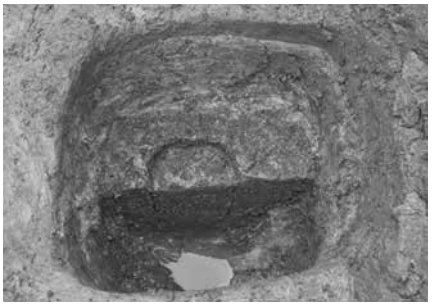
10．SB228 掘立柱建物跡 P8 断面（南西から）



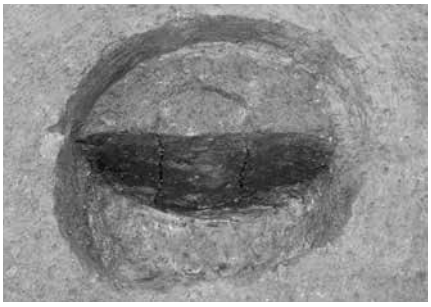
11．SB228 掘立柱建物跡 P9 断面（北から）

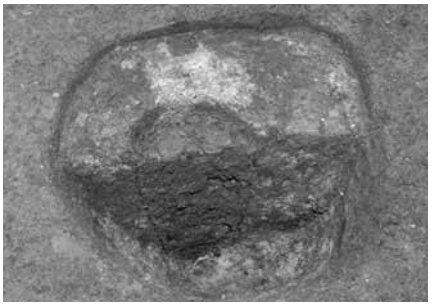
12．SB233 掘立柱建物跡 P4 断面（東から）

13．SB233 掘立柱建物跡 P5 断面（北から）

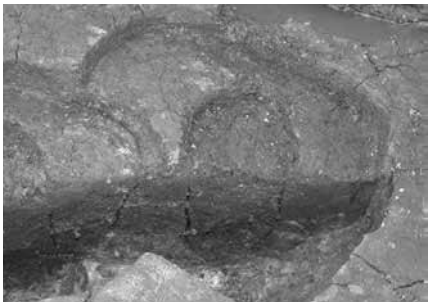

1．SB236 掘立柱建物跡 P1 断面（東から）

2．SB236 掘立柱建物跡 P3 断面（東から）

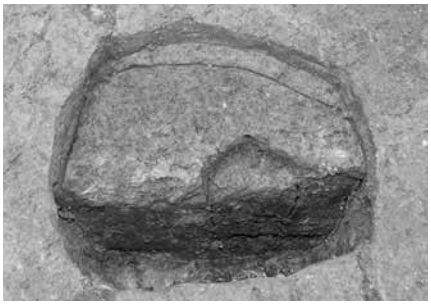

3．SB236 掘立柱建物跡 P5 断面（南から）

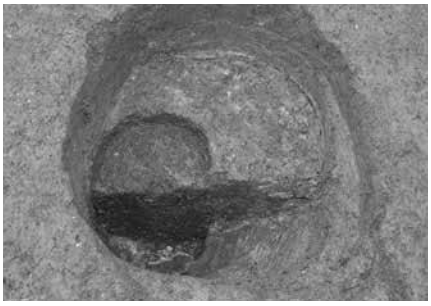

4．SB238 掘立柱建物跡 P1 断面（南西から）

5．SB238 掘立柱建物跡 P2 断面（北から）


6．SB238 掘立柱建物跡 P5 断面（北西から）

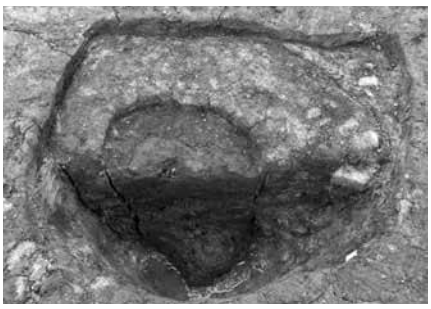
7．SB240 掘立柱建物跡 P3 断面（東から）

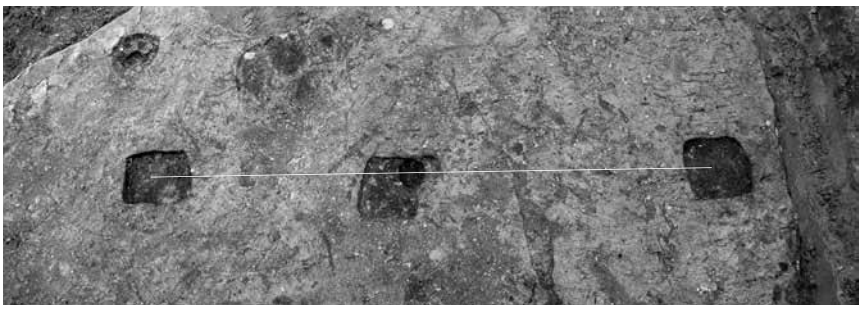

8．SB241 掘立柱建物跡 P2 断面（南から）


9．SB241 掘立柱建物跡 P3 断面（南から）

10．３区西柱穴跡群 確認状況（南から）

11. SB242 掘立柱建物跡 P1 断面（北東から）


12. SB243 掘立柱建物跡 P4 断面（南から）

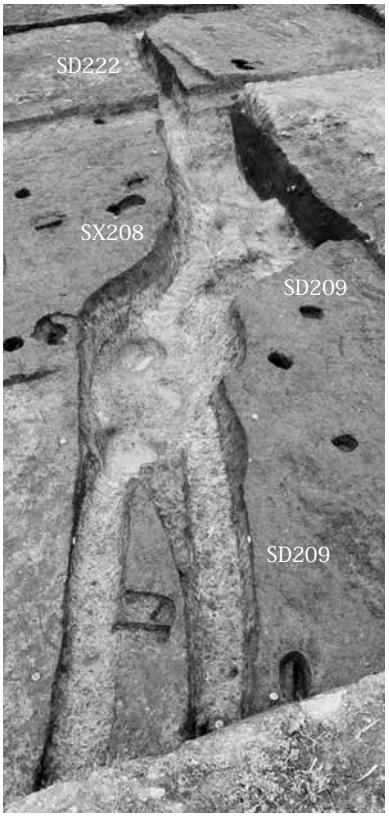

13．SA217 柱列跡 確認状況（西から）

14. SA217 掘立柱建物跡 P3 断面（西から）

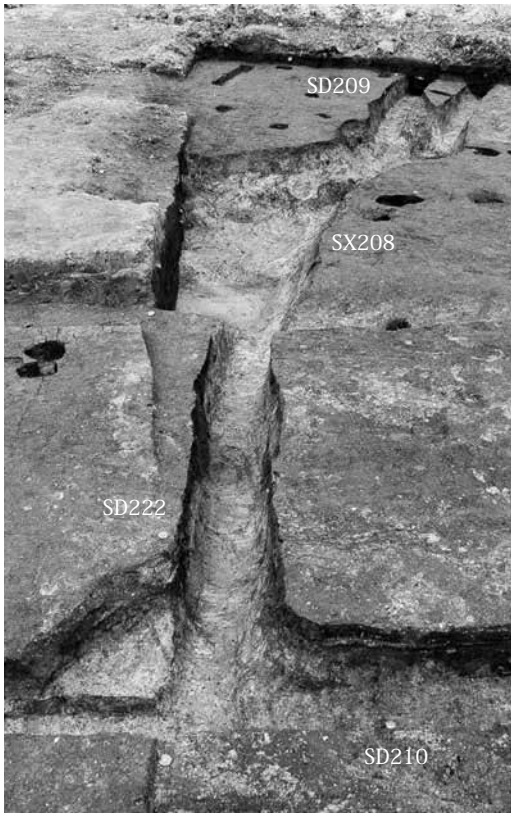
1．SA239 柱列跡 P2 断面（南から）

2．SA239 柱列跡 P3 断面（東から）

3．SA244 柱列跡 P1 断面（南から）

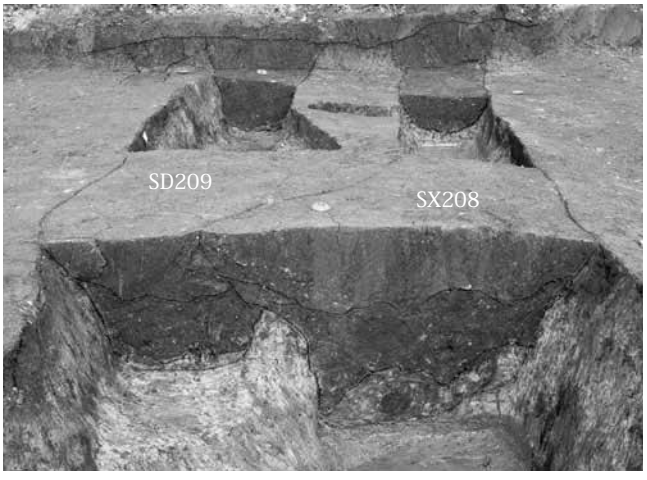


4．SX208･SD209 溝跡 完掘状況（東から）



5．SX208・SD209 溝跡 完掘状況（西から）

6．SD210･SD222 溝跡 完掘状況（北から）

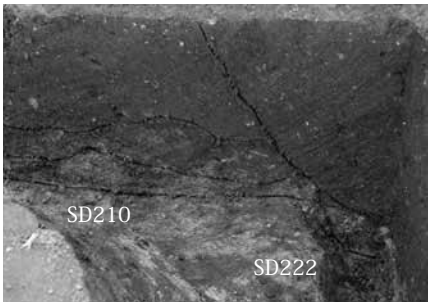


7．SX208・SD209 溝跡 断面（西から）

8．SD208 溝跡 断面（東から）

9．SD210 溝跡 断面（北から）

10．SD222 溝跡 断面（北から）



11．SD210・SD222 溝跡 断面（東から）

1．SD213・SD214 溝跡 確認状況（東から）

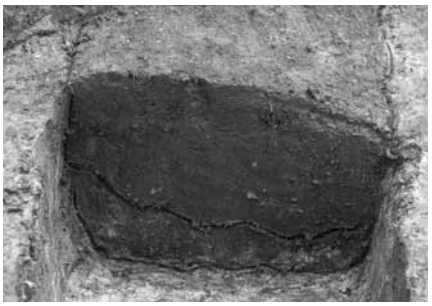
2．SD213 溝跡 断面（南から）

3．SD215 溝跡 完掘状況（南から）

4．SD215 溝跡 鋤鍬痕確認状況（北から）

5．SD224 溝跡 完掘状況（南東から）

6．SD215 溝跡 断面（北から）



7．SD224 溝跡 断面（北西から）

8．SD227 溝跡 完掘状況（東から）

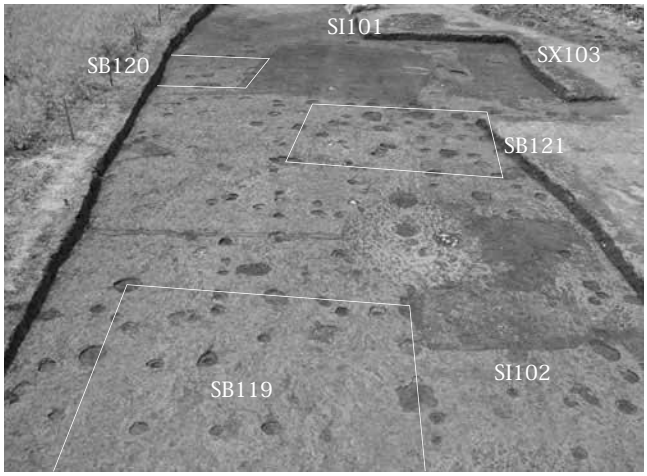
9．SD230 溝跡 完掘状況（南から）

10.　SD227 溝跡 断面（東から）

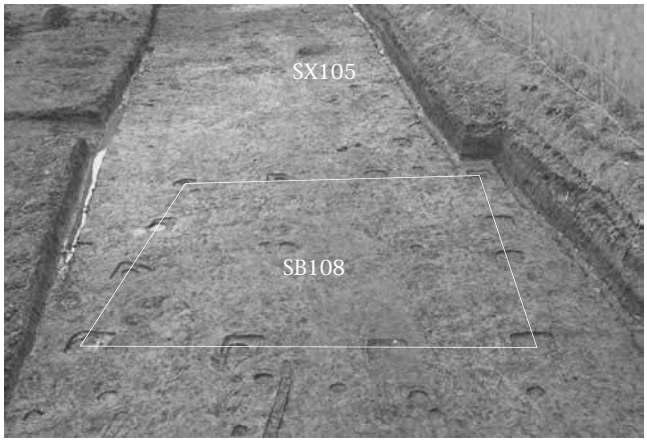
11．SD230 溝跡 断面（西から）

写真図版 22

1．4区遺構確認状況（東から）

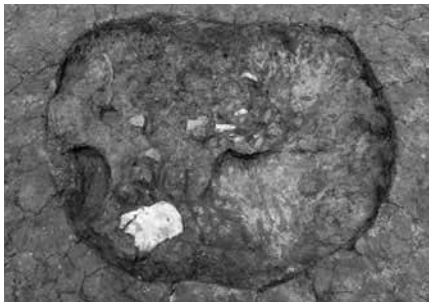


2．4区 遺構確認状況（東部・東から）



3．4区 遺構確認状況（西部・西から）

4． SX105 焼成遺構 断面（南から）



5．SX105焼成遺構 焼面検出状況(南から)

6．SX105焼成遺構 焼面検出状況(東から)

7．SX103竪穴状遺構 確認状況(西から)

8． SK110 土坑 断面（南から）

9．SK115 落とし穴状土坑 断面(西から)

10. SK115落し穴状土坑 完掘状況(南東から)

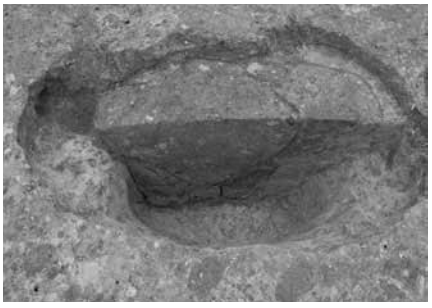
1．SI101 竪穴住居跡（南から）

2．SI101 竪穴住居跡 確認状況（南から）

3．SI101 竪穴住居跡 カマド（南から）

4．SI101 竪穴住居跡 カマド周辺遺物出土状況（南から）

5．SI101 竪穴住居跡 P4 断面（南東から）



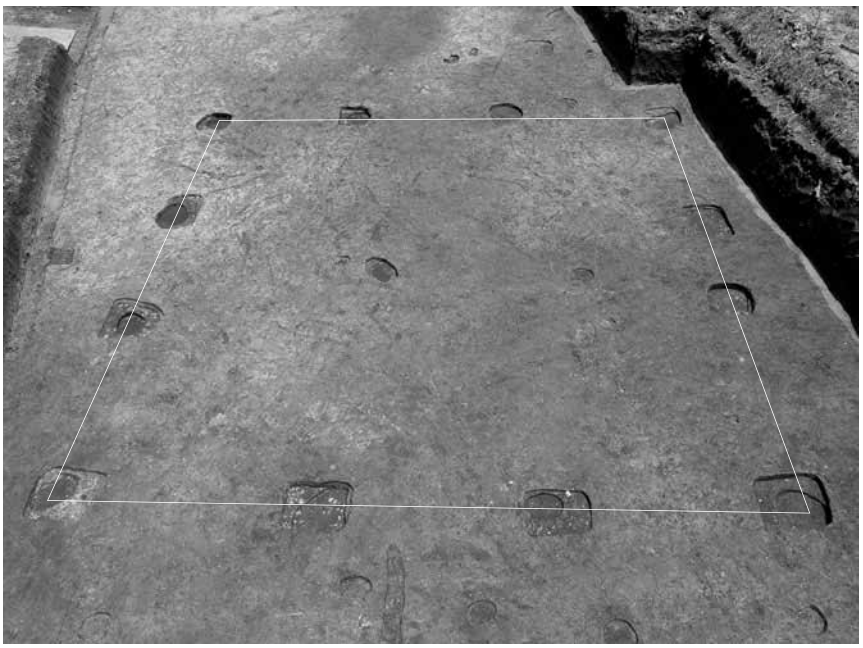
6．SI101 竪穴住居跡 P3 断面（北西から）

7．SI101 竪穴住居跡 北東部遺物出土状況（南から）

8．SI102 竪穴住居跡 確認状況（南から）

9．SI114 竪穴住居跡（南から）

写真図版 24



1．SB108 掘立柱建物跡 確認状況（西から）

2．SB108 掘立柱建物跡 P1 断面（北から）

3．SB108 掘立柱建物跡 P4 断面（北から）

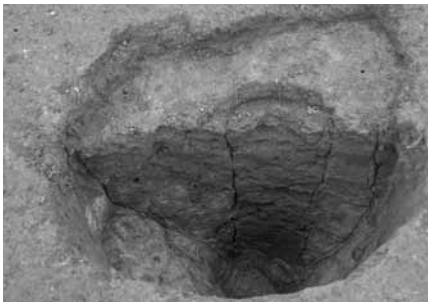
4．SB119 掘立柱建物跡 完掘状況（東から）

5．SB108 掘立柱建物跡 P11 断面（東から）

6．SB116 掘立柱建物跡 P5 断面（北から）

7．2 区 遺構断面実測作業風景

8．4 区 遺構確認作業風景

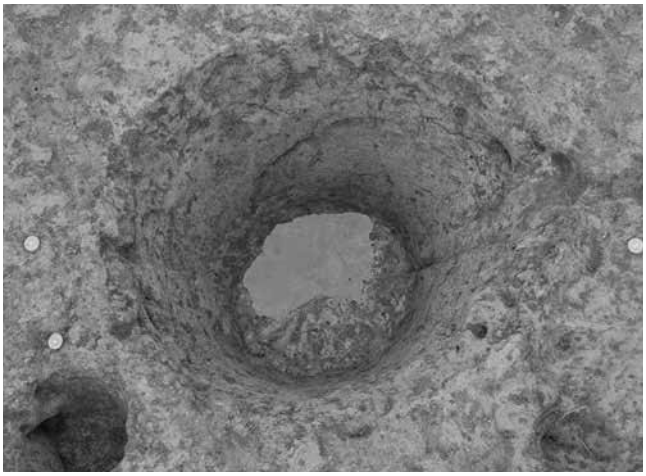


9．SB121 掘立柱建物跡 P8 断面（南から）

10．4 区 遺構確認作業風景

11．休憩風景

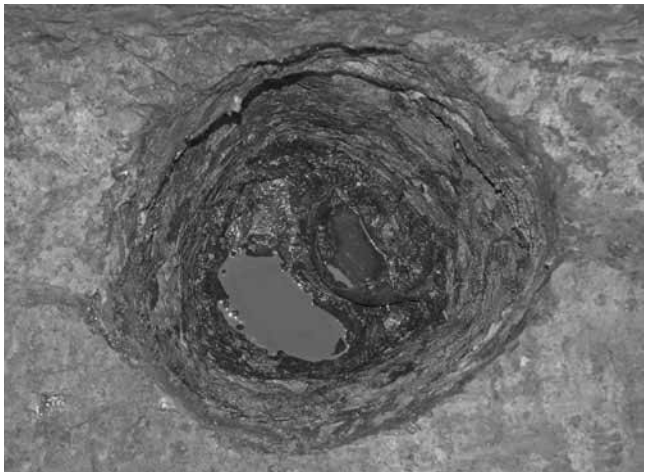
12．休憩風景



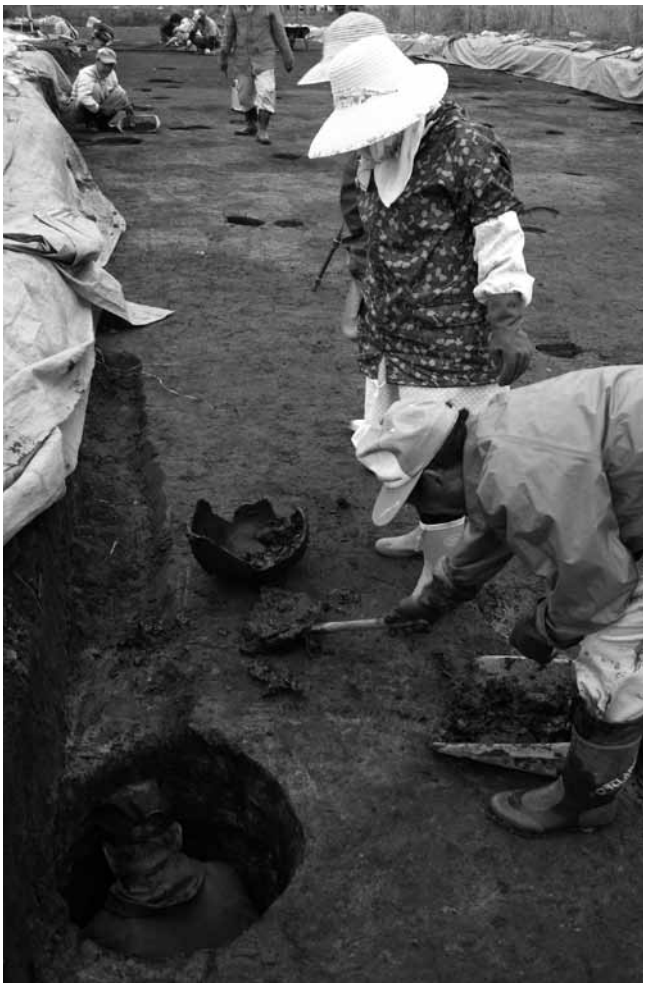
1．SE106 井戸跡 完掘状況（北から）

2．SE106 井戸跡 断面（南から）

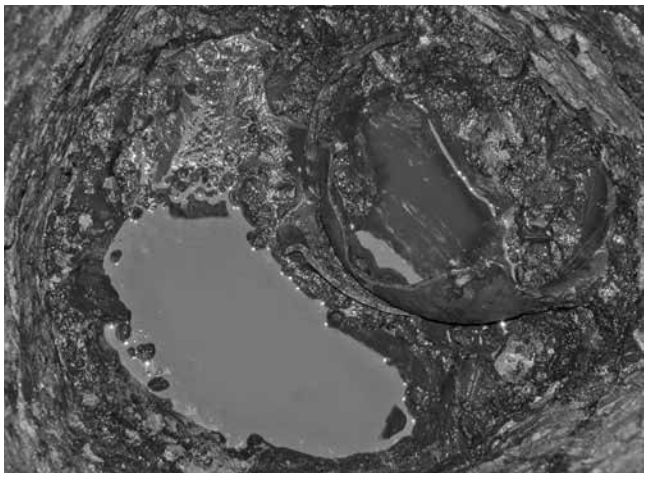
3．SE107 井戸跡 完掘状況（南から）



4．SE113 井戸跡 遺物出土状況（南から）



5．SE113 井戸跡 調査風景



6．SE113 井戸跡 遺物出土状況拡大（南から）

7．SE107 井戸跡 調査風景

SI101 竪穴住居跡出土土器（5 世紀中頃～後半）

SI1 竪穴住居跡出土土器（7 世紀末～ 8 世紀前葉）

SI3 竪穴住居跡出土土器（7 世紀中頃～後半）

SI302 竪穴住居跡出土土器（8 世紀末～ 9 世紀初頭）

SE22 井戸跡出土遺物（修復・保存処理後）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

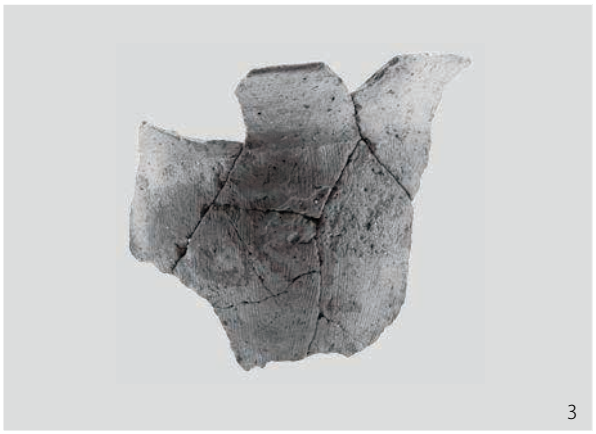
（S ≒ 1/3）

SI1 竪穴住居跡出土土器（1）

（1 ～ 10：第 13 図）

1

2


3

4

5a

5b

(S ≒ 1/3)

SI1 竪穴住居跡出土土器（2）

（1 ～ 2：第 13 図　3 ～ 5：第 14 図）

1

2

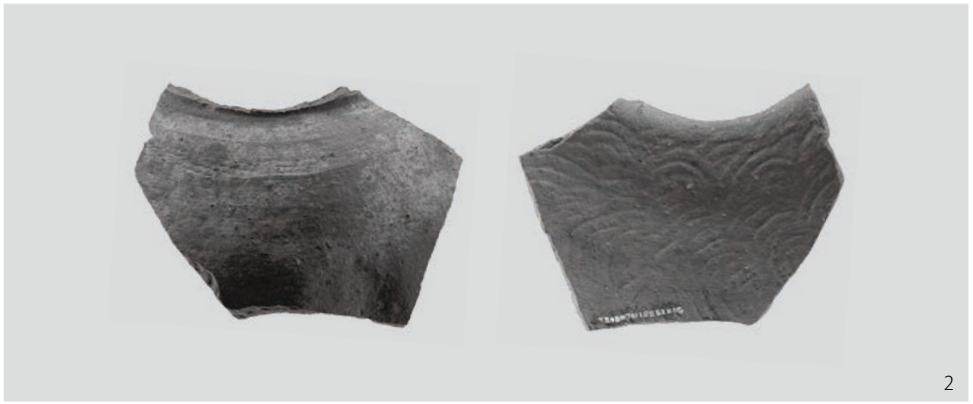
3

（S ≒ 1/3）

SI1 竪穴住居跡出土土器（3）

（1 ～ 2：第 14 図　3：第 15 図）

1

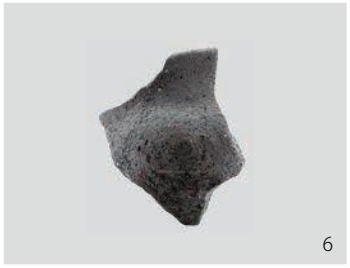

2

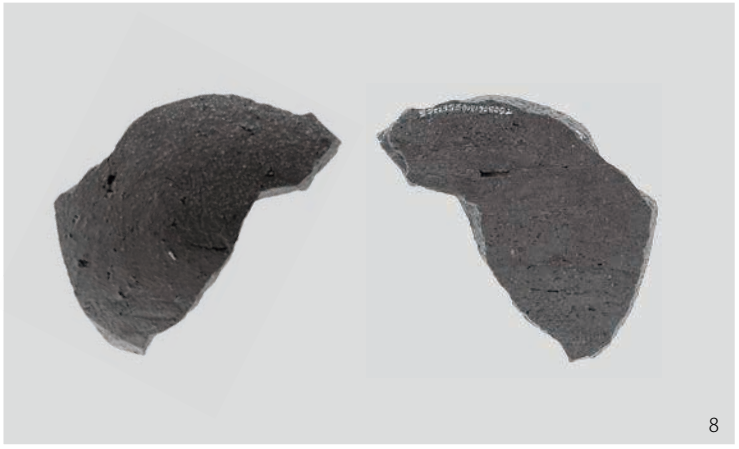
3

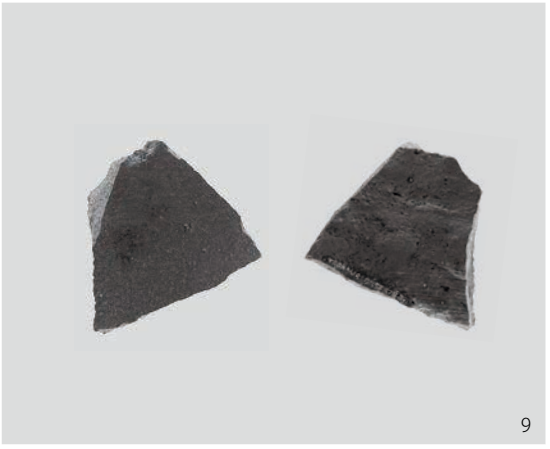
4

7

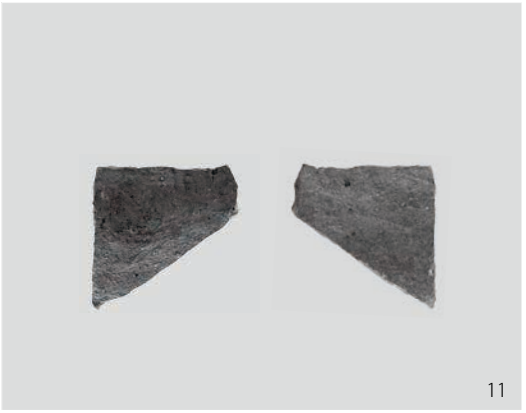
5


6


8


9

10


11

(S ≒ 1/3)

SI2・SI3 竪穴住居跡・SE22 井戸跡・SK5 土坑出土遺物

(1・2：SI2　3～7：SI3　8・9：SI22　10・11：SK5　／　1・2：第 17 図　3～7：第 19 図　8・9：第 30 図　10・11：第 33 図)

1

2

3a

3b

3：樺皮綴じ部分外面 拡大

3：樺皮綴じ部分内面 拡大

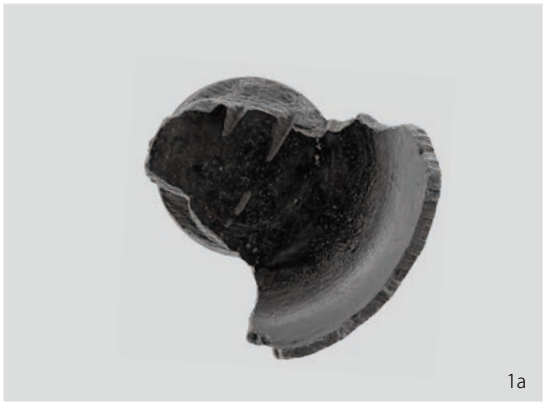
4

5

（S ≒ 1/3）

SE22 井戸跡出土遺物

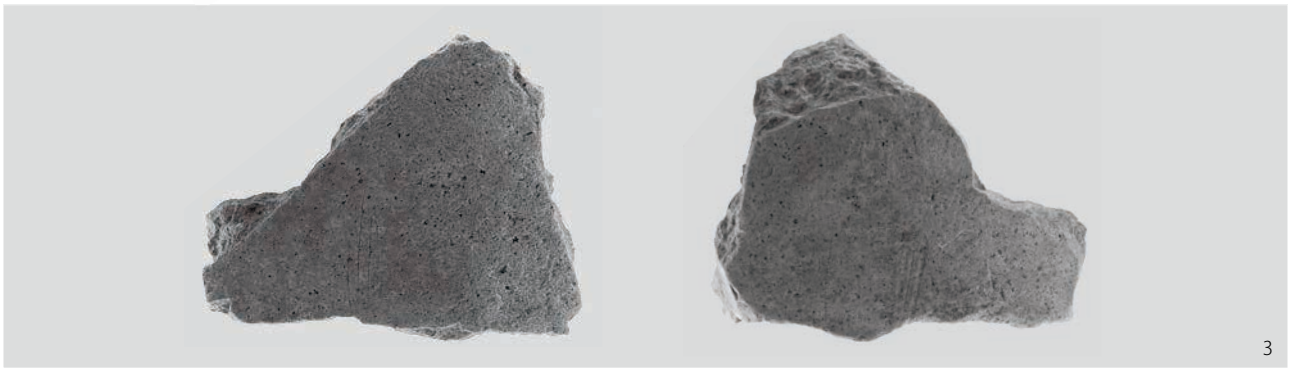
（1 ～ 5：第 31 図）


1a

1b

1c

2


3

4

（1・3・4：S ≒ 1/3　2：S ≒ 1/4）

SD7 溝跡・SI301 竪穴住居跡出土遺物

（1～3：SD7　4：SI301　／　1～3：第 37 図　4：第 41 図　）

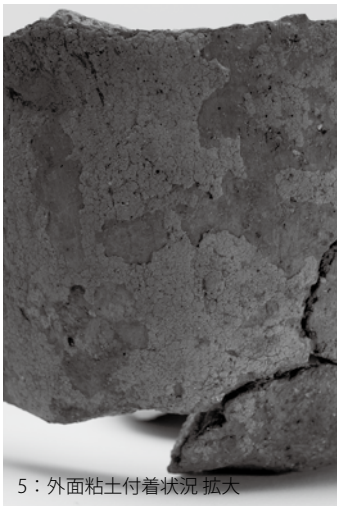
1

2

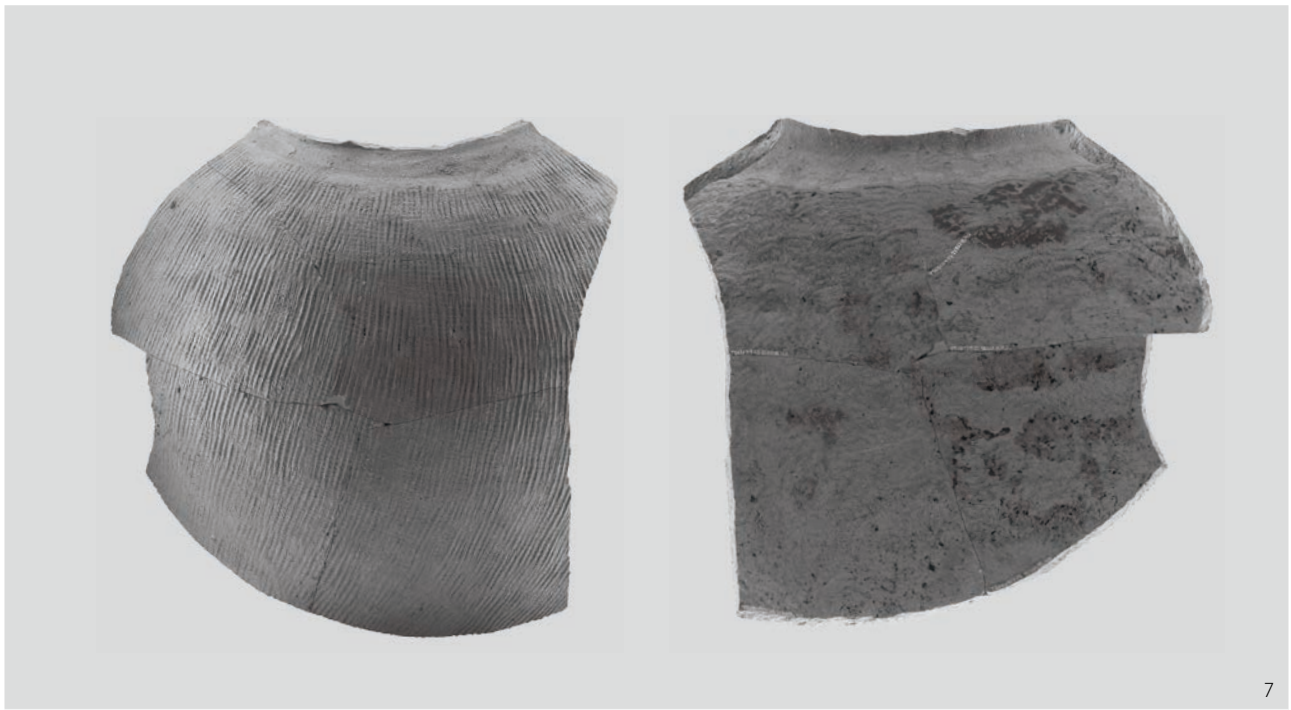
3

4

5


5：外面粘土付着状況 拡大

6


7

（1 ～ 6：S ≒ 1/3　7：S ≒ 1/4）

SI302 竪穴住居跡出土土器（1）

（1 ～ 7：第 44 図）

1

2

2：外底面線刻 拡大

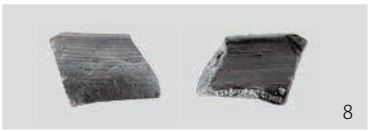
3

4

5

6

7


8

9

10

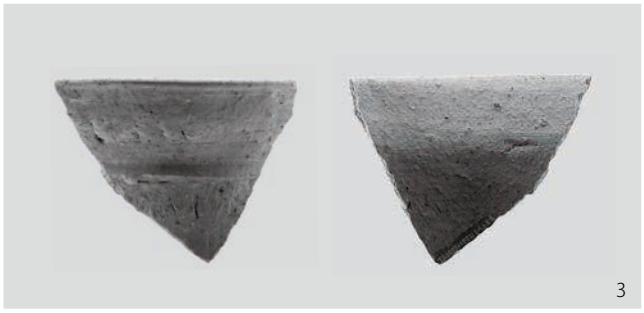
(S ≒ 1/3)

SI302 竪穴住居跡住居跡出土遺物（2）　SI303・SI305B 竪穴住居跡出土土器

（1：SI302　2：SI303　3～10：SI305B　／　1：第 45 図　2：第 48 図　3～10：第 53 図）

1

2


3

4

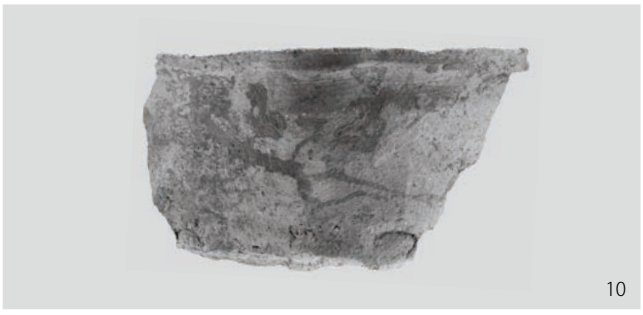
5

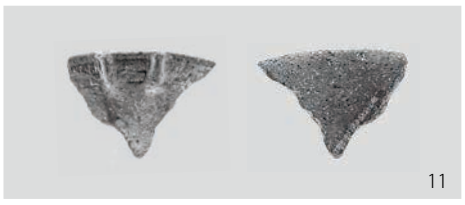
6

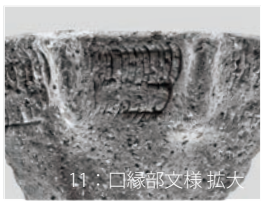
7

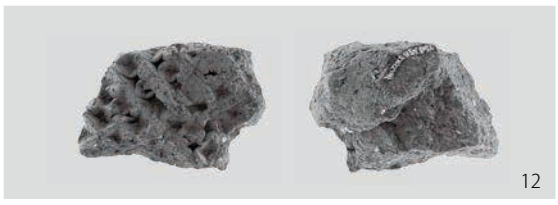
8

9


10


11


11：口縁部文様 拡大


12

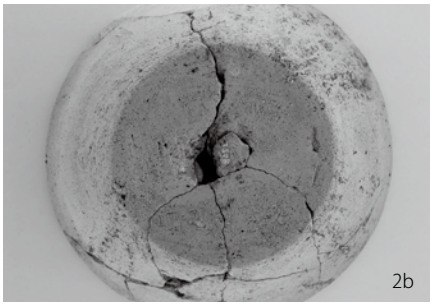
(S ≒ 1/3)

SI305A・SI207B 竪穴住居跡・SB308 掘立柱建物・SK307・SK232 土坑出土土器　　SD227 溝跡出土遺物（1）

(1～4：SI305A　5：SB308　6：SK307　7～10：SI207B　11：SK232　12：SD227　／　1～4：第 56 図　5：第 58 図　6：第 59 図　7～10：第 66 図　11：第 81 図　12：第 86 図)

1

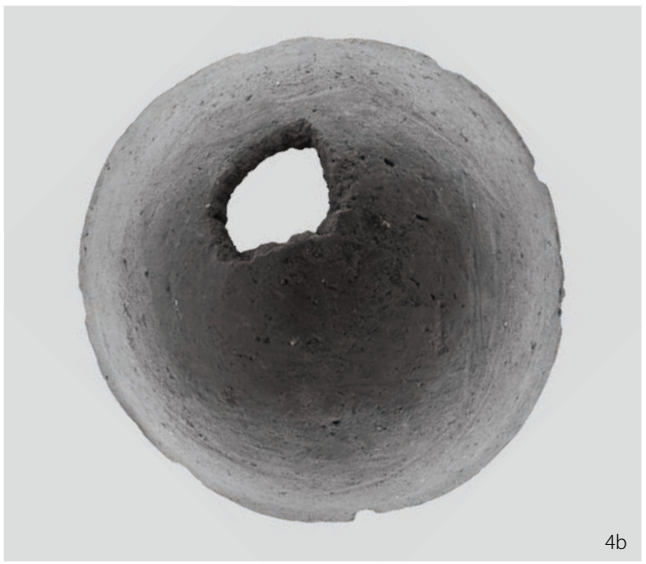
2a

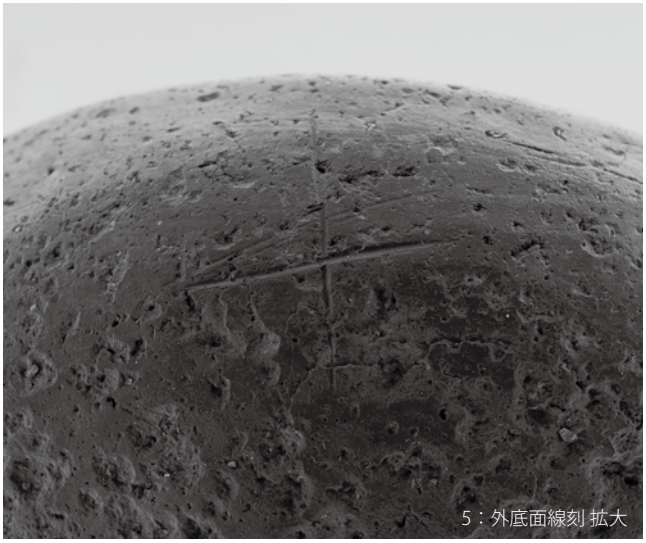

2b

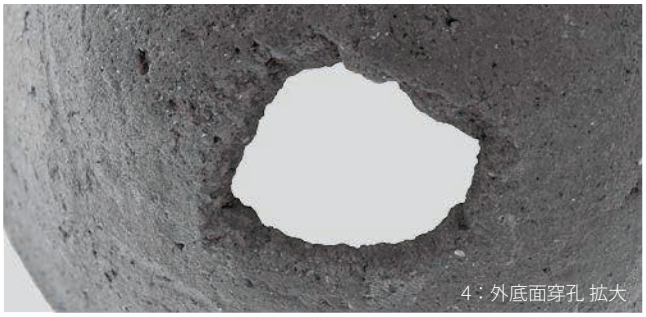
3

4a

5


4b


5：外底面線刻 拡大


4：外底面穿孔 拡大

(S ≒ 1/3)

SD227 溝跡出土土器（2）　SX208 水溜状遺構出土土器　SI101 竪穴住居跡出土土器（1）

(1：SD227　2：SX208　3～5：SI101　／　1：第 86 図　2：第 88 図　3～5：第 91 図)

1

2

3

4

5

6

（S ≒ 1/3）

SI101 竪穴住居跡出土土器（2）

（1 ～ 6：第 91 図）

1

2a

1：内面口縁部磨滅状況 拡大

2b

3

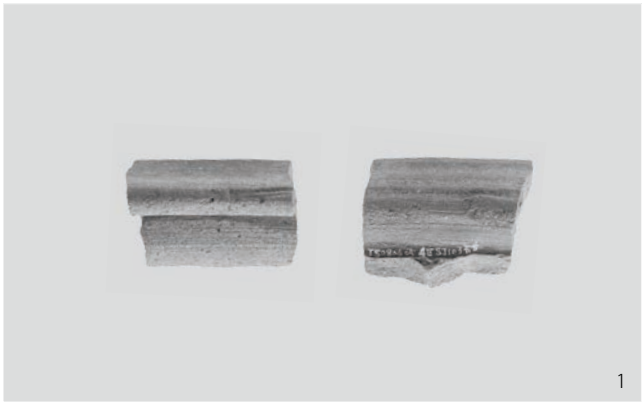
4

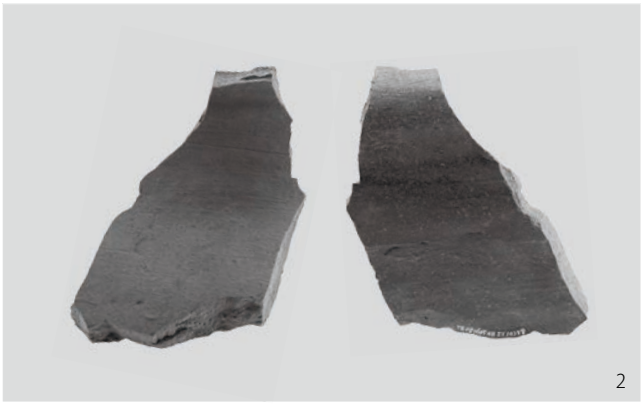
5

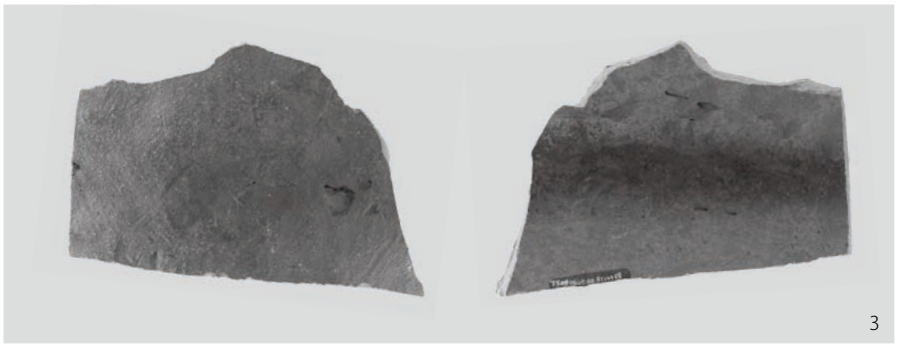
（S ≒ 1/3）

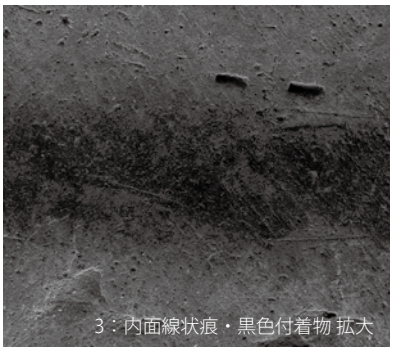
SI101 竪穴住居跡出土土器（3）　SI114 竪穴住居跡・SB108・SB119 掘立柱建物跡出土土器

（1・2：SI101　3：SI114　4：SB108　5：SB119　／　1・2：第 92 図　3：第 94 図　4：第 96 図　5：第 99 図）

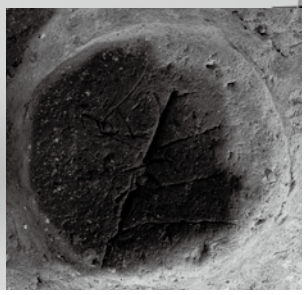

1


2


3


3：内面線状痕・黒色付着物 拡大

4



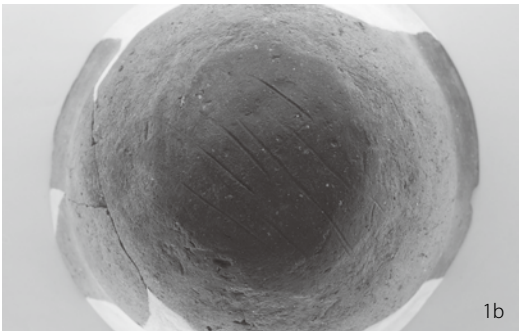
（1：S ≒ 2/3　2 ～ 4：S ≒ 1/3）

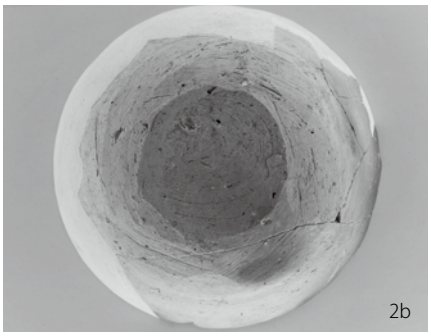
SX103 竪穴状遺構・SE113 井戸跡出土土器

（1 ～ 3：SX103　4：SE113　／　1 ～ 3：第 95 図　4：第 103 図）

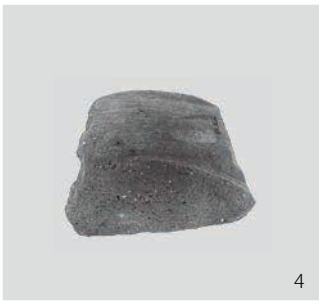
1a

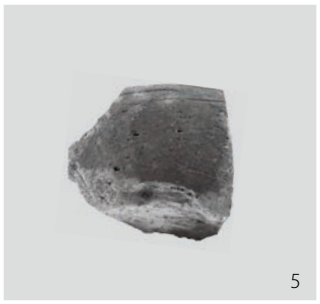
2a


1b

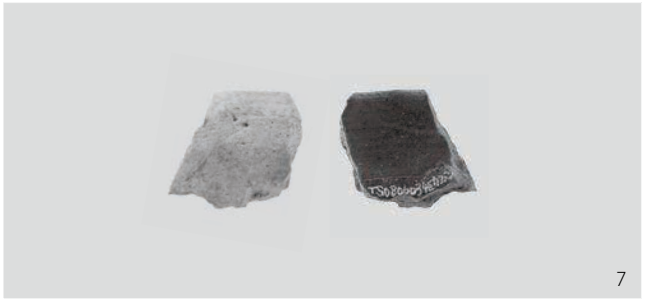

2b

3


4


5

6

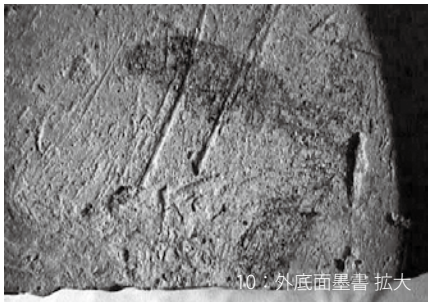

7

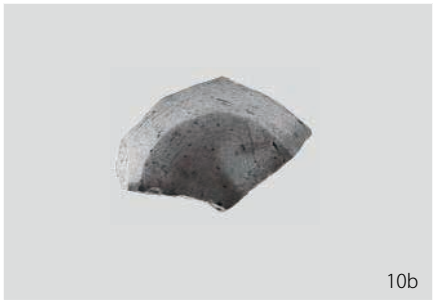
8

9

10a

11a


10：外底面墨書 拡大


10b

11b

(S ≒ 1/3)

SK117 土坑・柱穴跡出土土器　　遺構外出土遺物（1）　土師器・ロクロ土師器

（1：SK117　2：P102　3～8：土師器　9～11：ロクロ土師器　／　1：第 107 図　2：第 109 図　3～11：第 110 図）

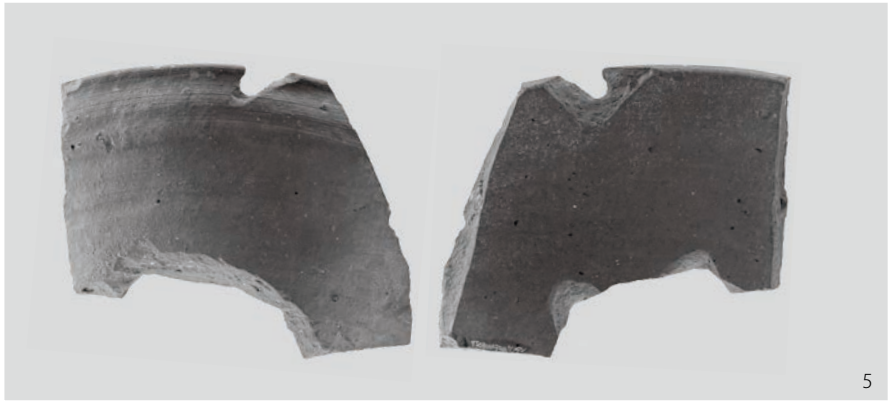
1

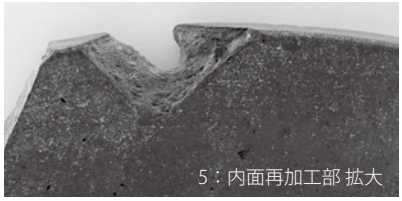
2

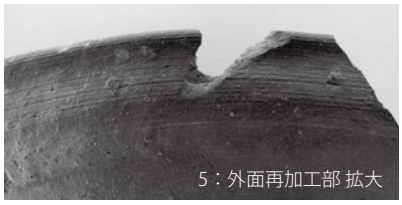
3

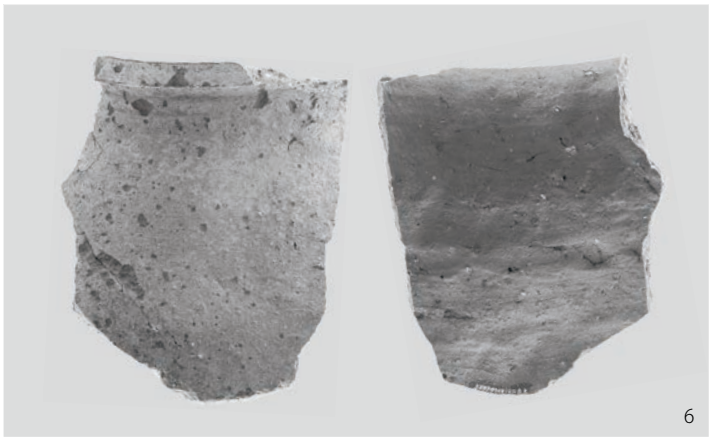
4a

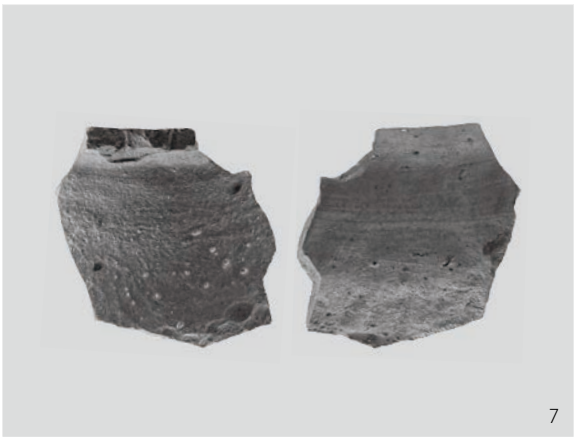
4b

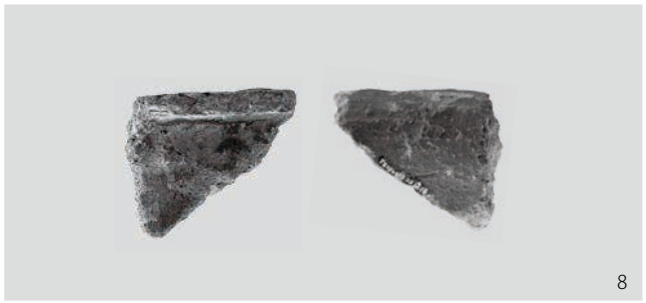

5

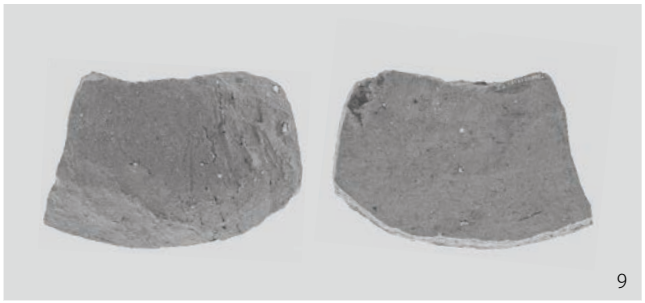

5：内面再加工部 拡大


5：外面再加工部 拡大


6


7

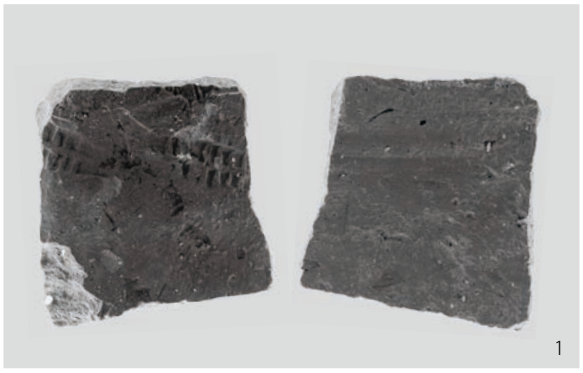

8

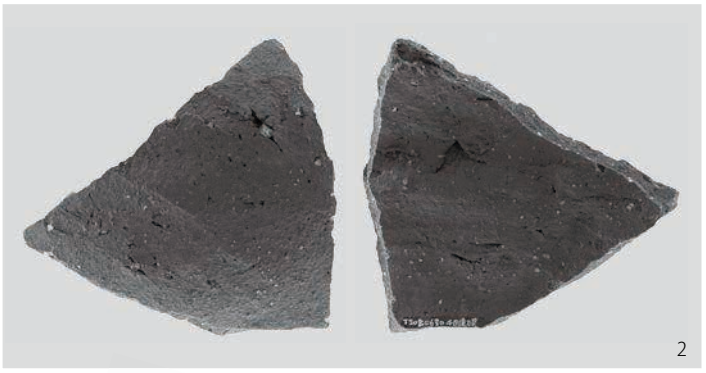

9

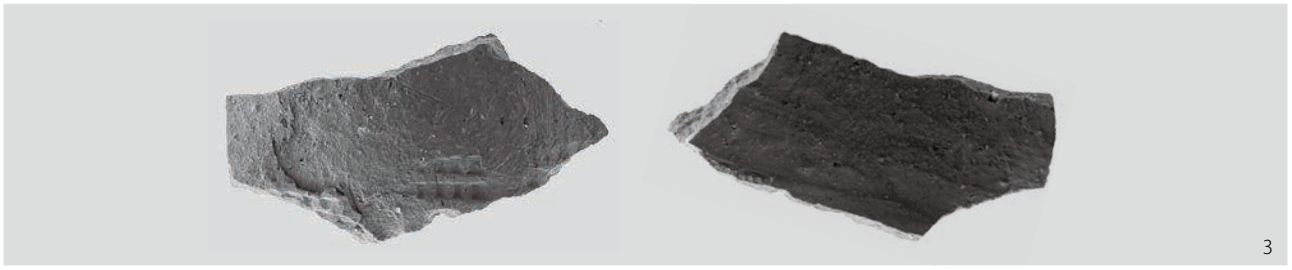
（1 ～ 3・4b・5・8：S ≒ 1/3　4a：S ≒ 1/2　6・7・9：S ≒ 1/4）

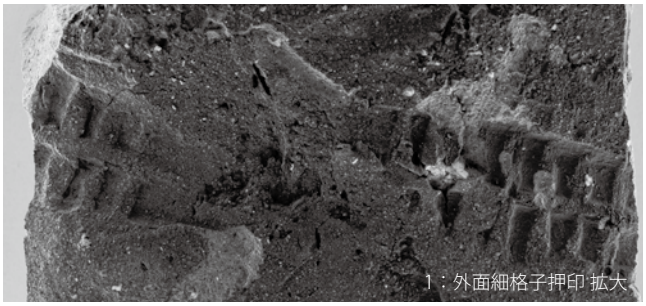
遺構外出土遺物（2）須恵器・土製品・中世陶器

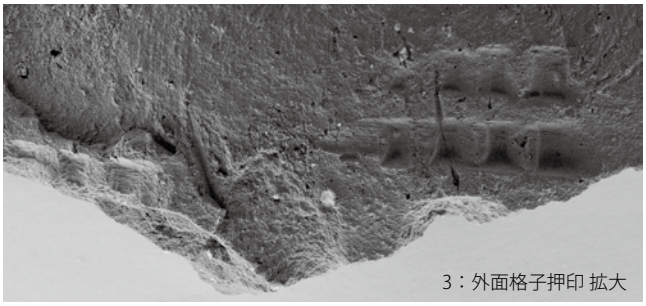
（1 ～ 3：須恵器　4：土製紡錘車　5 ～ 9：中世陶器　／　1 ～ 4：第 110 図　5 ～ 9：第 111 図）


1


2

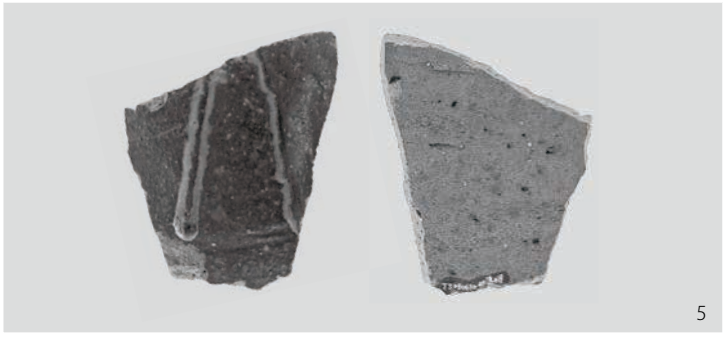

3

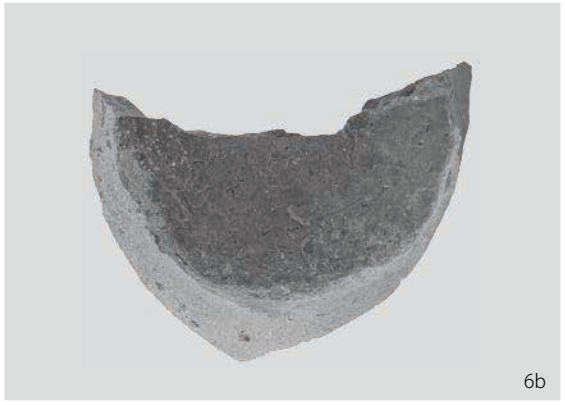

1：外面細格子押印 拡大


3：外面格子押印 拡大

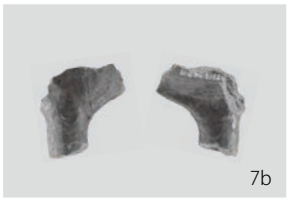
4

6a


5


6b

7a


7b

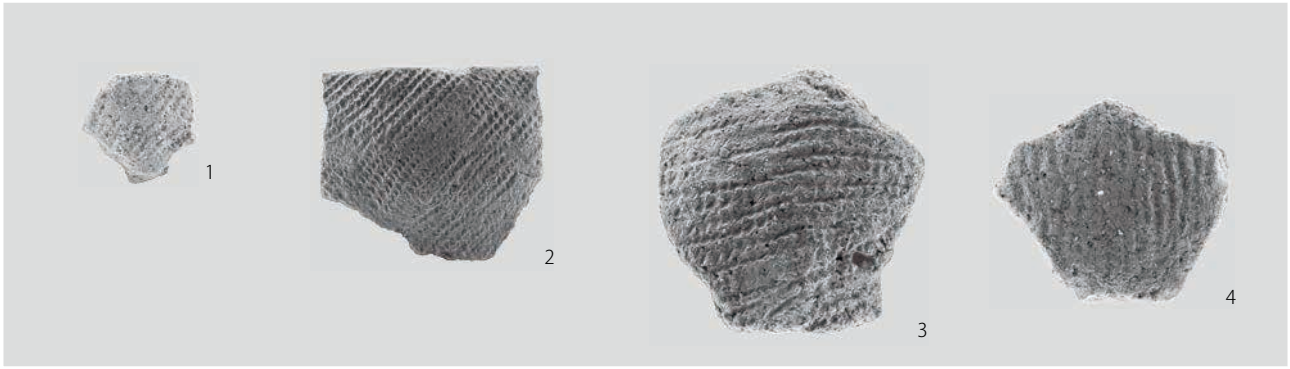
8a

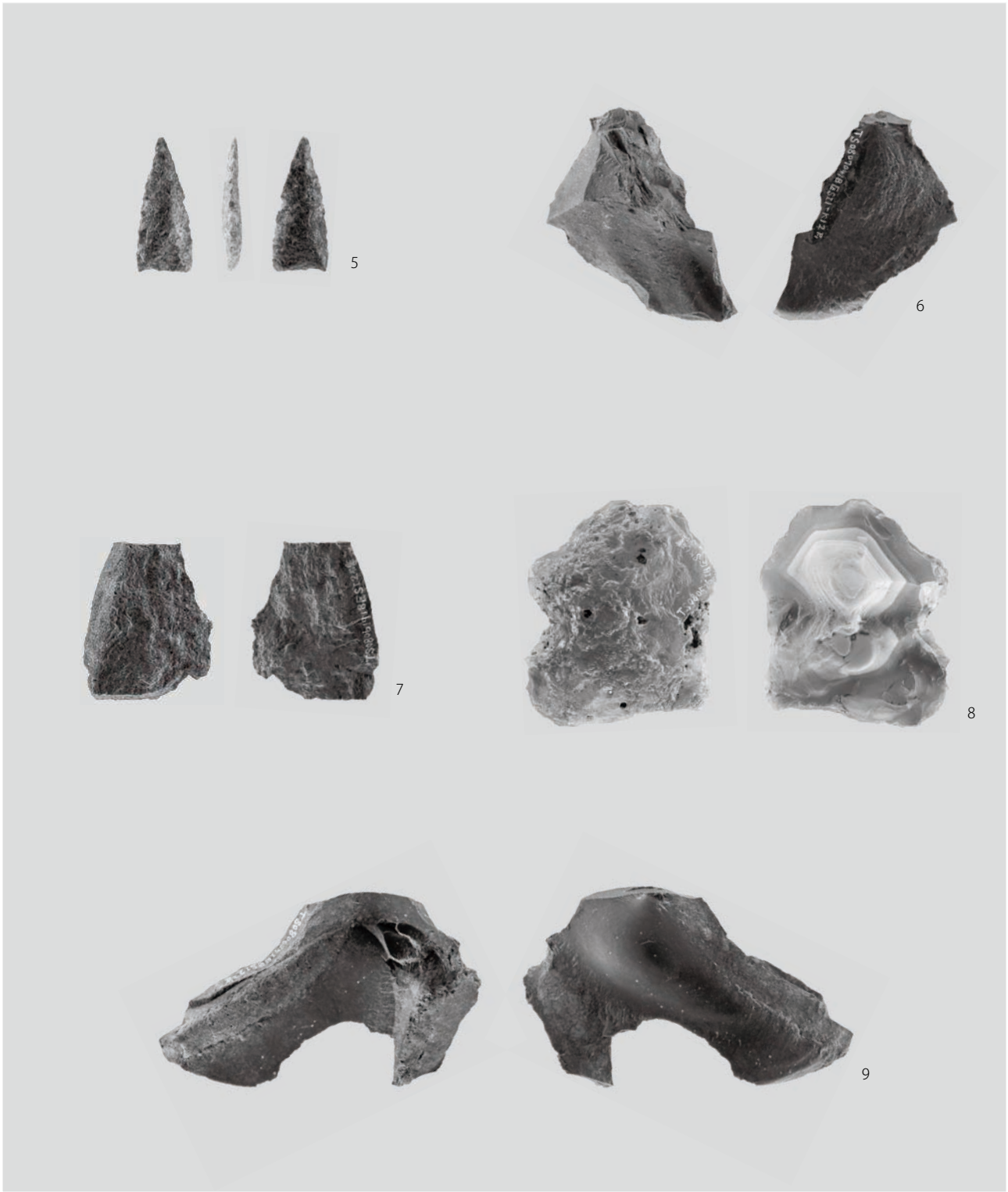
8b

（S ≒ 1/3）

遺構外出土遺物（3） 中世陶器・近世陶器

（1～6：中世陶器　7・8：近世陶器　／　1～6：第 111 図　7・8：第 112 図）





（1～4：S ≒ 1/2　5～9：S ≒ 1/1）

遺構外出土遺物（4）　縄文土器・石器

（1～4：縄文土器　5～9：石器　／　1～9：第 112 図）

報 告 書 抄 録

ふりがな	くぼたいせき
書名	窪田遺跡
副書名	経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査
巻・次	
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 11 集
編著者名	鈴木　雅
編集機関	蔵王町教育委員会
所在地	〒 989-0892　宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10　℡ 0224-33-3008　Fax0224-33-3831
発行年月日	西暦２０１１年（平成２３年）　3月２５日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
くぼたいせき 窪田遺跡	宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字窪田・田中地内	43010	05193	38° 7′ 22″	140° 41′ 9″	2008.5.21 ～ 2008.9.19	4,029㎡	経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業・円田２期地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
窪田遺跡	集落跡 散布地	縄文 弥生 古墳 飛鳥 奈良 平安 中世	竪穴住居跡 15 軒 竪穴状遺構 1 基 掘立柱建物跡 25 棟 柱列跡 8 条 井戸跡 9 基 落とし穴状土坑 2 基 土坑 25 基 溝跡 18 条 水溜状遺構 1 基 焼成遺構 1 基 柱穴多数	土師器 ロクロ土師器 須恵器 中世陶器 近世陶器 縄文土器 弥生土器 石器 木製品（曲物・鋤） 漆器（椀） 鉄製品（鎌） 総量：コンテナ 30 箱分	

要約	飛鳥時代後半～奈良時代前半（7 世紀中頃～ 8 世紀中頃）の集落跡が確認され、3 時期に変遷することが判明した。出土土器には関東系土師器とみられるものを伴う。周辺の十郎田遺跡・都遺跡・六角遺跡などの集落との密接な関連が窺われ、飛鳥～奈良時代における円田盆地周辺の様相を考える上で重要である。このほか、縄文時代とみられる落とし穴状土坑、古墳時代中期後半（5 世紀中頃～後半）・平安時代初頭（8 世紀末～ 9 世紀初頭）の竪穴住居跡など、中世前半（13 世紀）の屋敷地の一部とみられる溝跡などを確認した。

【　解　説　】

かけがえのない遺跡を未来へ

私たちの足もとには、昔の人びとが暮らした家の跡や、そこで使われた土器や石器などの道具が埋もれている場所があります。このように、昔の人びとの生活の跡が残されている場所を、「遺跡」と呼んでいます。遺跡は、長い歴史の中で大地に刻み込まれた人間の生活の記憶なのです。

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた蔵王町には、私たちの祖先が残した多くの遺跡があります。人びとがいつ、どのようにして郷土蔵王に住み着いたのか。コメ作りはいつから始めたのか。彼らは日々の生活をどのように送り、何歳まで生きたのか。興味の尽きないテーマです。

遺跡を調べることで昔の人びとの知恵に学び、私たちの歴史や文化をよく知ることは、私たち自身の生活を見直したり、将来を考えるためにとても大切な役割を果たしています。そのためには、長い歴史を経て今日に伝えられている大切な遺跡を、私たち国民共有の財産として、未来の子どもたちの世代へ守り伝えていかなくてはなりません。

遺跡を記録に残すための発掘調査

地面の下に埋もれている遺跡は、一度掘り返されて壊れてしまうと、二度と元に戻すことができません。かけがえのない遺跡を未来へ残すためには、そのままで保存することが望ましいのです。ところが、現在の私たちの生活に必要な土木工事などによって、どうしても遺跡を壊さなくてはならないことがあります。このような時には、工事をする前にそこにどのような遺跡が残されていたのかを調べ、その様子を写真や図面に記録するために、発掘調査を行ないます。

窪田遺跡のある平沢・小村崎地区の円田盆地では、水田や畑を使いやすく作り変えるほ場整備工事が計画されました。できるだけ遺跡を壊さないで工事を行うために、地元地権者の皆さんでつくる蔵王町土地改良区や宮城県大河原地方振興事務所ではたくさんの工夫をしました。それでも、どうしても遺跡が壊れてしまう部分では、蔵王町教育委員会が発掘調査をして記録を残すことになりました。発掘調査では、たくさんの発掘作業員の皆さんが汗を流しました。このように、たくさんの人の努力によって、窪田遺跡の記録を残すことができたのです。

窪田遺跡から見えてきた郷土の歴史

ここに刊行した「窪田遺跡発掘調査報告書」をひも解くと、雄大な蔵王山麓に抱かれた円田盆地に暮らした人びとの歴史であり、さらには蝦夷と呼ばれた東北地方の人々と大和朝廷とのダイナミックな古代史の１ページを知らせてくれる重要な遺跡だったことがわかります。

発掘調査の様子－土の違いを注意深く見分ける
重機で現在の田んぼの土を取り除いた後、地面を少しずつ削って昔の住居や柱の跡を探します。

掘立柱建物跡の調査－柱穴の跡を掘り下げる
建物の柱を立てた穴の跡を半分ずつ掘り下げ、柱の位置や使われていた柱の太さなどを調べます。

窪田遺跡は蔵王町の東部、円田盆地の北部に西からのびる低い丘の上にあります。さて、その「窪田の丘」に営まれたムラの様子をのぞいてみましょう。

今からおよそ 1300 年ほど前の飛鳥時代、窪田の丘にムラが作られました。当時の人びとの住まいは、地面を浅く掘りくぼめたところに柱を立て、地面まで届くように屋根をかけた竪穴住居でした。窪田のムラでは竪穴住居だけでなく、掘立柱建物も多く建てられました。掘立柱建物は周囲に柱を立てて壁を作り、その上に屋根をかけた建物で、当時は役所や寺院などにしかありませんでした。窪田の丘には、どうして掘立柱建物が建てられていたのでしょうか。

窪田の丘にムラができたころ、北側に川をはさんで向かい合う十郎田の丘にも新しいムラが作られました。十郎田の丘では、材木を立て並べた塀でムラ全体を取り囲んでいました。考古学者はこの十郎田のムラを、当時の東北地方に暮らしていた蝦夷と呼ばれる人びとを支配するために、大和朝廷が前線基地として作ったのだと考えています。

それからやや時が過ぎて奈良時代の初めになると、やはり大和朝廷の手によって、窪田の丘の南側に役所のような施設が作られました。溝と塀で囲まれた中に、大きな掘立柱建物が建てられたのです。この施設が作られたころには、十郎田のムラは姿を消していました。そして、十郎田のムラの人びとと入れ替わるかのように、窪田のムラや周辺のムラには、現在の福島や関東地方から多くの人々が移り住んできたらしいのです。

そして、それから数十年が過ぎた奈良時代の半ばまでには、窪田のムラも、役所のような施設もなくなり、元の草原へと戻ってしまったのです。やがて長い時が過ぎて畑が作られるようになると、役所のような施設が作られていた場所では瓦や土器がたくさん出土するので、後の人びとはここを昔の都の跡だと考え、「都遺跡」と呼ぶようになりました。

窪田の丘に暮らした人々も、大和朝廷と何か関わりのある人々だったのでしょうか。あるいは、たくさんの掘立柱建物は「都遺跡」につくられた役所のような施設の一部だったのかもしれません。この謎は、これからの考古学の研究で少しずつ解き明かされていくのかもしれませんし、謎を解く重要なカギは発掘せずに保存された遺跡にまだ眠っているのかもしれません。

ほかにも、縄文時代の人びとがシカやイノシシを捕らえた落とし穴の跡や、古墳時代・平安時代の住居跡、鎌倉時代の屋敷の跡などが見つかりました。窪田の丘には、縄文時代から現代にいたるまで幾重にもわたって人々の生活の痕跡が残されていることが分かったのです。ここに記録された窪田遺跡の考古学的成果は、地域の歴史を解き明かすカギとしてとても貴重なものです。

竪穴住居跡の調査－住居の構造を調べる
住居の跡を少しずつ掘り下げ、住居内に作られたカマドや貯蔵穴、柱を立てた穴の跡を調べます。

竪穴住居跡の調査－土器が出土した様子
住居跡に残された土器は、当時の人びとの暮らしぶりや、その年代を知るための貴重な資料です。

蔵王町文化財調査報告書 第 11 集

窪 田 遺 跡

―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―

２０１１年（平成２３年）３月２５日　印刷・発行

発行　蔵王町教育委員会

〒 989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北 10

ＴＥＬ 0224-33-3008　ＦＡＸ 0224-33-3831

印刷　㈱ 津 田 印 刷

〒 989-1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町 13-5

ＴＥＬ 0224-52-5550　ＦＡＸ 0224-52-3097